

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 261

百間川原尾島遺跡

警察本部宿舎建替整備事業に伴う発掘調査

2023

岡山県教育委員会



1 遺跡遠景（南西上空から）



1 調査地全景（南西上空から）



2 調査地全景（北東上空から）

序

本書は、警察本部宿舍建替整備事業に伴い発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書です。

岡山県教育委員会では、計画地内に所在する遺跡の取り扱いについて関係機関と協議を重ねて参りました。その結果、事業の実施によって影響を受ける部分については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

百間川は沖新田の開発の一環として江戸時代前期に築造された放水路です。この百間川の改修工事に伴って昭和51年以来実施された河川敷内の発掘調査により、縄文時代から室町時代にわたる大集落が営まれたことが明らかとなっています。とりわけ弥生時代末の洪水によって埋没した水田跡は、当時の稲作技術を伝える貴重な遺構として全国に知られています。

このたびの調査地は百間川の北側に当たりますが、弥生時代の土坑や古墳時代の竪穴住居が見つかり、百間川原尾島遺跡の一端を捉えることができました。なかでも、昭和54～55、63年及び平成11年の発掘調査において木製品や玉類、製鉄関連遺物など多くの遺物が出土した古墳時代後期の大溝を当調査地でも確認したことは、大きな成果の一つに挙げられます。

これらの調査成果を収めた本書が、学術研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用されるならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成に当たりましては、関係機関並びに地元住民の皆様には御協力・御理解を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所 長 大 橋 雅 也

例 言

- 1 本書は、警察本部宿舍建替整備事業に伴い、岡山県教育委員会が警察共済組合岡山県支部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 百間川原尾島遺跡は岡山市中区藤原光町に所在する。
- 3 確認調査は令和元年度に團奈歩が担当した。調査期間は令和元年7月22日～26日、調査面積は62.5㎡である。本発掘調査は、令和2年度及び令和3年度に実施した。令和2年度は渡邊恵里子・米田克彦・藤井翔平が担当し、調査期間は令和3年1月1日～3月31日、調査面積は500㎡である。令和3年度は渡邊・藤井雅大・山口香織が担当し、調査期間は令和3年4月1日～6月30日、調査面積は495㎡である。
- 4 本書の作成は、令和3年度及び令和4年度に実施し、渡邊が担当した。
- 5 本文の執筆は調査担当者が分担し、文責は節及び各項目、あるいは遺構ごとの文末に示した。また、全体の編集は渡邊が担当した。
- 6 本書に関係する遺構・遺物については、次の諸氏に鑑定・分析を依頼し有益な教示を得た。記して謝意を表する。

石材の鑑定・堆積土層の鑑定	鈴木茂之（岡山大学）
獣骨の鑑定	富岡直人（岡山理科大学）
鉄鉱石の分析	白石 純（岡山理科大学）
- 7 本書に関係する遺物の分析については、次の機関と業務委託契約を行い実施した。

花粉分析・珪藻分析・種実同定・樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
---------------------	---------------
- 8 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 9 本書収載の遺構・遺物の図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

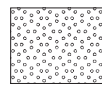
- 1 本書に用いた高度値は標高である。
- 2 遺構図が示す北方位は平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。
- 3 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院発行の「電子地形図25000」を使用し、加筆したものである。
- 4 土層と遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修）、『新版色の手帖』（永田泰弘監修 小学館 2002）に準拠している。
- 5 遺構・遺物の縮尺は個々に明記している。
- 6 遺構全体図では遺構名に次のような略称を用いている。
 竪穴住居：住 掘立柱建物：建 柱穴列：列 土坑：土 柱穴：P
- 7 遺構・遺物の番号は、それぞれ種類別に通し番号を付している。
- 8 遺物番号は、土器・瓦は番号のみ、それ以外は次の記号を番号の前に付した。
 土製品：C 石製品：S 玉類：J 木製品：W 金属製品：M
- 9 遺構図における柱痕や被熱範囲等については、次のように表現した。



柱痕



被熱



焼土

- 10 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため、口径復元に不確実性があることを示す。
- 11 本書で用いた時期区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分や世紀を併用しているが、弥生時代から古墳時代前半期は「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39で採用した土器編年に基づき、百・後・I等の略称で表記し、古墳時代後半期については陶器編年（田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店）に基づいている。なお、7世紀代については、ここでは古墳時代を表記として用いた。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査及び報告書作成の経過	5
第3節 日誌抄	6
第4節 発掘調査及び報告書作成の体制	7
第3章 発掘調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 弥生時代以前の遺構・遺物	12
1 概要	12
2 土坑	13
3 柱穴列	14
4 溝	17
5 その他の遺構・遺物	25
第3節 古墳時代～奈良時代の遺構・遺物	26
1 概要	26
2 竪穴住居	26
3 土坑	28
4 溝	28
5 その他の遺構・遺物	47
第4節 平安時代以降の遺構・遺物	48
1 概要	48
2 掘立柱建物	48
3 土坑	51
4 溝	51
5 その他の遺構・遺物	52
第4章 自然科学分析	53
第1節 百間川原尾島遺跡の自然科学分析	53
第2節 百間川原尾島遺跡出土鉄鉱石の分析	63

第49図 溝18出土遺物① (1/4)	41	第64図 土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4)	51
第50図 溝18出土遺物② (1/4)	42	第65図 溝24・25 (1/30)・溝24出土遺物 (1/4)	51
第51図 溝18出土遺物③ (1/4)	43	第66図 下がり1出土遺物 (1/4)	52
第52図 溝18出土遺物④ (1/4・1/3・1/1)	44	第67図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4・1/3)	52
第53図 溝19 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	45	第68図 花粉分析群集	55
第54図 溝20 (1/30)	45	第69図 各遺跡出土鉄鉱石の比較	65
第55図 溝21～23 (1/60)	46	第70図 遺跡と鉱山山地出土鉄鉱石の比較	66
第56図 溝21 (1/30)	46	第71図 遺跡と鉱山山地出土鉄鉱石の比較	66
第57図 溝22 (1/30)・出土遺物 (1/4)	46	第72図 百間川原尾島遺跡主要遺構配置図 (1/5,000)	68
第58図 溝23 (1/30)・出土遺物 (1/4)	46	第73図 土坑1出土円礫の大きさ	69
第59図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4・1/3)	47	第74図 百間川原尾島遺跡周辺における主な遺跡 (1/10,000)	70
第60図 平安時代以降遺構全体図 (1/400)	48	第75図 百間川原尾島遺跡周辺における古墳時代後期の 手工業生産関連遺物 (1/4・1/8)	75
第61図 掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物 (1/4)	49		
第62図 掘立柱建物2 (1/60)	50		
第63図 掘立柱建物3 (1/60)	50		

表 目 次

表1 調査一覧.....	5	表10 旭川東岸地域における主な遺跡の動向	71
表2 文化財保護法に基づく提出書類一覧.....	6	表11 百間川遺跡群周辺における石製模造品一覧	76
表3 珪藻・花粉分析.....	53	表12 百間川原尾島遺跡 製鉄・鍛冶関連遺物集計表	78
表4 珪藻分析結果.....	54	表13 百間川原尾島遺跡周辺の製鉄・鍛冶関連遺物の 出土量.....	78
表5 花粉分析結果.....	55	表14 百間川原尾島遺跡周辺における古墳時代後期の 手工業生産の変遷.....	80
表6 樹種同定結果.....	56	表15 百間川遺跡群周辺における古墳時代の牛・馬の 遺存体一覧.....	82
表7 種実同定結果.....	57		
表8 昆虫同定結果.....	58		
表9 岡山県内遺跡出土鉄鉱石、鉱山採取鉄鉱石の分析 (%)	64		

写 真 目 次

写真1 作業風景 (北から)	15	写真5 珪藻化石.....	60
写真2 円筒形の土製品142	36	写真6 木材.....	61
写真3 溝18土器出土状況 (北から)	39	写真7 大型植物遺体・昆虫.....	62
写真4 溝18木器出土状況 (南から)	40		

巻頭図版目次

巻頭図版 1 1 遺跡遠景（南西上空から）

巻頭図版 2 1 調査地全景（南西上空から）

2 調査地全景（北東上空から）

図版目次

図版 1－1 調査地西半（1区）全景（空撮：上が北）

－2 調査地東半（2区）全景（空撮：上が北）

図版 2－1 調査地西半（1区）全景（東から）

－2 調査地西半（1区）北壁（南東から）

図版 3－1 調査地東半（2区）全景（東から）

－2 調査地東半（2区）作業風景（北西から）

図版 4－1 竪穴住居 1（東から）

－2 竪穴住居 1 堆積状況（北東から）

－3 竪穴住居 1 北東部遺物出土状況（東から）

図版 5－1 竪穴住居 1 カマド検出状況（北東から）

－2 掘立柱建物 1（北から）

－3 掘立柱建物 2・3（北西から）

図版 6－1 掘立柱建物 2（北から）

－2 掘立柱建物 3（北から）

－3 掘立柱建物 2－P 4（南から）

－4 掘立柱建物 3－P 2（東から）

図版 7－1 土坑 1（南から）

－2 土坑 2（南東から）

－3 土坑 3（東から）

図版 8－1 柱穴列 1～3（北から）

－2 柱穴列 1～3（南から）

－3 柱穴列 2－P 2 遺物出土状況（南から）

図版 9－1 溝 1～6（北東から）

－2 溝 1 断面 B（南から）

－3 溝 3 断面 D（南から）

図版 10－1 溝 4 断面 E（北から）

－2 溝 5・6（東から）

－3 溝 8～10（南西から）

図版 11－1 溝 8・10 北半（南東から）

－2 溝 9・10 南端（北東から）

－3 溝 11・12 北端断面（北から）

図版 12－1 溝 13・14（西から）

－2 溝 15（南東から）

－3 溝 16 上層掘削後の状況（北西から）

図版 13－1 溝 15・16（北東から）

－2 溝 16 南端東肩口土器 100 出土状況（南から）

－3 溝 16 南半土器出土状況（北東から）

－4 溝 16 北端土器・木製品出土状況（南東から）

－5 溝 16 北端土器・木製品出土状況（北東から）

図版 14－1 溝 17～20（西から）

－2 溝 17～20（北東から）

－3 溝 17 断面（断面 F 西半）（北西から）

図版 15－1 溝 18（北東から）

－2 溝 18 北端（南西から）

－3 溝 18・19 中央断面（断面 F 東半）（南西から）

図版 16－1 溝 18（北東から）

－2 溝 18 北半（南西から）

－3 溝 18 内木・獣骨出土状況（南東から）

－4 溝 18 内木・獣骨出土状況（北から）

－5 溝 18 内獣骨出土状況（東から）

図版 17－1 溝 18 南半土器出土状況（北東から）

－2 溝 19（北東から）

－3 溝 20（北東から）

図版 18－1 溝 21～23（北東から）

－2 溝 24・25（東から）

－3 下がり 2（北西から）

図版 19 縄文土器・弥生土器

図版 20 竪穴住居 1・溝 16・溝 17 出土遺物

図版 21 溝 16 出土遺物

図版 22 溝 18 出土遺物

図版 23 瓦・硯・鉄製品・石製品・土製品

第1章 遺跡の位置と環境

百間川原尾島遺跡(1)は、縄文時代から中世にかけての集落・生産遺跡で、県下三大河川の一つである旭川下流の旭東平野に位置する。

沖積世以降、中国山地に源を発する旭川は多くの中小河川とともに土砂を運び、浅海に流入したことで下流に沖積平野を形成した。旭川東岸に位置する旭東平野もこうした沖積作用によるもので、北を龍ノ口山丘陵、東を芥子山及び山王山丘陵、南を操山丘陵によって囲まれた、東西約5km、南北約3kmのまとまりをもった地域を形成している。なお、岡山市中区竹田・中島で旭川から分流する百間川は、江戸時代に造られた人工河川である。百間川築造以前の旭東平野は、複数の小河川が複雑に分岐する地形であり、百間川の河床下や周辺には縄文時代から近世にかけての複合遺跡群である百間川遺跡群が存在する。本遺跡は、その中でも旭川からの分流部にほど近い西側に位置する。

この地域における人々の営みは、操山の丘陵上でナイフ形石器が採集されていることから旧石器時代に遡る⁽¹⁾。その後は百間川遺跡群において縄文時代前・中期の土器が散見される。後期になると、百間川沢田遺跡(2)の貯蔵穴や炉床・貝塚、百間川原尾島遺跡の微高地上で焼土面と土器溜まりなど、遺構や遺物がまとまって見られ、沖積平野における定住生活の様子がうかがえる。また、晩期には百間川沢田遺跡において石鍬や石包丁形石器などが出土しており、農耕の萌芽が認められる。

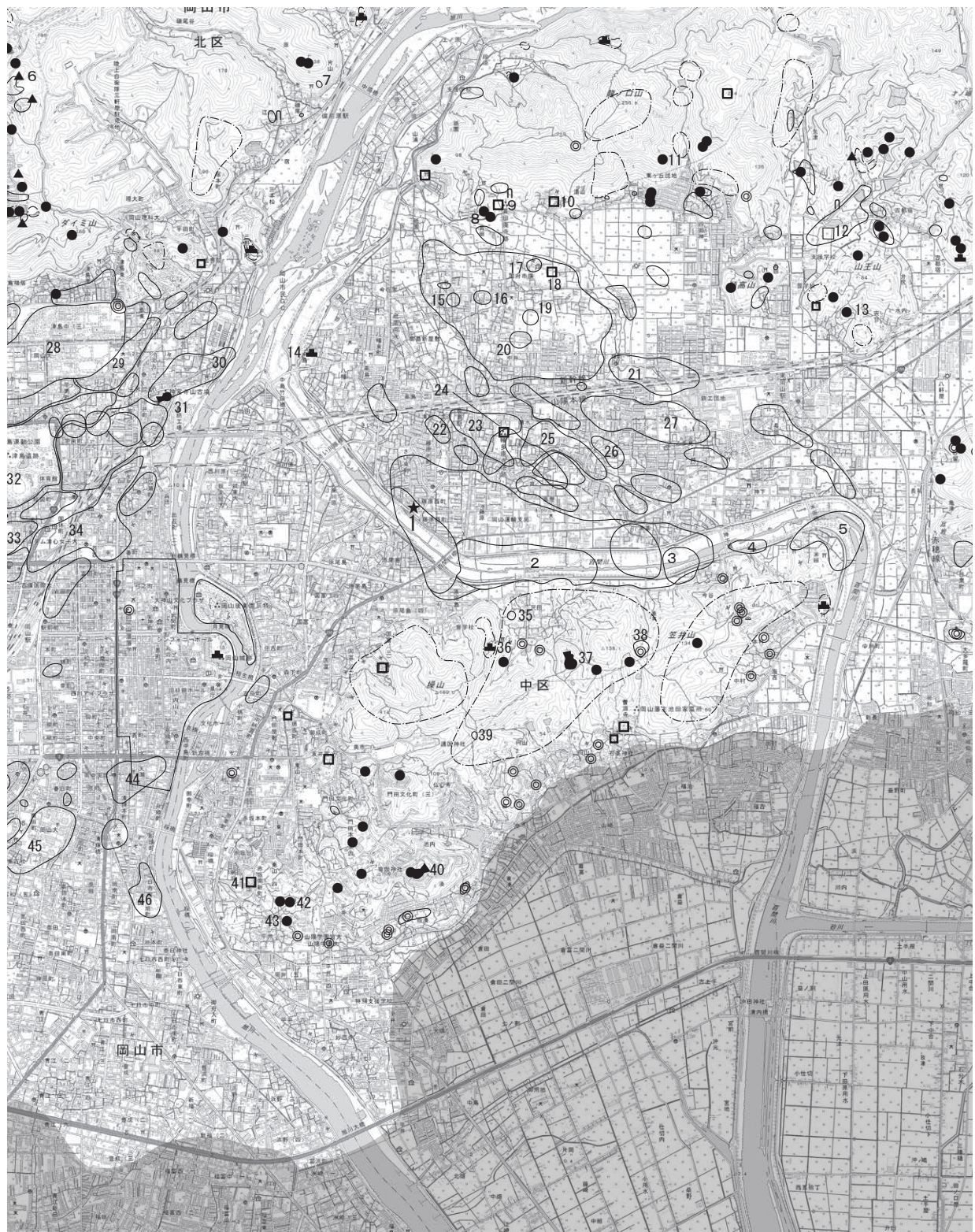
弥生時代前期には、百間川原尾島遺跡や百間川沢田遺跡では、微高地上の凹部や縁辺部で水田が確認されており、百間川沢田遺跡では集落を画する環濠が確認されている⁽⁴⁾。中期の遺跡は、百間川遺跡群の他に、雄町遺跡(21)、乙多見遺跡(27)、南方遺跡(34)などが旭川の両岸に展開する。後期には集落数が飛躍的に増加し、集落規模も拡大する。とりわけ百間川原尾島遺跡では、竪穴住居をはじめとする遺構数も突出しており、当該期の拠点集落であったと考えられる⁽⁵⁾。この時期には水田域の拡大が図られ、百間川原尾島遺跡の西端から約3km東の百間川兼基・今谷遺跡(3)まで、微高地を挟みながら水田域が続くことが確認されている。水田は整然とした区画をなし、用排水路の存在も確認されており、集約的な農耕が行われていたようである。しかし、後期末の洪水により、居住域、水田域ともに埋没している。

古墳時代には、百間川遺跡群をはじめ雄町遺跡、原尾島遺跡(22)、赤田東遺跡(25)、などの遺跡で集落が営まれる。また、百間川原尾島遺跡では5世紀末から6世紀初頭にかけて大型住居を含む遺構が急増し、集住の様子がうかがえる⁽⁶⁾。周辺の生産遺跡としては、原尾島遺跡で中期末に白玉の生産が行われている。後期には、百間川原尾島遺跡、原尾島遺跡、



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)

第1章 遺跡の位置と環境



- 1 百間川原尾島遺跡 2 百間川沢田遺跡 3 百間川兼基・今谷遺跡 4 百間川長谷遺跡 5 百間川米田遺跡 6 白壁奥遺跡 7 片山南斜面遺跡 8 唐人塚古墳 9 賞田廃寺 10 浄土寺 11 備前車塚古墳 12 古都廃寺 13 叡甘山王山古墳 14 中島城跡 15 備前国府推定地(南国長)遺跡 16 南古市場遺跡 17 北口遺跡 18 成光廃寺 19 ハガ遺跡 20 中井・三反田遺跡 21 雄町遺跡 22 原尾島遺跡 23 赤田西遺跡 24 幡多廃寺 25 赤田東遺跡 26 関遺跡 27 乙多見遺跡 28 津島岡大遺跡 29 津島江道遺跡 30 北方長田遺跡 31 神宮寺山古墳 32 津島遺跡 33 上伊福遺跡 34 南方遺跡 35 操山219号遺跡 36 明禅寺城跡 37 金蔵山古墳 38 兼基島坂遺跡 39 操山218号遺跡 40 湊茶臼山古墳 41 網浜廃寺 42 網浜茶臼山古墳 43 操山109号墳 44 天瀬遺跡 45 鹿田遺跡 46 二日市遺跡

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

北口遺跡(17)で鉄滓や轡羽口などの製鉄関連遺物がまとまって出土しており、付近で製鉄を行っていた可能性が高い⁽⁷⁾。一方、平野部を臨む丘陵上では前期に備前車塚古墳(11)や操山109号墳(43)、中期に金蔵山古墳(37)など多数の古墳が築かれ、旭東平野に展開した集落の首長系譜の墳墓と考えられる。後期になると操山丘陵や龍ノ口山丘陵に古墳群が形成され、終末期には丘陵裾に竜山石製の石棺を持つ唐人塚古墳(8)が造られる。

古代になると、上道郡にあたる本地域には、賞田廃寺(9)・幡多廃寺(24)が造営され、基壇や伽藍配置から畿内の有力寺院に匹敵する内容が判明している⁽⁸⁾。奈良時代には備前国府が置かれたとされ、ハガ遺跡(19)では羊形硯を含む陶硯や奈良三彩などの官衙と関連性の強い遺物が出土している⁽⁹⁾。また、百間川米田遺跡(5)では船曳き道や運河、倉庫群などのほか、墨書や刻字のある土器や帯金具など公的性格の強い遺物が出土しており、国府との位置関係から国や郡が建設を行った国府津の可能性が指摘されている⁽¹⁰⁾。さらに、百間川原尾島遺跡では、平安時代初頭の大溝から墨書土器とともに人形や齋串などの木製模造品が出土し、律令的祭祀である大祓の品々の一部と考えられ、遺跡周辺に国府の祓所の存在がうかがえる⁽¹¹⁾。

中世の集落は、百間川原尾島遺跡や百間川米田遺跡、ハガ遺跡などがある。これらの遺跡では、屋敷地が溝や堀で区画されており、条里制地割による規制を受けた集落の様子が明らかとなっている⁽¹²⁾。百間川米田遺跡では、中近世の橋梁遺構が確認されており、水陸の交通の要衝であったことがうかがえる。一方で、百間川原尾島遺跡から百間川今谷遺跡までの範囲については16世紀以降には耕地化している。天正18(1590)年以降の岡山城改修に際し、旭川の流路を付け替えたことが一因となり、城下がたびたび洪水に見舞われることとなった。そこで寛文9(1669)年の荒手(越流堤)の設置に始まり、貞享3(1686)年から翌年にかけての本格的な築堤工事により、放水路としての百間川が整備された。百間川は岡山城下の洪水対策はもとより、下流域の新田開発に伴う耕地の排水処理の機能を併せ持つ放水路として、現在に至るまで補修を繰り返しながら機能し、岡山の発展に寄与した⁽¹³⁾。

以上、本章は百間川遺跡群の既刊各報告書の第1章「地理的・歴史的環境」を参考に、一部加筆して執筆した。(山口)

註・参考文献

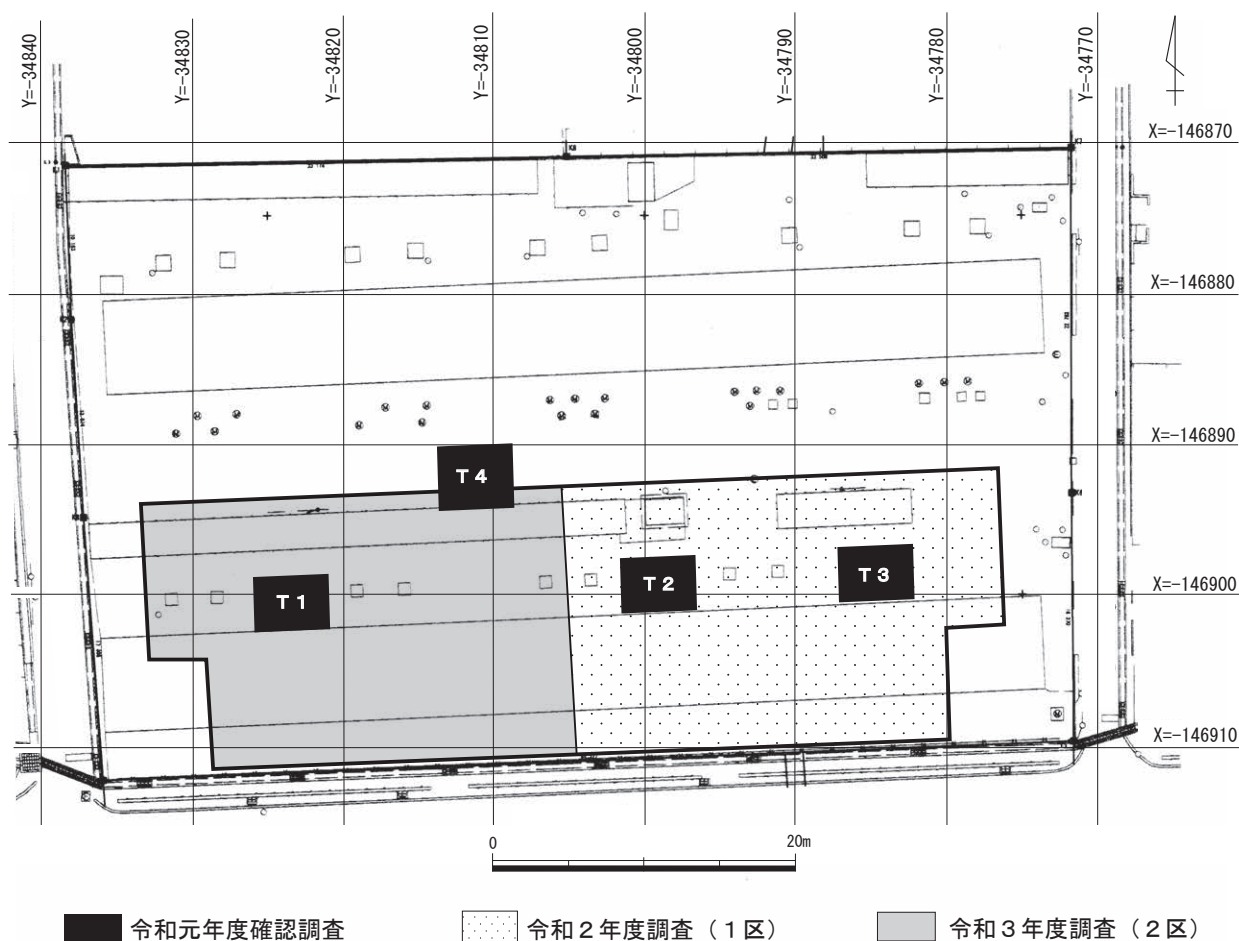
- (1) 操山217・218・219号遺跡など 岡山市史編集委員会 1962『岡山市史』古代編
- (2) 岡山県教育委員会 1993「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84
- (3) 岡山県教育委員会 1996「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106
- (4) 岡山県教育委員会 1994「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88、岡山県教育委員会 2013「百間川原尾島遺跡8 百間川沢田遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』239
- (5) 岡山県教育委員会 2000「原尾島遺跡 沢田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』153、岡山県教育委員会 2004「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179、前掲(3)
- (6) 岡山県教育委員会 2008「百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』215、前掲(5)
- (7) 岡山県教育委員会 1999「原尾島遺跡(藤原3丁目地区)」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139、岡山市教育委員会 2001「北口遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999(平成11)年度』
- (8) 岡山市教育委員会 2005『史跡賞田廃寺跡』
- (9) 岡山市教育委員会 2004『ハガ遺跡』
- (10) 岡山県教育委員会 1982「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52、岡山県教育委員会 2002「百間川米田遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』164
- (11) 前掲(3)と同じ
- (12) 岡山県教育委員会 1995「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97、岡山県教育委員会 1989「百間川米田遺跡3(旧当麻遺跡)」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74
- (13) 岡山県教育委員会 2019「百間川一の荒手及び背割堤 百間川二の荒手2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』246

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

岡山市中区所在の岡山県警察本部宿舍2棟は老朽化が進み、警察共済組合岡山県支部（以下、県支部）では建て替え計画を進め、令和2年度に工事を始める予定であった。しかし、事業地が百間川原尾島遺跡にかかることから、令和元年5月に岡山県教育庁文化財課（以下、県文化財課）にその取扱いについて協議の申し入れがあり、文化財保護法に基づく手続きと確認調査の必要性、本発掘調査の可能性や調査経費負担などについて説明した。

その後、令和元年7月22～26日に確認調査を実施した結果、遺構を確認したので本発掘調査が必要になったため、県支部は、令和2年4月14日付け、警岡山発第11号で解体・建替工事による埋蔵文化財発掘の届出を岡山市教育委員会へ提出して発掘調査の指示を受け、県文化財課は、県支部に対して調査に係る条件整備を依頼し、令和3年1月から発掘調査を開始した。（柴田）



第3図 調査区位置図 (1/500)

第2節 調査及び報告書作成の経過

1 調査の経過

本発掘調査は、令和3年1～6月に岡山県古代吉備文化財センター（以下、センター）職員3名が担当して実施した。調査排土置場を場内で確保する必要があり、調査年度も令和2年度と令和3年度の2年度にわたるため、調査区を2分し、東半を1区、西半を2区とし、1区から着手した。

既存建物の造成土（第5図第1層）は除去されていたが、確認調査時に遺構を確認していた標高4mを目安に重機によってさらに除去した。重機掘削後の時点で現地表から比高1.5mと深く、さらには地下水位も高く脆弱な地盤であったので、崩落防止のため調査区壁面には勾配を付けると共に、段切りを施した。そのため、実際に遺構を検出し得た範囲はかなり狭まっている。また、既存建物の基礎であったコンクリートパイルが調査区南半に深く打ち込まれており、撤去不可能であったため、掘削・検出共に困難を極めた。

人力による掘削は、古代以降の耕作土層と推定される灰色～灰黄褐色粘質微砂層（第5図第3～5層）から始めた。1区では標高3.6～3.8mで古墳時代以降の遺構を検出している。しかし、既存建物の基礎などの攪乱や後世の遺構による削平を受け、面的に確認できた古墳時代の微高地は僅かで、基本的な層序にも不明な点が多く残されていた。加えて、2区との境に竪穴住居が検出されたことから、1区の調査終了後も竪穴住居周辺は埋め戻さず、次年度にさらに下層の調査を行うこととした。令和3年4月からは2区の調査を行い、側溝やトレンチにおいて古墳時代以降の遺構面より約50cm下位で弥生時代の遺構面を確認した。そこで、竪穴住居周辺の微高地部分については古墳時代以降の遺構面の調査終了後、重機によって間層を除去し、弥生時代中期～後期の遺構の検出に至った。さらに弥生時代の基盤層を部分的に掘り下げたが、弥生時代前期以前に遡る遺構は確認できなかった。（渡邊）

2 報告書作成の経過

報告書の作成は、センターにおいて職員1名が担当し、令和3年7月～令和4年9月に行った。出土遺物の洗浄・注記は発掘調査と並行して発掘調査事務所でを行い、復元・実測・写真撮影・浄書・版組・編集作業等はセンターで行った。

整理対象は、遺構46基、出土遺物42箱で、実測した遺物は、土器246点、石製品16点、鉄製品2点、土製品8点、木製品12点、玉類6点である。また、この期間中に、石材鑑定については岡山大学鈴木茂之氏に、動物遺存体の同定には岡山理科大学富岡直人氏に教示を仰ぎ、鉄鉱石の蛍光X線分析については岡山理科大学白石純氏に依頼し、玉稿を賜った。（渡邊）

表1 調査一覧

種別	調査区	調査年度	調査期間	調査面積 (㎡)	遺物数 (箱)	調査担当者
確認調査	T1～T4	R 1	R1.7.22～7.26	62.5	1	團 奈歩
本発掘調査	1区	R 2	R3.1.1～3.31	500	20	渡邊恵里子・米田克彦・藤井翔平
	2区	R 3	R3.4.1～6.30	495	21	渡邊恵里子・藤井雅大・山口香織
計				1,057.5	42	

第3節 日誌抄

令和元年度	5月28日（金）	2区空撮実施	
令和元年	6月30日（水）	2区発掘調査終了	
7月22日（月）	確認調査開始	7月1日（木）	報告書整理作業開始
7月26日（金）	確認調査終了	11月12日（金）	岡山理科大学白石純教授による鉄鉱石鑑定
令和2年度			
令和3年		令和4年	
1月1日（金）	事業開始	2月2日（水）	岡山大学鈴木茂之特命教授による石材鑑定
1月5日（火）	1区発掘調査開始	2月24日（木）	岡山理科大学富岡直人教授による獣骨鑑定
1月18日（月）	基準杭打設		
3月16日（火）	1区空撮実施		
3月18日（木）	岡山大学鈴木茂之特命教授による堆積土壌に関する現地指導	令和4年度	
3月31日（水）	1区発掘調査終了	令和4年	
令和3年度		9月30日（金）	報告書整理作業終了
令和3年		令和5年	
4月6日（火）	2区発掘調査開始	3月31日（金）	事業完了

表2 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地の 有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第57号 R1.8.2	集落跡 百間川原尾島遺跡	岡山市中区藤原光町	62.5	集合 住宅	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	團 奈歩	R1.7.22～26

埋蔵文化財発掘の届出（法第93条）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	目的	届出者	届出日	指示事項
岡教文 第111-1号 R2.4.17	集落跡 百間川原尾島遺跡	岡山市中区藤原光町	解体・新築 (集合住宅)	県警共済組合岡山支部長	R2.4.17	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第93号 R3.1.4	集落跡 百間川原尾島遺跡	岡山市中区藤原光町	500	集合 住宅	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	渡邊恵里子・米田克 彦・藤井翔平	R3.1.1～3.31
岡吉調 第4号 R3.4.1	集落跡 百間川原尾島遺跡	岡山市中区藤原光町	495	集合 住宅	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	渡邊恵里子・藤井雅 大・山口香織	R3.4.1～6.30

埋蔵文化財発見通知（法第100条第2項）

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文理 第690号 R1.8.1	土器(弥生土器・土師器)、瓦 計整理箱1箱	岡山市中区 藤原光町	R1.7.22～26	岡山県教育委員会教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター
教文理 第1877号 R3.3.22	土器(縄文土器・弥生土器・土師器・須恵 器)、土製品、木製品、鉄滓、動物遺存体、 植物遺存体ほか 計整理箱20箱	岡山市中区 藤原光町	R3.1.12～ 3.19	岡山県教育委員会教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター
教文理 第515号 R3.7.5	土器(縄文土器・弥生土器・土師器・須恵 器)、石器・鉄器・土製品、木製品、鉄滓、 動物遺存体ほか 計整理箱21箱	岡山市中区 藤原光町	R3.4.6～6.30	岡山県教育委員会教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター

第4節 発掘調査及び報告書作成の体制

令和元年度		文化財課	
岡山県教育委員会		課 長	小林 伸明
教 育 長	鍵本 芳明	参 事(文化財保存・活用担当)	大橋 雅也
岡山県教育庁		総括参事(埋蔵文化財班長)	柴田 英樹
教育次長	高見 英樹	主 幹	河合 忍
文化財課		主 事	九富 一
課 長	大西 治郎	岡山県古代吉備文化財センター	
参 事(文化財保存・活用担当)	横山 定	所 長	小見山 晃
総括副参事(埋蔵文化財班長)	柴田 英樹	次 長(総務課長事務取扱)	佐々木雅之
主 幹	河合 忍		(～10月14日)
主 任	原 珠見	参 事(文化財保護担当)	亀山 行雄
岡山県古代吉備文化財センター		〈総務課〉	
所 長	向井 重明	課 長	甲元 秀和
次 長(総務課長事務取扱)	佐々木雅之		(10月15日～)
参 事(文化財保護担当)	大橋 雅也	総括副参事(総務班長)	甲元 秀和
〈総務課〉			(～10月14日)
総括主幹(総務班長)	甲元 秀和	総括主任(総務班長)	多賀 克仁
主 任	東 恵子		(10月15日～)
主 任	多賀 克仁	主 任	多賀 克仁
〈調査第一課〉			(～10月14日)
課 長	高田恭一郎	主 任	井上 裕子
総括副参事(第一班長)	金田 善敬	〈調査第三課〉	
主 幹	團 奈歩	課 長	弘田 和司
(確認調査担当)		総括副参事(第一班長)	渡邊恵里子
			(調査担当)
令和2年度		主 幹	米田 克彦
岡山県教育委員会			(調査担当)
教 育 長	鍵本 芳明	主 事	藤井 翔平
岡山県教育庁			(調査担当：調査第二課)
教育次長	高見 英樹		

令和3年度

岡山県教育委員会

教 育 長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 池永 亘

文化財課

課 長 小林 伸明

副 参 事(文化財保存・活用担当) 尾上 元規

総括主幹(埋蔵文化財班長) 河合 忍

主 幹 松尾 佳子

主 事 九富 一

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 大橋 雅也

次 長(総務課長事務取扱) 浅野 勝弘

参 事(文化財保護担当) 亀山 行雄

〈総務課〉

総括主幹(総務班長) 多賀 克仁

主 任 井上 裕子

〈調査第三課〉

課 長 弘田 和司

総括副参事(第一班長) 渡邊恵里子

(調査・整理担当)

主 事 藤井 雅大

(調査担当：調査第二課)

主 事

山口 香織

(調査担当：調査第一課)

令和4年度

岡山県教育委員会

教 育 長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 浮田信太郎

文化財課

課 長 江草 大作

副 課 長(文化財保存・活用担当) 尾上 元規

総括副参事(埋蔵文化財班長) 河合 忍

副 参 事 松尾 佳子

主 事 金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 大橋 雅也

次 長(総務課長事務取扱) 浅野 勝弘

参 事(文化財保護担当) 柴田 英樹

〈総務課〉

総括副参事(総務班長) 福池 光修

主 幹 井上 裕子

〈調査第三課〉

課 長 澤山 孝之

総括副参事(第一班長) 渡邊恵里子

(整理担当)

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

百間川原尾島遺跡は旭川下流東岸の沖積平野に位置する集落遺跡で、旭川の放水路である百間川改修工事に伴う発掘調査によって河川敷内およそ延長900mにわたって弥生時代～近世に至る集落跡や水田が発見され、とりわけ弥生時代後期末の洪水砂で覆われた水田が、当時の景観を留めるものとして全国的にも著名な遺跡である。今回の調査地点は百間川北側の堤防の外に位置するが、直線距離にして100mも離れておらず、河川敷内で確認された集落がここまで広がることは十分に予測されていた。そこで、集落や水田の広がり、洪水砂の有無の確認を主眼に、調査を進めた。

現地表面は標高5.5mで、標高3.6～3.7mで弥生時代後期末から古墳時代の遺構面を、標高3.3mで弥生時代中期から後期の遺構面を確認した。調査区南壁堆積状況第5図第74層が弥生時代中期以前の基盤＝基盤Ⅲ、第71・72層が古墳時代の基盤＝基盤Ⅰ・Ⅱに対応する。調査区西半（2区）では第54層が基盤Ⅰ・Ⅱに対応するが、溝1より西には古代以降の堆積層第4層との間に第54層が堆積している。この第54層は第6図西壁第11層に対応し、第11層下部で甕204が出土しており、古墳時代前期の包含層と考えている。今回の調査では水田は確認できず、全面微高地上と考えられるが、この包含層の堆積状況から、古墳時代初頭には溝1以西が西へ緩やかに下がる地形であったと推定できよう。なお、第54層下面は凹凸が著しい特徴があり、西壁での標高は3.1～3.2mを測る。

調査した遺構総数は、竪穴住居1軒、掘立柱建物3棟、土坑3基、柱穴列3列、溝25条、たわみ2か所を数える。古代～中世の耕作土層である第3～5層を掘削後、任意の標高で上面を水平に揃えて掘削し、平面精査することを繰り返し、竪穴住居1、掘立柱建物1～3、土坑2・3、溝13～23、た



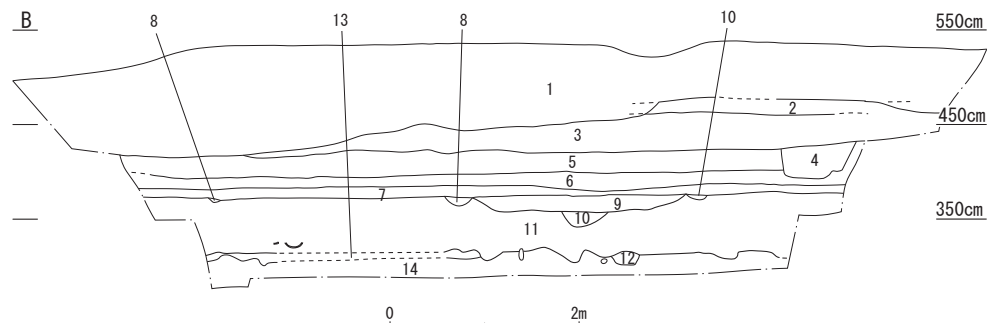
第4図 遺構全体図（1/400）



第5図 調査区南壁 (1/80)

- | | |
|---|--|
| 1 造成土 | 38 黒褐色(10YR3/2)シルト |
| 2 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土<中世以降耕作土> | 39 黄灰色(2.5Y4/1)シルト |
| 3 灰黄褐色(10YR6/2)粘質微砂<中世以降耕作土> | 40 黒褐色(2.5Y3/2)シルト |
| 4 褐灰色(10YR6/1)粘質微砂<古代~中世耕作土> | 41 黒褐色(10YR3/2)シルト |
| 5 黄褐色(10YR5/6)粘質土<古代~中世耕作土> | 42 黄褐色(2.5Y4/1)シルト |
| 6 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト<素掘溝> | 43 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土<溝10> |
| 7 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト | 44 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土 |
| 8 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質微砂 | 45 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土<溝9> |
| 9 灰黄色(2.5Y6/2)微砂質土(灰白色細砂混)<溝16> | 46 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土 |
| 10 黄灰色(2.5Y6/1)粘質微砂<溝16> | 47 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト<溝11> |
| 11 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土<溝16> | 48 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土<溝11> |
| 12 灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂(土器混)<溝16> | 49 灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土<溝11> |
| 13 オリーブ灰色(2.5GY6/1)細砂と灰色(N6/)シルトの互層<溝16> | 50 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(しまり非常に弱い)<溝7> |
| 14 灰色(N5/)粘質土(砂が縞状に貫入)<溝16> | 51 灰色(5Y5/1)粘質土(しまり強い)<溝7> |
| 15 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂(黄灰色(2.5Y5/1)粘土塊混)<溝16> | 52 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト<溝5> |
| 16 灰色(N4/)粘質土(砂混)<溝16> | 53 灰色(5Y4/1)砂質土(しまり非常に弱い)<溝5> |
| 17 褐灰色(10YR5/1)砂質土<溝16> | 54 灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂(土器・焼土粒混) |
| 18 灰色(N5/)粘質微砂~細砂(砂多・有機質多混)<溝16> | 55 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土 |
| 19 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト<溝18> | 56 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂 |
| 20 灰オリーブ色(5Y5/2)砂質土(木質混)<溝18> | 57 灰黄褐色(10YR6/2)細砂<溝3> |
| 21 褐灰色(10YR5/1~6/1)粘質土<溝18> | 58 褐灰色(10YR6/1)粘質土<溝3> |
| 22 灰白色(5Y7/1)細砂<溝18> | 59 褐灰色(10YR5/1)粘質土<溝3> |
| 23 灰色(10Y4/1)シルト<溝18> | 60 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土<溝3> |
| 24 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土<溝18> | 61 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土<溝3> |
| 25 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂 | 62 灰色(N6/)粘土(炭混)<溝3> |
| 26 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト<溝18?> | 63 灰色(5Y5/1)粘質土<溝3> |
| 27 暗灰黄色(2.5Y3/2)シルト(Mn多含)<溝18?> | 64 灰オリーブ色(5Y5/2)細砂<溝3> |
| 28 灰オリーブ色(5Y4/2)砂質土(Fe多含)<溝18?> | 65 灰色(5Y5/1)粘質細砂<溝3> |
| 29 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト(Mn多含)<溝18?> | 66 灰色(N5/)粘質土(黄色土粒多混)<溝3> |
| 30 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト(Mn多含)<溝19> | 67 暗褐色(10YR3/4)土<溝1> |
| 31 灰オリーブ色(5Y5/3)砂<溝19> | 68 褐灰色(10YR5/1)粘質土<溝1> |
| 32 黒褐色(2.5Y3/2)シルト(Mn多含)<溝19> | 69 黄灰色(2/5Y5/1)粘質土<溝1> |
| 33 黄灰色(2.5Y4/1)シルト<溝19> | 70 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質微砂<溝1> |
| 34 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト<溝19> | 71 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト<基盤I> |
| 35 黒褐色(2.5Y3/2)シルト(Mn多含)<溝19> | 72 黒褐色(10YR3/2)シルト<基盤II> |
| 36 褐灰色(10YR5/1)粘質土<溝20> | 73 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト |
| 37 黒褐色(2.5Y3/2)シルト(Mn多含) | 74 暗灰黄色(2.5Y4/2)~オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂質土<基盤III> |

わみ1・2を検出した。ただし、掘立柱建物や土坑3は重機掘削面で既に視認できたことから、中世以降に堆積する途上に、もう一面遺構面が存在していたと想定している。また、調査区東半(1区)での遺構の重複は激しく、溝7~12は基盤I上面で検出できず、側溝やトレンチ、後世の溝の壁面などで把握し、調査を行った。また、西半(2区)では弥生時代の基盤IIIが側溝で確認できたので、古墳時代後期以降の遺構調査終了後、重機によって第56層を除去し、基盤III上面の標高3.3mより下位で土坑1、溝1~6、柱穴列1~3を検出し、調査を行った。(渡邊)



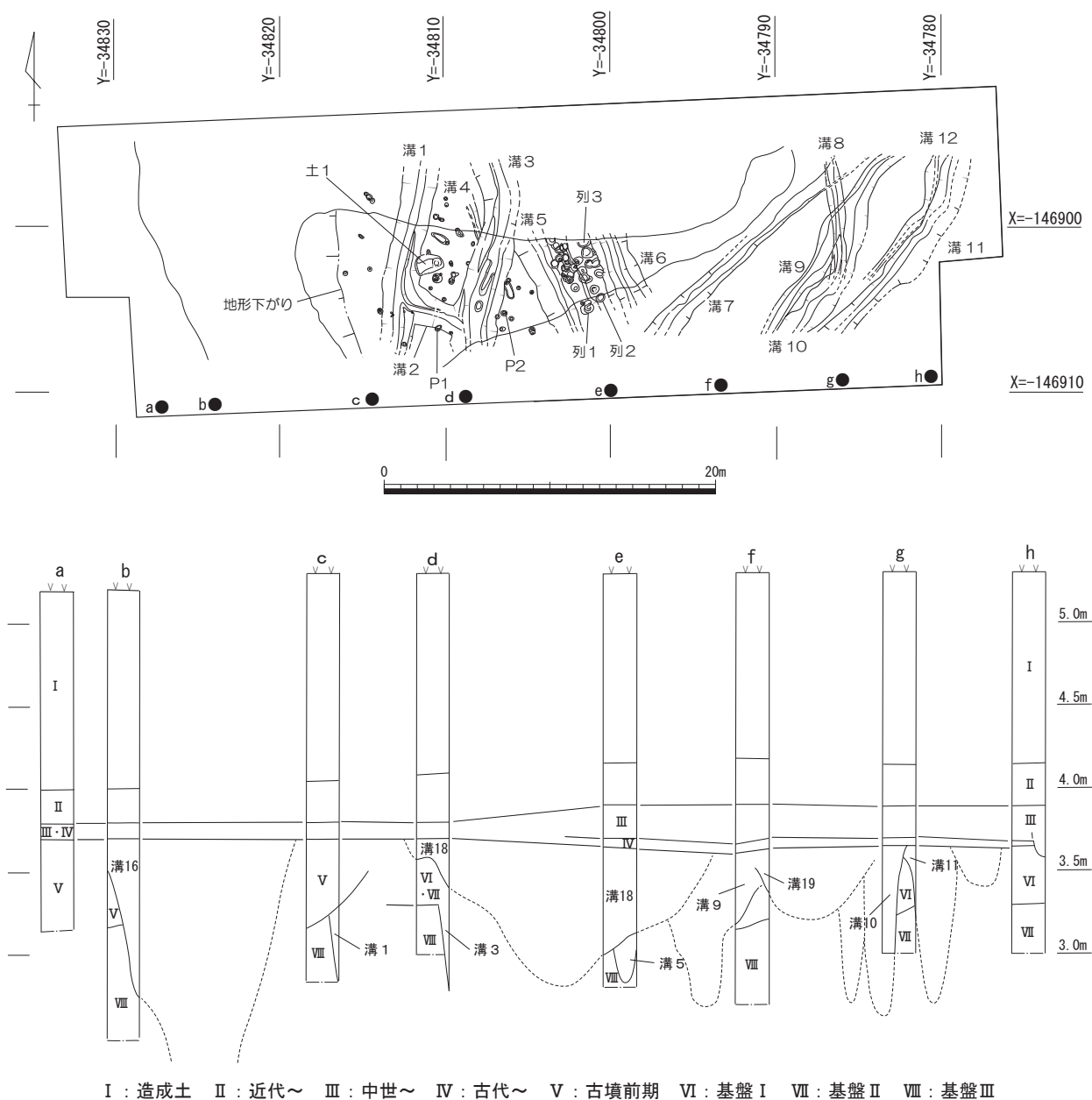
- | | | |
|-------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 造成土 | 5 灰オリーブ(5Y6/2)色微砂<中世以降耕作土> | 10 灰褐色(7.5YR6/2)粘質微砂<溝14> |
| 2 黄灰色(2/5Y5/1)粘質微砂 | 6 褐灰色(10YR5/2)粘質微砂<中世以降耕作土> | 11 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂 |
| 3 灰黄色(2.5Y6/2)粘質微砂 | 7 褐黄灰色(10YR6/1)粘質<古代~中世耕作土> | 12 褐灰色(10YR5/1)粘質土 |
| 4 灰オリーブ(7.5Y5/2)色微砂(礫混) | 8 にぶい黄褐色(10YR7/2)粘質微砂<素掘溝> | 13 褐灰色(7.5YR6/1)粘質微砂<基盤III> |
| | 9 にぶい黄褐色(10YR6/3)粘質微砂<溝15> | 14 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質土<基盤III> |

第6図 調査区西壁(1/80)

第2節 弥生時代以前の遺構・遺物

1 概要

弥生時代の主な遺構は、土坑1基、柱穴列3列、溝12条である。古墳時代後期の溝や現代の攪乱により削平を受けているが、調査地の中央に、弥生時代中期以前に形成された微高地が島状に削り残されており、中期の土坑、柱穴列、中期及び後期の溝を検出した。第7図に、第5図の南壁を模式化した基本層序を示す。第Ⅷ層が基盤Ⅲに対応し、微高地を形成している。上面の標高は約3.3mを測る。第Ⅷ層上には第Ⅵ・Ⅶ層が堆積し、第Ⅵ層上部において弥生時代後期末の洪水砂で埋没した溝群を検出している。第Ⅵ層上面の標高は3.6～3.7mを測る。(渡邊)



第7図 弥生時代遺構全体図① (1/400)・基本層序模式図

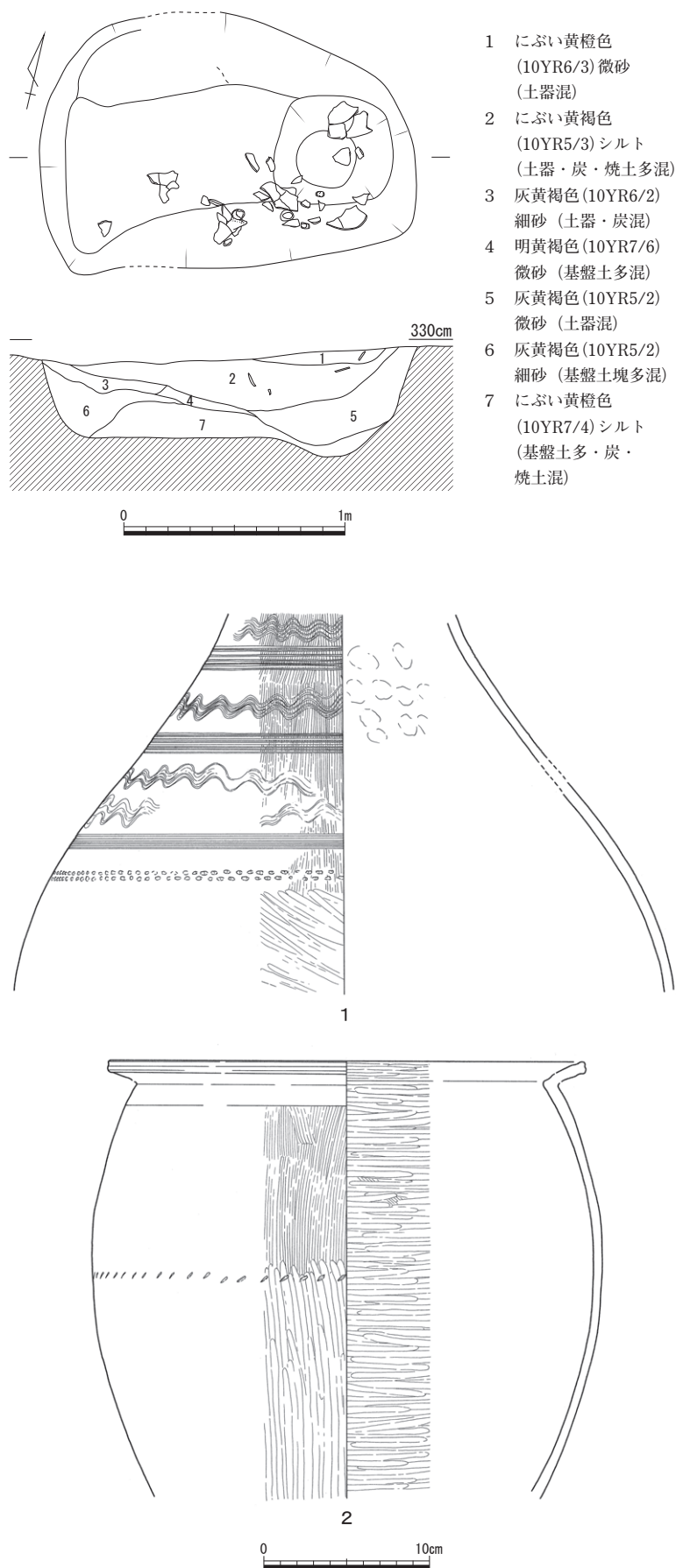
2 土坑

土坑 1（第7・8図、図版7・19）

調査区の中央西寄りに位置する。基盤Ⅲ上面で検出し、検出面の標高は3.25mである。深さは最も深い所で50cmを測り、底面の標高は2.76mである。埋土は大きく第7層、第6層、第1～5層の3段階に分かれ、最終段階にあたる第1～5層に土器片や炭・焼土が含まれていた。第5層からは、比較的多くの土器片に混じり、小円礫が出土した。採取したのは14個で、材質は泥岩や花崗岩、流紋岩質凝灰岩など様々あるが、いずれも旭川流域で産出するとの鑑定結果を岡山大学鈴木茂之教授から得ている。長3～6.5cm、重さ50～135g、平均85gを測り、ある程度の大きさの円礫を選んで意図的に収集していたと考えられる。石製投弾の可能性が高い。

壺1は土坑南半に散在していた破片が接合した。平行櫛描文と波状櫛描文を交互に巡らし、下端に半裁竹管を用いて2個一対で施文したと考えられる列点文を巡らす。甕2は土坑東半の円形落ち込み北半で出土した。胴の張りは弱く、最大径も上方にある。口縁部端部の拡張はなく、内面は口縁部上面までミガキを施している。胴部最大径に篋状工具による刺突文を巡らす。このほか、上げ底の甕底部も出土している。

時期は、百・中・Ⅰの新相に位置付けられる。（渡邊）



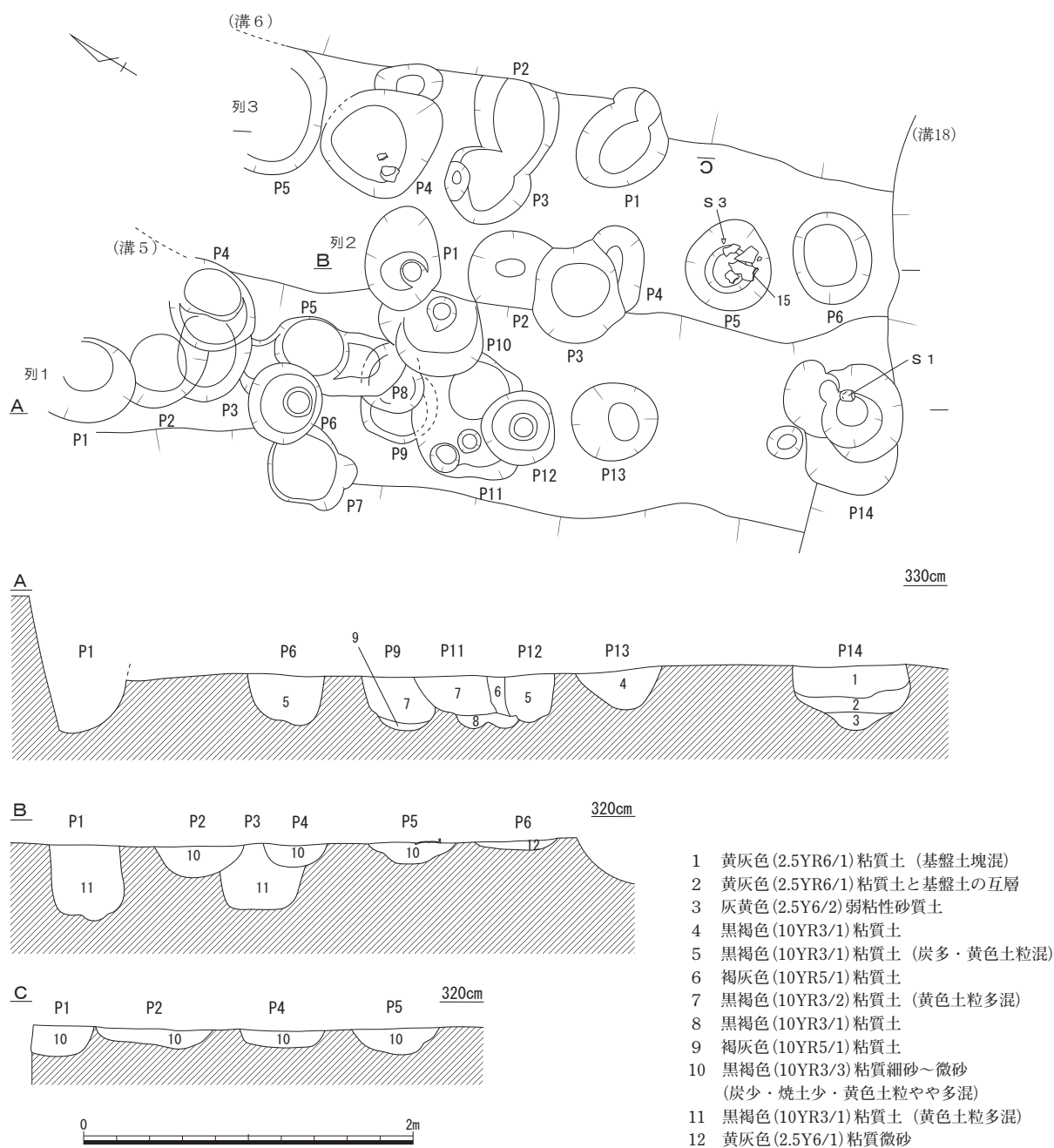
第8図 土坑 1（1/30）・出土遺物（1/4）

3 柱穴列

柱穴列1（第7・9・10図、写真1、図版8・19・23）

基盤Ⅲ上面で検出した。調査区の中央東寄り、溝5と溝6の間に位置する。弥生時代の柱穴がほとんど検出されない中、比較的大きく深い柱穴が溝5と溝6の間にのみ偏在していた。北は既存の建物施設により攪乱を受け、南は古墳時代の溝18により削平されているため全容は不明だが、南北方向に列を成すように見受けられることから、柱穴列として扱い、西から柱穴列1、2、3とした。

柱穴列1はそのうち最も西の並びで、溝5除去後に検出した。溝5東側のテラス状部に溝に沿うように並んでいる。第20図F断面第35層はP1埋土に対応する。15本以上の柱穴が重複しており、切り



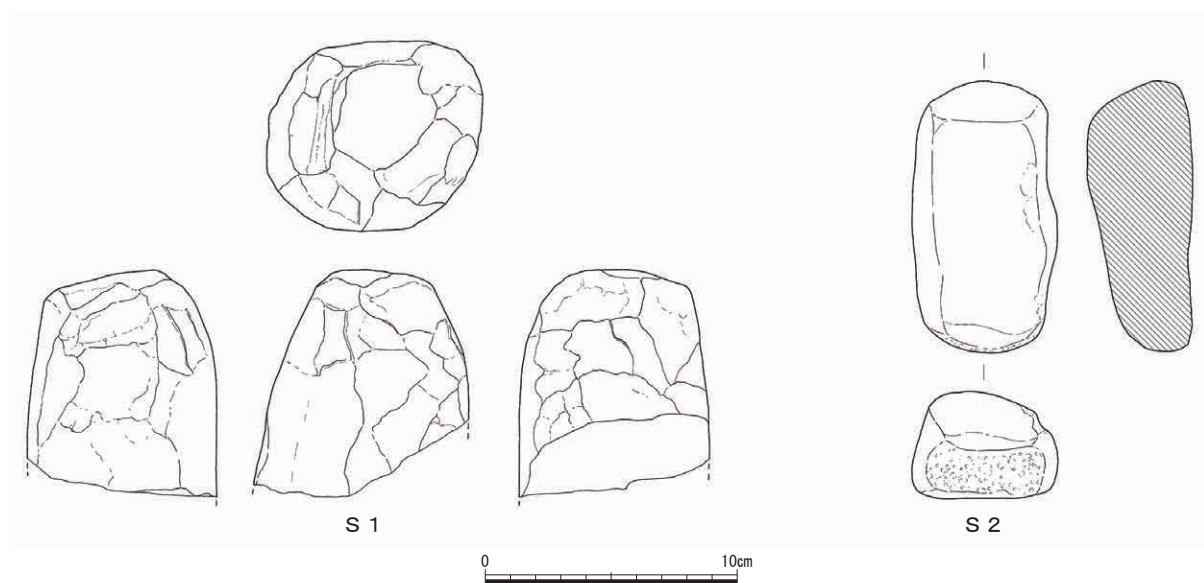
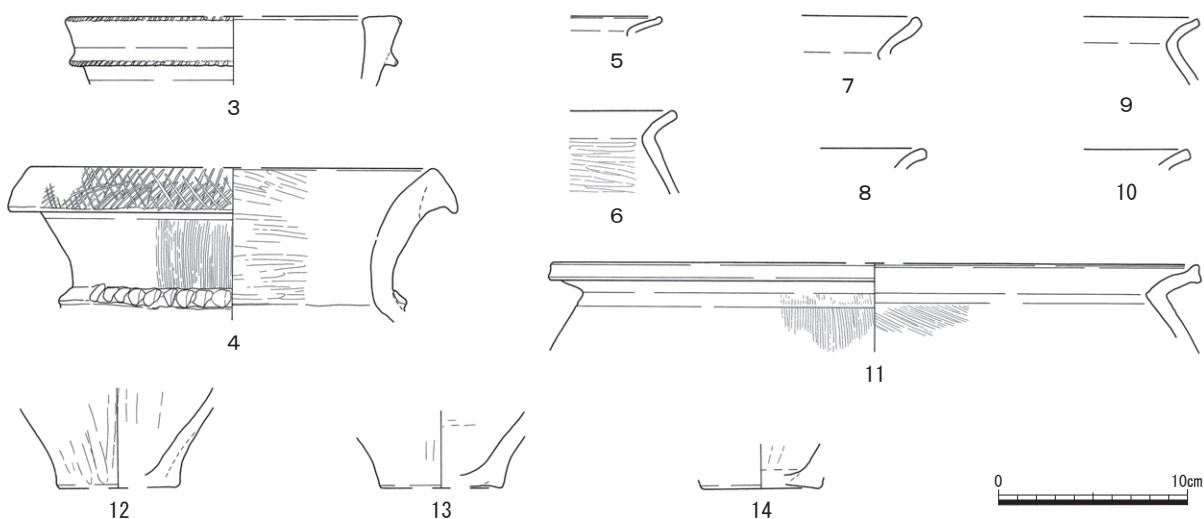
第9図 柱穴列1～3 (1/40)

合いから、P 1－6－12－14、あるいはP 3－9－13－14など複数列に分離できる可能性もある。P 14は検出状況及び堆積状況から、少なくとも3本の重複が認められる。検出面の標高はおよそ3.8mで、柱穴の規模は、径40～50cm、深さ25～40cm、底面の標高は、P 13を除いて、2.4～2.5mである。P 6・12・14では径20cm前後の柱痕も確認した。

出土土器には壺3・4、甕5～14があり、そのうち、3はP12、4はP7、5はP14、6～8・14はP6、9はP1、10はP10、11はP13、13はP3から出土した。いずれも細片で、埋没時に混入したものと思われるが、石器S1・2は共にP14から出土しており、意図的に埋置された可能性がある。3は広口壺で、口縁下に突帯を巡らし、口縁端部と突帯に刻目を施す。上端面はほぼ水平である。4も広口壺で、口縁端部を拡張し、外面に斜格子を沈線で描いている。頸部には指頭圧痕文突帯を巡



写真1 作業風景（北から）



第10図 柱穴列1出土遺物（1/4・1/3）

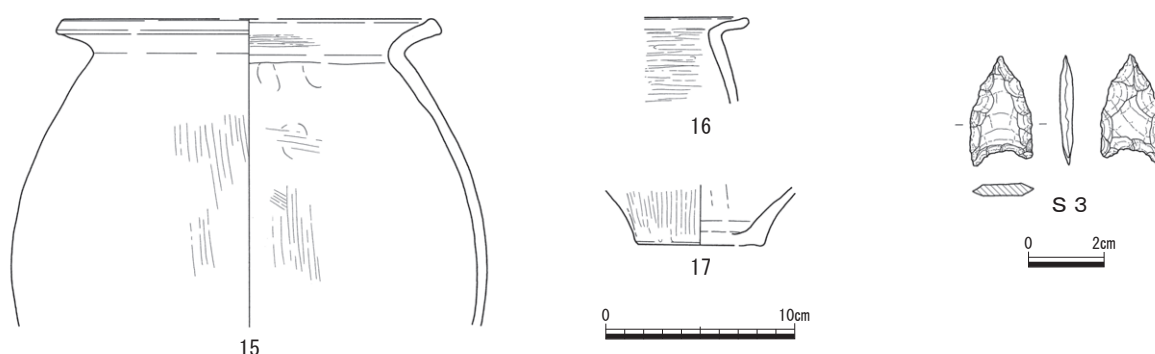
らす。甕5～10は口縁端部が肥厚せず、6では胴部内面にミガキが観察できるが、11は胴部内面ハケ調整で、頸部～口縁部に強いヨコナデを施し、端部が上方に突出する。底部13・14は上げ底である。S1は安山岩で、研磨面はないが、端部に平坦面を有し、そこから側面に放射状に打割を加えている。磨製石斧の未製品と考えられ、古墳時代の溝16最下層から質の酷似した安山岩の剥片が出土しており、近隣で磨製石斧の製作が行われた可能性も考えられる。

時期は、11に新しい様相が認められるが、百・中・Ⅱの古相に位置付けておきたい。(渡邊)

柱穴列2 (第7・9・11図、図版8・23)

柱穴列1の東に位置する。P1～3は溝5に切られている。平面的な柱通りだけ見れば、P1～6のほか、柱穴列1のP2―同P5―同P10―P3―P5―P6の列も想定可能だが、P2・4～6は深さが浅く、判然としない。前者の底面の標高は2.35～2.6mに対し、後者は2.85m以上を測り、複数時期の柱穴列が混在している可能性がある。

出土遺物には甕15～17、石鏃S3があり、15及びS3はP5、16はP1、17はP2から出土している。15は口縁部は強いヨコナデ、胴部内面はハケで仕上げる。16も摩滅で不明瞭だが、口縁部にヨコナデを施す。柱穴列1との時期差はなく、百・中・Ⅱの範疇で捉えられる。(渡邊)



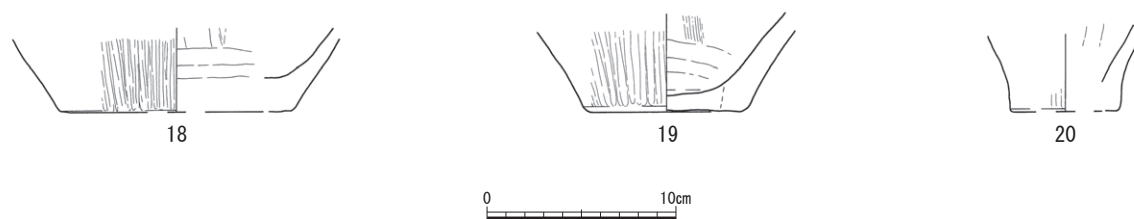
第11図 柱穴列2出土遺物 (1/4・1/2)

柱穴列3 (第7・9・12図、図版8)

柱穴列2の東、柱穴群の東端の列である。いずれも浅く、底面の標高は2.87～2.92mであり、柱穴の深さに着目すれば、柱穴列1及び柱穴列2のP1・3と柱穴列2のP2・4～6及び柱穴列3の2群に分けて考えることもできる。後者はおおむね平行な位置関係にある。

出土遺物は少なく、図示し得たのは壺や甕の底部18～20である。いずれも外面は縦方向のミガキを施し、内面はナデで仕上げている。ケズリは確認できない。

時期は、柱穴列1・2と同様に、百・中・Ⅱの古相に位置付けられる。(渡邊)

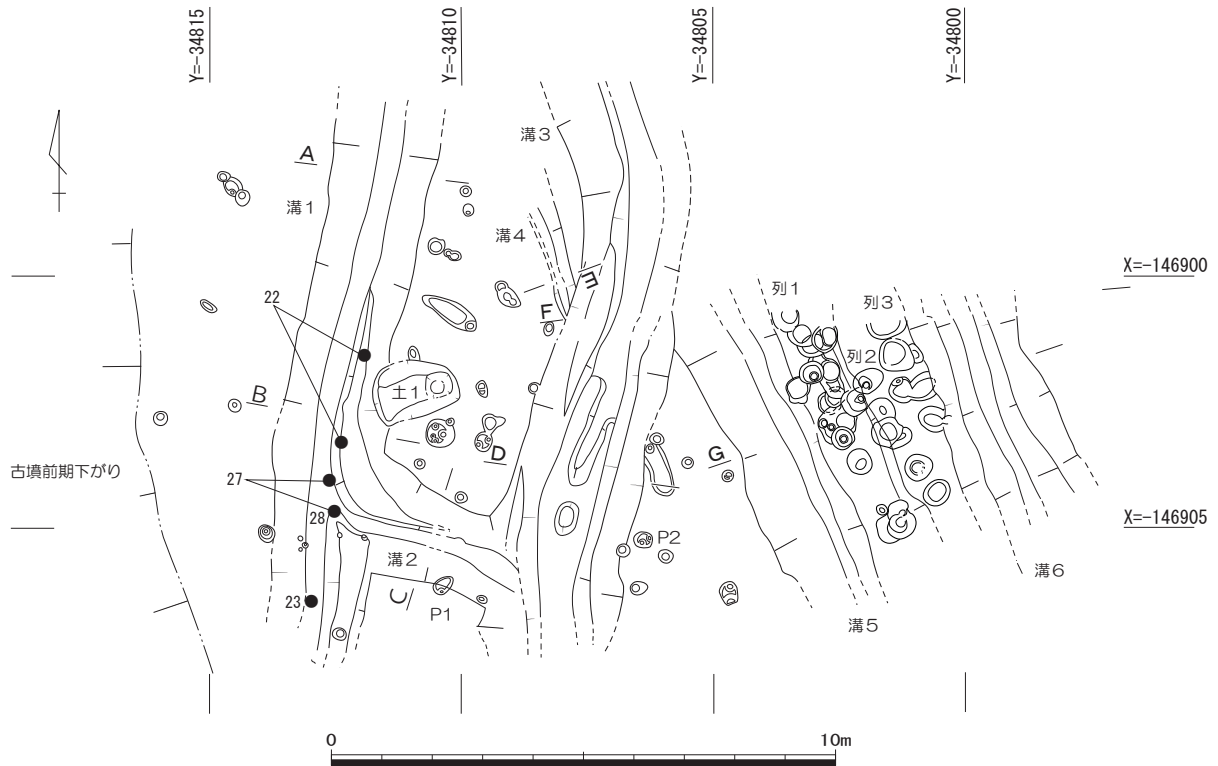


第12図 柱穴列3出土遺物 (1/4)

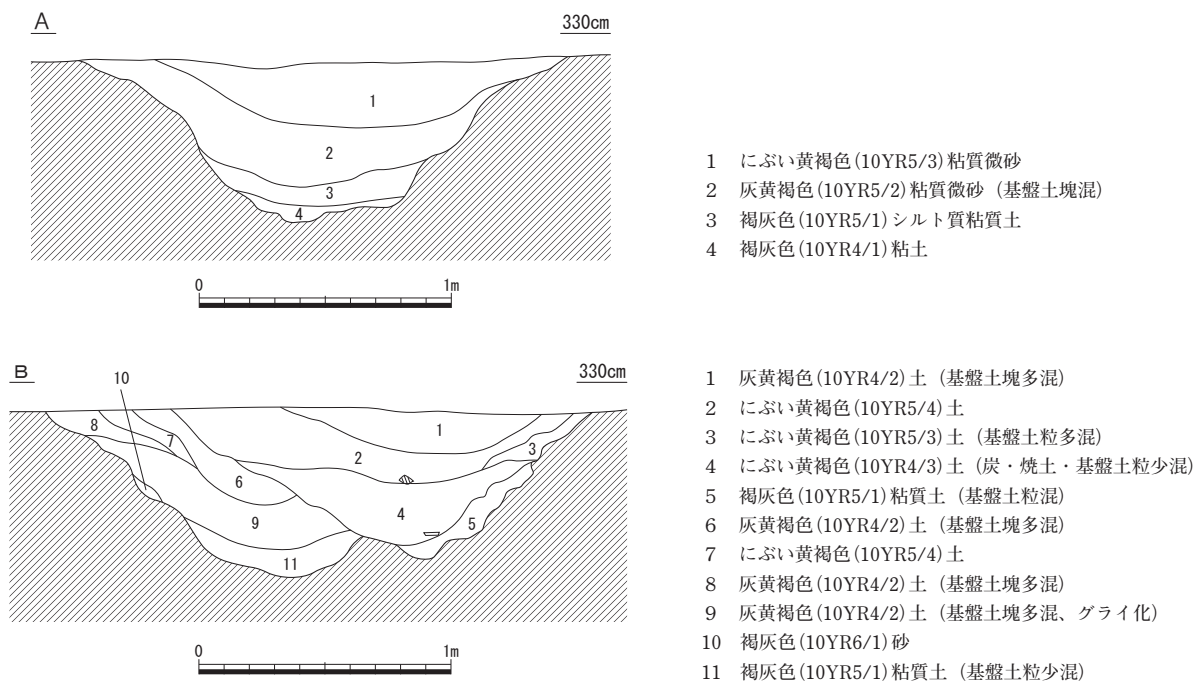
4 溝

溝1 (第7・13~15図、図版9・19)

調査区の中央西寄り、土坑1の西側に位置する南北方向の溝である。基盤Ⅲまで重機で除去した後
に検出した。調査区南壁の堆積状況では第54層と重複して定かではないが、第56層上面から掘り込ま



第13図 弥生時代遺構全体図② (1/150)

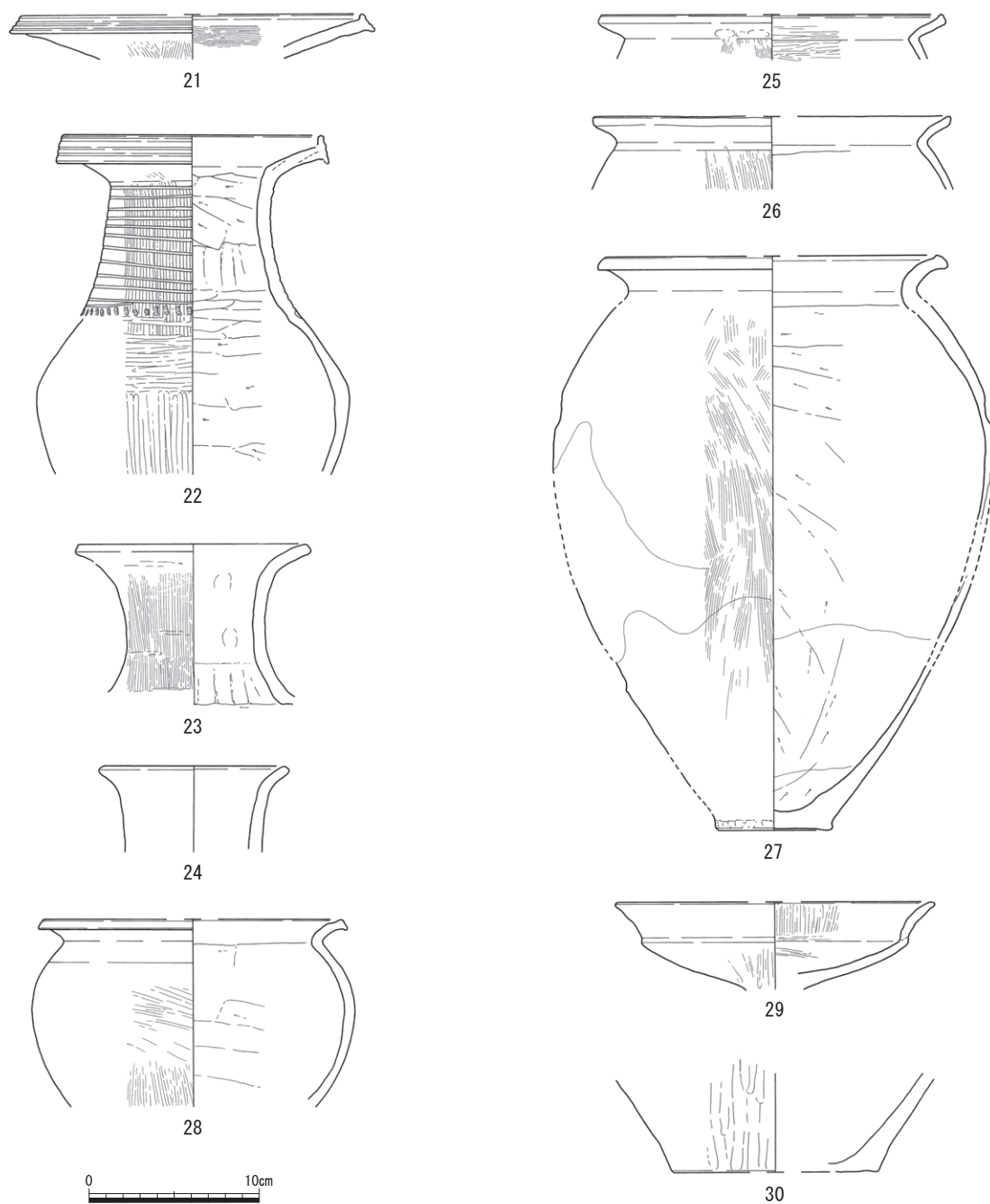


第14図 溝1 (1/30)

れた可能性も考えられる。上面幅2m、検出面からの深さ60cm、断面台形で、基幹水路の一つと考えられる。検出面の標高は3.25m、底面の標高は2.5～2.6mで、南北にあまり高低差がない。

B断面では堆積状況から第1～5層と第6～11層に大きく分かれ、前者は調査区南壁（第5図）の第67・68層、後者は南壁第69層に対応する。最下層は、水性堆積を示す粘質土が堆積していた。

出土遺物には中期の遺物が混入しているが、中間層掘削中に比較的大形の壺22・23、甕27、鉢28が出土した。層中に基盤土の擬礫を多く含むことから、人為的に投棄され、埋められた可能性も考えられる。出土土器の示す時期は百・後・Ⅱ～Ⅲで、後述する溝2・3と有機的な関係にあるが、溝3埋没時まで降る土器はない。また、溝3最上層の洪水砂と同様の砂層も見られないことから、溝3埋没の前段階には機能を失っていたと想定される。（渡邊）

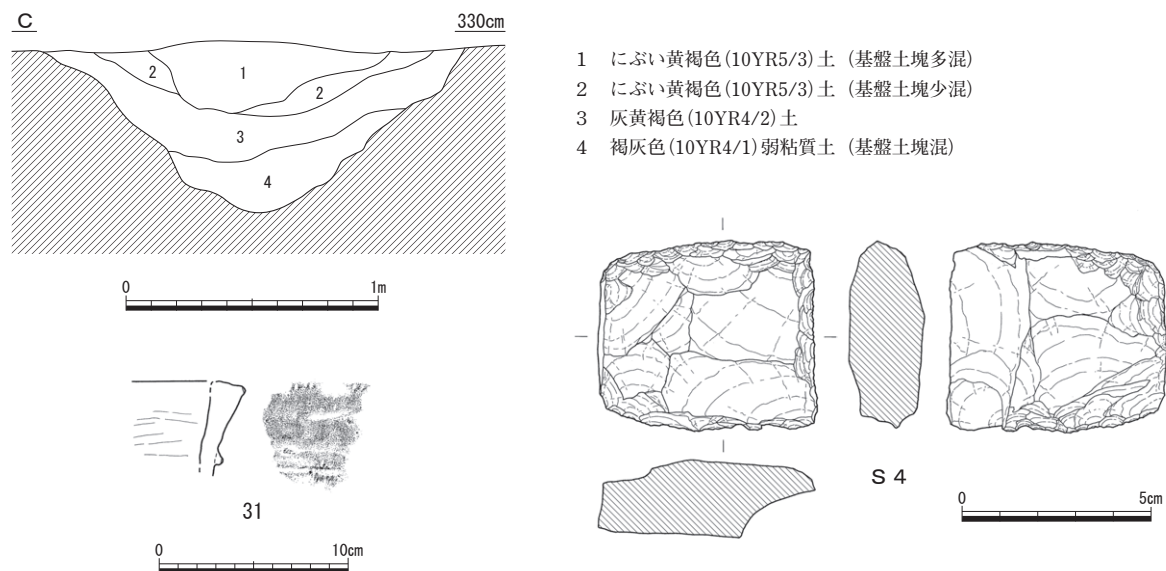


第15図 溝1出土遺物（1/4）

溝2 (第7・13・16図、図版9・23)

溝1と溝3の間の東西方向の溝で、両溝を繋ぎ、水量調節の機能を担っていたと想定される。基盤Ⅲ上面で検出した。底面の標高は2.6m前後で、西端は溝1と一体となっている。一方、東端は溝3より30cm以上高く、西側壁の中段に取り付いている。

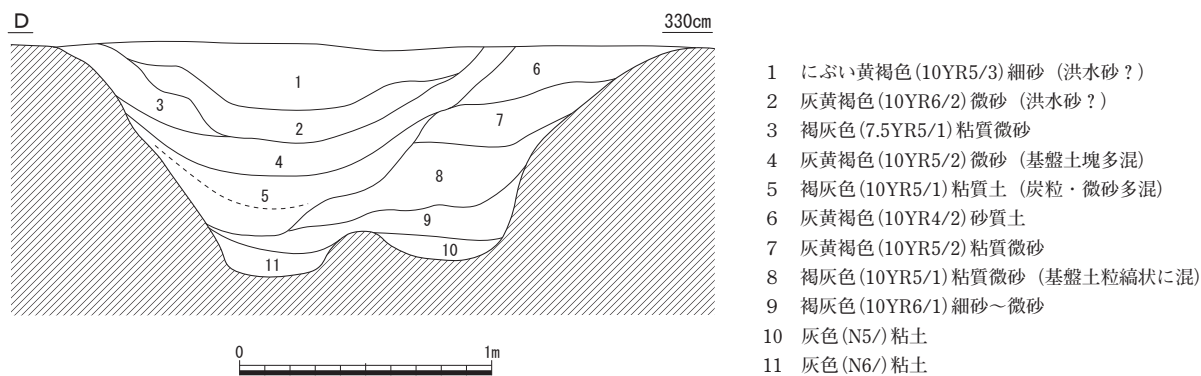
出土土器のうち図示し得たのは壺31のみだが、下層から内面に削りを施した破片も出土している。S4は上層から出土した。溝1と同時期に機能していたと考えられる。(渡邊)



第16図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/2)

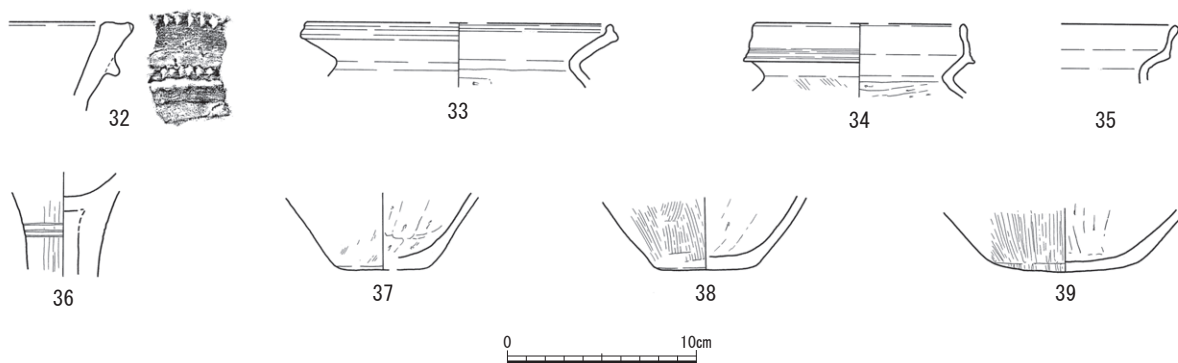
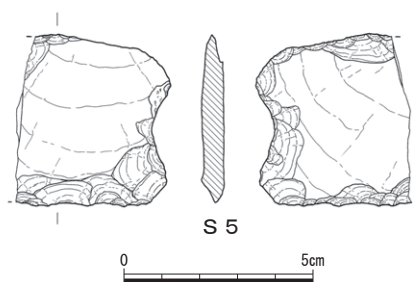
溝3 (第7・13・17・18・20図、図版9・23)

溝1の約3m東にほぼ並行する溝である。北端は攪乱により調査不可能で、北端がやや西へ湾曲しているが、溝5と重複しており、溝5と混同した可能性がある。底面の標高は北端2.3m、中央2.34m、南端2.26mで、溝1より20cm以上低い。堆積状況はD断面第1・2層、第3～5層、第6層以下に大きく分かれ、幾度か掘り直しが認められる。最下層は水性堆積と思われる粘質土が堆積していた。南半の底面中央には南北方向に細長い隆起部分があり、あるいは当地点より南方で2本に分岐していた可能性も考えられる。溝上部は弥生時代後期末の洪水砂と考えられる黄褐色の砂(D断面第1・2層、F断面第1層、第5図第57層)で埋没していた。



第17図 溝3 (1/30)

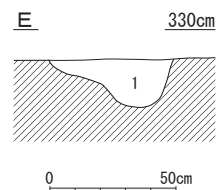
出土土器の多くは細片で、中期の壺32や後期前半の高杯36があり、洪水砂にも中期の土器が混入していた。打製石包丁S 5は上層から出土している。一方、複合口縁の甕34・35や薄手で丸味を帯びた底部39は下層から出土しており、開削が溝1と同時であった可能性もあるが、埋没は溝1に遅れ、最終的に百・後・IVに埋没したと考えられる。(渡邊)



第18図 溝3出土遺物 (1/2・1/4)

溝4 (第7・13・19・20図、図版9・10)

基盤Ⅲ上面で検出した。溝3中央付近に交錯するように重複する南北方向の溝で、溝5の西側に平行する。上面幅40cm、深さ20cm程度の細く浅い溝で、出土遺物も無い。時期不明であるが、第34図第11層が当溝埋土で、第10層が基盤Ⅰ・Ⅱ、第12層が基盤Ⅲに当たり、層序関係と溝5との位置関係から、後期前半以前と考えられる。(渡邊)



1 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂

第19図 溝4 (1/30)

溝5 (第7・13・20～22図、図版9・10・19・23)

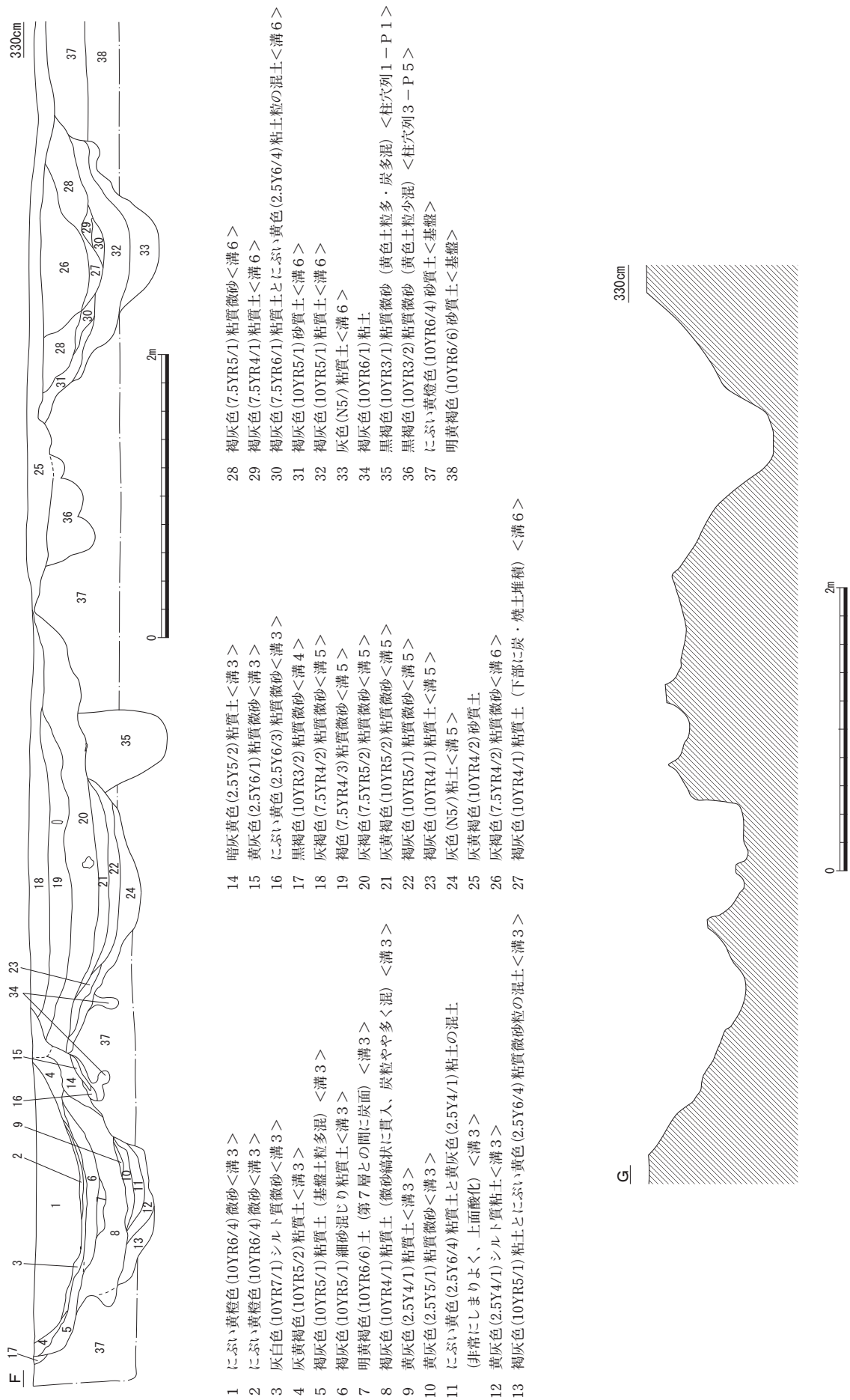
基盤Ⅲ上面で検出した。南端は溝3の東4mにあるが、北端は溝3に切られる。南端は古墳時代の溝18に切られるが、南壁の第5図第52・53層が、本溝埋土にあたると考えられる。第20図では第18～24層が埋土にあたる。東肩にテラス状の段を有し、上面幅は300cmあるが、テラスより下は幅180cm前後となる。テラス面の下幅は100cmあり、ほぼ平坦である。このテラス面上の柱穴列3は、第20図第20層除去後に検出している。底面の標高は約2.5mで、南北の高低差はない。底からテラスまでの比高は約40cmある。最下層は水性堆積とみられる粘土で、全体に粘質微砂がレンズ状に堆積しており、徐々に埋没していった状況を示している。

出土土器は比較的多いが細片で、上層からの出土が多い。中期の土器が主体を占めるが、柱穴列1を切っており、柱穴列1からの流入もあると見られる。壺41・甕43は、溝南半の、第20図第20層に対応する位置から出土した。最も新しい様相を示す短脚の高杯65は北半上層で出土しており、重複する溝3からの混入の可能性はある。磨製石斧の基部S 6も上層出土である。S 6は、折損部が潰れており、破損後に敲石として再利用したとみられる。

切り合いや出土土器から、百・後・Ⅱに埋没したと考えられる。(渡邊)

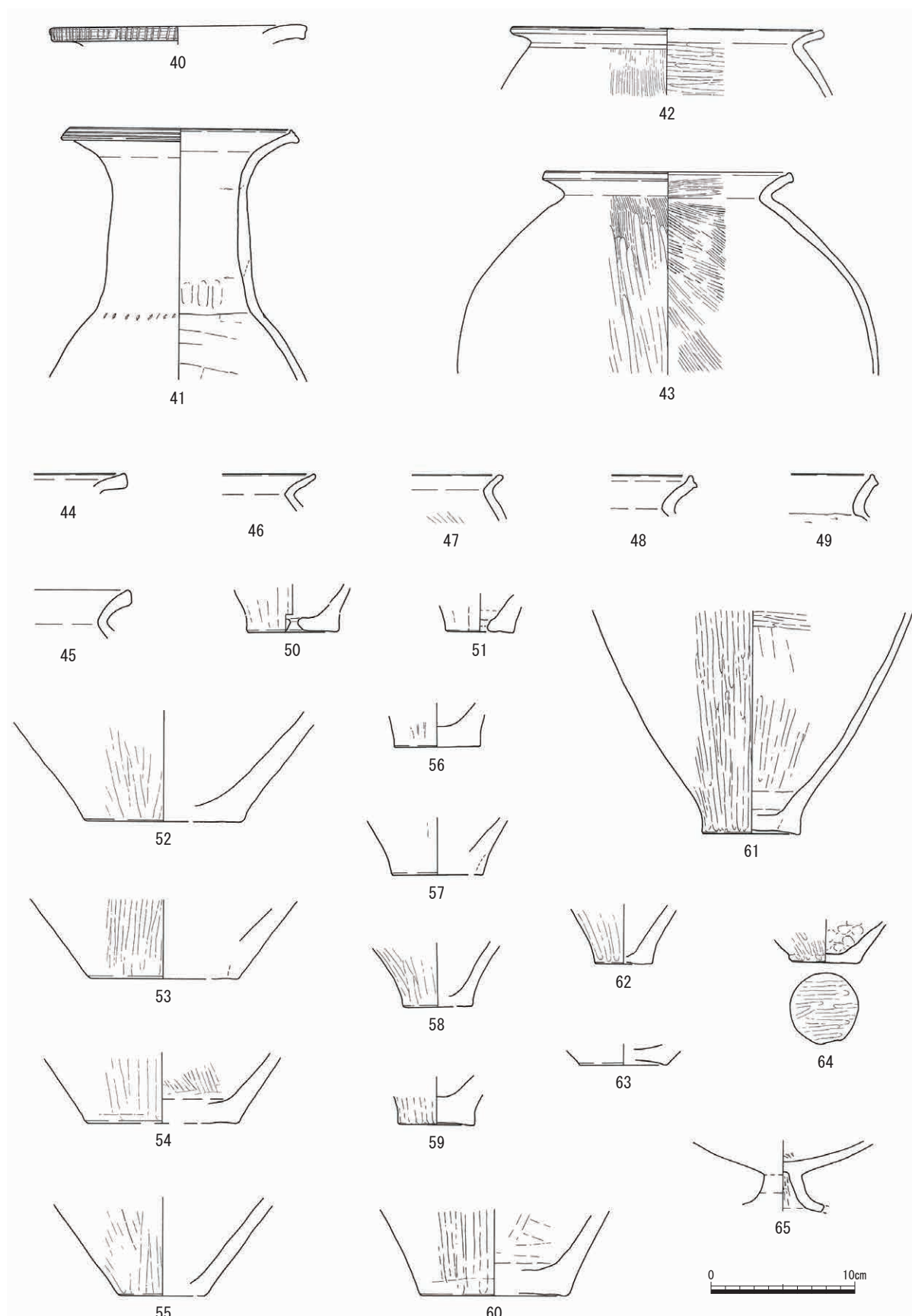
溝6 (第7・13・20・23図、図版9・10・19)

基盤Ⅲ上面で検出した。溝5の東にほぼ平行する溝である。北端は攪乱により調査不可能で、南端



第20図 溝3～6 (1/40)

は溝18に切られる。平面的な観察では、柱穴列3を切っている。断面は、下半は逆台形だが、上方は
 椀状に緩く立ち上がる。上面幅160～200cm、下面幅40cm、底面の標高は北端で2.34m、南端で2.26m



第21図 溝5出土遺物① (1/4)

で、溝5より20cm程度深い。

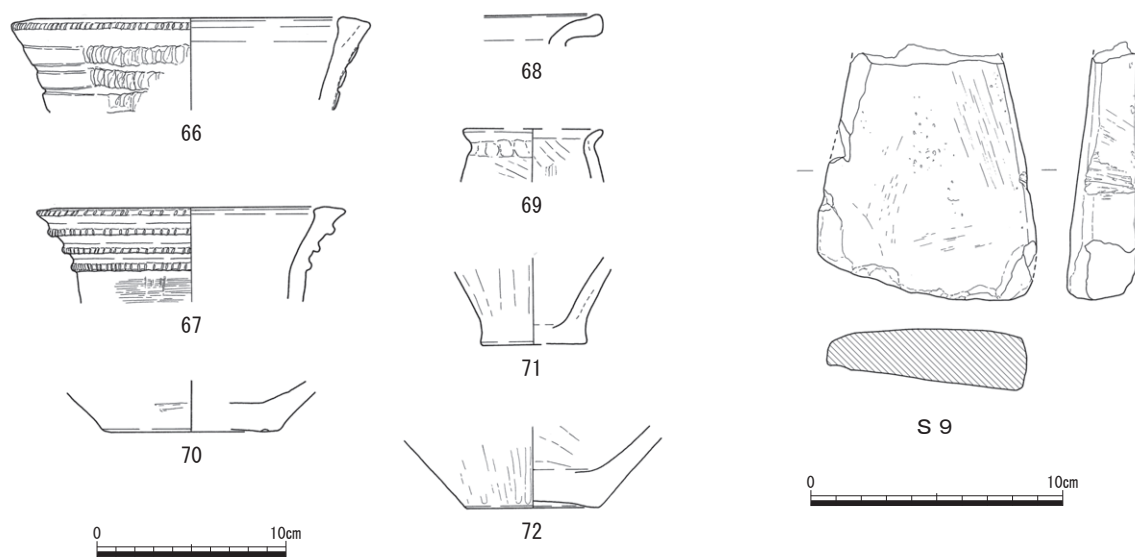
埋土は第20図第26～33層にあたる。古墳時代の基盤となる基盤Ⅱに対応する砂質土（第20図第25層）が上面を覆っていた。堆積状況は、第26・27層、第28～31層、第32・33層の大きく3段階に分かれ、埋没途上で幾度か掘り直しが観察できる。特に第27層下面はU字状を呈し、底面に炭・焼土塊が帯状に堆積していた。厚い所では3cm程度あったが被熱痕跡はなく、性格は不明である。水のない状態が一時的にあり、そこに炭・焼土が投棄されたと推定される。

出土遺物は比較的少なく、細片のみである。66は上面、67・70・S9は下層、ほかは上層出土で、上層と下層に明確な時期差は認められない。壺66は指頭圧痕文突帯、壺67には刻目突帯を巡らす。S9は片面に研磨に

よる擦痕があるため砥石としたが、用途は不明。側面に幅1.5cm程度の溝状の擦り切り痕が観察できる。土器は百・中・Ⅱの範疇で捉えられ、土坑1と併存していた可能性がある。（渡邊）



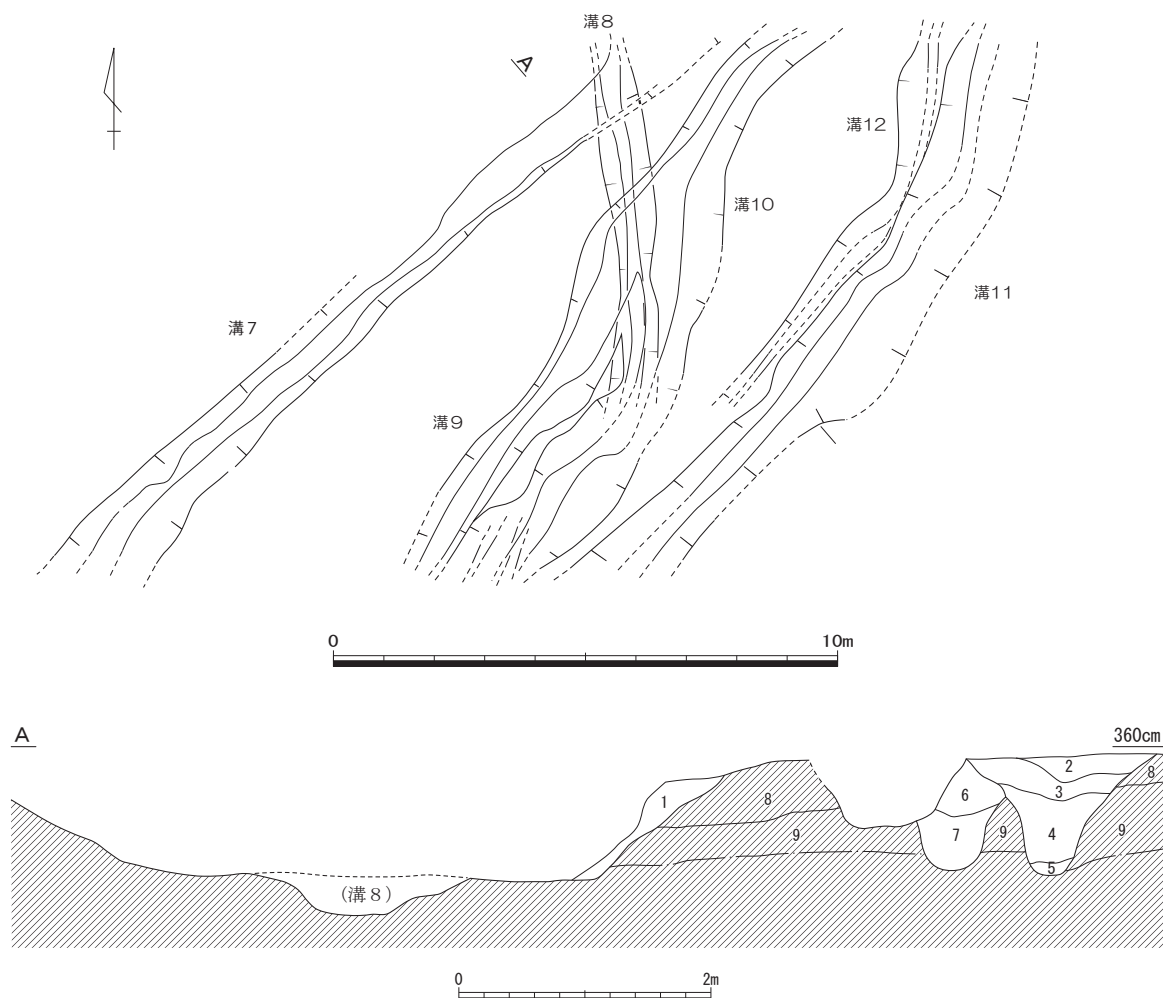
第22図 溝5出土遺物② (1/3)



第23図 溝6出土遺物 (1/4 · 1/3)

溝7 (第7・24図)

溝6の東に位置する。上面幅160cm、下面幅30cm、検出面からの深さは30cmを測る。底面標高は北側が2.60m、南側が2.66mを測り、北側がやや低い。遺構の時期を明らかにできる遺物は出土していないが、溝は洪水砂で埋没しており、弥生時代終末期、百・後・Ⅳとなる可能性が高い。(藤井翔)

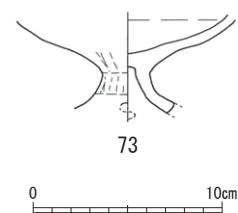


- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(やや固くしめる) <溝10> | 6 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(やや固くしめる) <溝12> |
| 2 灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルト <溝11> | 7 灰色(7.5Y5/1)粘質土(粘性強) <溝12> |
| 3 灰黄褐色(10YR5/2)粘質細砂～シルト <溝11> | 8 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土(固くしめる、Mn斑状に含) |
| 4 にぶい黄橙色(10YR6/3)細砂(洪水砂) <溝11> | 9 黒褐色(10YR3/2)粘質土(固くしめる) |
| 5 灰色(5Y4/1)粘質土 <溝11> | |

第24図 溝7～12 (1/150・1/60)

溝8～10 (第7・24・25図、図版10・11)

溝7の東に位置する。溝8は3条の溝の中で最も早く掘削された溝と考えられ、底面標高は2.26mとなる。溝9・10は調査区中央で合流しており、同時期に機能していた可能性が高い。底面標高は北側が2.5m前後、南側が2.7m前後で、北側がやや低い。いずれも暗灰黄色の洪水砂で埋没している。73は溝10から出土した弥生土器の高杯の破片である。遺構の時期は、溝9・10が出土遺物から百・後・Ⅳと考えられ、溝8も



第25図 溝10出土遺物 (1/4)

出土した土器の破片から弥生時代終末期、百・後・Ⅳに収まる可能性が高い。(藤井翔)

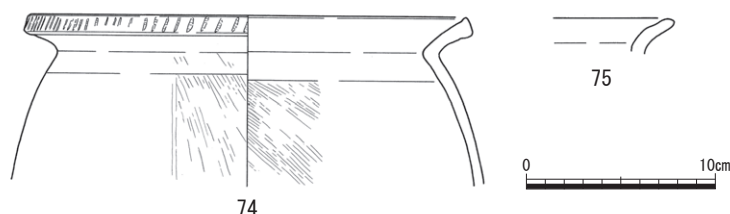
溝11・12 (第7・24図、図版11)

溝9・10の東側に位置する。溝12は溝11に先行して掘削された溝で、底面標高は北側2.44m、南側で2.61mを測り、北側が低くなる。溝11は溝12の埋没後に掘削されたと考えられる溝で、床面標高は北側で2.30m、南側で2.58mを計り、やはり北側が低くなる。溝11は溝9・10と同様の洪水砂で埋没しており、同じ時期に機能していた可能性がある。遺構の時期は、溝11が溝9・10と同じ百・後・Ⅳで、溝12はそれよりやや先行すると考えられる。(藤井翔)

5 その他の遺構・遺物

柱穴 (第7・26図)

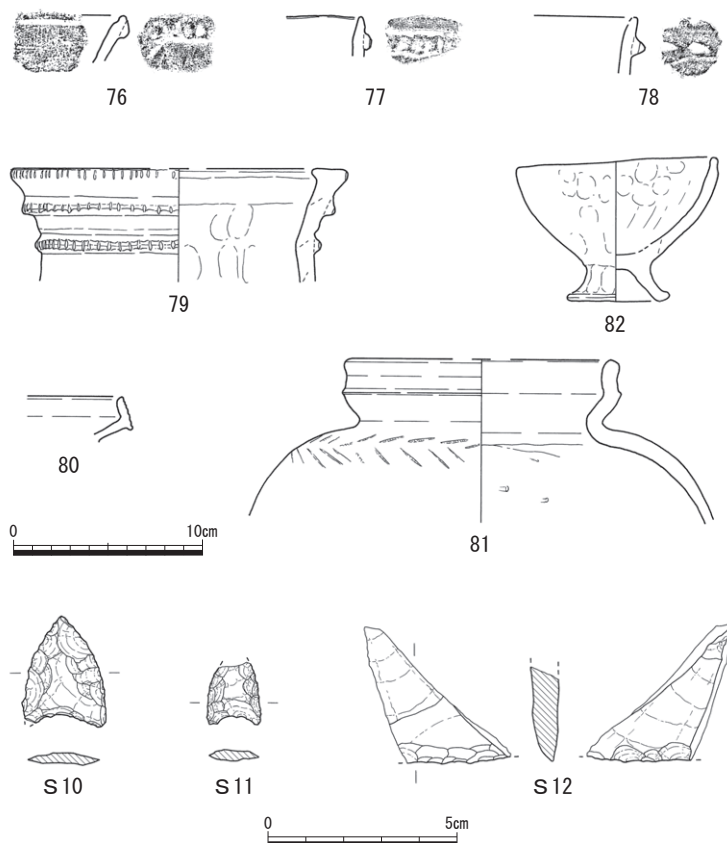
古墳時代以降の遺構基盤となる堆積層除去後、溝16から溝18の間に削り残された微高地の基盤Ⅲ上面で検出した柱穴を、弥生時代の柱穴として扱った。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土で、炭粒や黄色土粒を含むものが多い。また、径30～40cmの規模が多い。検出状況から弥生時代後期以前と考えられるが、土器が出土したのは10本のみで、そのうち図化し得たのはP1から出土した74とP2から出土した75のみである。P1は溝2南肩中央の溝2に切られた柱穴で、P2は溝3東側に位置する。いずれも百・中・Ⅱに比定できよう。(渡邊)



第26図 柱穴出土遺物 (1/4)

遺構に伴わない遺物 (第27図、図版19・23)

ここには掘り下げ時や古墳時代以降の遺構から出土した遺物を掲載している。縄文時代晩期後葉～弥生時代後期末葉までの時期幅が認められる。82は基盤Ⅲ上面、76・79は溝3、77・81・S11・S12は溝16、78・S10は溝18、80は溝19から出土した。いずれの溝も基盤Ⅰ上面から基盤Ⅲに達するまで深く掘り込まれた溝で、溝開削時に下部にある弥生時代の遺構を掘削し、混入した可能性がある。一方、晩期の遺構や堆積層は確認しておらず、他地点から流れ込んできた可能性もある。(渡邊)



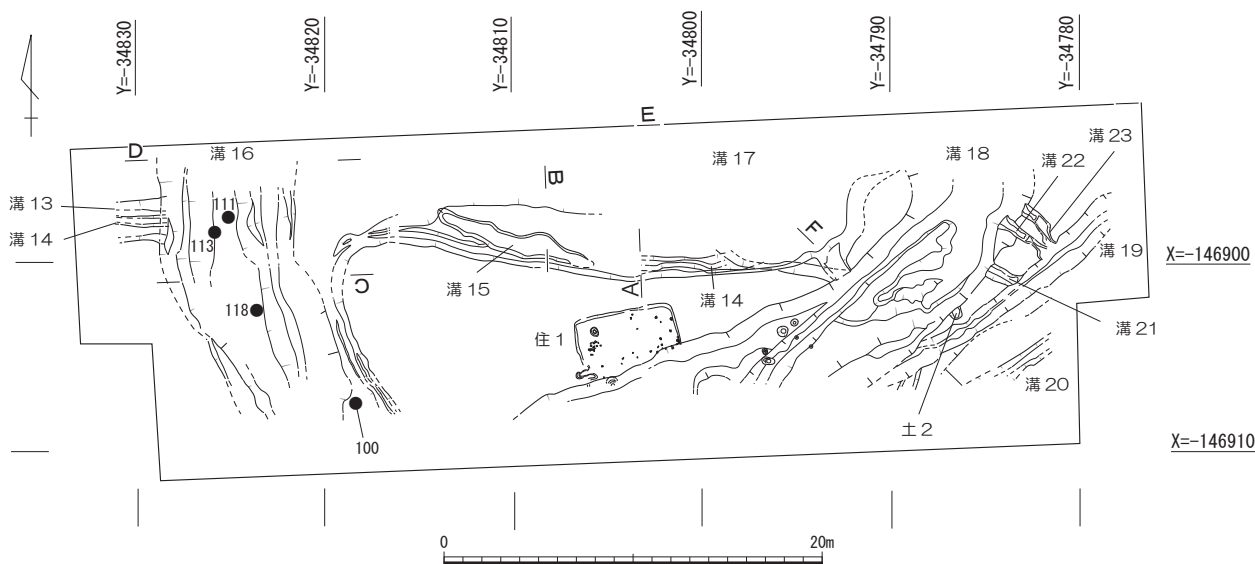
第27図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4 · 1/2)

第3節 古墳時代～奈良時代の遺構・遺物

1 概要

古墳時代の主な遺構は、竪穴住居1軒、土坑1基、溝11条である。弥生時代中期～後期の遺構上部を覆う暗灰黄色～灰黄褐色の砂質土（基盤Ⅰ）上面で検出した。検出面の標高は3.6～3.8mである。

調査地には大小様々な溝が様々な方向に流走していた。調査範囲が限られているためこれらの関係は正確に捉えられなかったが、出土遺物から、ある時点で併存していた可能性は高い。なかには溝同士を繋ぐ溝もあり、有機的な関係を持って機能していたと考えられる。溝18北端では堰と思われる構造物も検出した。これら溝群に削り残された微高地上では、竪穴住居を1軒検出した。（渡邊）



第28図 古墳時代遺構全体図（1/400）

2 竪穴住居

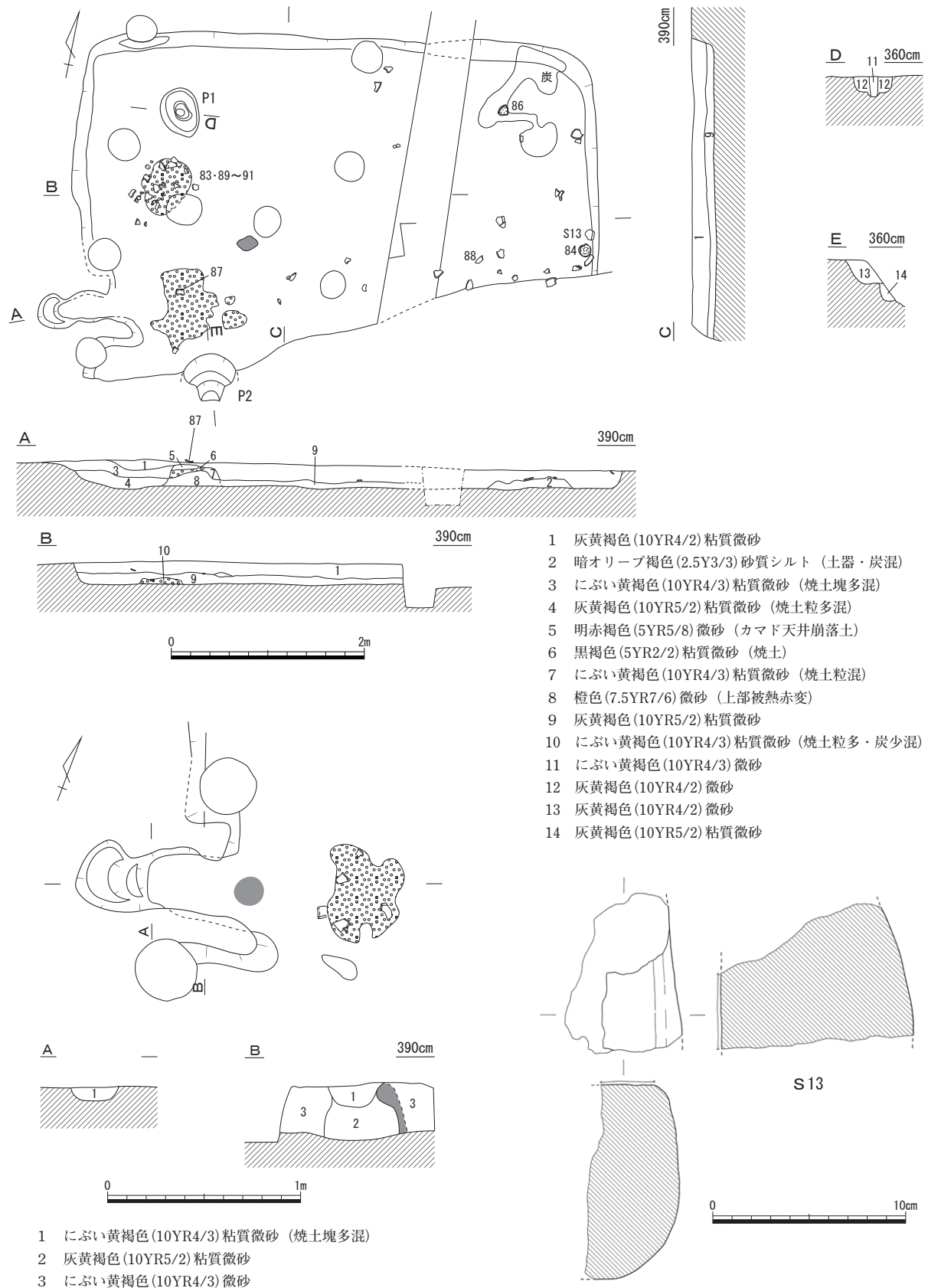
竪穴住居1（第28～30図、図版4・5・20）

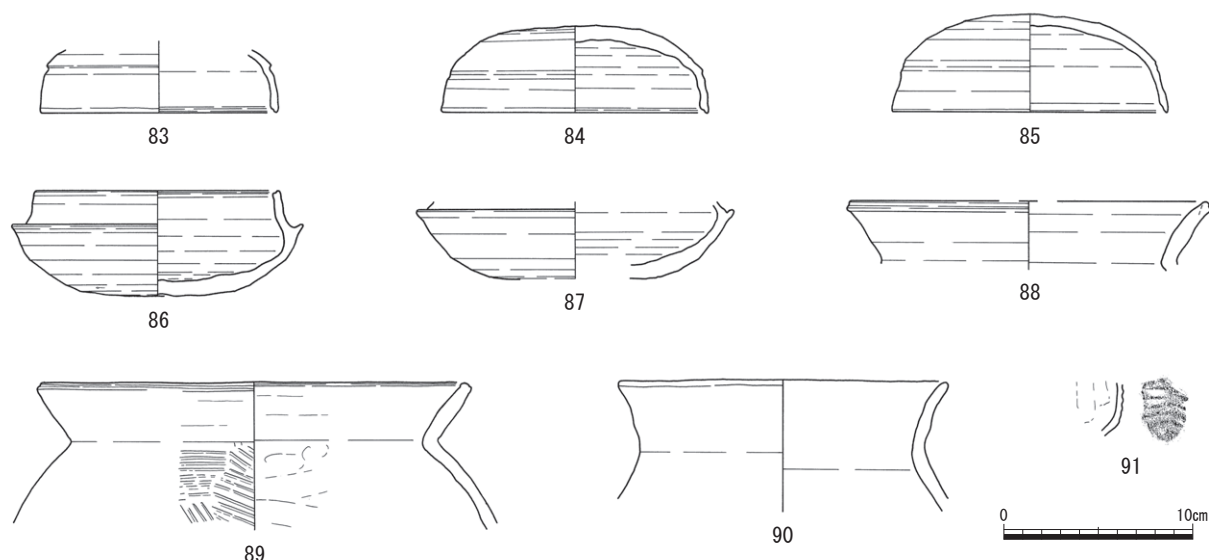
調査区の中央に位置する。住居の南半は溝18により失われている。平面形は方形で、規模は長軸が540cm、残存する短軸は352cmである。支柱穴は竪穴住居の北西角で1本（P1）を確認した。カマドの南側でも柱穴1本（P2）を確認したが、後述するカマドと近接しており、支柱穴ではない可能性が高い。東側では柱穴は確認できなかった。

竪穴住居の西壁にはカマドが付設されている。天井部は崩落しており、その下で被熱を受けた燃焼部を確認した。袖部は欠損しており、元の規模は不明である。煙道は竪穴住居外まで延び、なだらかに立ち上がる。竪穴住居床面では焼土が散在し、カマド北側の焼土には土師器片が多く含まれていた。

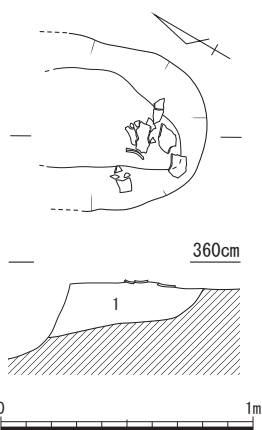
出土遺物には須恵器蓋杯83～86、土師器甕88～90、製塩土器91、一部に被熱を受けた台石S13がある。また須恵器杯身87が崩落したカマドの上で出土した。出土状況から廃絶後に廃棄されたものと考えられる。竪穴住居の使用時期は、須恵器からMT15型式併行期（6世紀前半）と考えられる。その

後、MT85型式併行期（6世紀後半）には廃絶されていたと推定される。また、甕89は溝16の南端東側肩口で出土した破片と接合しており、竪穴住居と溝16が同時期に併存していたといえる。（藤井雅）

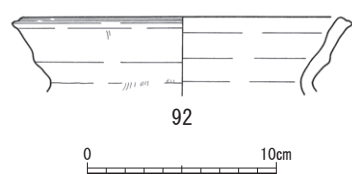




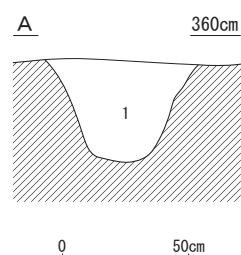
第30図 竪穴住居 1 出土遺物② (1/4)



1 褐灰色(10YR4/1)粘質土 (炭混)



第31図 土坑 2 (1/30)・
出土遺物 (1/4)



1 褐灰色(10YR5/1)粘質土

第32図 溝14 (1/30)

3 土坑

土坑 2 (第28・31図、図版7)

調査区の東側に位置し、溝18・19間の微高地上で確認した。土坑の北半は溝18の東肩土層に切られる。平面形は楕円形に近く、規模は残存長63cm、幅67cm、深さ20cmである。掘り方の南寄り上面では土師器壺92が破片の状態でもとまって見つかった。土師器壺92は複合口縁で、屈曲部がややにぶい。口縁部のほかに胴部の破片も出土したが、接合が困難であった。

時期は古墳時代前期後葉、百・古・Ⅲと考えられる。(米田)

4 溝

溝13 (第28図、図版12)

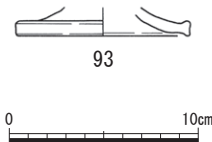
調査区西端に位置する東西方向の溝で、東側は溝16に切られている。古墳時代前期包含層上面で検出した。埋土は第6図第9層に当たり、上部には古代以降の耕作土=第6図第7層が堆積している。上面幅は2mを測る。検出面の標高は3.54m、深さは16cm、断面皿形を呈する。遺物はなく、切り合いから古墳時代の範疇と考えられる。(山口)

溝14 (第28・32図、図版12)

調査区北側に位置する東西方向の溝で、西端では溝13に重複する。古墳時代前期包含層上面で検出した。第6図第10層がこれに相当する。溝16・17に切られているため、調査区西端と中央付近で部分的に検出している。上面幅は西側で82cm、東側で50cmを測る。検出面の標高は3.5m、深さは最大60cmで、断面U字形を呈する。時期の明確な遺物はなく、切り合いから古墳時代の範疇と考えられる。(山口)

溝15 (第28・33・34図、図版12・13)

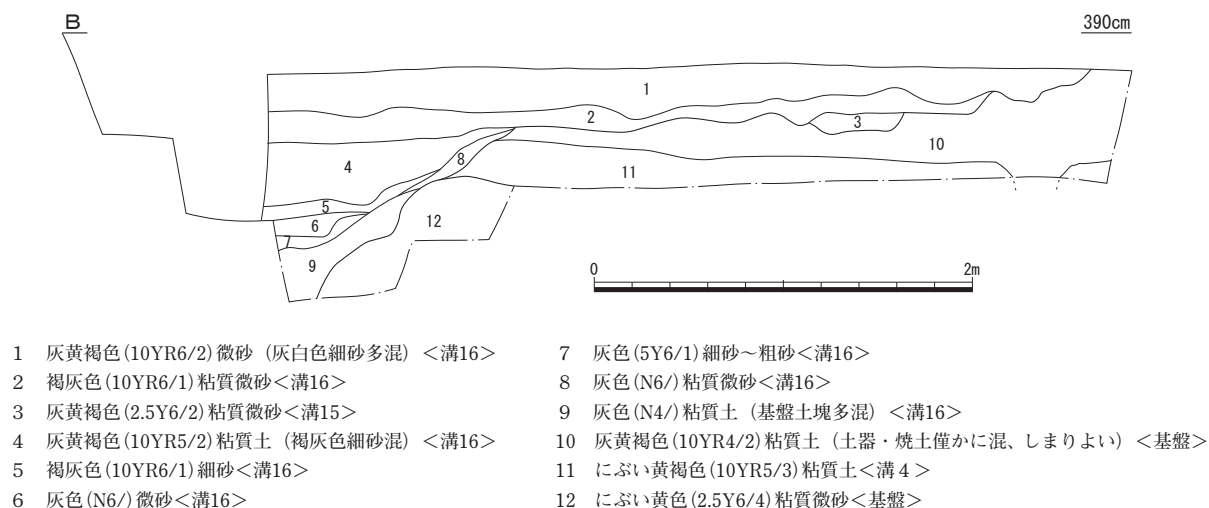
調査区北側に位置する東西方向の溝である。第34図B断面第3層が埋土に相当する。基盤Ⅰ・Ⅱに当たる第34図B断面第10層上面で検出した。調査区西半では溝16に切られているため詳細は不明であるが、上面幅70～130cm、検出面からの深さは9.2cmである。須恵器高杯93が出土しており、古墳時代後期に埋没したと考えられる。



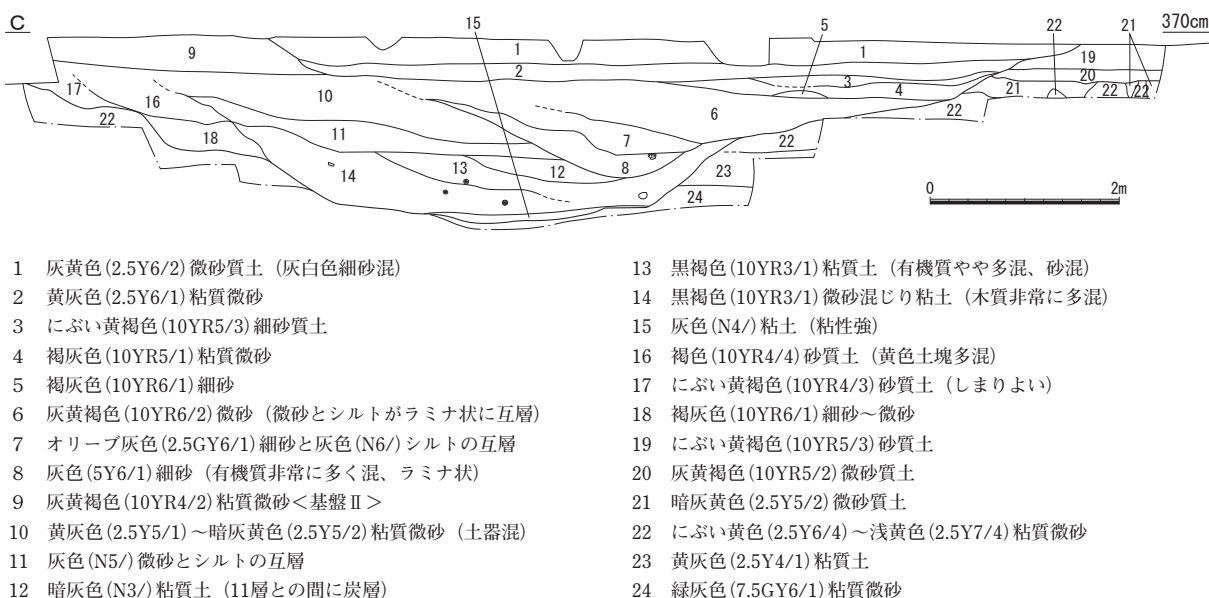
第33図 溝15出土遺物 (1/4)

溝16 (第28・35～43図、図版12・13・20・21)

調査区西側に位置する溝である。北側が調査区外に広がっているため、全容は不明であるものの、上面幅10m以上、検出面からの深さ1.5mを超える大規模な溝である。堆積状況を第34・35・38図に示しているが、C断面第10～15層 (第1段階)、第3～8層 (第2段階)、第1・2層 (第3段階) の大きく3段階に分けられる。膨大な土量が予測され、脆弱な地盤で湧水も激しく、完掘が困難であったため、第1段階の完掘についてはトレンチでの確認のみにとどまった。



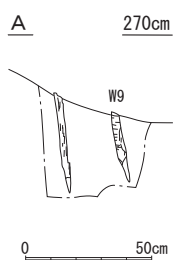
第34図 溝15・16 (1/40)



第35図 溝16中央断面 (1/80)



第36図 溝16内遺物出土状況 (1/40)



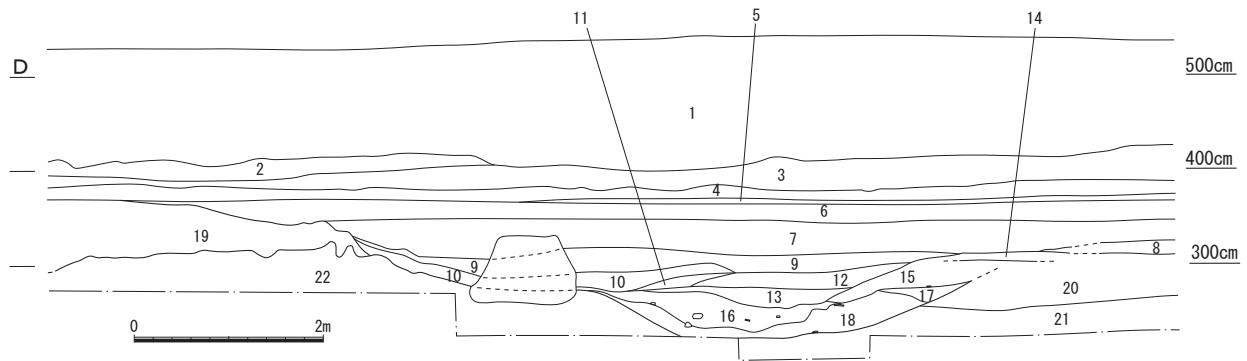
第37図 杭A断面
(1/30)

第1段階は、基盤Ⅲ上面で検出している。D断面では第20・21層に当たり、この層が東へ続くことから、初期段階では調査区北辺で東から西へ流走し、北西部付近で方向を変え、南へ流れていたことが想定される。底面の標高は1.7mである。なお、この直上に堆積したC断面第13・14層では、自然木を多数検出しており、この一部を第36図の南東側の一群として図示している。いずれも溝の方向に平行することから、自然に流れてきたものとみられる。

第2段階は、D断面では第10～18層に当たる。第1段階の溝の埋没後、基盤

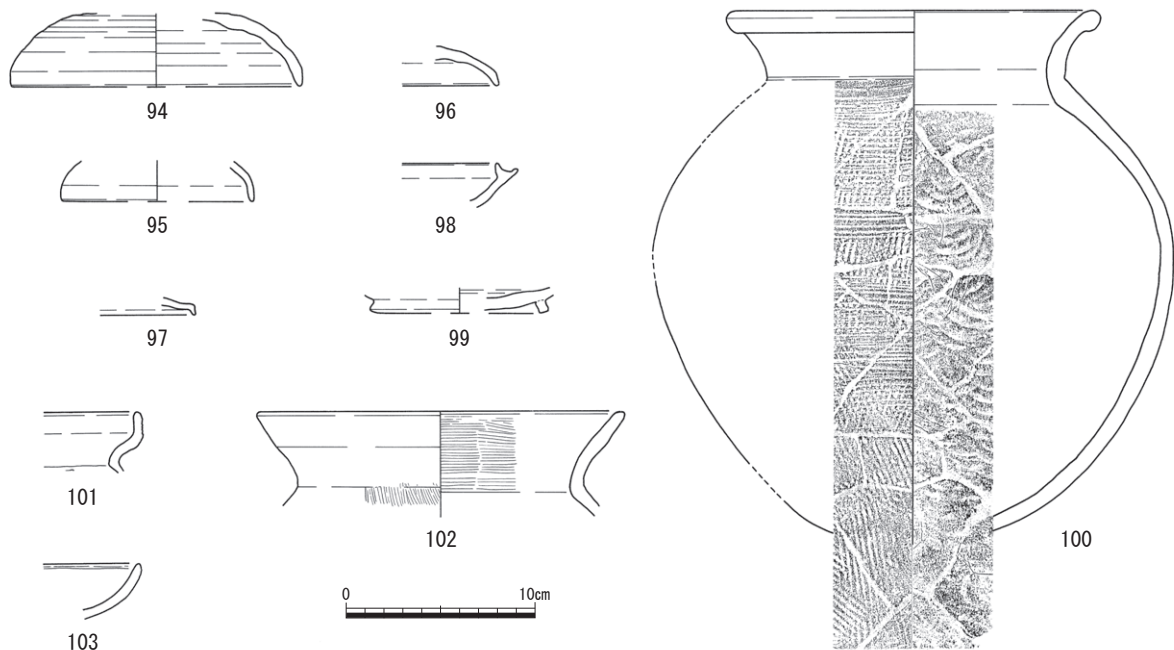
ⅡにあたるC断面第9層が堆積しており、これ以降の掘り直しによるものと考えられる。この段階では、第1段階のように屈曲はせず、南北方向の流路をとっていたようである。溝の底面の標高は2.19～2.33mで、この直上に堆積したC断面第16・18層から多くの遺物が出土している。第36図の北西部の一群で示したもので、多量の杭や角材、板材などの木製品に加え、須恵器、石製品、土製品がこの範囲で出土した。木製品については、第37図の断面で示した杭以外は使用状況が明確なものはなく、上流にあった柵列や堰のような構造物が崩れて流れてきたものと考えられる。

第3段階はC断面で第1・2層、D断面では第7～9層に当たる。第1段階と同様に調査区北西部で屈曲する流路をとっている。溝の底面の標高は3.1～3.5mである。



- | | | |
|------------------------------|-------------------------|--|
| 1 造成土 | 8 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂 | 16 褐灰色(7.5YR5/1)細砂～微砂
(砂とシルトの互層、有機質非常に多混) |
| 2 灰オリーブ色(5Y6/2)微砂 | 9 黄灰色(2.5Y5/1)細砂質土 | 17 褐灰色(10YR5/1)細砂(木質層状に挟む) |
| 3 褐灰色(10YR4/1)粘質シルト<中世以降耕作土> | 10 灰色(N6/)粘質土 | 18 褐灰色(7.5YR4/1)シルト質粘土(微砂混) |
| 4 灰色(5Y5/1)粘質土<中世以降耕作土> | 11 灰色(N7/)細砂 | 19 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土(土器混) |
| 5 黄褐色(10YR5/6)粘質土(下面にFe沈着) | 12 褐灰色(7.5YR4/1)粘質微砂～細砂 | 20 灰色(N5/)砂混じり粘質土 |
| 6 褐灰色(10YR6/1)砂質土 | 13 暗灰色(N3/)粘質土 | 21 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土 |
| 7 灰黄褐色(10YR6/2)粘質微砂 | 14 灰色(5Y5/1)粘質土 | 22 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘質土<基盤Ⅲ> |
| | 15 灰色(N6/)砂質土 | |

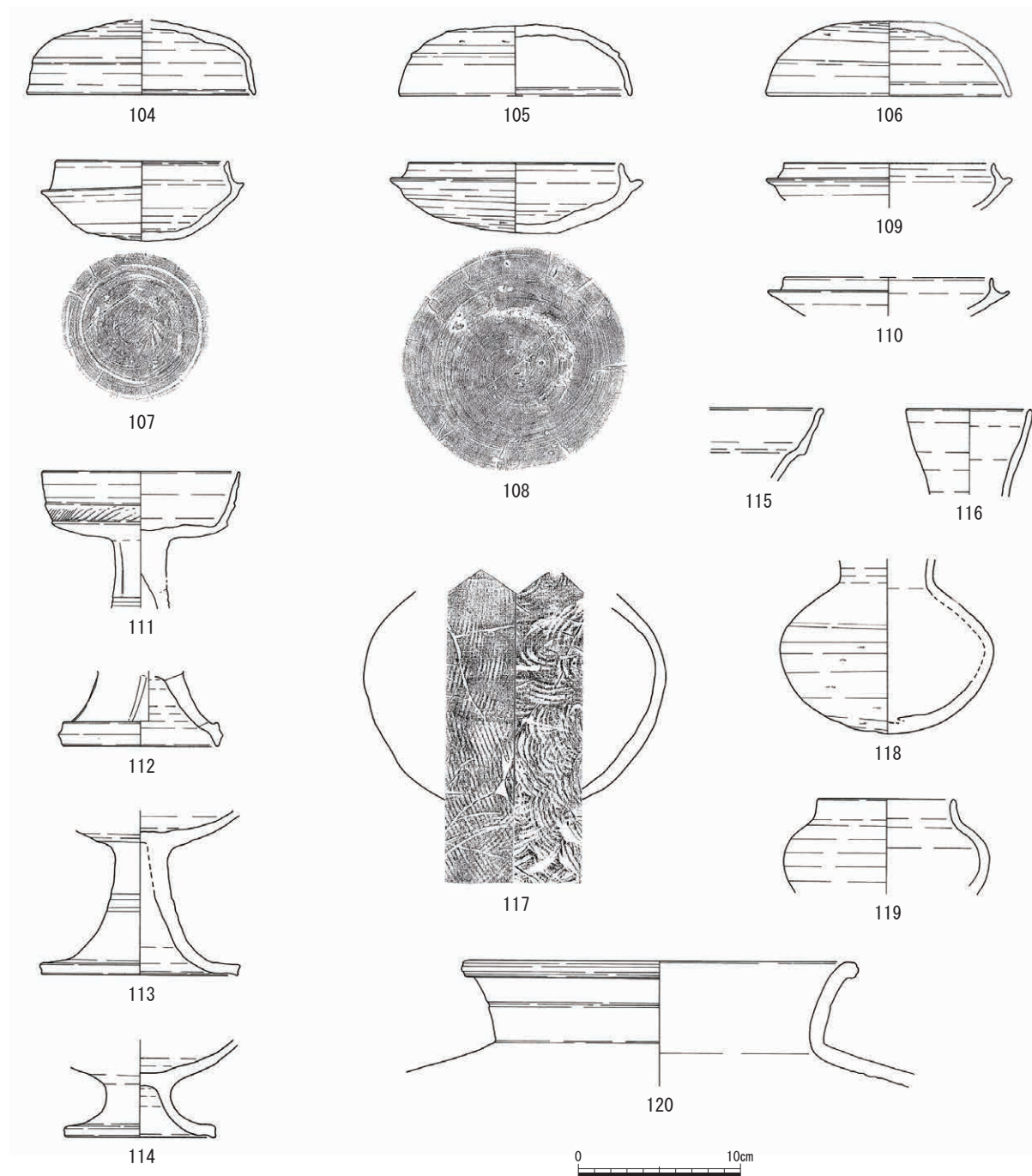
第38図 溝16北壁断面(1/80)



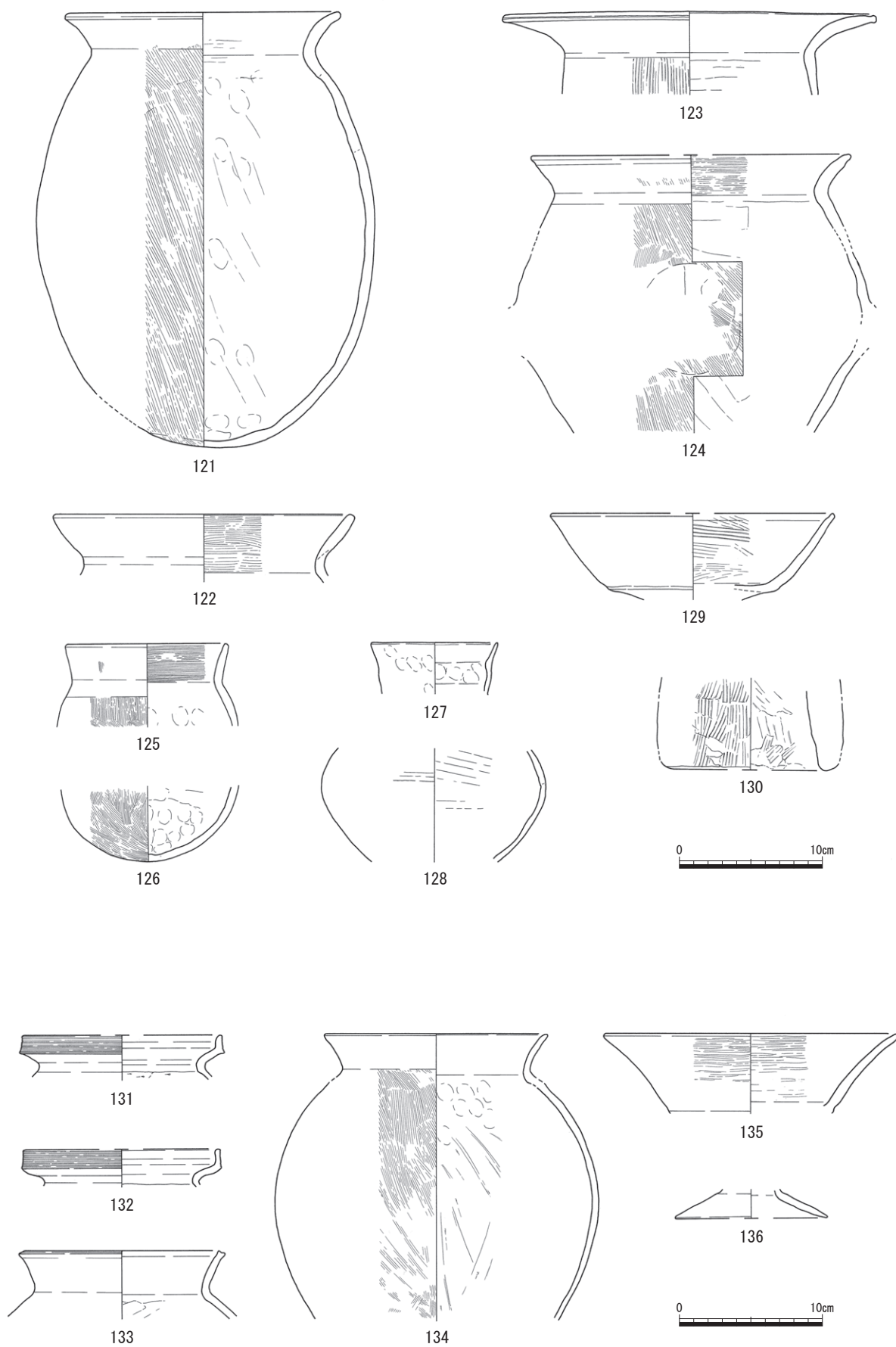
第39図 溝16出土遺物①(1/4)

出土土器は、94～99が第3段階、100～130が第2段階、131～136が第1段階に属する。第1段階は櫛描沈線の甕131・132が出土しており、古墳時代前期の使用が想定される。ただしトレンチ調査のため遺物の出土量が限られている点、基盤Ⅲ上での検出であることを勘案すると開削時期は弥生時代に遡る可能性もある。第2段階はTK10～TK217型式が主体で、6世紀後半から7世紀中葉まで機能していたと考えられる。この段階で竪穴住居1や溝17などの調査区中央から東半に展開する遺構と併存していたとみられる。第3段階は蓋杯97・99のような新相の須恵器を含むことから、溝16の埋没が完了するのは7世紀末頃と考えられる。

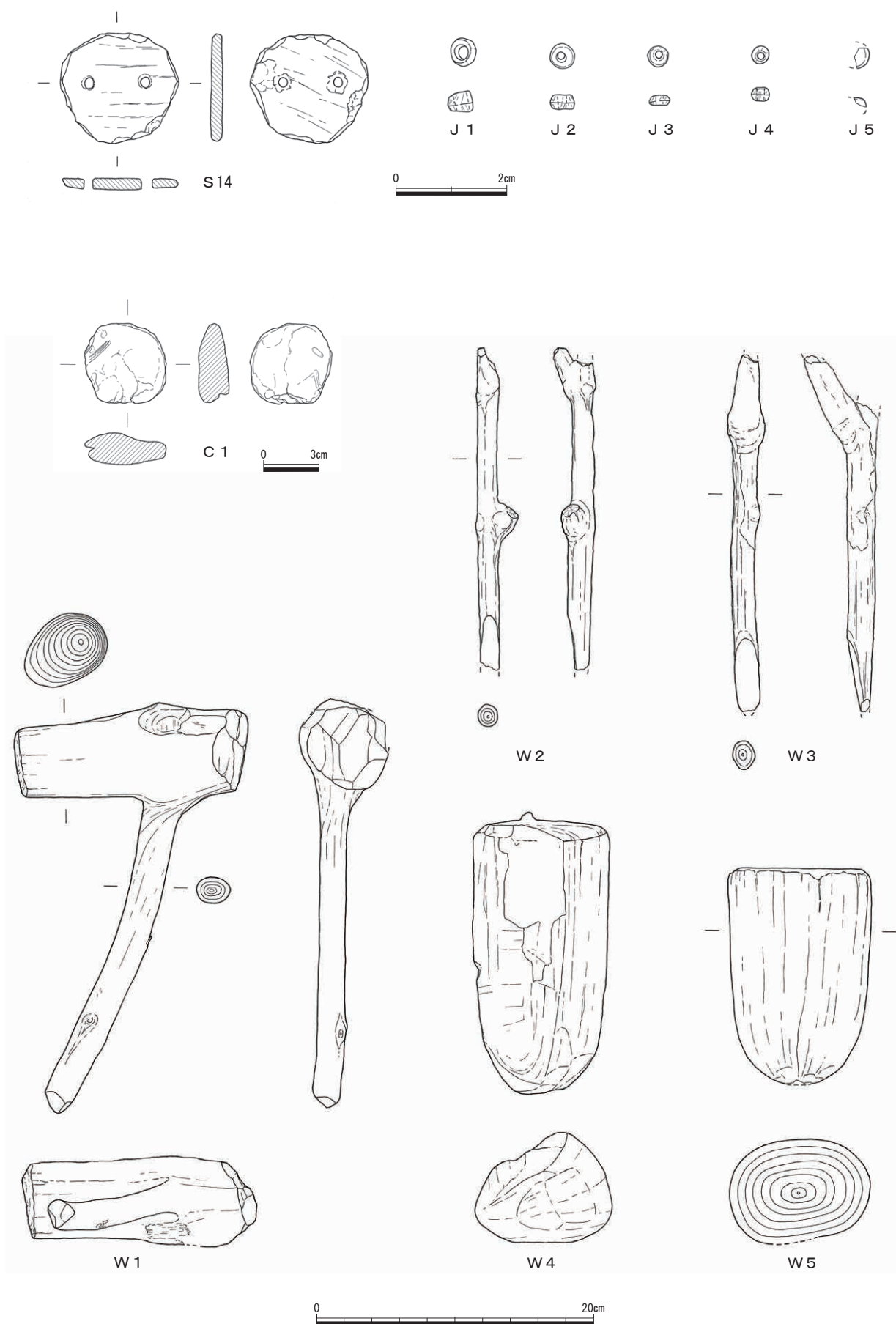
遺物は第2段階下層（C断面第16・18層）から多く出土しており、須恵器蓋杯104・106～108、有孔円板S14、白玉J1～5、土製品C1、木製品W1～11はすべて第36図の北西部からの出土である。



第40図 溝16出土遺物② (1/4)

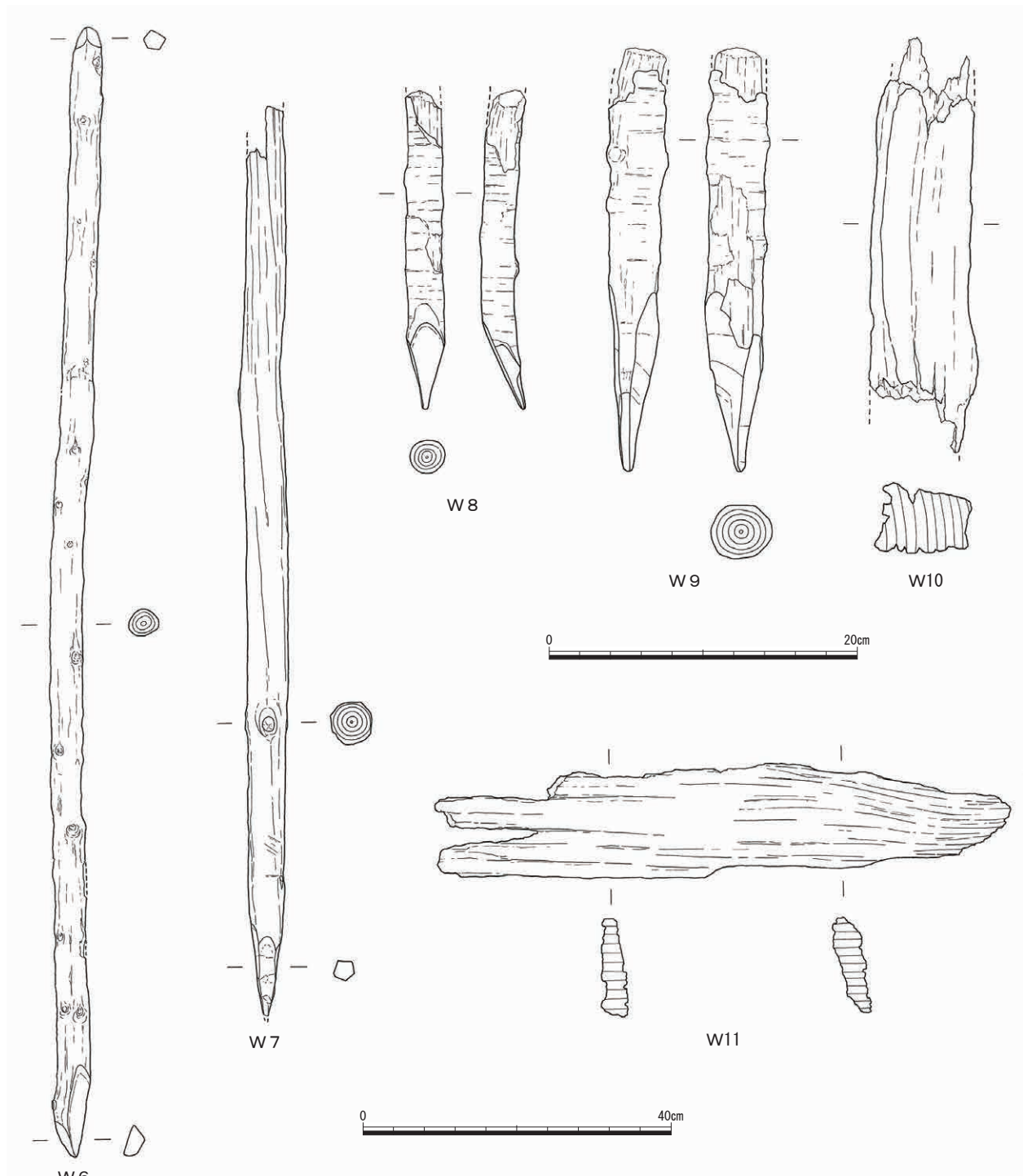


第41図 溝16出土遺物③ (1/4)



第42図 溝16出土遺物④ (1/1・1/3・1/4)

また、須恵器甕100は第2段階の南端東肩口の傾斜の緩やかな地点で出土しており（図版13－2）、ほぼ完形に復元できることから、意図的に配置されたものと考えられる。杭や角材などの構造物材（W6～11）は、樹種同定によるといずれも調査地周辺で生育可能な種類であり、近隣から伐採した木材を使用したようである。また、第2段階下層埋土での種実同定の結果、イネやコムギ等の栽培植物のほか、希少な例としてダイコン属とみられる炭化種子が確認された（第4章第1節参照）。この他に第2・3段階の埋土から炉壁（895.9g）、製錬滓（1937.5g）、碗形鍛冶滓（141.3g）が出土しており、この溝の上流部で鍛冶や製鉄が行われていたことを示唆する。（山口）



第43図 溝16出土遺物⑤（1/4・1/8）

溝17（第28・44～46図、写真2、図版14・20）

調査区北側に位置する東西方向に流れる溝である。調査区内では溝17の南肩の一部を確認したに過ぎず、大半は調査区外の北側に続くとみられる。溝17の南肩は湾曲していびつな形状である。溝17の南側は溝14を切る。また、溝17の南東端では延長150cm、幅125cm、深さ20cmの幅が狭い溝が南東の溝18の方向に延びる。底面は溝17より11cm、溝18より67cmほど高い。この幅が狭い溝は土層の確認から溝18の上層に切られていたが、配置状況から一時期は溝17と溝18を繋ぎ、溝21～23と同様に水量調整を行っていた可能性が考えられる。溝の西側は調査区北側中央の攪乱によって失われていたことから、溝の東西で土層の対応関係が把握しづらいが、溝17の西端は溝16と繋がる可能性も考えられる。溝の全容は明らかでないが、規模は延長10m以上、幅450cm以上、深さは検出面から40cm以上である。埋土は第45図第14・15層、第46図第24～26層に当たり、上層は暗灰黄色細砂や黄灰色細砂～シルト、下層は灰黄褐色細砂～シルトを主体とする。

出土遺物は須恵器の杯蓋137・138、杯身139・140、壺141、円筒形の土製品142があり、いずれも破片である。137～139・141は上層、140・142は下層から出土した。

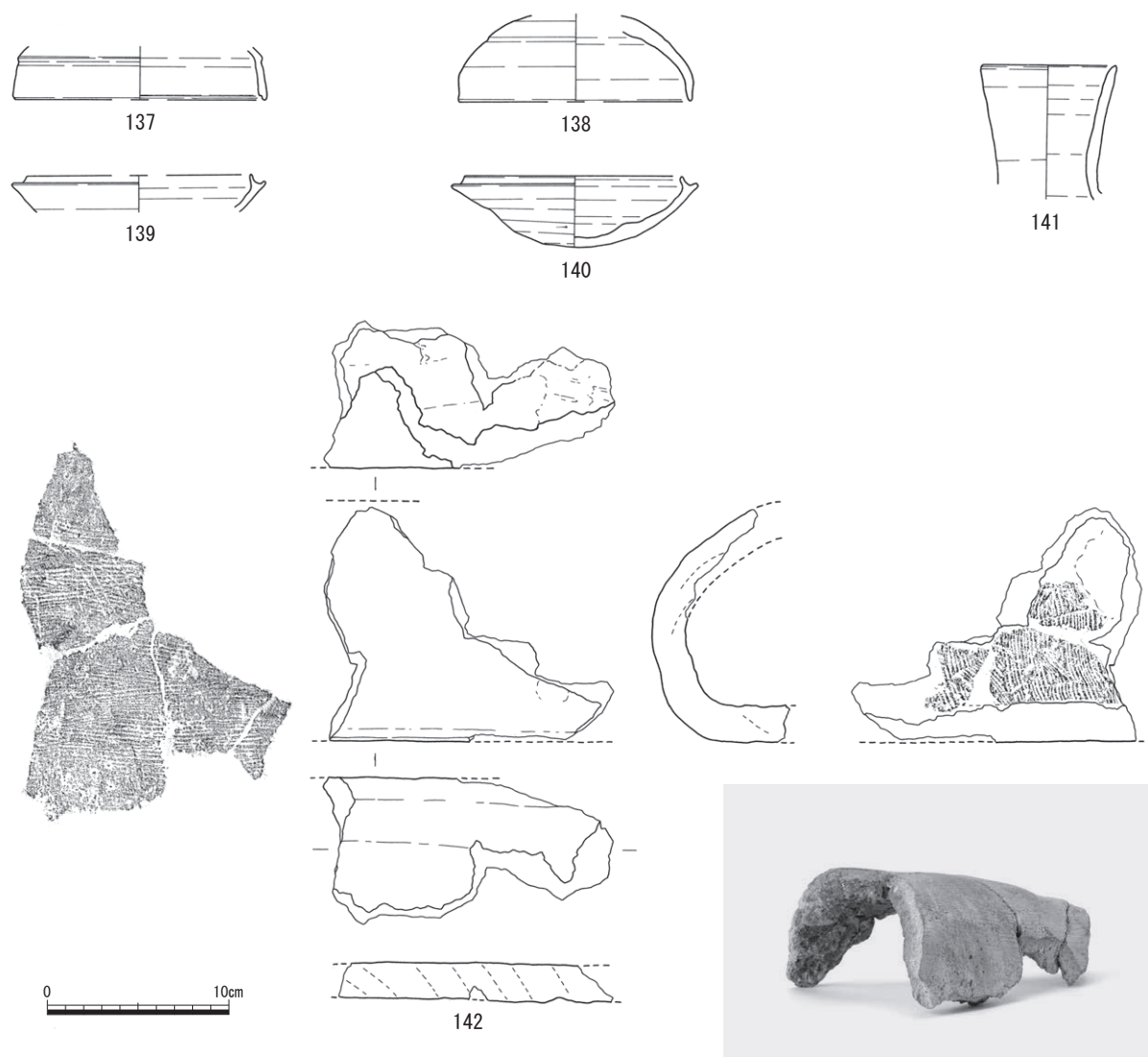
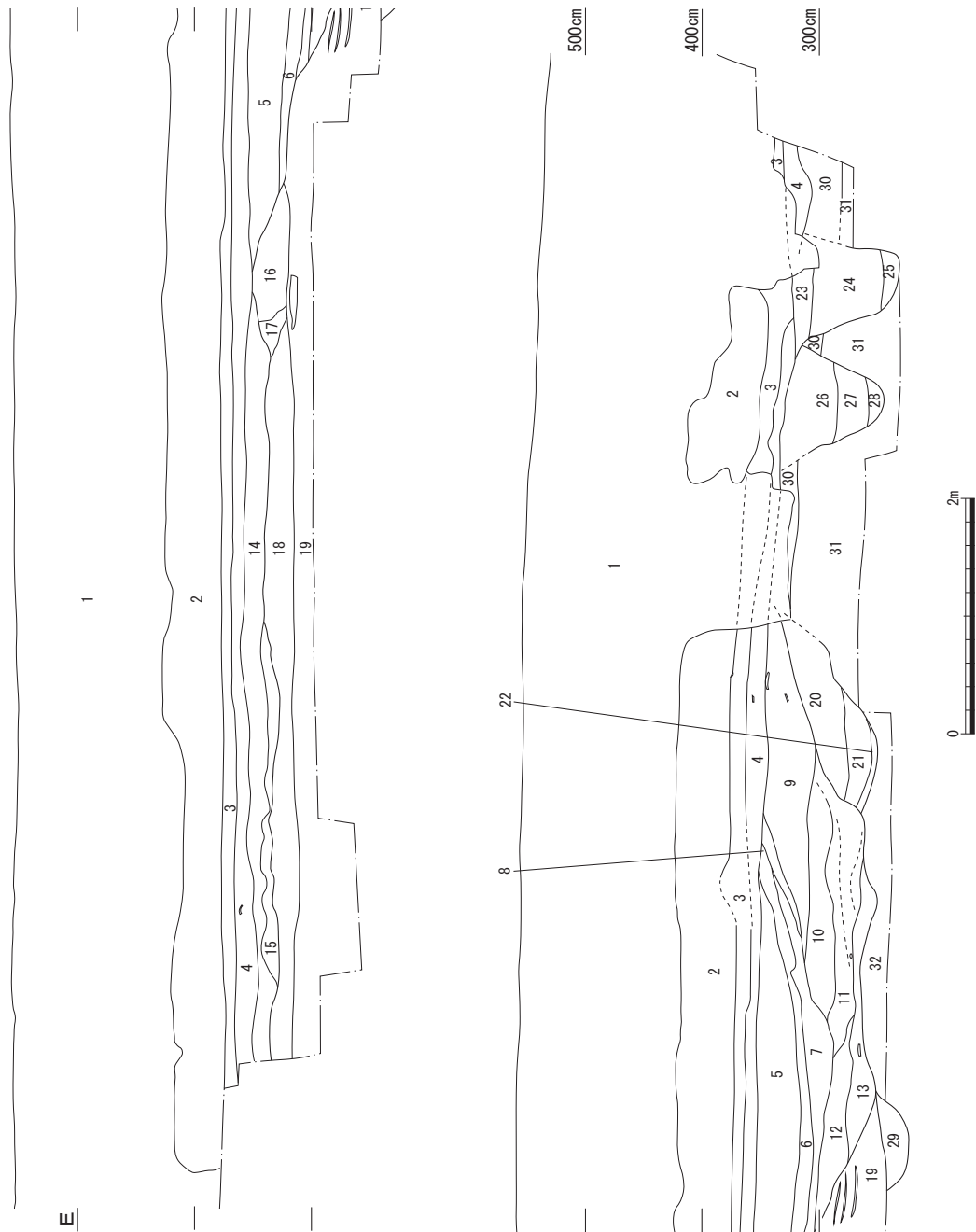


写真2 円筒形の土製品142

第44図 溝17出土遺物（1/4）

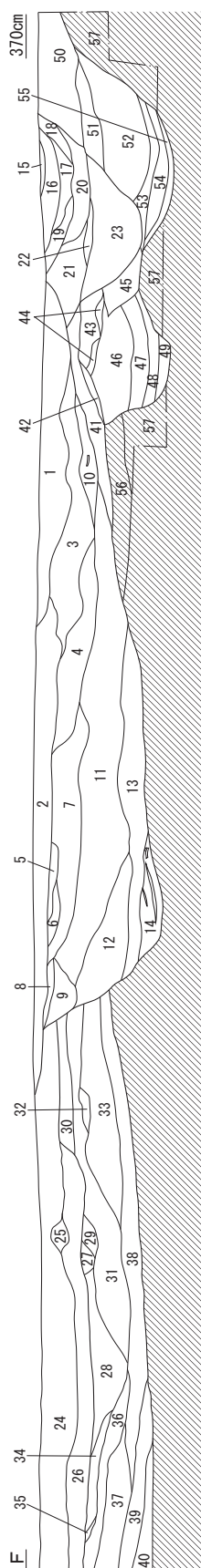
- 1 造成土
- 2 褐灰色(10YR4/1)粘質シルト<中世以降耕作土>
- 3 灰色(5Y5/1)粘質土<中世以降耕作土>
- 4 黄褐色(10YR5/6)粘質土<古代～中世耕作土>
- 5 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土～シルト<溝18>
- 6 黄灰色(2.5Y5/1)細砂<溝18>
- 7 褐灰色(10YR4/1)粘質土<溝18>
- 8 灰色(10Y5/1)粗砂<溝18>
- 9 褐灰色(10YR4/1)粘質土～シルト(しまりなし)<溝18>
- 10 灰色(10Y5/1)粗砂
- 11 灰色(7.5Y4/1)粘質土 灰色(10Y5/1)細砂ラミナ状に混、有機質混)<溝18>
- 12 灰色(5Y4/1)粘質土～微砂(炭化物・木片多混)<溝18>
- 13 暗灰色(N3/)粘質土(粘性強、しまりなし、粗砂混、木片多混)<溝18>
- 14 暗灰黄色(2.5Y4/2)微砂<溝17>
- 15 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト(Mn多含)<溝17>
- 16 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(固くしまる)<溝24>
- 17 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト(Mn含)<溝24>
- 18 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(やや固くしまる)<溝24>
- 19 灰色(7.5Y4/1)粘質土(細砂がラミナ状に混、木片多混)<溝24>
- 20 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(やや固くしまる)<溝10>
- 21 にぶい黄褐色(10YR6/3)細砂(洪水砂)<溝10>
- 22 灰色(5Y4/1)粘質土(粘性強、しまりなし)<溝10>
- 23 灰黄褐色(10YR5/2)粘質細砂～シルト(やや固くしまる)<溝11>
- 24 にぶい黄褐色(10YR6/3)細砂(洪水砂)<溝11>
- 25 灰色(5Y4/1)粘質土(粘性強)<溝11>
- 26 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(固くしまる、Mn含)<溝12>
- 27 灰色(7.5Y5/1)粘質土(固くしまる)<溝12>
- 28 黒褐色(10YR3/1)粘質土<溝12>
- 29 灰色(N4/)粘質土<溝7>
- 30 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(固くしまる、Mn斑に含)
- 31 黒褐色(10YR3/2)粘質土(固くしまる)<基盤Ⅲ>
- 32 オリーブ灰色(5GY5/1)粘質土(ピート層)<基盤Ⅲ>



第45図 溝17・18北壁断面 (1/60)

須恵器のうち、杯蓋137はM T 15型式の可能性があり、蓋杯138、杯身139・140はT K 209型式に相当する。142は土師質の筒形の土製品と考えられる。長さは15.9cm以上、幅と厚さは12.8cm、器壁は2.0cmである。外径は13.2cm、内径は9.2cmに復元される。断面形は不整円形で、一部に平らな部分がある。外面は主に暗灰黄色を基調とするが、一部の平らな部分は橙色を呈する。調整は内外面ともに粗いハケメで、外面は長軸に平行、内面は長軸に直交する。外面はあまり摩滅していないのに対し、内面は左側表面が著しく剥離している。断面は粘土紐を輪積みにした痕跡が顕著に残る。被熱や滓の付着は認められず、用途の特定は難しい。胎土や形態的特徴から、溝16出土の130（第41図）と同一個体であった可能性がある。

溝17の埋没時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられ、溝18上層より古い。（米田）



- | | | | |
|----|---|----|---------------------------------|
| 1 | 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(固くしまる) <溝18> | 39 | 灰色(5Y6/1)細砂 |
| 2 | 灰黄褐色(2.5Y6/2)粘質シルト(固くしまる) <溝18> | 40 | 灰色(5Y4/1)粘質土(しまり弱) |
| 3 | 黄灰色(2.5Y6/1)細砂(粗砂混、ややしまり弱) <溝18> | 41 | 灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト(固くしまる) |
| 4 | 褐灰色(10YR4/1)粘質土 <溝18> | 42 | 灰色(5Y5/1)粘質シルト |
| 5 | 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト <溝18> | 43 | 暗灰色(2.5Y5/2)微砂 |
| 6 | にぶい黄色(2.5Y6/3)微砂 <溝18> | 44 | 灰色(5Y5/1)粘質シルト |
| 7 | 黄灰色(2.5Y5/1)細砂(固くしまる) <溝18> | 45 | 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(固くしまる) <溝8か> |
| 8 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂(ややしまり弱) <溝18> | 46 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)細砂～微砂(しまりなし) <溝9> |
| 9 | 灰黄褐色(10YR4/2)粘質細砂(ややしまり弱) <溝18> | 47 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト <溝9> |
| 10 | 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト(やや固くしまる、粘質土～細砂斑状に混) <溝18> | 48 | 灰色(5Y4/1)粘質土(粘性有、しまりなし) <溝9> |
| 11 | 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト(粘質土～細砂斑状に混) <溝18> | 49 | 灰色(5Y4/1)粘質土(粘性強) <溝9> |
| 12 | 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(粘質土～細砂斑状に混) <溝18> | 50 | 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(固くしまる) |
| 13 | 灰色(N5/)粗砂～シルト(炭化物僅かに混) <溝18> | 51 | 灰色(5Y4/1)粘質土(固くしまる) |
| 14 | 灰色(10Y5/1)粘質土 <溝18> | 52 | 灰色(5Y5/1)粘質シルト～粘質土 |
| 15 | 黄灰色(2.5Y6/1)細砂～シルト <溝19> | 53 | 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土(しまり弱) |
| 16 | 灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルト <溝19> | 54 | 灰黄色(2.5Y6/2)細砂 <溝10> |
| 17 | 褐灰色(10YR5/1)粘質シルト <溝19> | 55 | 灰色(7.5Y4/1)粘質土(粘性強、固くしまる) <溝10> |
| 18 | 褐灰色(10YR5/1)粘質土 <溝19> | 56 | 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(固くしまる) <基盤> |
| 19 | 灰黄色(2.5Y6/2)細砂 <溝19> | 57 | 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(固くしまる) <基盤> |
| 20 | 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土(やや固くしまる) <溝19> | | |
| 21 | 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(固くしまる) <溝19> | | |
| 22 | 灰色(5Y4/1)粘質土(固くしまる、粘性強) <溝19> | | |
| 23 | 灰色(5Y4/2)粘質土～シルト(固くしまる) <溝19> | | |
| 24 | 黄灰色(2.5Y5/1)粘質細砂～シルト(やや固くしまる) <溝17> | | |
| 25 | にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト <溝17(基盤土塊か)> | | |
| 26 | 灰黄褐色(10YR5/2)粘質細砂～シルト <溝17> | | |
| 27 | 灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト | | |
| 28 | 褐灰色(10YR4/1)粘質土～シルト | | |
| 29 | 褐灰色(10YR4/1)粘質土(固くしまる) | | |
| 30 | 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト(固くしまる) | | |
| 31 | 褐灰色(10YR4/1)粘質土(固くしまる) | | |
| 32 | 灰黄色(2.5Y6/2)微砂 | | |
| 33 | 褐灰色(10YR4/1)粘質土～シルト(細砂～シルトがラミナ状に貫入) | | |
| 34 | 褐灰色(10YR5/1)粘質土 | | |
| 35 | 黄灰色(2.5Y5/1)細砂 | | |
| 36 | 黄灰色(2.5Y6/1)粘質土 | | |
| 37 | 灰色(5Y5/1)粘質土(ややしまり弱) | | |
| 38 | 黄灰色(2.5Y4/1)細砂(やや粘性有) | | |

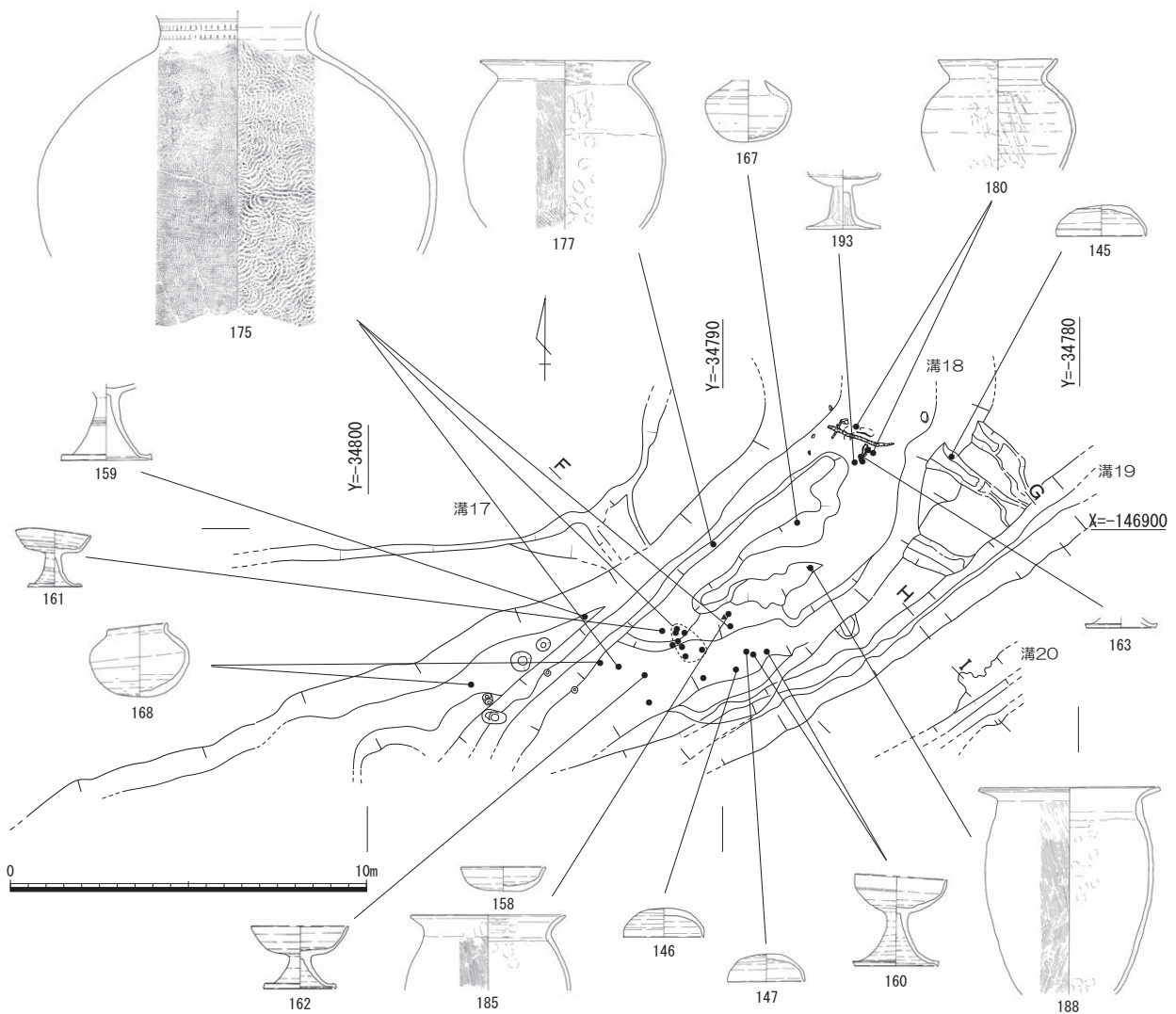
第46図 溝17・18中央断面(1/50)

溝18（第28・45～52図、写真3・4、図版14～17・22）

調査区東側に位置する南西から北東方向に流れる溝である。流走方向は概ねN-48°-Eである。調査区内では溝18の一部を確認したに過ぎず、大半は調査区外に続く。溝の両肩は直線的である。溝18の南東側は溝8～10を切り、南端は溝19に切られる。また、上層の堆積は溝17よりも新しいが、配置状況から一時期は溝18と溝17が幅の狭い溝で繋がっていた可能性がある。規模は箇所によって異なるが、延長25.8m以上、上幅440～530cm、下幅220～370cmである。深さは北壁（第45図）で112cm、中央（第46図）で100cm、南壁で88cmである。底面最深部の海拔高は北壁2.58m、中央で2.74m、南壁で2.65mで、底面の中央はやや高く起伏があり、北端と南端に向かってそれぞれ20cm程度下がる。底面は南壁より北壁のほうがわずかに低い。また、溝の中央西寄りの底面では、径40～55cm、深さ12～16cmのピット3個、径18cm、深さ7～18cmの杭状の痕跡が4か所で認められた。



写真3 溝18土器出土状況（北から）



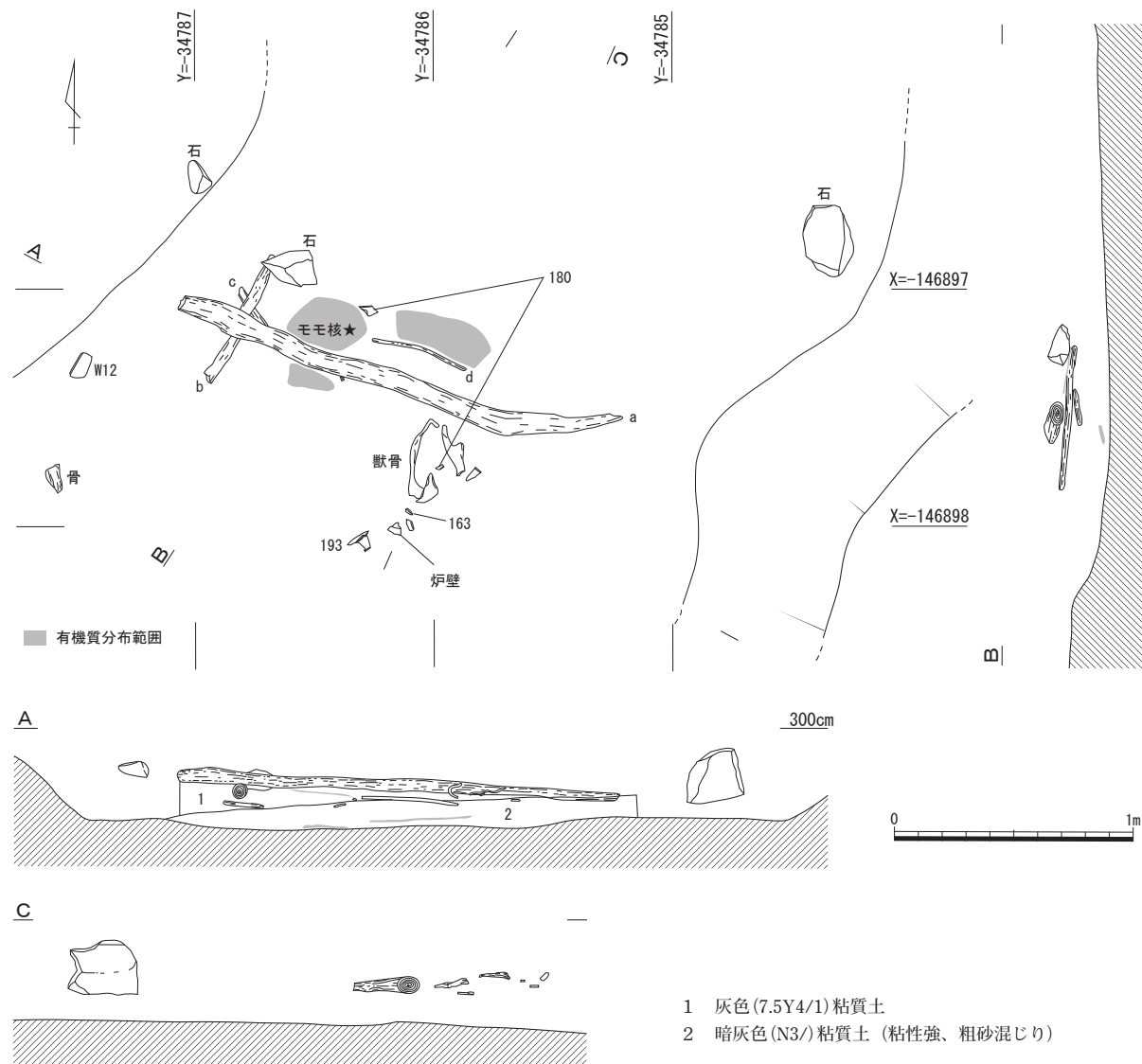
第47図 溝18～20（1/200）

溝の断面形は、北壁が逆台形、中央が不整逆台形で、北側が深くて壁面が垂直気味に立ち上がり、南側に向かって徐々に浅くなる。上層（第45図第5～7層、第46図第1～4層）は灰黄褐色粘質土～シルトや褐灰色粘質土で、掘り直しの可能性がある。中層（第45図第10・11層、第46図第11～13層）は灰色粗砂～シルトを主体とし、ラミナ構造を部分的に確認した。中央の最下層（第46図第14層）はラミナ構造を含む灰色粘質土で、底面北端で確認した幅1 m前後の直線的に延びる溝の埋土である。北壁の最下層（第45図第13層）は粗砂や多くの木片を含む灰色粘質土で、その直上の溝北側において木や骨がまとまった状態で見つかった（第48図）。

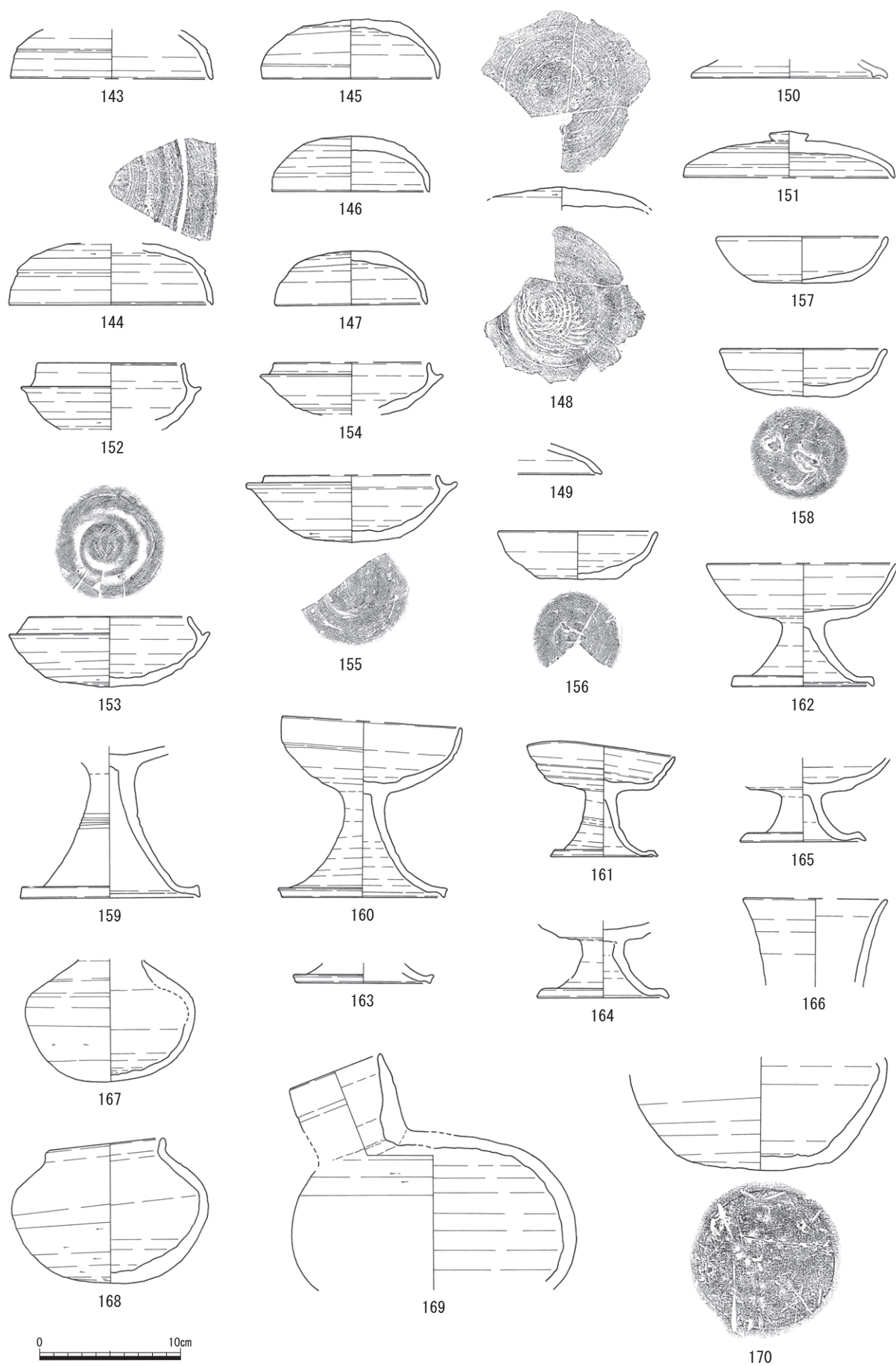
木は4本（a～d）あり、a～cは丸太材、dは枝材で、いずれも表面に樹皮が残っていた。木aは長さ192 cm、径12 cmで最も長くて太く、溝の流走方向に対して直交するように見つかった。木aの西側直下では長さ60 cm、径6 cmのやや細い木bが直交し、さらにその下には長さ20 cm、径3 cmの細い木cがあり、木a～cが互い違いに



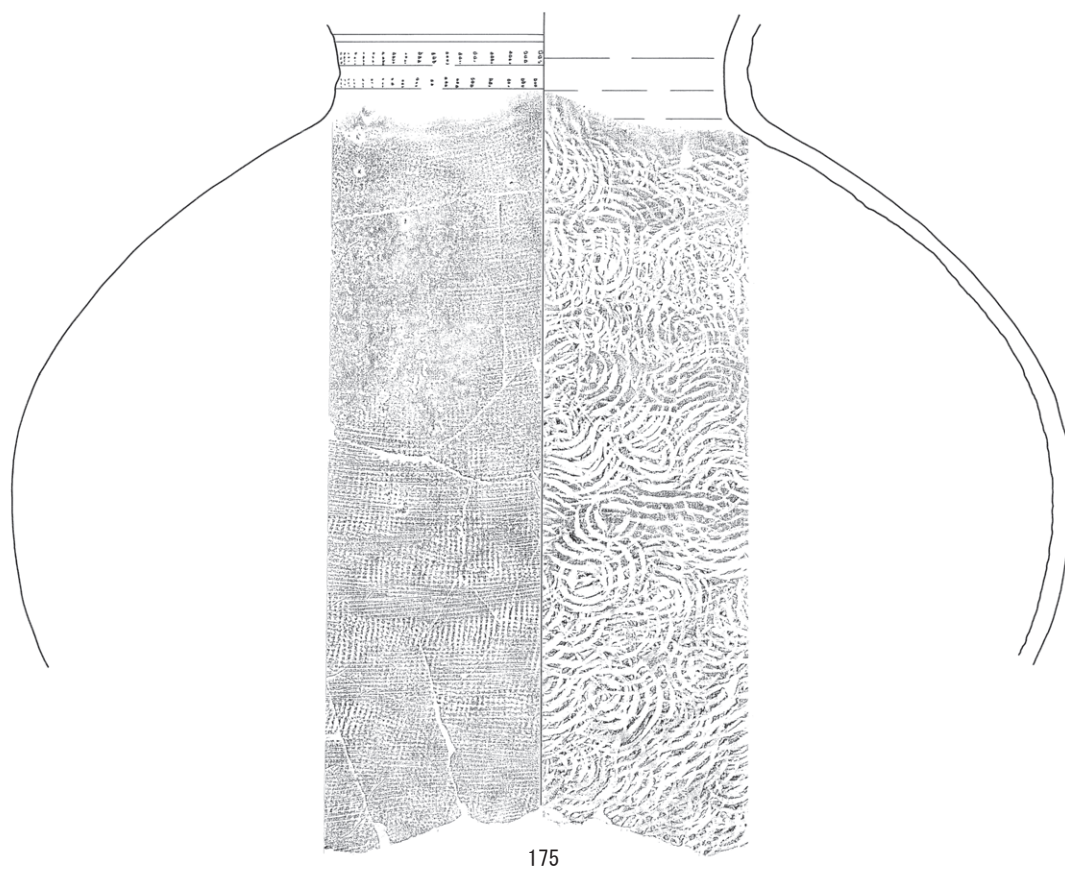
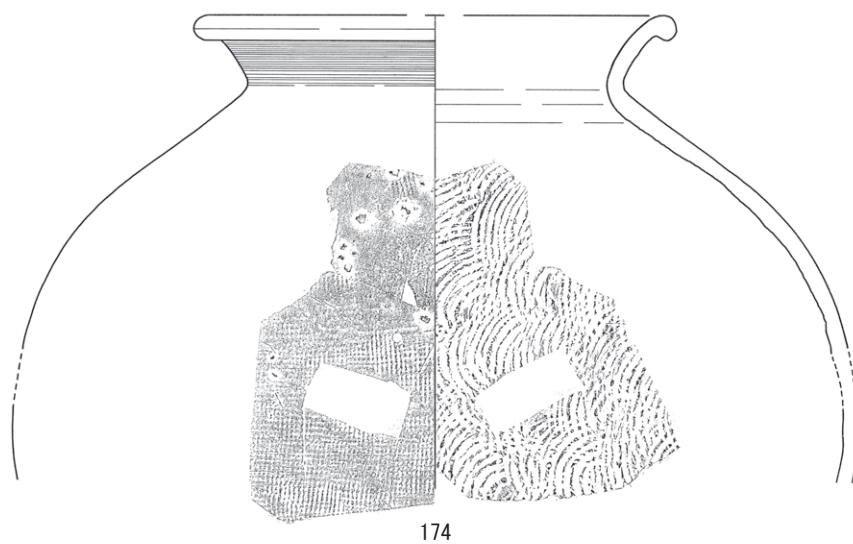
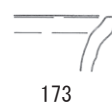
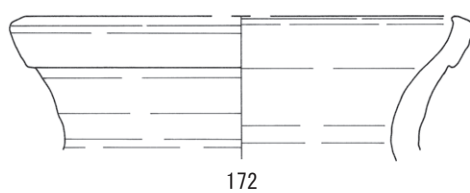
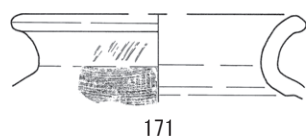
写真4 溝18木器出土状況（南から）



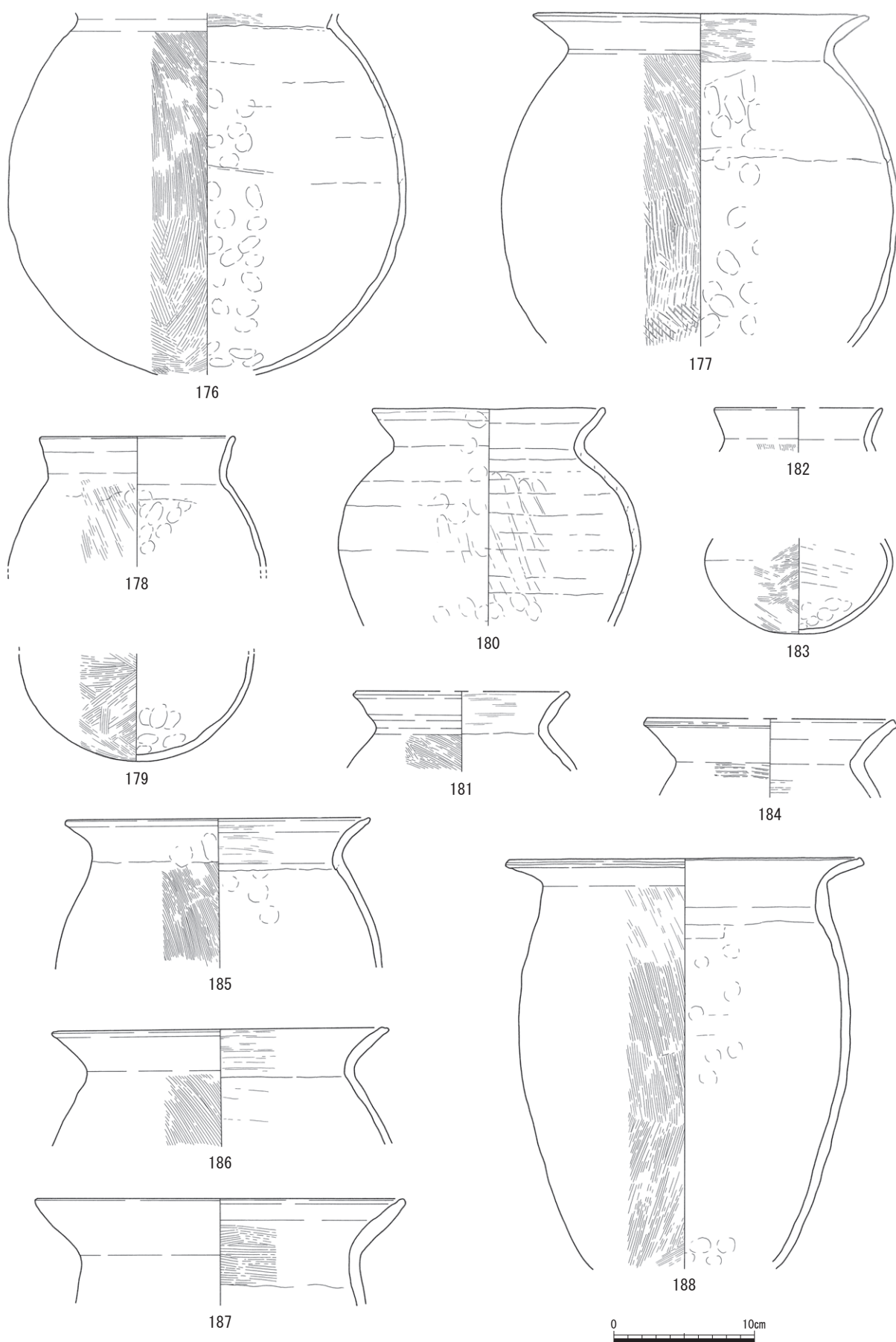
第48図 溝18内木・獣骨出土状況（1/30）



第49図 溝18出土遺物① (1/4)

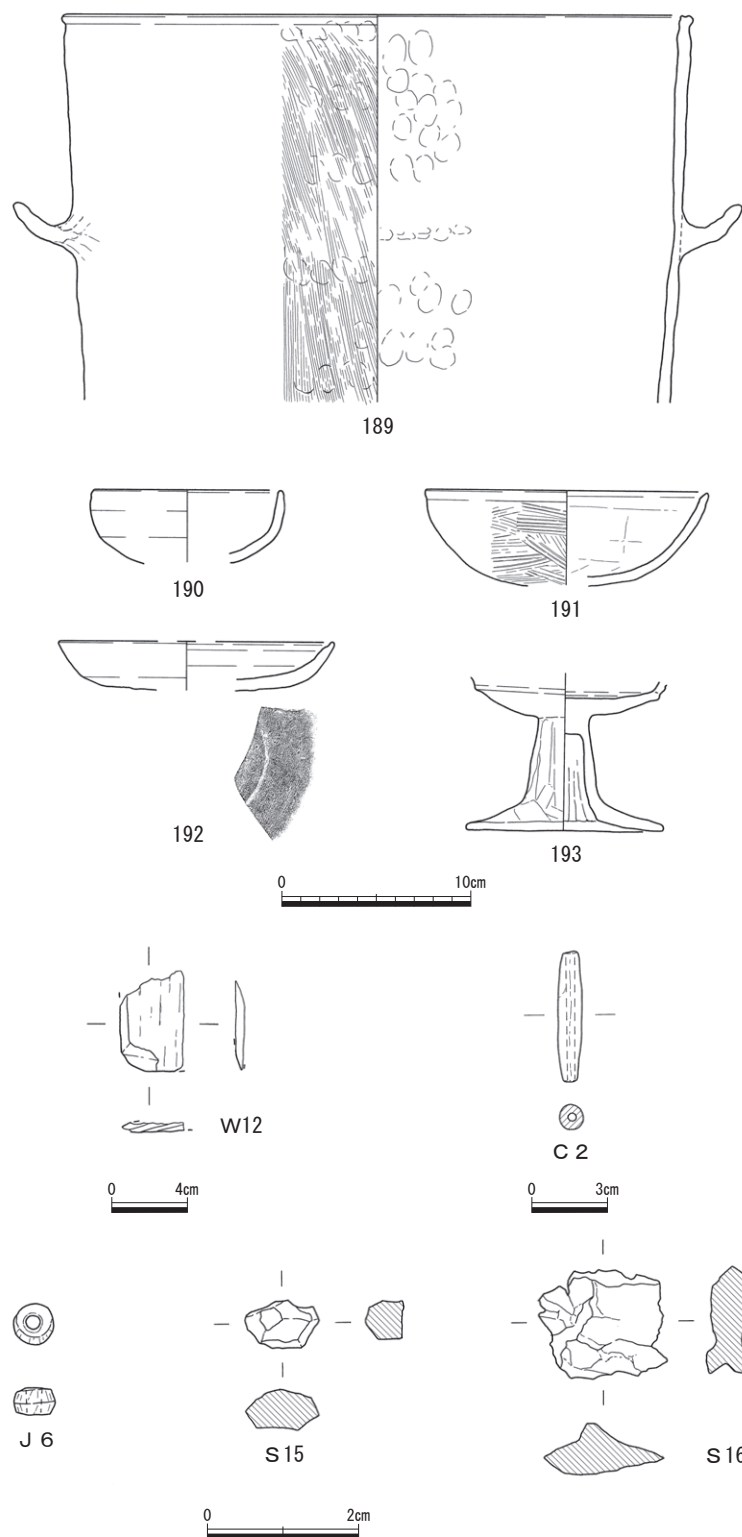


第50図 溝18出土遺物② (1/4)



第51図 溝18出土遺物③ (1/4)

上下に重なった状態であった。木bの北端直上で25cm大の角礫、木a～cから少し離れた北西で15cm大の円礫、北東で30cm大の角礫を確認した。木a～cに緊縛痕は認められなかった。このほか、木aの中央周辺の最下層（第48図第2層）の中位において、約90cm×40cmの範囲に植物性の有機物がシート状に認められた（第48図トーン部分）。遺物は木a周辺にやや多く、木aの中央両脇で土師器甕180、中央南側で獣骨や須恵器の高杯163、土師器の高杯193、西側で板状木製品W12が出土した。富



第52図 溝18出土遺物④ (1/4・1/3・1/1)

岡直人氏によると、獣骨はウシの左右一対の寛骨と鑑定され、右寛骨が東、左寛骨が西、両寛骨の尾側が北に向いた状態であった。左右の寛骨の結合部が離れ、他の骨格が認められないことから、水辺を利用してウシを解体した後に廃棄した可能性があるとの御教示をいただいた。木a～d周辺では杭やその痕跡は認められなかったが、木aが溝の流れに直交していることを評価するならば、堰のような構造物であったことが推測される。木a・bの樹種はコナラ亜属クヌギ節？と同定された。このほか、木a～d周辺の下層埋土を水洗選別したところ、滑石製白玉1点（J6）、モモ核10点、オニグルミ2点、スモモ核7点が採取でき、ウシの寛骨の廃棄と合わせて、水辺で祭祀が行われた痕跡と捉えられる。

遺物は溝18全体から出土したが、下層では特に中央の南寄りと北端の木a～g周辺にまとまっていた。溝の中央では須恵器の杯蓋146、杯身147・158、高杯159～162、甕167、短頸壺168、土師器の甕177・185・188が底面付近で7m×4mの範囲に比較的まとまって出土した。なかでも、須恵器の杯蓋146、杯身147、高杯160は、溝の南肩の傾斜が緩やかなところに近接して見つかり、意図的に配置された可能性がある。また、溝の西側では鉄鉱石S15・S16

が出土した。遺物の出土層位は、151・164・170～175・178・179・182～185・187・188が上層、144・147・149・150・157・160・166・177・181・189・190・C 2が中層、143・145・146・148・152～156・158・159・161～163・165・167・169・176・180・186・191～193・W12・J 6・S 15が下層である。

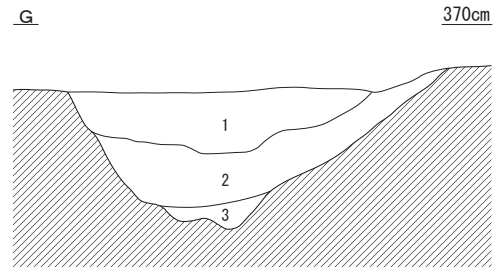
出土遺物は須恵器の杯蓋143～151、杯身152～158、高杯159～164、長頸壺166・170、甕167、短頸壺168、平瓶169、甕171～175、土師器の甕176～188、甕189、杯190・191、皿192、高杯193、板状木製品W12、土錘C 2、滑石製白玉J 6、鉄鉱石S 15・S 16（計2.37 g）のほか、炉壁（1,236.2 g）、製錬滓（1,426.7 g）、碗形鍛冶滓（99.9 g）、鉄鉱石（1.7 g）、フイゴ羽口の破片（64.7 g）、獣骨（ウシ）、炭化種子（モモ核25点、オニグルミ2点、スモモ核7点）がある。須恵器はMT 15～MT 21型式が認められるが、下層出土須恵器はTK 217～TK 48型式が主体である。土師器は180が古墳時代前期後葉、176・177が中期後葉、185・186が後期前半、187～189・193が後期後半に位置づけられる。溝18は主に7世紀前葉～中葉に機能し、7世紀末に埋没したと考えられる。（米田）

溝19（第28・47・53図、図版14・15・17・23）

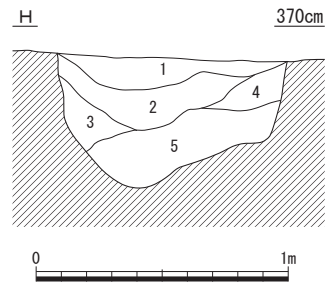
溝18の東に位置する。溝18と併走し、上面幅90～160cm、下面幅40cm、検出面からの深さは52cmを測る。底面標高は北側で2.88m、南側で3.01mを測り、北側がやや低い。溝21～23で溝18と接続されており、水量の調整が行われた可能性が指摘できる。出土遺物には須恵器蓋杯194、土師器甕口縁部195、管状土錘C 3がある。遺構の時期は、溝18との関係から、7世紀前半と考えられる。なお、溝下層の灰色粘質土からはモモ核の破片が出土している。（藤井翔）

溝20（第28・47・54図、図版14・17）

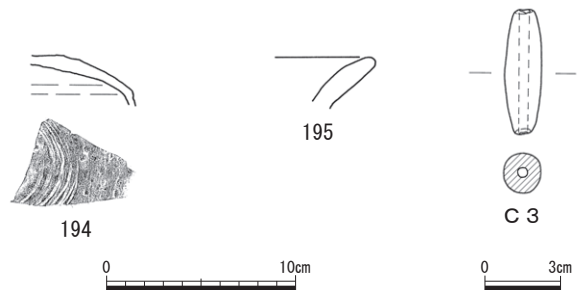
溝20は、溝19と併走し、上面幅78cm、下面幅38cm、検出面からの深さ43cm、底面標高は北側で3.16mを測る。溝18・19と併走するように掘削されていることから、関連する溝である可能性が高い。検出レベル及び溝18・19との関係から、時期は7世紀前半ごろと考えられる。（藤井翔）



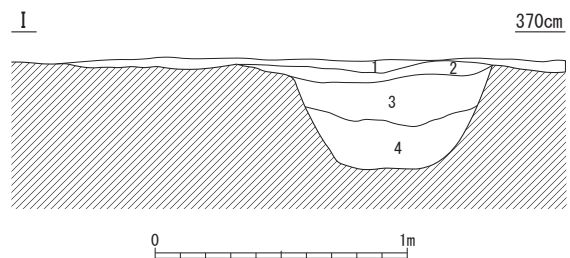
- 1 灰黄褐色(10YR5/2)粘性シルト
- 2 褐灰色(10YR4/1)粘質土（やや粘性有）
- 3 灰色(5Y4/1)粘質土（粘性強、しまりなし）



- 1 灰黄色(2.5Y7/2)粘性微砂
- 2 灰黄褐色(10YR5/2)粘性シルト
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土（固くしまる）
- 4 灰褐色(10YR4/1)粘質土（やや固くしまる）
- 5 灰褐色(10YR4/2)粘質土（やや粘性有）



第53図 溝19（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）



- 1 灰黄色(2.5Y6/2)粘性シルト
- 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性シルト
- 3 褐灰色(10YR5/1)粘質土（一部ラミナ層有、やや固くしまる）
- 4 褐灰色(10YR4/1)粘質土（第3層より粘性強、やや固くしまる）

第54図 溝20（1/30）

溝21～23（第28・55～58図、図版18）

溝21～23は調査区東側に位置する。これらは南西から北東に向かって溝21・22・23が近接して並列する。各溝の南北端は溝18・19と連結する。

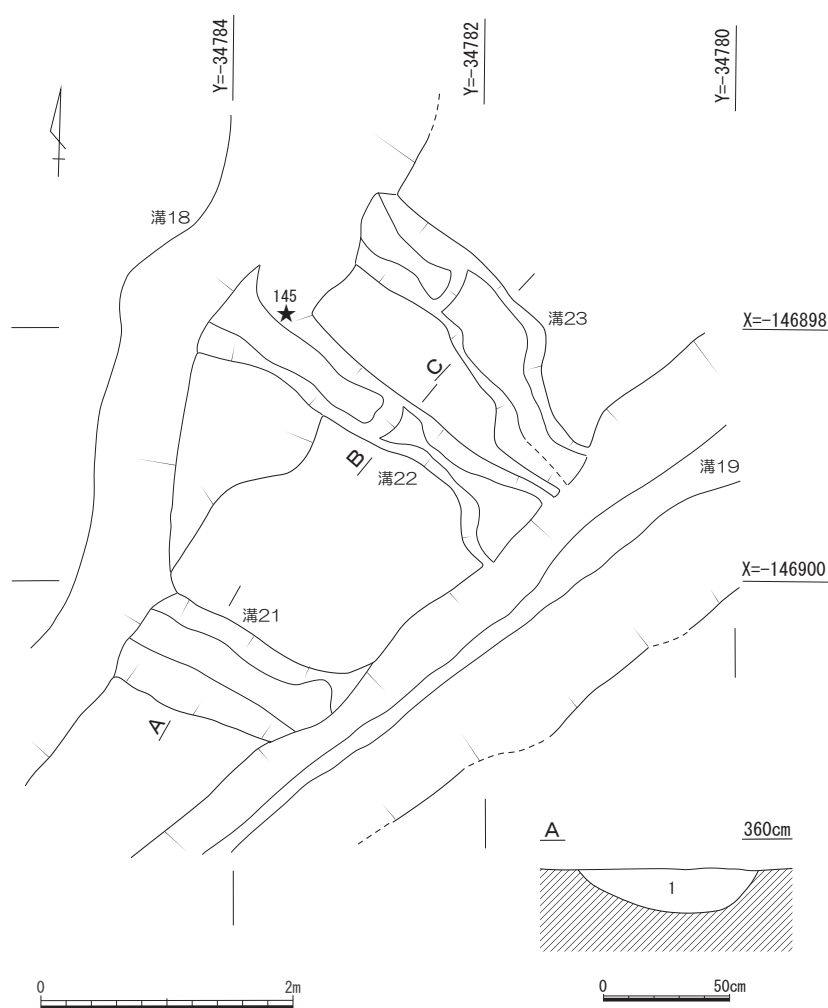
溝21は延長160cm、上端幅80cm、下端幅30cm、深さ34cmである。底面は平坦に近く、溝18底面から約70cm、溝19底面から約30cmほど高い。

溝22は延長295cm、上端幅76cm、下端幅30cm、深さ15cmである。底面は北端が南端より約40cmほど低いうえ、溝18の底面から約40cm、溝19の底面から約40cmほど高い。遺物は須恵器杯蓋196が見つかった。また、溝22北端と溝18南肩の境では完形の須恵器杯蓋145が出土した。

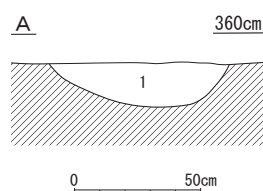
溝23は延長275cm、上端幅70cm、下端幅47cm、深さ25cmである。底面は北端が南端より約20cmほど低く、溝18の底面から約40cm、溝19の底面から約40cmほど高い。遺物はT K217型式の須恵器杯蓋197が出土した。

溝21～23の流走方向はN-40～63°-Wで、概ね直線的であるが、溝23は南端がわずかに曲がる。埋土はいずれも灰オリーブ色シルトである。溝21～23は埋土や流走方向から同時併存し、溝18・19と繋がることで両溝の水量を調整した機能が想定される。

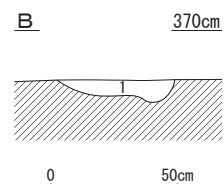
溝22・23の時期は古墳時代後期末（7世紀中葉）で、溝21も同時期の可能性がある。（米田）



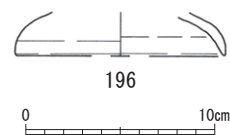
第55図 溝21～23（1/60）



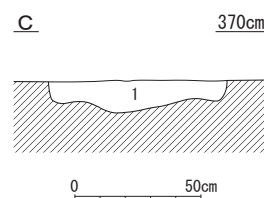
第56図 溝21（1/30）
1 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト



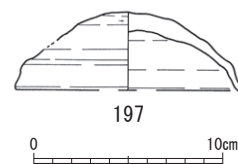
1 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト



第57図 溝22（1/30）・
出土遺物（1/4）



1 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト



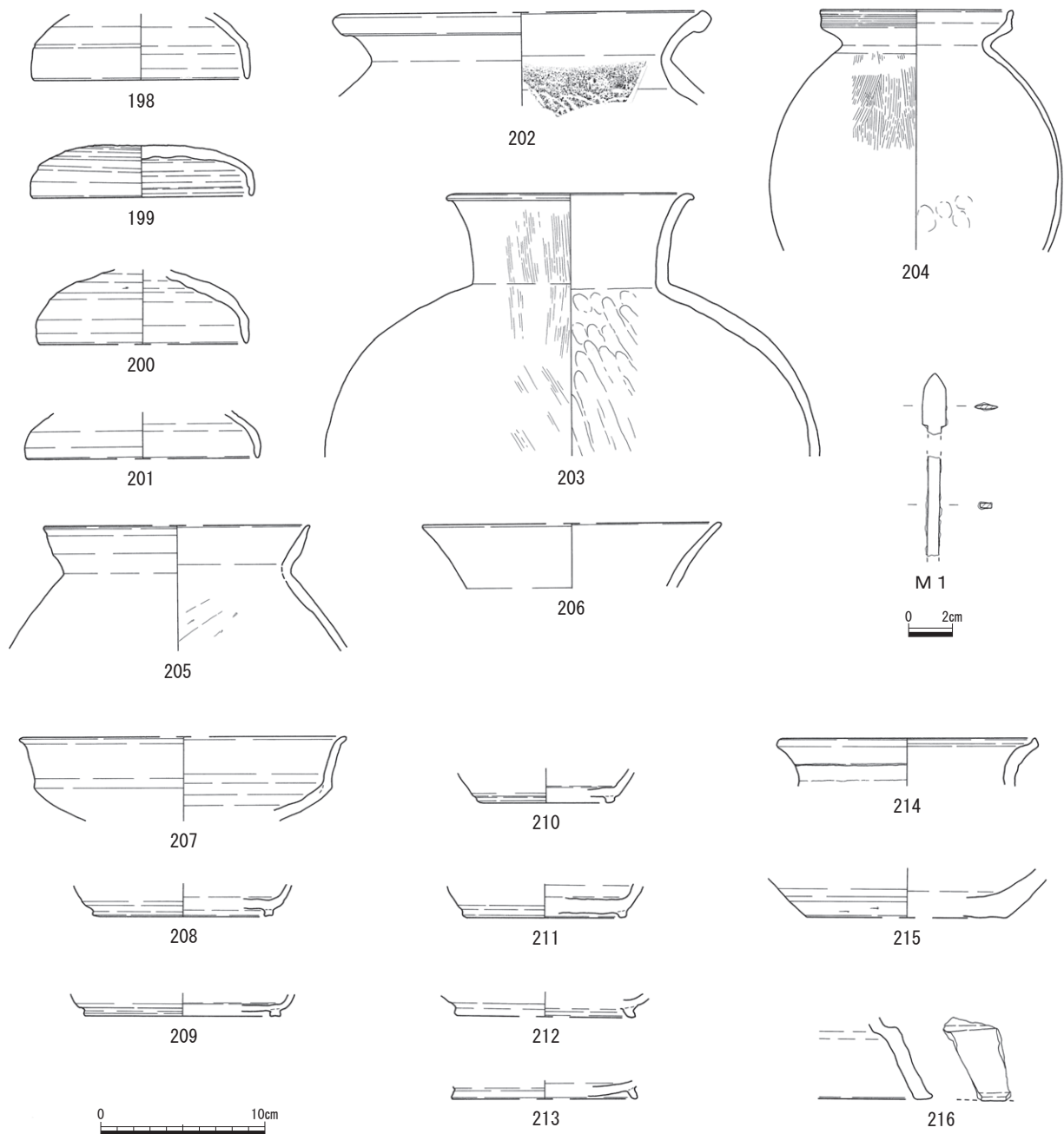
第58図 溝23（1/30）・
出土遺物（1/4）

5 その他の遺構・遺物

遺構に伴わない遺物（第59図、図版23）

ここには遺構面上面や側溝・トレンチ掘削時に出土した、帰属遺構不明の遺物を掲載している。櫛描沈線の甕204は調査区西壁第6図第11層から出土した。基盤Ⅱの上位に堆積し、西への下がりの時期を示す。鉄鏃M1は基盤Ⅲ上面で出土した。形態から古墳時代に属すると考えられる。奈良時代の遺物もあるが、本調査地における7世紀代も含めた古墳時代後期と平安時代以降の隔絶を認める観点から、ここに含めて掲載した。特殊な遺物として円面硯216や羽口C4があげられる。

(渡邊)

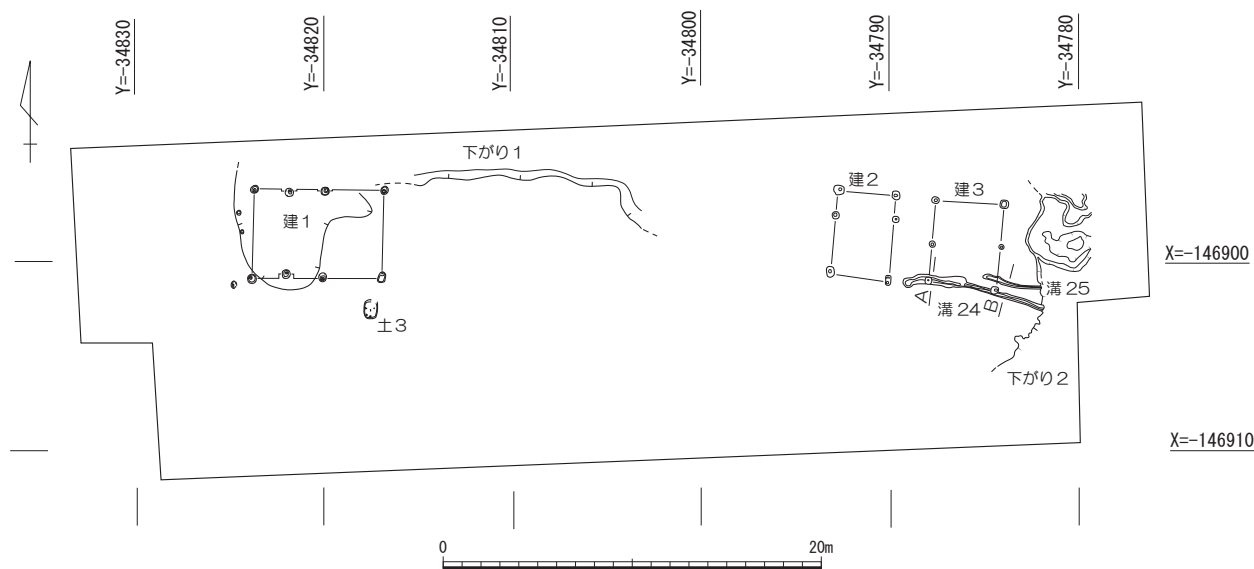


第59図 遺構に伴わない出土遺物（1/4・1/3）

第4節 平安時代以降の遺構・遺物

1 概要

中世以降の掘立柱建物、土坑、溝、たわみを検出したが、古墳時代の遺構面を覆う水平堆積層（第5図第2～5層、第6図第5～7層）は鉄分やマンガンの沈着面を伴っており、耕作土層と認識している。また、基盤I上面で素掘溝も検出している。この耕作土層の下層からは内面黒色土器碗が出土しており、古墳時代後期の溝の埋没が完了した平安時代以降、耕作地化したと想定できる。一方、この耕作土層を掘り下げている途中で掘立柱建物の柱穴を検出しており、少なくとも古代～中世の耕作土より掘立柱建物は新しく、一旦耕作地となったが、耕作により平坦化した当地を屋敷地として利用し、廃絶後に再度耕作地として利用した可能性が考えられる。（渡邊）



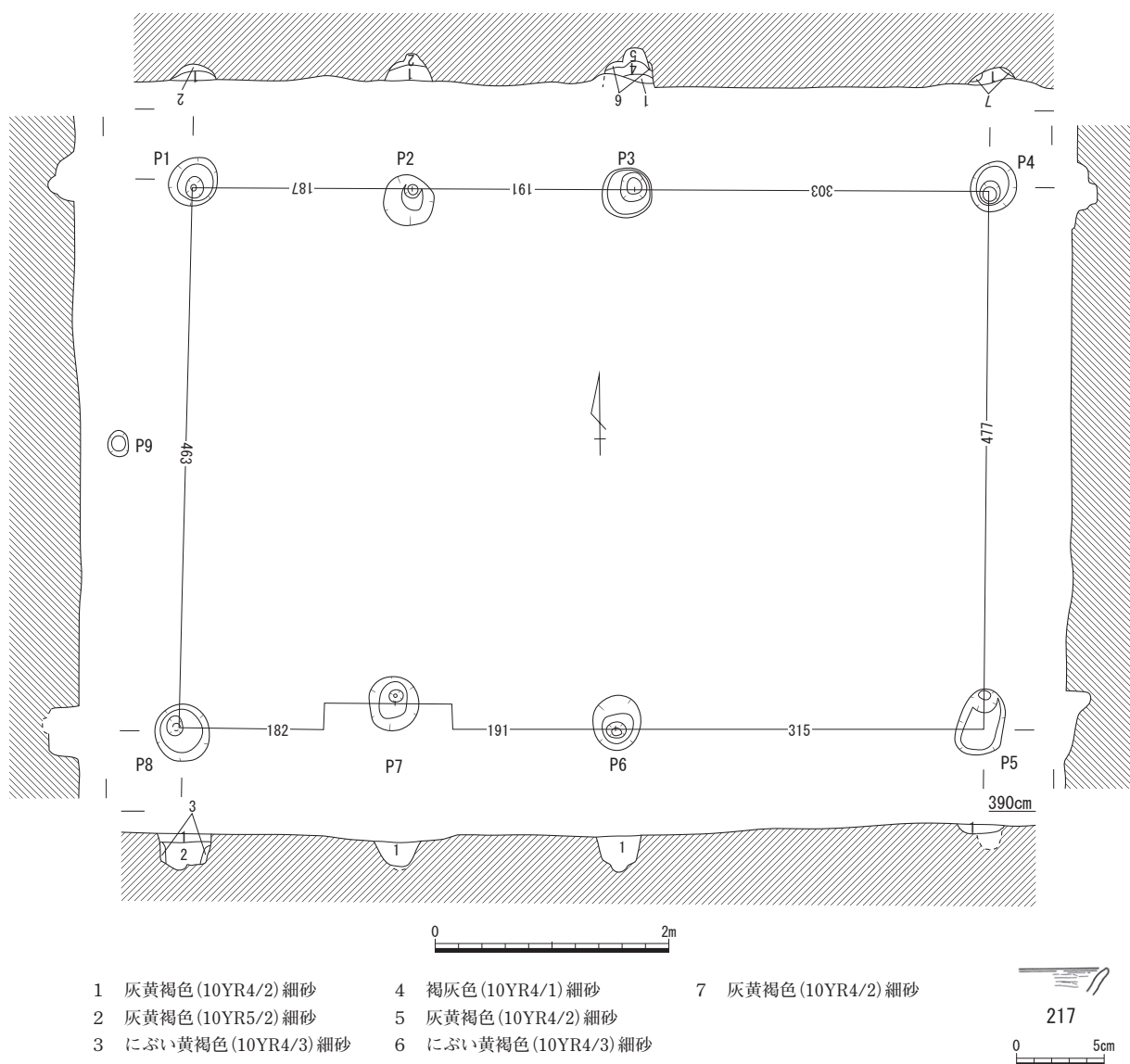
第60図 平安時代以降遺構全体図（1/400）

2 掘立柱建物

掘立柱建物1（第60・61図、図版5）

調査区の北西に位置する。東西3間×南北1間の建物である。柱穴は古代～中世耕作土層の上から掘り込まれる。規模は桁行681～688cm、梁行463～477cmで、床面積は32.2㎡である。P1－2間、P2－3間、P6－7間、P7－8間は、桁間が182～191cmであるのに対し、P3－4間とP5－6間は303～315cmであり、他の桁間よりも1.5倍以上長くなっている。建物西側では3つのピットがあり、中でもP9は梁の中間地点に位置していることから、この建物に伴うものかもしれない。

出土遺物は、P8から出土した瓦器の碗217がある。口縁部には沈線や段は認められず、和泉型に分類できる。遺構の時期は、鎌倉時代以降のものと考えられる。後述する土坑3が隣接して並ぶことを考慮すると、土坑3に近い時期まで降るかもしれない。（藤井雅）



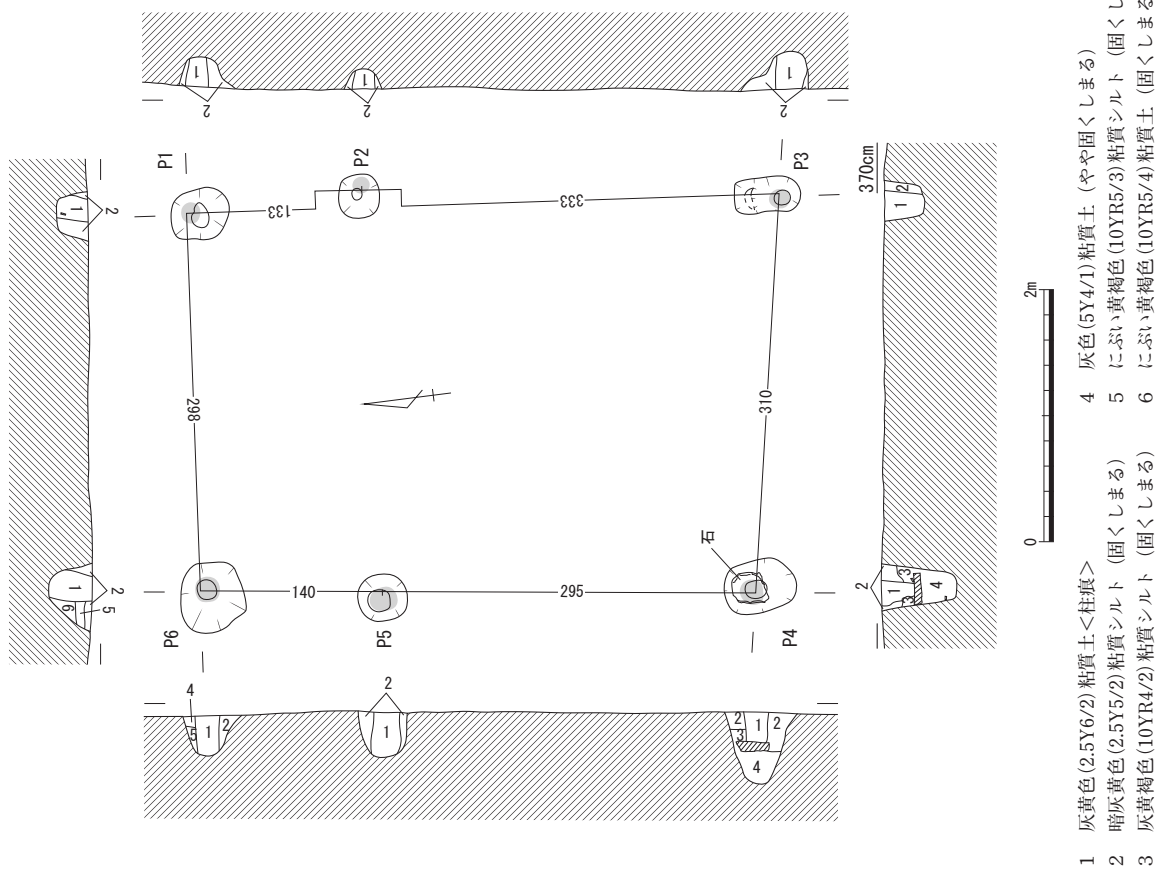
第61図 掘立柱建物1 (1/60)・出土遺物(1/4)

掘立柱建物2 (第60・62図、図版5・6)

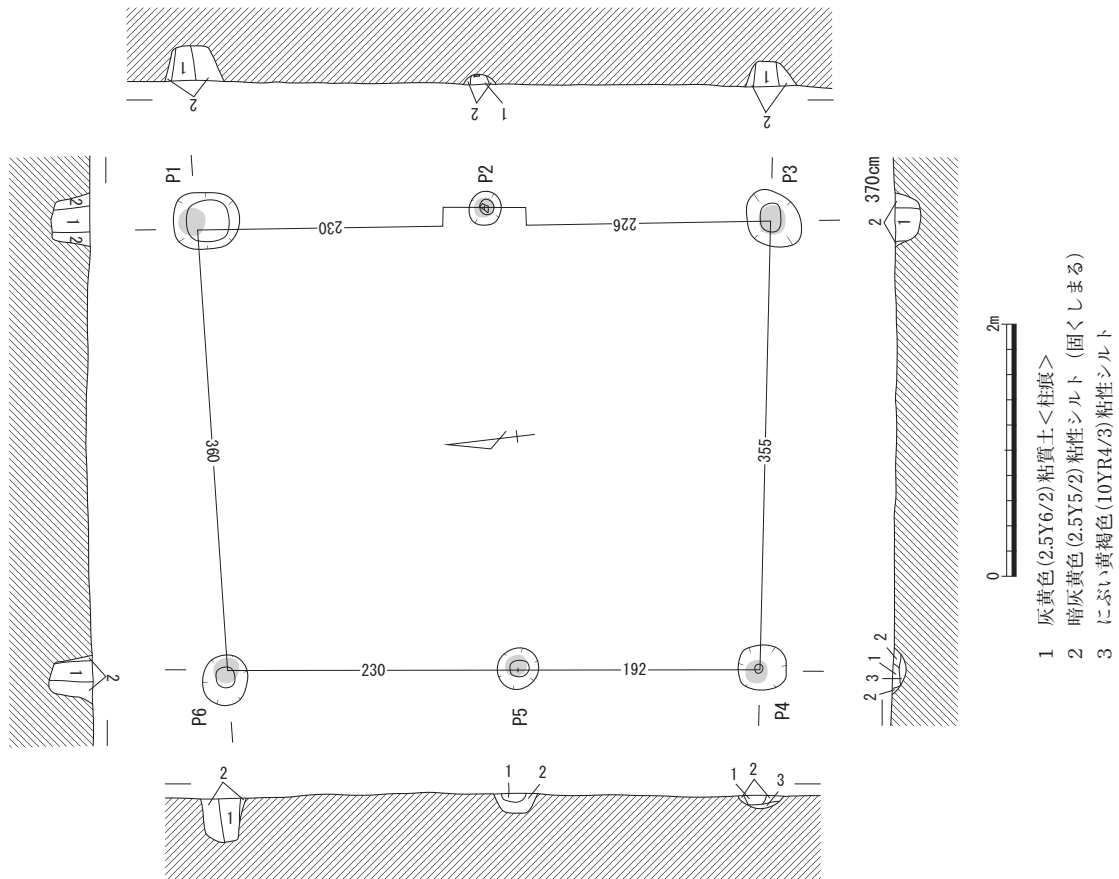
調査区東半、掘立柱建物1の東約24mの地点に位置する。規模は2×1間で、桁行435～466cm、梁間298～310cm、面積は約13.7㎡を測る。柱穴間隔は梁方向が293～310cmで、桁方向は北側が133～140cm、南側が295～333cmを測る。棟方向はN-7°-Wとなる。柱穴は円形の掘り方を有し、柱痕から推定される柱の太さは15～20cmである。P4の掘り方が他と比べて深く、一度埋め戻し、根石を置いて深さを調節した様子が窺える。建物に伴う遺物は出土していないが、柱穴は古代～中世耕作土層の上から掘り込まれており、時期は中世以降と考えられる。(藤井翔)

掘立柱建物3 (第60・63図、図版5・6)

掘立柱建物2の東に隣接して位置する。規模は2×1間で、桁行422～456cm、梁間355～360cm、面積は約15.7㎡を測る。柱穴間隔は桁方向が192～230cm、梁方向が355～360cmである。棟方向はN-6.5°-Wとなる。柱穴は円形の掘り方を有し、柱痕から推定される柱の太さは15～20cmである。建物に伴う遺物は出土していないが、掘立柱建物2と同様、柱穴は古代～中世耕作土層の上から掘り込まれており、時期は中世以降と考えられる。(藤井翔)



第62図 掘立柱建物 2 (1/60)

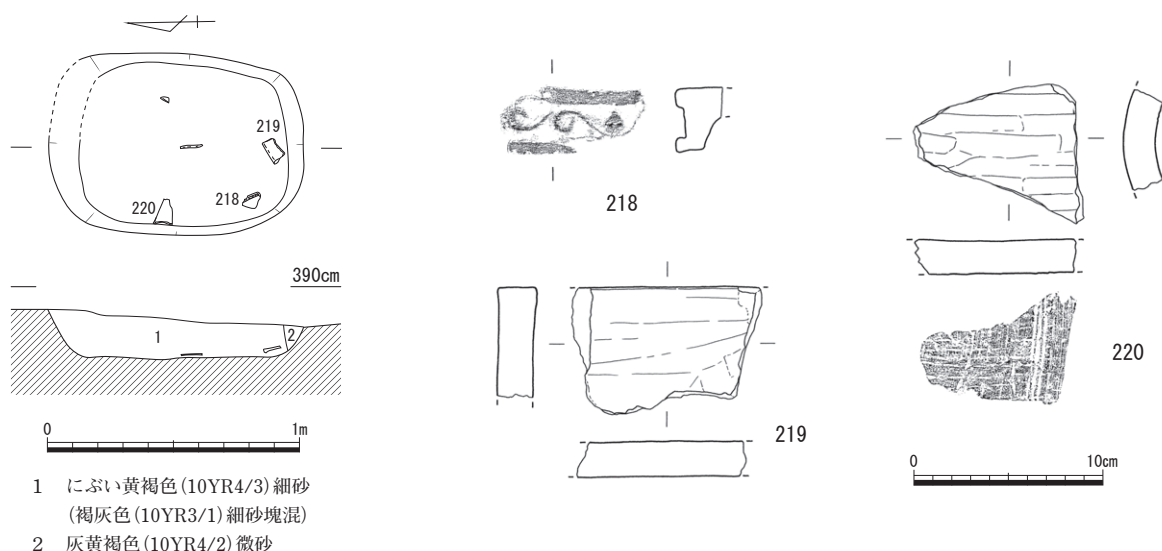


第63図 掘立柱建物 3 (1/60)

3 土坑

土坑3（第60・64図、図版7・23）

掘立柱建物1の南側に隣接する。平面形は隅丸方形で、断面形は箱形である。規模は長軸101cm、短軸70cm、残存する深さ18cmである。底面の標高は3.62mである。土坑の中心では木片が見つかり、下端付近では瓦片が出土した。出土状況から瓦は棺を据える棺台として使用されたものと考えられる。出土遺物は軒平瓦218、平瓦219、丸瓦220がある。軒平瓦218は中実宝珠と2転唐草が描かれる。平瓦219は全面がナデで調整される。丸瓦220は内面にガーゼ状の細かな布目がある。これらの特徴から、時期は、17世紀第2～4四半期であると考えられる。（藤井雅）

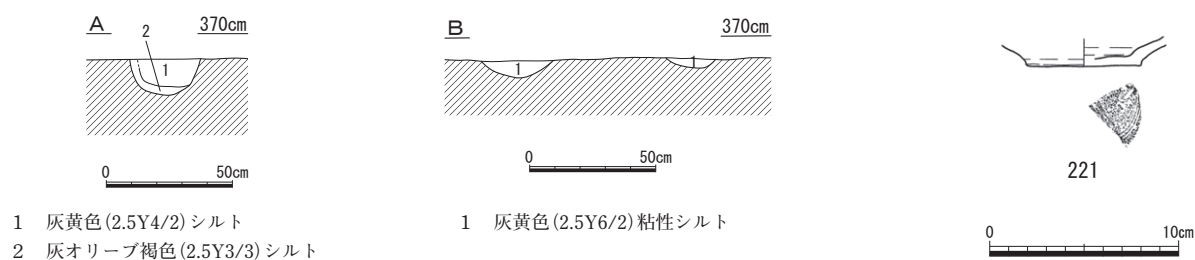


第64図 土坑3（1/30）・出土遺物（1/4）

4 溝

溝24・25（第60・65図、図版18）

調査区東端に位置する。溝24は上面幅20～45cm、下面幅10cm、検出面からの深さ14cmを計り、溝25は上面幅16～32cm、下面幅5cm、検出面からの深さ14cmを計る。いずれも古代～中世の耕作土層を除去した段階で検出し、溝24の一部は掘立柱建物3に切られている。出土遺物について、221は須恵器の碗で、底部には糸切り痕が認められる。遺構の時期は出土遺物や、掘立柱建物3との関係、検出面の標高から、12世紀ごろと考えられる。（藤井翔）



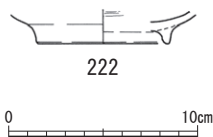
第65図 溝24・25（1/30）・溝24出土遺物（1/4）

5 その他の遺構・遺物

下がり1 (第60・66図)

調査区の北端で確認された、古代～中世の耕作土層の北への下がりである。溝16・17の直上にあたるため、埋没した溝上部の窪みに堆積したものと考えられる。出土遺物は土師器碗（早島式土器）222がある。器表面、断面ともに摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、内面のミガキの存在、立ち上がりの角度、高台の形状などから、時期は12世紀末～13世紀代と考えられようか。（藤井雅）

下がり2 (第60図、図版18)

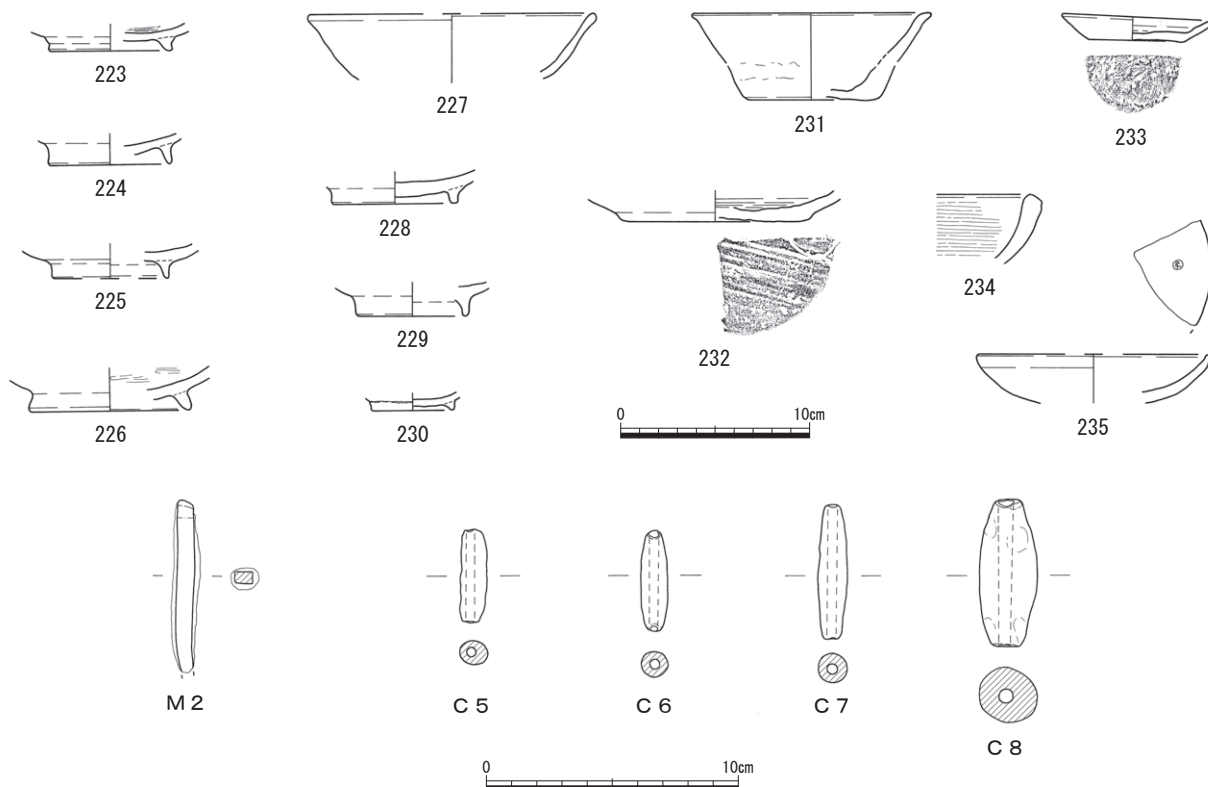


第66図 下がり1出土遺物 (1/4)

下がり1の東側、調査区の東端に位置する。黄褐色を呈する古代～中世の耕作土層が東～東南に向かって徐々に下がっているもので、全体の形状は不明である。検出レベルは標高3.6m付近で、調査区東端での底面レベルは標高3.2mとなる。遺構の時期を特定できる遺物は出土していないが、12世紀ごろと想定される溝24・25を切っていることから、それよりは新しく位置づけることができる。中世の前半か。（藤井翔）

遺構に伴わない遺物 (第67図、図版23)

主に調査区全面を覆う耕作土層（第5図第2～6層、第6図第5～8層）や側溝掘削時に出土した遺物を掲載している。内面黒色土器碗や土師器碗など古代～中世の時期幅が認められる。古代の土器は包含層の下面近くで出土しており、面的な掘り下げは行わなかったが、第5図第5層が古代に遡る耕作土層に対応する可能性がある。一方、磁器235は、既存施設の攪乱坑から出土しており、当該期の状況は明らかでない。鉄釘M2及び土錘C5～8も耕作土層から出土した。（渡邊）



第67図 遺構に伴わない出土遺物 (1/4・1/3)

第4章 自然科学分析

第1節 百間川原尾島遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本分析調査では、当時の周辺環境を知る目的で珪藻分析と花粉分析を実施する。また、木製品と用材に関する情報を得る目的で樹種同定を実施し、周辺環境と栽培植物に関する情報を得る目的で有機質堆積物の水洗選別で検出された種実・昆虫の同定を実施する。

1. 土壌の花粉分析及び珪藻分析

1-1. 試料

試料は、北壁より採取された6点である。試料の詳細は表3に示す。分析方法は、紙面の都合上割愛する。

表3 珪藻・花粉分析

試料番号	出土層位	土質	対応遺構	時期
1	北壁第45図第13層	暗灰色粘質土	溝18最下層	古墳時代後期
2	北壁第45図第21層	黄灰色粘質土	溝10中層	弥生時代後期?
3	北壁第45図第27層	灰色粘質土	溝12中層	弥生時代後期?
4	北壁第45図第29層	灰色粘質土	溝7	弥生時代後期?
5	北壁第45図第31層	黒褐色粘質土	基盤上層	弥生時代以前?
6	北壁第45図第32層	オリーブ灰色粘質土	基盤下層	弥生時代以前?

1-2. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表4に示す。第31層と第32層は無化石である。第29層と第27層は保存状態が悪い淡水生種がそれぞれ1個体産出した。第21層からは保存状態が悪い淡水生種がそれぞれ3個体産出した。第13層からは70個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く一部に溶解の痕跡が認められるため、不良～極不良である。産出した種の生態性は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の *Cocconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella turgidula*、淡水生種で流水不定性種の *Cymbella tumida*、*Fragilaria ulna*、*Gyrosigma acuminatum* 等である。

(2) 花粉分析

結果を表5、第68図に示す。第31層と第32層は、花粉化石の産出状況、保存状態とも悪い。第31層からはイネ科、ヨモギ属などが、第32層からはツガ属、スギ属などが、僅かに認められる程度である。第29層は花粉化石が豊富に産出するが、保存状態は花粉外膜が溶解しているものが多く悪い。花粉化石群集は、木本花粉と草本花粉が同程度の割合で認められる。木本花粉ではマツ属、スギ属が多く、モミ属、ツガ属、コナラ亜属、アカガシ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、キク亜科、タンポポ科などを伴う。第21層と第27層は、いずれも花粉化石産出が少なく、僅かに認められる花粉化石の保存状態も悪い。木本花粉ではハンノキ属、アカガシ亜属などが、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが確認される。第13層は花粉化石が豊富に産出し、保存状態も普通程度である。花粉化石群集は木本花粉の割合が高く、モミ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが多く認められ、ヤナギ属、ブナ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴

表4 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	北壁					
	塩分	pH	流水		第13層 1	第21層 2	第27層 3	第29層 4	第31層 5	第32層 6
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>lineata</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	7	1	-	-	-	-
<i>Cocconeis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
<i>Cyclotella radiosa</i> (Grun.) Lemmermann(syno.: <i>C. comta</i>)	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	3	-	-	-	-	-
<i>Cymbella cistula</i> (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	1	-	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	7	-	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	5	1	-	1	-	-
<i>Cymbella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	-	-	-	-	-
<i>Encyonema silesiacum</i> (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	5	-	1	-	-	-
<i>Fragilaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	8	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	-	-	-	-	-
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		8	-	-	-	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	1	-	-	-	-
<i>Luticola mutica</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	-	-	-	-	-
<i>Melosira varians</i> C.Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,U	1	-	-	-	-	-
<i>Navicula rhynchocephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia karelica</i> Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	2	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	1	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	1	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	1	-	-	-	-	-
<i>Sellaphora</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anceps</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	3	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水生種					70	3	1	1	0	0
珪藻化石総数					70	3	1	1	0	0

凡例
塩分:塩分濃度に対する適応性 pH:水素イオン濃度に対する適応性 流水:流水に対する適応性
Euh :海水生種 al-bi:真アルカリ性種 l-bi:真止水性種
Euh-Meh:海水生種-汽水生種 al-il:好アルカリ性種 l-ph:好止水性種
Meh :汽水生種 ind :pH不定性種 ind :流水不定性種
Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種 ac-il:好酸性種 r-ph:好流水性種
Ogh-hil:貧塩好塩性種 ac-bi:真酸性種 r-bi:真流水性種
Ogh-ind:貧塩不定性種 unk :pH不明種 unk :流水不明種
Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
Ogh-unk:貧塩不明種
環境指標種
A:外洋指標種 B:内湾指標種 C1:海水藻場指標種 C2:汽水藻場指標種
D1:海水砂質干潟指標種 D2:汽水砂質干潟指標種
E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種 F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)
G:淡水浮遊生種群 H:河口浮遊性種群 J:上流性河川指標種 K:中～下流性河川指標種
L:最下流性河川指標種群 M:湖沼浮遊性種 N:湖沼沼沢湿地指標種 O:沼沢湿地付着生種
P:高層湿原指標種群 Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)
S:好汚濁性種 U:広適応性種 T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995)
R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)

う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、サナエタデ節―ウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。

1-3. 考察

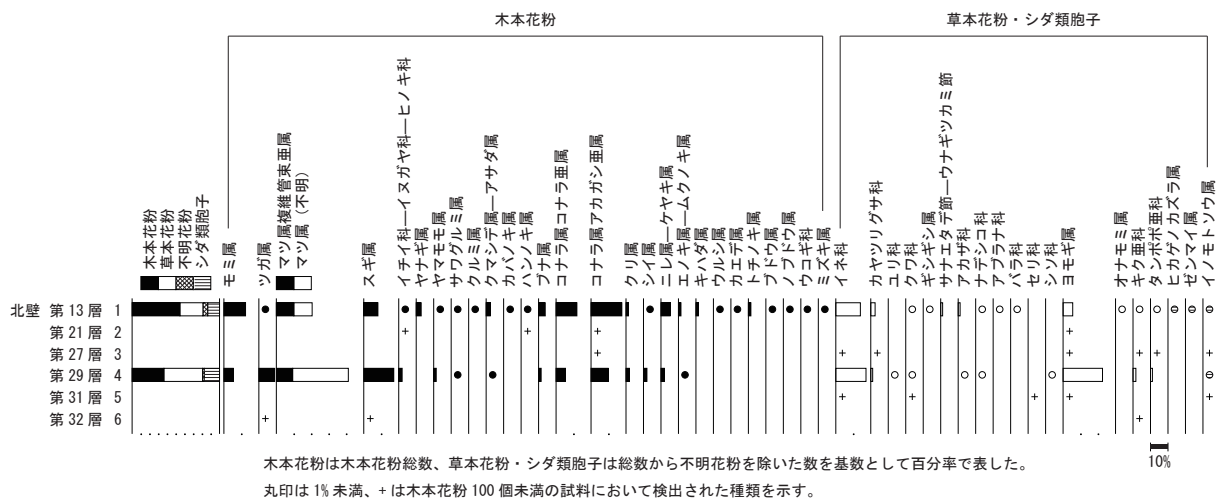
第13層を除く試料では、珪藻化石がほとんど検出されない。これは、好気的な環境下における風化により化石が消失したためと考えられる。珪質化石の風化に関しては千木良(1995)に、花粉化石の風化に関しては中村(1967)で述べられている。

珪藻化石で比較的多く検出されたのは第13層のみである。検出された種類は、淡水生種で流水性種の*Cocconeis placentula* var. *lineata*、*Cymbella turgidula*、淡水生種で流水不定性種の*Cymbella tumida*、*Fragilaria ulna*、*Gyrosigma acuminatum*等である。流水性種の*Cocconeis placentula* var. *lineata*は、河川

等の流水域の基物（礫等）に大型の藻類と共に付着生育する種である。流水性種の *Cymbella turgidula* は中～下流性河川指標種群(安藤, 1990)と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現する。流水不定性種の *Cymbella tumida* は、一般に貧塩不定、好アルカリ性種、流水不定の広域頒布種であるが沼沢湿地に普遍的に認められる。また、Asai and Watanebe (1995)によると好清水性種とされる。淡水生種で流水不定性種の *Gyrosigma acuminatum* は、淡水生で塩分不定、好アルカリ性、流水不定とされるが、淡水では淀んだ止水域や汽水域からも見出される種である。第13層から産出した群集の特徴として、様々な生態性をもつ珪藻化石が含まれ、かつ際だって多い種類が認められない点があげられる。このような群集は混合群集と呼ばれる。混合群集とは、基本的に生育環境を異にする種群で構成され、かつ種数が多い(堆積物中からの産出が低い割に構成種数は多い)。これらは流れ込み等による二次化石が殆どを占める種群とされる(堀内ほか, 1996)。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物などの一過性堆積物で認められ

表5 花粉分析結果

種 類	北壁					
	第13層 1	第21層 2	第27層 3	第29層 4	第31層 5	第32層 6
木本花粉						
モミ属	26	-	-	11	-	-
ツガ属	2	-	-	18	-	1
マツ属複維管束亜属	21	-	-	19	-	-
マツ属(不明)	22	-	-	65	-	-
スギ属	17	-	-	35	-	1
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	2	1	-	4	-	-
ヤナギ属	6	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	1	-	-	3	-	-
サワグルミ属	1	-	-	1	-	-
クルミ属	1	-	-	-	-	-
クマシデ属—アサダ属	5	-	-	1	-	-
カバノキ属	2	-	-	-	-	-
ハンノキ属	2	2	-	-	-	-
ブナ属	8	-	-	3	-	-
コナラ属コナラ亜属	25	-	-	11	-	-
コナラ属アカガシ亜属	37	1	2	20	-	-
クリ属	3	-	-	4	-	-
シイ属	1	-	-	4	-	-
ニレ属—ケヤキ属	11	-	-	4	-	-
エノキ属—ムクノキ属	3	-	-	1	-	-
キハダ属	3	-	-	-	-	-
ウルシ属	1	-	-	-	-	-
カエデ属	2	-	-	-	-	-
トチノキ属	3	-	-	-	-	-
ブドウ属	1	-	-	-	-	-
ノブドウ属	2	-	-	-	-	-
ウコギ科	1	-	-	-	-	-
ミズキ属	1	-	-	-	-	-
草本花粉						
イネ科	51	-	8	95	4	-
カヤツリグサ科	9	-	1	6	-	-
ユリ科	-	-	-	1	-	-
クワ科	3	-	-	1	1	-
ギシギシ属	1	-	-	-	-	-
サナエタデ属—ウナギソカミ節	4	-	-	-	-	-
アカザ科	4	-	-	2	-	-
ナデシコ科	1	-	-	3	-	-
アブラナ科	3	-	-	-	-	-
バラ科	2	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	1	-
シソ科	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	20	3	6	124	1	-
オナモミ属	1	-	-	-	-	-
キク亜科	1	-	2	9	-	1
タンポポ科	1	-	1	6	-	-
不明花粉						
不明花粉	21	-	-	11	-	-
シダ類孢子						
ヒカゲノカズラ属	1	-	-	-	-	-
ゼンマイ属	1	-	-	-	-	-
イノモトソク属	1	-	4	4	4	-
他のシダ類孢子	49	12	36	94	25	5
合 計						
木本花粉	210	4	2	204	0	2
草本花粉	101	3	18	248	7	1
不明花粉	21	0	0	11	0	0
シダ類孢子	52	12	40	98	29	5
合計(不明を除く)	363	19	60	550	36	8
その他						
回虫卵	1	-	-	-	-	-



第68図 花粉分析群集

る場合が多い。地形的にみると、河川による削剥、運搬を繰り返しながら徐々に堆積して行く中で、様々な場所から流れ込んだ珪藻殻が流入するだけでなく、その場で生産された珪藻殻の堆積、さらには表層部付近での自然の攪乱などによって混合群集が形成されていたと思われる。特に今回の場合、殻が厚く種類が多い傾向にあることから、好氣的環境下における分解の影響を強く受け、検出数の減少等といった群集変化が起こったと思われる。

弥生時代後期とされる第29層は、花粉化石は多いが、保存状態は全体的に悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められる。検出された花粉化石は、風化に強い針葉樹やある程度風化が進んでも同定可能な種類が確認されている。このことから、本層から得られた花粉化石群集は、針葉樹花粉が実際の割合よりも増加している可能性がある。本層は溝7の覆土であることから、溝内はしばしば好氣的環境下に曝されていた可能性がある。周辺植生を反映する木本類について見ると、ツガ属、マツ属、スギ属など針葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が確認された。このうち、アカガシ亜属はシイ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素である。また、ツガ属、スギ属などの針葉樹は温帯針葉樹林を形成する。よって、これらの照葉樹林や温帯針葉樹林が当時周辺に分布したと推測される。

草本植生では、イネ科、ヨモギ属など開けた明るい場所に草本群落を形成する種類が確認される。当時の遺跡周辺は、水田等の開発が行われていたことから、調査区周辺は開けた草地が存在していたと考えられる。

古墳時代後期とされる第13層は、他の試料と比較すると花粉化石の保存状態が良い。木本類ではアカガシ亜属などの常緑照葉樹やモミ属、マツ属、スギ属などの温帯針葉樹が多いことから、弥生時代と同様、当時の低地～後背山地にかけてこれらが生育していたと推測される。また、コナラ亜属をはじめ、ヤナギ属、クマシデ属—アサダ属、ニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属、トチノキ属など渓谷林や河畔林を構成する種類が検出されることから、これらが百間川などの河川沿いに生育していたと考えられる。草本類はイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属などが検出される。弥生時代と同様、周辺開発によって開けた草地が存在したと思われる。このような花粉化石群集は、これまで百間川流域で行われてきた花粉分析と類似する。

表6 樹種同定結果

試料番号	出土遺構	取上番号	掲載番号	種別	樹種	備考
1	溝18	W2	W12	板材	広葉樹	若年枝?
2	溝18	W4	未掲載	堰構造材か	クヌギ節?	若年枝?
3	溝18	W5	未掲載	堰構造材か	クヌギ節?	若年枝?
4	溝16	W4	W11	板状、建築部材か	モミ属	
5	溝16	W13	W2	不明木器(二叉棒)	アワブキ属	若年枝?
6	溝16	W16	W5	砲弾形木製品	イスノキ	
7	溝16	W19	W1	斧柄	カヤ	
8	溝16	W20	W6	加工棒状	クヌギ節	
9	溝16	W27	W4	砲弾形木製品	アカガシ亜属	
10	溝16	W29	W9	杭	クヌギ節	

2. 出土木材の樹種同定

2-1. 試料

試料は、溝16、溝18溝から検出された10点である。分析方法は、紙面の都合上割愛する。

2-2. 結果・考察

結果を表6に示す。針葉樹2種類（モミ属、カヤ）、広葉樹4種類（コナラ亜属クヌギ節、アカガシ亜属、アワブキ属、イスノキ）に同定された。今回樹種同定を行った木製品は、用途

がはっきりしないものや、杭や堰構造材などである。伊東・山田編(2012)の木材データベースによれば、上記のような木製品の場合、周辺に生育している入手しやすい木材を使って行うため、周辺植生を反映し雑多な組成になる。今回の場合も分析点数10点に対して6種類と種類数が多い。また、常緑広葉樹であるアカガシ亜属やイスノキ、温帯針葉樹であるモミ属とカヤ、二次林に多いコナラ亜属ク

ヌギ節やアワブキ属など、温暖な地域に生育する種類が多く、いずれも遺跡周辺に生育可能である。植物は、種類によって化石になりやすい部位が異なるため、花粉化石、種実遺体、木材の組成は必ずしも一緒にならない。

表7 種実同定結果

ただし今回の組成を

大局的にみると、今

回分析した花粉化

石、種実遺体、木材

はいずれも矛盾しな

い組成になっている。

3. 出土有機質の同定

3-1. 試料・分析方法

試料は、溝16より

採取された1点であ

る。主に雑穀や生産

量の多い雑草類の把

握を目的として、試

料を粒径0.25mmの篩

で水洗し、種実遺体

や昆虫遺体を100個

以上抽出する。次に、

主に栽培植物や木本

の把握を目的として、

1.0mm篩で水洗し、

種実遺体や保存状態

が良い昆虫遺体のう

ち10点を抽出同定す

る。

3-2. 結果

種実の結果を表7、

昆虫の結果を表8に

示す。木本22分類群

の葉1個、種実88個、

草本59分類群の種実

304個、車軸藻類の

卵孢子1個、計394

個の大型植物遺体が

同定された。1個は

分類群	部位・状態	2区 No.10					試料水洗に使用した篩の粒径 分析量(cc) 分析量(g) 備考
		0.25mm		1.0mm		合計	
		50		450		885	
		100		890		1310	
		完形	破片	完形	破片	-	-
木本							
モミ属	葉(基部)	-	-	-	1	-	1
ケヤキ	果実	-	-	-	-	1	1
クワ属	核	-	-	1	3	+	4
カジノキ属	核	-	10	6	15	+	31
マタタビ近似種	種子	-	-	1	-	-	1
ヒサカキ属	種子	1	-	1	-	-	2
スモモ	核	-	-	-	2	1	3
ノイバラ節	果実	-	-	-	1	-	1
フユイチゴ類	核	-	-	1	-	-	1
キイチゴ属A	核	-	-	4	2	+	6
キイチゴ属B	核	1	1	-	-	-	2
アカメガシワ	種子	-	-	-	2	+	2
カラスザンショウ	種子	-	2	-	1	-	3
サンショウ	種子	-	1	-	3	-	4
ブドウ属	種子	1	1	-	3	+	5
ノブドウ	種子	-	-	-	3	-	3
ブドウ科	種子	-	2	-	2	-	4
クマノミズキ	核	-	-	-	1	-	1
タラノキ	核	-	-	1	-	-	1
ウコギ節	核	-	-	2	-	+	2
ニワトコ	核	-	5	2	3	+	10
スイカズラ属?	核	-	-	1	-	-	1
草本							
コナギ近似種	種子	4	1	-	-	-	5
イボクサ	種子	-	-	1	-	-	1
イネ	籾	-	3	-	-	-	3
	籾(基部)	-	1	-	1	-	2
	籾(基部)	-	1	-	1	-	2
	玄米	-	-	1	-	1	2
コムギ	穎果	-	-	-	-	1	1
ハトムギ	苞鞘	-	-	1	-	-	1
エノコログサ属A	果実	-	-	-	2	-	2
エノコログサ属B	果実	-	-	3	-	+	3
イネ科	果実	2	-	-	-	-	2
アゼスゲ類	果実	-	-	1	-	-	1
スゲ属(ナキリスゲ類?)	果実	-	-	1	-	-	1
スゲ属	果実	1	1	1	-	+	3
ウキヤガラ?	果実	-	-	-	2	-	2
カヤツリグサ属	果実	2	1	-	-	+	3
アサ	果実	-	-	-	-	2	2
カナムグラ	核	-	4	1	27	+	32
ミズ属	果実	1	-	-	-	+	1
カラムシ属	果実	-	3	-	-	+	3
イラクサ科(サンショウソウ属?)	果実	9	25	-	-	+	34
ギンギシ属	果実	-	-	3	1	+	4
	花被	-	-	3	12	+	15
ミソソバ	果実	-	-	-	-	1	1
サナエタデ近似種	果実	-	-	8	17	+	25
イヌタデ近似種	果実	-	5	1	-	-	6
ヤナギタデ近似種	果実	-	1	1	-	+	2
ボントクタデ近似種	果実	-	-	-	12	+	12
タデ属	果実	-	-	-	7	+	7
マルミノヤマゴボウ	種子	-	-	-	2	-	2
ザクロソウ	種子	-	1	-	-	+	1
ミドリハコベ近似種	種子	1	3	-	-	-	4
ナデシコ科(ウシハコベ近似種)	種子	6	6	-	-	+	12
ナデシコ科(マンテマ属?)	種子	2	-	-	-	-	2
アカザ属	種子	-	9	-	-	+	9
ヒユ属	種子	1	-	-	-	+	1
ムラサキケマン型	種子	-	-	1	3	+	4
ダイコン属?	種子	-	-	1	-	-	1
キジムシロ類A	核	1	7	-	-	-	8
キジムシロ類B	核	1	3	-	-	-	4
カタバミ属	種子	2	-	-	-	-	2
エノキグサ	種子	-	3	1	2	+	6
ヒョウタン類	種子	1	-	-	-	1	2
モモルディカメロン型	種子	-	-	2	2	-	4
モモルディカメロン型・マクワ・シロウリ型	種子	-	-	2	1	-	3
マクワ・シロウリ型	種子	-	-	-	-	1	1
メロン類	種子	1	-	-	17	1	19
チドメグサ属	果実	-	1	-	-	-	1
ヤブジラミ属	果実	-	-	2	-	+	2
オカトラノオ属	種子	1	-	-	-	-	1
キランソウ属	果実	-	-	1	-	+	1
シソ属・イヌコウジュ属	果実	-	6	2	3	-	11
メハジキ属	果実	-	-	3	-	-	3
トウバナ属	果実	-	-	-	-	1	1
ハダカホオズキ属?	種子	-	-	2	-	-	2
イガホオズキ属	種子	1	2	-	3	-	6
ナス属	種子	-	-	2	1	+	3
タカサブロウ	果実	-	-	-	1	-	1
メナモミ属	果実	-	-	1	-	+	1
ヨメナ属	果実	-	-	2	-	-	2
アキノノグシ?	果実	-	-	-	1	-	1
ヤブタバコ	果実	-	-	1	-	-	1
キク科A	果実	1	-	-	-	+	1
キク科B	果実	3	-	-	-	+	3
車軸藻類							
シャジクソウ科	卵孢子	1	-	-	-	-	1
合計		45	109	69	160	11	394
不明双子葉類	種子? 炭化	-	-	-	-	1	1
昆虫遺体		-	60	-	63	-	123

一部同定対象

表8 昆虫同定結果

仮	和名	部位	左右	状態等	備考
1	ゾウムシ科	前胸背板		略完	
2	コガネムシ科	前翅	右	完形	
3	コウチュウ目	前翅	左	先端	
4	コウチュウ目	前翅	左	完形	
5	コウチュウ目	前翅	右	基部	半分～2/3残存
6	カメムシ目	前胸腹板		完形	1～6節残存
		中胸腹板		完形	
		後胸腹板		完形	
7	コウチュウ目	前翅	左	完形	
8	コウチュウ目	前翅	右	破片	左半分残存
9	コウチュウ目	前翅	右	先端	半分残存 10と同一個体
10	コウチュウ目	前翅	右	基部	半分残存 9と同一個体

草本主体である。試料450cc/1.0mm篩は229個で草本主体であるが、栽培植物と木本の分類群を補っている。

栽培植物は、スモモ3個、イネ粃3個、粃（基部）2個、炭化粃（基部）2個、炭化玄米2個、コムギ炭化穎果1個、ハトムギ1個、アサ2個、ヒョウタン類2個、モモルディカメロン型4個、モモルディカメロン型 - マクワ・シロウリ型3個、マクワ・シロウリ型1個、メロン類19個の、計45個が確認された。栽培の可能性は、ダイコン属？炭化種子1個、シソ属 - イヌコウジュ属11個が確認された。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、木本21分類群86個、草本50分類群250個、車軸藻類1個から成り、草本（雑草）主体の組成を示す。木本は、針葉樹で常緑高木のモミ属、広葉樹で落葉高木のケヤキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、クマノミズキ、落葉高木～低木のクワ属、カジノキ属、常緑小高木～低木のヒサカキ属、常緑低木のフユイチゴ類、常緑または落葉低木のキイチゴ属A・B、落葉低木のノイバラ節、サンショウ、タラノキ、ウコギ節、ニワトコ、スイカズラ属？、落葉籐本のマタタビ近似種、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科が確認され、河畔や林縁などの明るく開けた場所に生育する分類群から成る。

草本や車軸藻類は、沈水植物のシャジクソウ科、抽水植物のコナギ近似種、イボクサ、ウキヤガラ？、湿生植物のアゼスゲ類、ミズ属、ミゾソバ、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、ムラサキケマン型、トウバナ属、タカサブロウ、中生植物のエノコログサ属A・B、イネ科、スゲ属（ナキリスゲ類？）、スゲ属、カヤツリグサ属、カナムグラ、カラムシ属、イラクサ科（サンショウソウ属？）、ギシギシ属、イヌタデ近似種、タデ属、マルミノヤマゴボウ、ザクロソウ、ミドリハコベ近似種、ナデシコ科（ウシハコベ近似種）、ナデシコ科（マンテマ属？）、アカザ属、ヒユ属、キジムシロ類A・B、カタバミ属、エノキグサ、チドメグサ属、ヤブジラミ属、キランソウ属、メハジキ属、ハダカホオズキ属？、イガホオズキ属、ナス属、メナモミ属、ヨメナ属、アキノノゲシ？、ヤブタビラコ、キク科A・Bが確認され、中生植物を主体とする。

3-3. 考察

古墳時代の川底とされる溝16の土壌試料を洗い出した結果、木本22分類群、草本59分類群、車軸草類1分類群から成る大型植物遺体群や昆虫遺体などが確認された。昆虫遺体は保存状態が悪いため、目ならびに科までの同定にとどまっているため、当時の環境について検討することは難しい。

栽培植物は、スモモ、イネ、コムギ、ハトムギ、アサ、ヒョウタン類、モモルディカメロン型やマクワ・シロウリ型を含むメロン類が確認された。近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明である

不明で双子葉類の炭化種子と考えられる。他、昆虫123個、木材、炭化材、植物片、岩片・土粒類等が確認され、植物片を主体とする。

昆虫遺体は保存状態が悪く、かつ細片であるため、種まで同定できたものはなく、コガネムシ科、ゾウムシ科、コウチュウ目、カメムシ目が確認された。

大型植物遺体の保存状態は不良である。イネの一部とコムギ、ダイコン属？は炭化している。検出個数は、試料50cc/0.25mm篩は154個で圧倒的な

が、当時利用された植物質食料と示唆される。

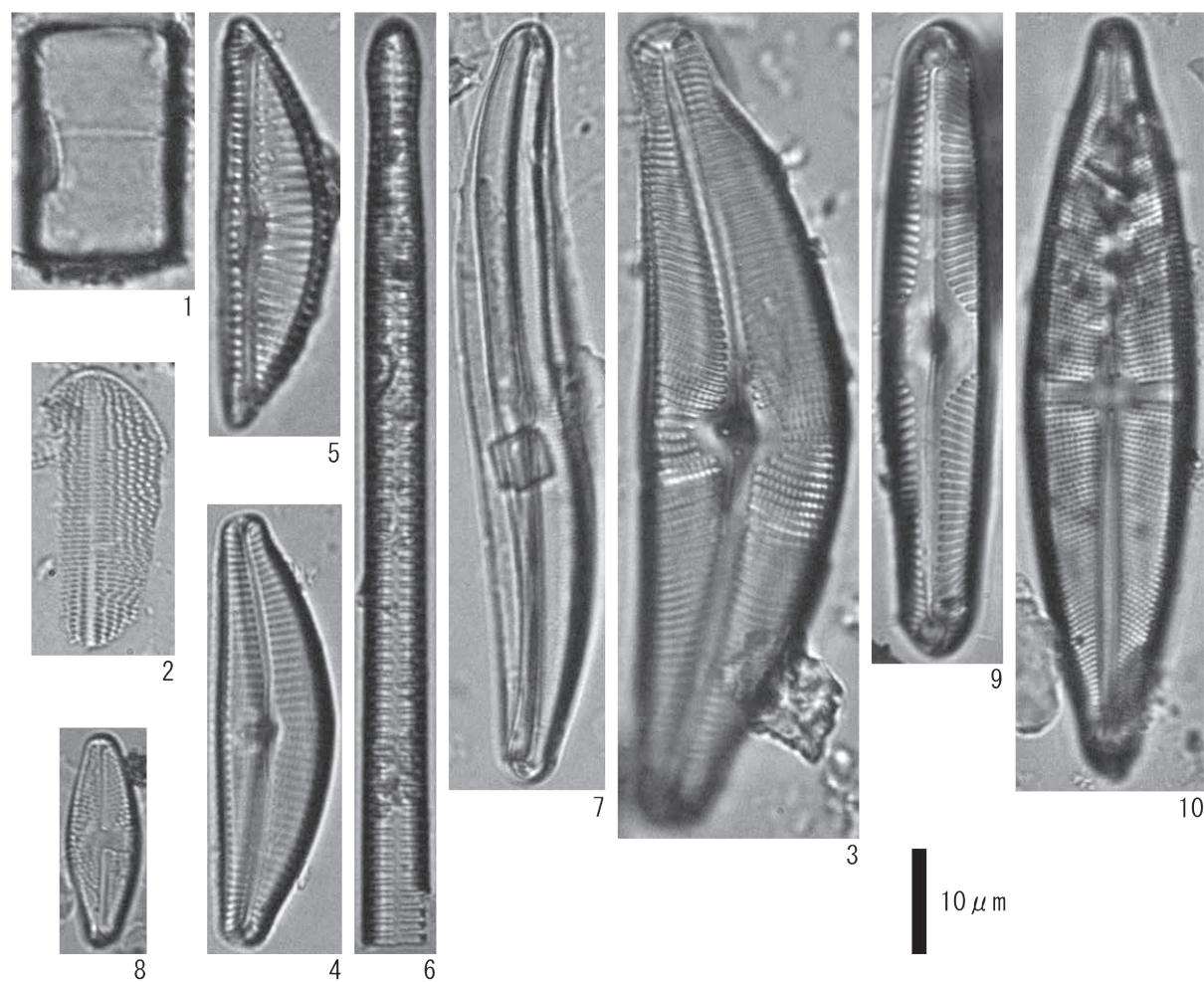
栽培の可能性は、ダイコン属？、シソ属-イヌコウジュ属が確認された。畑作物に由来する場合、周囲で栽培された可能性がある。また、イネの一部とコムギ、ダイコン属？は炭化していることから、火を受けたとみなされる。

栽培植物や栽培の可能性を除いた分類群は、圧倒的な草本主体の組成を示す。当時の調査区近辺は開発の進んだ明るく開けた草地環境で、まとまった林分が存在しなかったと考えられる。草本や車軸藻類は、那須（2014）、那須・百原（2018）などの生育環境を参考にすると、水田（水中）雑草のシャジクソウ科、コナギ近似種、イボクサ、ウキヤガラ？、ヤナギタデ近似種、ボントクタデ近似種、田畑（湿生）共通雑草のイネ科、アゼスゲ類、スゲ属（ナキリスゲ類？）、スゲ属、カヤツリグサ属、ギシギシ属、ミゾソバ、ムラサキケマン型、チドメグサ属、トウバナ属、タカサブロウ、ヤブタビラコ、畑（人里）雑草のエノコログサ属、カナムグラ、カラムシ属、イヌタデ近似種、タデ属、ザクロソウ、ミドリハコベ近似種、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、キジムシロ類、カタバミ属、エノキグサ、ヤブジラミ属、キランソウ属、メハジキ属、ナス属、メナモミ属、アキノノゲシ？、キク科、山野草のミズ属、イラクサ科（サンショウソウ属？）、マルミノヤマゴボウ、ハダカホオズキ属？、イガホオズキ属、ヨメナ属などが確認された。当時の調査区近辺の草地や上述の林縁、水深の浅い水湿地などに生育していたと考えられる。

木本は、針葉樹で常緑高木のモミ属（おそらくモミ）、広葉樹で落葉高木のケヤキ、アカメガシワ、カラスザンショウ、クマノミズキ、落葉高木～低木のクワ属、カジノキ属、常緑小高木～低木のヒサカキ属、常緑低木のフユイチゴ類、常緑または落葉低木のキイチゴ属、落葉低木のノイバラ節、サンショウ、タラノキ、ウコギ節、ニワトコ、スイカズラ属？、落葉籐本のマタタビ近似種、ブドウ属、ノブドウ、ブドウ科などが確認された。当時の旭川流域の河畔や森林の林縁などに生育していたと考えられる。植物利用の可能性は、食用可能なクワ属、カジノキ属、フユイチゴ類、キイチゴ属、ブドウ属、食用や薬用、香辛料等に利用可能なサンショウなどが挙げられる。出土種実に人による明瞭な利用痕跡は確認されないが、当時利用された可能性は考えられる。

引用文献

- 安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
- Asai Kazumi&Watanabe Toshiharu, 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.
- 千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊. 近未来社, 204p.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫, 1996, 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－. 日本文化財科学会, 第13回大会研究発表要旨集, 62.
- 伊東隆夫・山田昌久（編）, 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討 ー陸生珪藻の細分ー. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌, 6, 23-44.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
- 那須浩郎, 2014, 雑草からみた縄文時代晩期から弥生時代移行期におけるイネと雑穀の栽培形態. 国立歴史民俗博物館研究報告, 187, 95-109.
- 那須浩郎・百原 新, 2018, 稲作農耕伝来後の水田雑草フロアの変遷. 雑草学入門, 山口裕文監修, 宮浦理恵・松嶋賢一・下野嘉子編, 講談社, 50-65.



1. *Melosira varians* C. Agardh (北壁 第13層;1)
2. *Cocconeis placentula* var. *lineata* (Ehr.) Cleve (北壁 第13層;1)
3. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck (北壁 第13層;1)
4. *Cymbella turgidula* Grunow (北壁 第13層;1)
5. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D. G. Mann (北壁 第13層;1)
6. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (北壁 第13層;1)
7. *Gyrosigma acuminatum* (Kuetz.) Rabenhorst (北壁 第13層;1)
8. *Luticola mutica* (Kuetz.) D. G. Mann (北壁 第13層;1)
9. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (北壁 第13層;1)
10. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (北壁 第13層;1)

写真5 珪藻化石

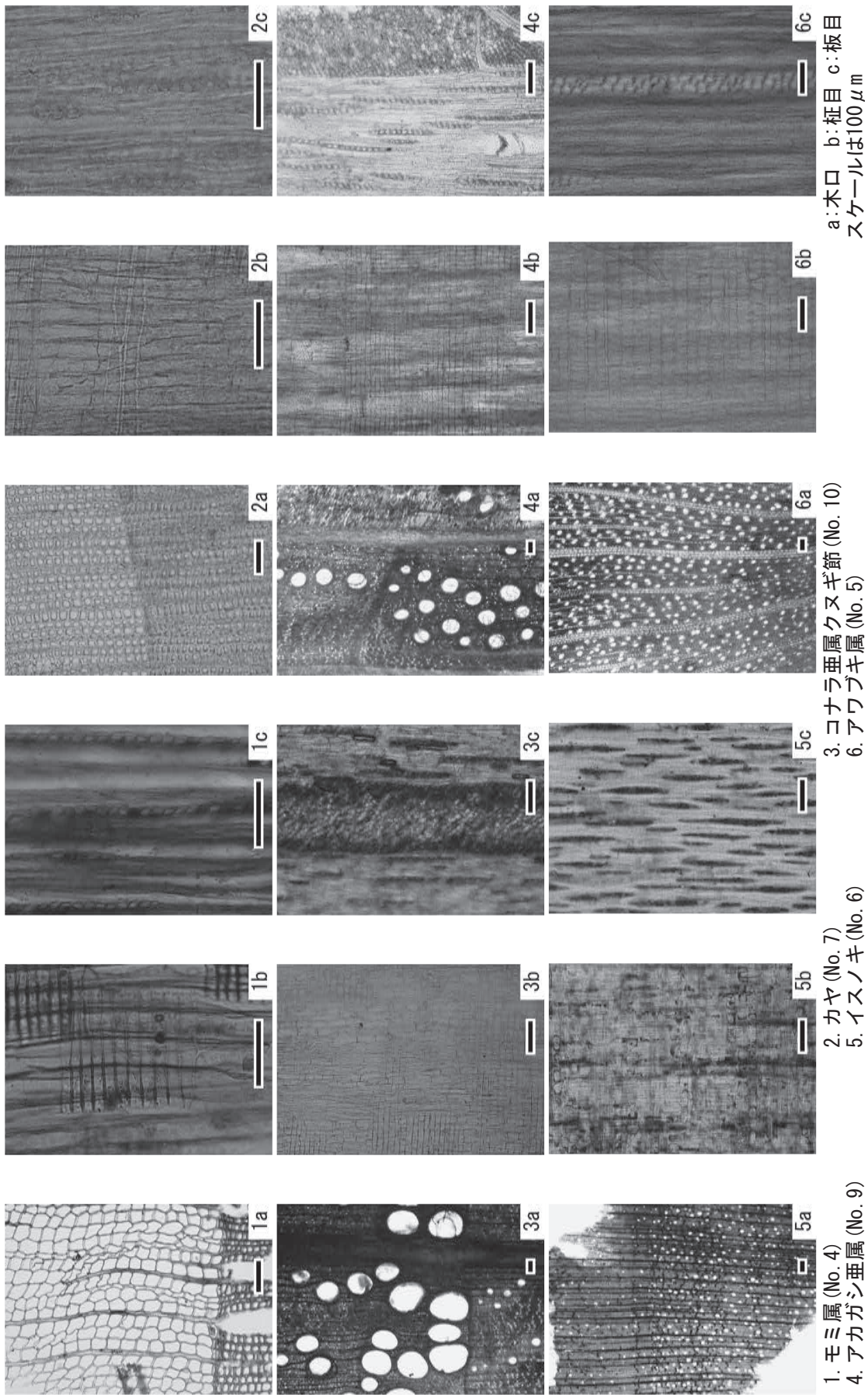
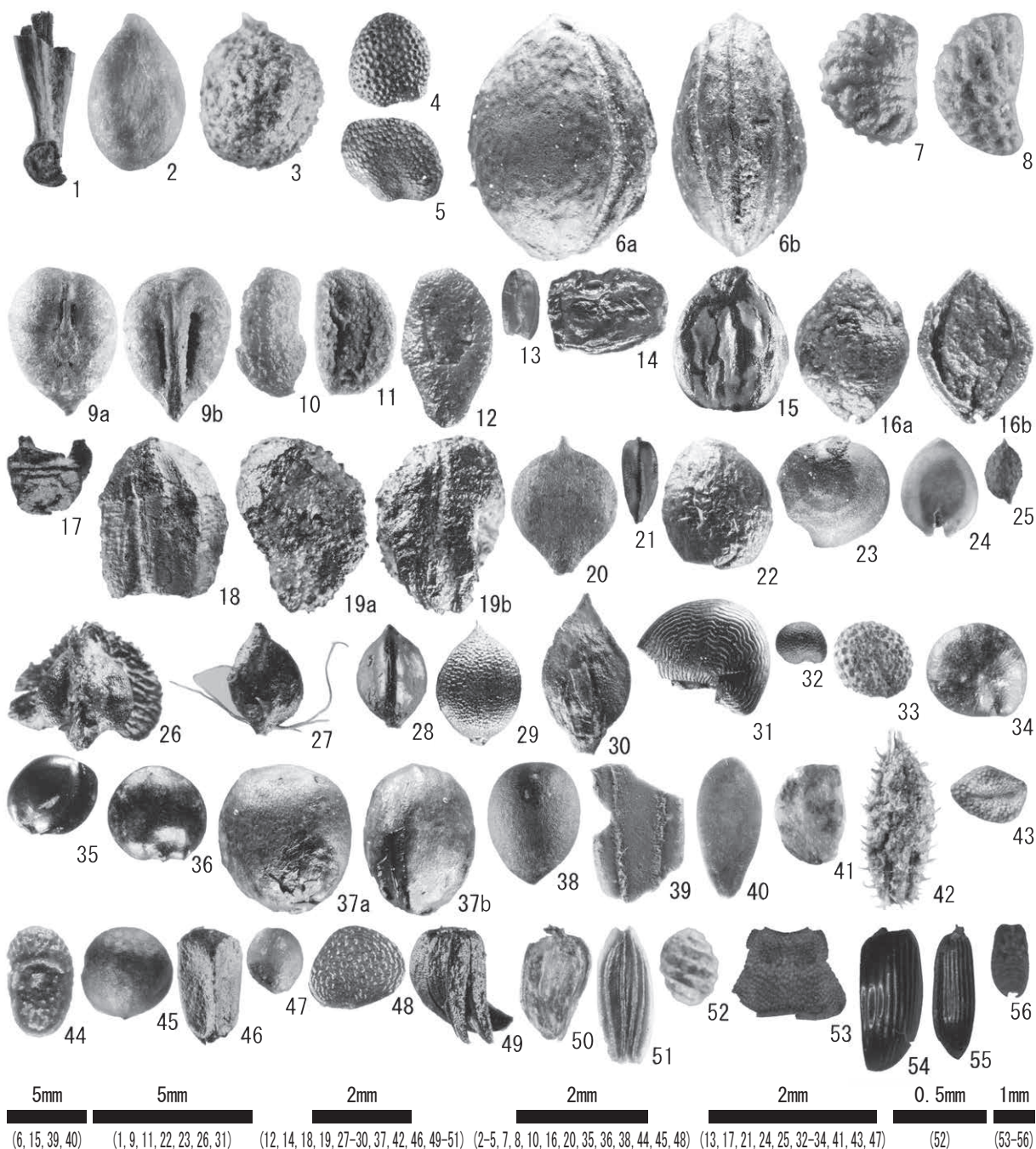


写真6 木材



- (6, 15, 39, 40) (1, 9, 11, 22, 23, 26, 31) (12, 14, 18, 19, 27-30, 37, 42, 46, 49-51) (2-5, 7, 8, 10, 16, 20, 35, 36, 38, 44, 45, 48) (13, 17, 21, 24, 25, 32-34, 41, 43, 47) (52) (53-56)
1. モミ属 葉(基部) (2区 No. 10)
 2. クワ属 核 (2区 No. 10)
 3. カジノキ属 核 (2区 No. 10)
 4. マタビ近似種 種子 (2区 No. 10)
 5. ヒサカキ属 種子 (2区 No. 10)
 6. スモモ 核 (2区 No. 10)
 7. フユイチゴ類 核 (2区 No. 10)
 8. キイチゴ属 核A (2区 No. 10)
 9. ブドウ属 種子 (2区 No. 10)
 10. タラノキ 核 (2区 No. 10)
 11. ウコギ節 核 (2区 No. 10)
 12. ニワトコ 核 (2区 No. 10)
 13. コナギ近似種 種子 (2区 No. 10)
 14. イボクサ 種子 (2区 No. 10)
 15. ハトムギ 苞鞘 (2区 No. 10)
 16. エノコログサ属B 果実 (2区 No. 10)
 17. イネ 籾(基部) (2区 No. 10)
 18. イネ 玄米 (2区 No. 10)
 19. コムギ 穎果 (2区 No. 10)
 20. アゼスゲ類 果実 (2区 No. 10)
 21. カヤツリグサ属 果実 (2区 No. 10)
 22. アサ 果実 (2区 No. 10)
 23. カナムグラ 核 (2区 No. 10)
 24. ミズ属 果実 (2区 No. 10)
 25. イラクサ科(サンショウソウ属?) 果実 (2区 No. 10)
 26. ギンギン属 果実・花被 (2区 No. 10)
 27. サナエタデ近似種 果実 (2区 No. 10)
 28. イヌタデ近似種 果実 (2区 No. 10)
 29. ポントクタデ近似種 果実 (2区 No. 10)
 30. ヤナギタデ近似種 果実 (2区 No. 10)
 31. マルミノヤマゴボウ 種子 (2区 No. 10)
 32. ザクロソウ 種子 (2区 No. 10)
 33. ナデシコ科(ウシハコベ近似種) 種子 (2区 No. 10)
 34. アカザ属 種子 (2区 No. 10)
 35. ヒコ属 種子 (2区 No. 10)
 36. ムラサキケマン型 種子 (2区 No. 10)
 37. ダイコン属? 種子 (2区 No. 10)
 38. エノキグサ 種子 (2区 No. 10)
 39. ヒョウタン類 種子 (2区 No. 10)
 40. モモルディカメロン型 種子 (2区 No. 10)
 41. チドメグサ属 果実 (2区 No. 10)
 42. ヤブジラミ属 果実 (2区 No. 10)
 43. オカトラノオ属 種子 (2区 No. 10)
 44. キランソウ属 果実 (2区 No. 10)
 45. シソ属 - イヌコウジュ属 果実 (2区 No. 10)
 46. メハジキ属 果実 (2区 No. 10)
 47. トウバナ属 果実 (2区 No. 10)
 48. イガホオズキ属 種子 (2区 No. 10)
 49. メナモミ属 果実 (2区 No. 10)
 50. ヨメナ属 果実 (2区 No. 10)
 51. ヤブタバコ 果実 (2区 No. 10)
 52. シャジクソウ科 卵胞子 (2区 No. 10)
 53. ソウムン科 (2区 No. 10)
 54. コガネムシ科 (2区 No. 10)
 55. コウチュウ目 (2区 No. 10)
 56. カメムシ目 (2区 No. 10)

写真7 大型植物遺体・昆虫

第2節 百間川原尾島遺跡出土鉄鉱石の分析

岡山理科大学 白石 純

はじめに

この分析では、百間川原尾島遺跡より出土した鉄鉱石の分析を行い、成分組成から特徴を検討した。また、これまでの調査で出土している古代の鉄鉱石（表9）や、現在までにわかっている鉄鉱石の産出地と比較することで、遺跡出土鉄鉱石の産出地が推定できないか検討した。

分析方法・試料

測定装置、条件、試料は以下の通りである。

測定装置：エネルギー分散型蛍光X線分析計（日本電子JSX-3202EV）を使用。

測定条件：X線照射径7mm、電流50～200mA、電圧50kV/15vK、測定時間200秒、測定室内は真空状態で分析した。

測定元素：表9に示した16元素である。

測定試料：測定は分析した試料表面の形状が平坦で汚れができるだけ少ない部分を選定し、非破壊で分析した。しかし、表面の汚れや形状などで分析値がばらつくことが十分想定されることから測定場所を変えて3回測定し、平均値を算出した。

分析した鉄鉱石は、表9に示した47点で、1～28は遺跡出土。29～47は鉱山出土の鉄鉱石である。

分析結果と考察

これまでの鉄鉱石の分析では大澤正己氏の研究がある。この分析では肉眼観察、顕微鏡観察、ビッカース断面硬度、X線回折、化学組成分析などから検討されている。

今回の分析では、蛍光X線分析法による非破壊分析のため、定量性に欠けるが、分析値より各遺跡や鉱山出土の鉄鉱石の分類を試みた。分類はXY散布図を作成し検討した。比較した成分は、酸化第二鉄（ Fe_2O_3 ）とガラス質成分（ $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ ）で散布図を作成した。

第69図は、各遺跡から出土した鉄鉱石である。この散布図では、各遺跡の鉄鉱石は遺跡ごとに分類できそうである。それは、高品位（鉄成分が高い）から低品位（鉄成分が低い）で分かれる。酸化第二鉄（ Fe_2O_3 ）が約95%～70%の下坂遺跡、百間川原尾島遺跡、白壁奥遺跡、約70%～40%の原尾島遺跡（藤原光町）、約40%～20%の辺谷製鉄遺跡、約15%～8%の津島遺跡となる。

第70図では、現在確認されている鉱山採取の鉄鉱石との比較を行った。比較した鉱山は八代鉱山（総社市八代）、美袋（総社市種井）、三原鉱山（井原市）、占見鉱山（浅口市金光）、柵原鉱山（久米郡美咲町）、山宝鉱山（高梁市川上町）、本郷鉱山（新見市哲多町）の7つの鉱山である。

散布図より、鉱山採取の鉄鉱石には、当然のことながら鉄成分が多いものがある。それは山室、本郷、三原、美袋、占見の各鉱山は酸化第二鉄が約98%～75%で八代が約42%であった。また、遺跡出土の鉄鉱石との比較では、下坂遺跡、百間川原尾島遺跡、白壁奥遺跡が山室、本郷、三原、美袋、占

表9 岡山県内遺跡出土鉄鉱石、鉱山採取鉄鉱石の分析 (%)

試料番号	遺跡名	出土地点(報告書図番号)	SiO2	TiO2	Al2O3	Fe2O3	MnO	MgO	CaO	Na2O	K2O	P2O5	V2O5	CuO	Rb2O	SiO	Y2O3	ZrO2	ガラス質成分	
1	百間川原尾島遺跡	溝7鉄鉱石2-1	6.80	0.50	3.12	85.95	1.58	0.35	0.82	0.13	0.20	0.22	0.1645	0.0024	0.0893	0.0300	0.0000	0.0406	11.43	
2	百間川原尾島遺跡	1区No.7清西側北層	18.14	0.22	5.29	70.54	1.56	1.18	2.19	0.00	0.46	0.26	0.0635	0.0000	0.0591	0.0198	0.0000	0.0261	27.26	
3	原尾島遺跡(藤原光町3丁目)	第66図9	20.22	0.06	4.58	67.53	0.71	0.47	5.61	0.07	0.32	0.30	0.0133	0.0027	0.0498	0.0549	0.0007	0.0013	31.29	
4	原尾島遺跡(藤原光町3丁目)	第66図11	29.40	0.16	5.46	52.45	1.61	0.74	9.31	0.03	0.51	0.25	0.0143	0.0036	0.0271	0.0243	0.0005	0.0149	45.45	
5	原尾島遺跡(藤原光町3丁目)	第66図12	30.93	0.34	9.05	39.28	2.03	1.14	16.31	0.06	0.58	0.20	0.0305	0.0000	0.0229	0.0224	0.0013	0.0240	58.06	
6	原尾島遺跡(藤原光町3丁目)	第66図16	18.63	0.23	5.96	65.04	1.32	0.49	3.31	0.29	0.74	3.86	0.0072	0.0196	0.0517	0.0407	0.0004	0.0004	29.42	
7	原尾島遺跡(藤原光町3丁目)	22	24.63	0.27	7.80	58.75	1.45	0.59	3.65	0.53	0.79	1.44	0.0105	0.0000	0.0466	0.0325	0.0093	0.0132	37.98	
8	原尾島遺跡(藤原光町3丁目)	30	26.36	0.20	5.95	53.74	1.43	1.23	9.14	0.11	0.72	1.01	0.0249	0.0033	0.0316	0.0439	0.0001	0.0202	43.50	
9	津島遺跡	S区住居群(西)	鉄鉱石?1	72.89	0.52	7.07	15.23	0.85	1.87	0.67	0.00	0.53	0.29	0.0308	0.0032	0.0138	0.0042	0.0050	0.0239	83.04
10	津島遺跡	N区第I面	鉄鉱石?3	84.98	0.10	4.80	8.33	0.52	0.15	0.30	0.00	0.51	0.28	0.0000	0.0012	0.0070	0.0007	0.0091	90.75	
11	津島遺跡	N区第II面上層(北部)	鉄鉱石?4	88.25	0.10	3.04	7.40	0.45	0.06	0.25	0.00	0.19	0.21	0.0198	0.0061	0.0012	0.0020	0.0007	91.79	
12	津島遺跡	N区第II面上層(北部)	鉄鉱石?5	81.06	0.23	2.70	13.45	0.81	0.47	0.38	0.00	0.51	0.27	0.0686	0.0070	0.0103	0.0104	0.0077	85.12	
13	津島遺跡	N区第II面上層(北部)	鉄鉱石?5	84.28	0.41	4.85	8.44	0.60	0.74	0.31	0.00	0.12	0.21	0.0000	0.0031	0.0062	0.0025	0.0069	90.30	
14	津島遺跡	S区南東第II面	鉄鉱石?6	80.17	0.37	4.92	11.18	1.08	0.33	0.27	0.10	1.51	0.00	0.0156	0.0215	0.0185	0.0148	0.0099	87.29	
15	白壁奥遺跡	第9図M1	鉄鉱石	14.28	0.33	5.98	72.90	5.01	0.13	0.44	0.13	0.28	0.20	0.1467	0.0220	0.0724	0.0252	0.0055	0.0507	21.24
16	白壁奥遺跡	第9図M3	鉄鉱石	10.92	0.21	5.99	79.32	1.81	0.53	0.13	0.15	0.37	0.16	0.1997	0.0000	0.0815	0.0265	0.0000	0.1008	18.09
17	白壁奥遺跡	第9図M5	鉄鉱石	26.62	0.67	11.47	56.68	1.97	0.23	0.67	0.23	1.20	0.10	0.0181	0.0068	0.0488	0.0288	0.0002	0.0471	40.42
18	辺谷製鉄遺跡	第21図S10	鉄鉱石	26.67	0.75	10.54	49.07	1.40	0.00	10.32	0.28	0.75	0.08	0.0716	0.0006	0.0230	0.0112	0.0062	0.0146	48.57
19	辺谷製鉄遺跡	第21図S18	鉄鉱石	35.47	1.38	13.51	21.89	17.14	0.11	8.29	0.07	1.72	0.19	0.0261	0.0596	0.0248	0.0512	0.0063	0.0575	59.17
20	辺谷製鉄遺跡	第21図S19	鉄鉱石	31.62	0.54	10.93	32.50	14.74	0.02	7.77	0.21	1.45	0.16	0.0020	0.0050	0.0213	0.0156	0.0022	0.0144	52.00
21	辺谷製鉄遺跡	第21図S20	鉄鉱石	27.50	0.39	12.30	42.87	12.66	0.00	1.83	0.44	1.59	0.30	0.0075	0.0148	0.0398	0.0205	0.0005	0.0282	43.67
22	辺谷製鉄遺跡	第21図S25	鉄鉱石	28.92	2.26	12.20	39.42	1.40	0.95	12.70	0.35	1.45	0.15	0.0789	0.0016	0.0163	0.0193	0.0097	0.0689	56.58
23	下坂遺跡	第197図S4	鉄鉱石	9.35	0.03	2.91	86.81	0.00	0.08	0.13	0.11	0.15	0.18	0.0048	0.1125	0.1017	0.0339	0.0000	0.0004	12.73
24	下坂遺跡	第197図S6	鉄鉱石	7.47	0.09	2.55	89.17	0.02	0.10	0.18	0.08	0.09	0.11	0.0168	0.0292	0.0646	0.0260	0.0000	0.0009	10.47
25	下坂遺跡	第197図S8	鉄鉱石	2.44	0.01	0.70	95.99	0.00	0.02	0.16	0.16	0.22	0.15	0.0191	0.0173	0.0724	0.0264	0.0000	0.0006	3.70
26	下坂遺跡	第197図S12	鉄鉱石	15.04	0.11	8.22	75.90	0.00	0.02	0.13	0.19	0.23	0.07	0.0115	0.0070	0.0407	0.0194	0.0000	0.0025	23.83
27	下坂遺跡	第197図S13	鉄鉱石	3.64	0.04	1.82	94.03	0.02	0.00	0.13	0.00	0.06	0.11	0.0199	0.0376	0.0760	0.0240	0.0000	0.0000	5.65
28	下坂遺跡	第197図S22	鉄鉱石	5.53	0.06	3.18	90.77	0.00	0.00	0.09	0.00	0.12	0.09	0.0480	0.0051	0.0887	0.0222	0.0000	0.0000	8.92
29	柵原1	久米郡美咲町	鉄鉱石	3.93	0.00	1.43	88.00	0.18	0.41	5.28	0.39	0.09	0.11	0.0295	0.0421	0.0663	0.047	0.0000	0.0007	11.52
30	柵原2	久米郡美咲町	鉄鉱石	4.91	0.00	1.86	91.44	0.14	0.33	0.97	0.05	0.08	0.04	0.0272	0.0354	0.0779	0.0272	0.0000	0.0000	8.21
31	柵原3	久米郡美咲町	鉄鉱石	6.36	0.00	2.51	89.23	0.08	0.23	0.93	0.28	0.16	0.08	0.0042	0.0302	0.0769	0.0273	0.0000	0.0000	10.47
32	三原鉱山1	井原市	鉄鉱石	7.61	0.00	0.41	88.31	0.23	0.18	2.87	0.19	0.04	0.01	0.0514	0.0046	0.0616	0.0225	0.0000	0.0000	11.31
33	三原鉱山2	井原市	鉄鉱石	9.35	0.00	0.35	85.67	0.48	0.28	3.64	0.00	0.11	0.00	0.009	0.0194	0.0634	0.0201	0.0000	0.0000	13.74
34	三原鉱山3	井原市	鉄鉱石	8.58	0.01	0.81	85.74	1.02	0.62	2.30	0.47	0.17	0.06	0.0102	0.1297	0.0522	0.0241	0.0000	0.0000	12.95
35	山室1	高梁市川上町	鉄鉱石	1.50	0.01	0.16	96.68	0.07	0.15	0.99	0.40	0.00	0.00	0.0052	0.0000	0.0000	0.0234	0.0001	0.0000	3.20
36	山室2	高梁市川上町	鉄鉱石	0.73	0.00	0.13	97.59	0.23	0.01	0.67	0.24	0.25	0.00	0.0758	0.0415	0.0000	0.0257	0.0000	0.0000	2.03
37	山室3	高梁市川上町	鉄鉱石	3.83	0.01	0.80	90.37	0.29	0.47	3.79	0.00	0.19	0.04	0.0141	0.0095	0.1669	0.0259	0.0000	0.0000	9.08
38	占見1	浅口市金光占見	鉄鉱石	11.32	0.16	5.34	79.58	0.27	0.00	1.00	1.75	0.32	0.01	0.0465	0.0167	0.0525	0.0592	0.0000	0.0837	19.72
39	占見2	浅口市金光占見	鉄鉱石	13.00	0.14	6.19	77.17	0.34	0.00	0.83	1.87	0.25	0.02	0.0338	0.0109	0.0508	0.0651	0.0000	0.0284	22.14
40	占見3	浅口市金光占見	鉄鉱石	18.62	0.28	3.78	74.68	0.17	0.00	0.61	1.48	0.16	0.04	0.0176	0.0006	0.0495	0.0611	0.0000	0.0428	24.65
41	八代	総社市八代	鉄鉱石	36.41	0.16	9.58	42.50	5.26	0.02	1.28	3.53	0.96	0.13	0.0475	0.0000	0.0408	0.0444	0.009	0.0151	51.79
42	美袋1	総社市種井	鉄鉱石	11.54	0.02	1.70	79.47	0.00	2.79	3.71	0.00	0.24	0.06	0.0139	0.3687	0.0595	0.029	0.0000	0.0000	19.98
43	美袋2	総社市種井	鉄鉱石	9.15	0.00	2.00	84.97	0.00	1.96	1.22	0.00	0.21	0.08	0.0098	0.3063	0.0884	0.0264	0.0000	0.0008	14.54
44	本郷1	新見市哲多町本郷	鉄鉱石	0.13	0.00	0.10	95.19	1.84	0.34	0.49	0.24	0.29	0.09	0.0146	1.1683	0.0843	0.024	0.0000	0.0025	1.59
45	本郷2	新見市哲多町本郷	鉄鉱石	1.39	0.00	0.10	94.81	1.61	0.22	1.13	0.28	0.01	0.08	0.0675	0.2058	0.0895	0.0177	0.0000	0.0004	3.13
46	本郷3	新見市哲多町本郷	鉄鉱石	3.60	0.00	0.08	88.29	1.00	0.32	3.66	0.13	1.36	0.07	0.0000	1.4003	0.0589	0.0288	0.0000	0.0026	9.15
47	本郷4	新見市哲多町本郷	鉄鉱石	18.29	0.03	2.94	28.97	0.70	2.83	45.02	0.00	0.47	0.00	0.0465	0.6141	0.0002	0.0808	0.003	0.0047	69.54

見の鉱山と類似し、辺谷製鉄遺跡と原尾島遺跡（藤原光町）の一部が八代と類似した。

次に鉄鉱石の中に入っている鉱石鉱物の特徴をみるために第71図のようにCaOとMnOの成分で鉄鉱石に違いがみられないか検討した。なお、CaO成分は鉱石鉱物のザクロ石に、MnO成分は鉄マンガンに多く含まれる成分である。

その結果、第71図のCaO－MnOの散布図より辺谷製鉄遺跡がMnO成分の違いで二つに分類でき、そのうちのMnO成分が少ないものと原尾島が同じ領域に分布した。

以上、鉄鉱石の成分分析から、各鉄鉱石に特徴があるかどうか検討した。まず、鉄成分から比較したが、鉄の量の違いで分類が可能であった。しかし、鉄の量のみで鉄鉱石の違いや産地を推定することは難しいこともわかった。また、鉄鉱石を構成する鉱石鉱物の違いから鉄鉱石の産地を推定を試みたが、ザクロ石や鉄マンガンなどが含まれていることは推定されたが、産地推定までには至らなかった。

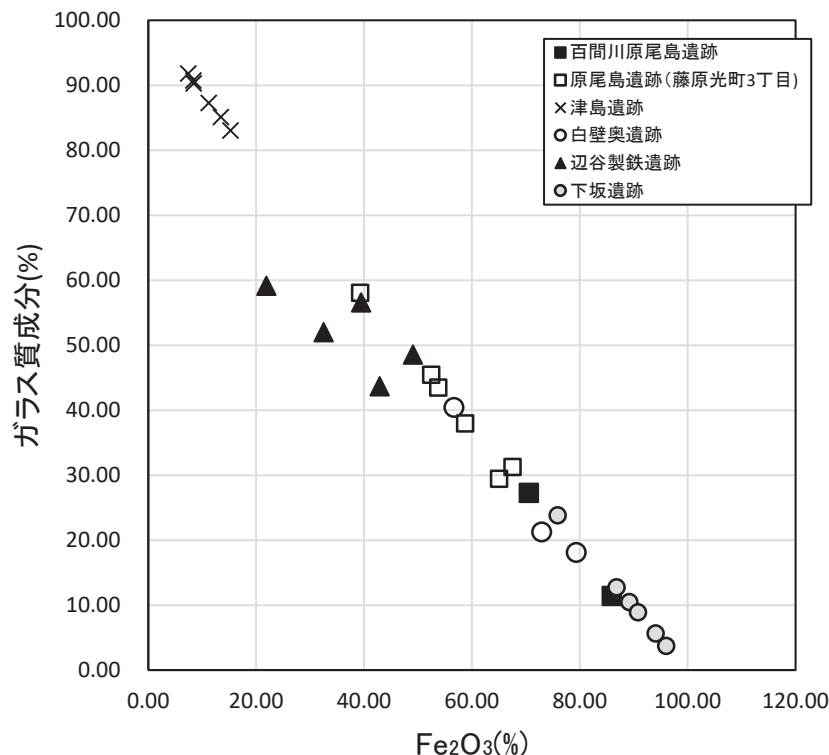
このように、鉄鉱石の表面分析では、大まかな特徴しか推定できなかった。今後、鉄鉱石の産地推定を行うには肉眼観察、顕微鏡観察、化学組成分析（蛍光X線分析、X線回折）など複数の分析を実施するとともに、遺跡出土鉄鉱石の分析試料を増やして検討する必要がある。

引用・参考文献

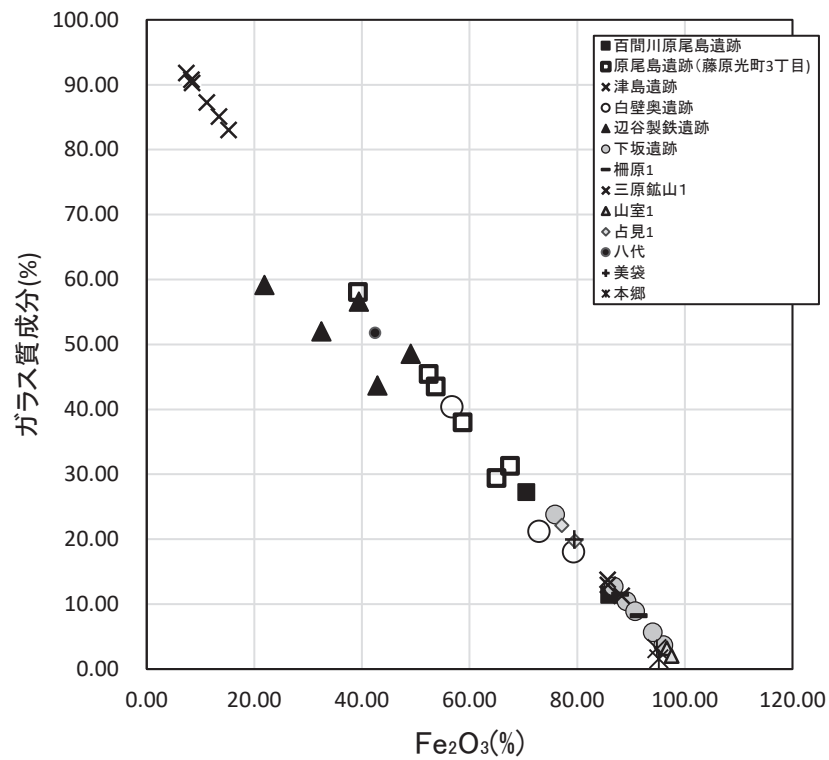
大澤正己 1999「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書139 岡山県教育委員会

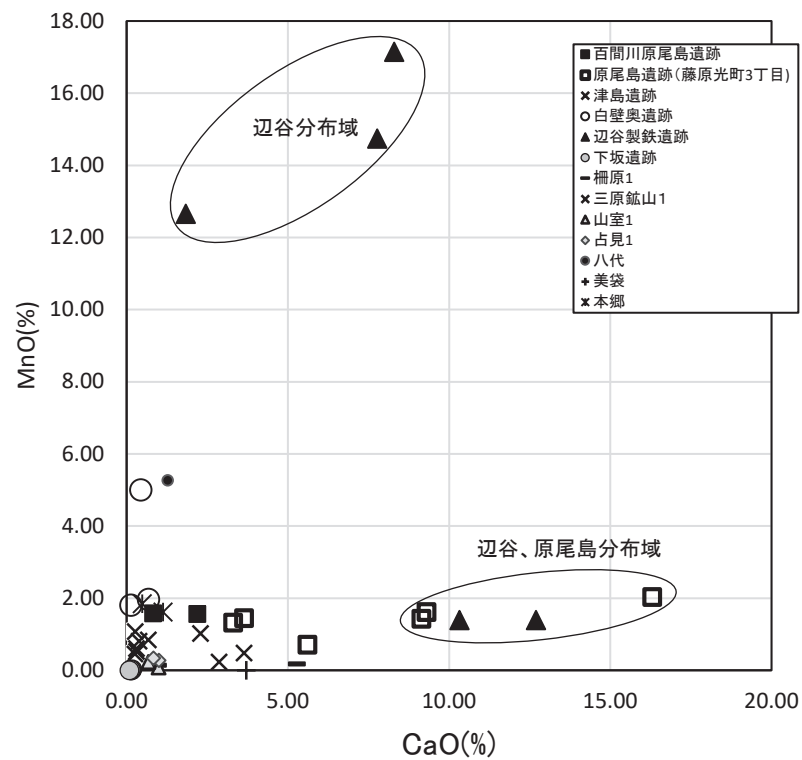
妹尾 護 1999「原尾島遺跡出土の鉱石、石材についての分析」『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書139 岡山県教育委員会



第69図 各遺跡出土鉄鉱石の比較



第70図 遺跡と鉱山山地出土鉄鉱石の比較



第71図 遺跡と鉱山山地出土鉄鉱石の比較

第5章 総括

第1節 発掘調査の成果

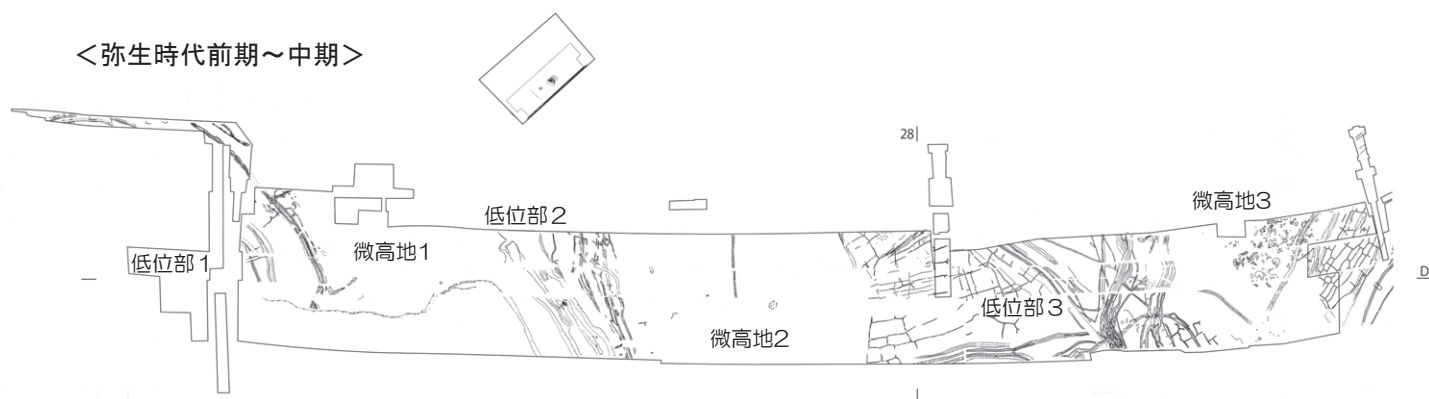
今回の発掘調査で見つかった主な遺構は、弥生時代中期の土坑1基、柱穴列3列、溝1条、後期の溝11条、古墳時代前期の土坑1基、後期の竪穴住居1軒、溝11条、中世以降の掘立柱建物3棟、土坑1基である。ここでは、これまでの河川敷内での発掘調査成果と照らし合わせながら、本調査地点における調査成果を顧みていきたい。

第72図は主な遺構の検出状況を時期別に示したものである。河川敷内の調査成果については既刊報告書に詳しくまとめられており、⁽¹⁾それらを参照しながら概要をみていくこととする。なお、弥生時代の百間川原尾島遺跡は大きく3つの微高地と3つの低位部に分かれており、それらを西から微高地1、2、3、低位部1、2、3とし、弥生時代後期末の洪水砂で埋没した水田も西から水田1、2、3とする。また、既刊報告書内の遺構は『報告書番号－遺構番号』で表記していく。

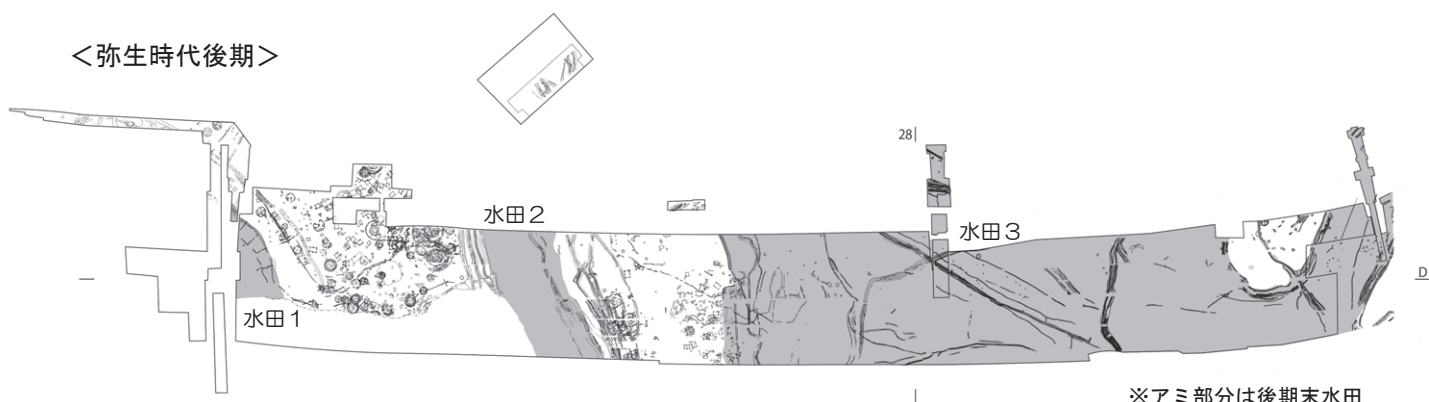
百間川原尾島集落の初現は縄文時代晩期中葉に遡る。しかし集落が活性化するのは弥生時代前期後半以降である。微高地1・2では竪穴住居や土坑が散見され、微高地縁辺には溝が掘削される。微高地3では前期後半～中期初頭の墓や貯蔵穴と思われる土坑が多数見つかっている。中期までには旧河道や低位部で水田が拓かれているが、中期前半の遺構は溝のほかなく、中期後半には明確な遺構は皆無となる。集落が再び盛行するのは後期に入ってからで、特に後期後半段階における微高地1での集住は著しい。標高も3.8mと最も高く、遺跡内で最も安定した居住域を形成している。微高地2は標高も2.5～3.4mで、微高地1と比べて遺構密度は低く、相対的に基盤の低い東半は後期までには水田域となる。微高地3の標高は3m前後とさらに低く、百・後・Ⅱに一時的に竪穴住居が建てられるが、集落から離れた地点と考えられている。古墳時代には全域が平地化され、古墳時代初頭には微高地上に竪穴住居が分布するが、引き続き集落の中心となるのは微高地1である。特に5世紀後半～6世紀初頭での集住が著しいが、6世紀中葉～後葉では竪穴住居が減少する。微高地2・3は前期後半～中期にかけて遺構がほとんど見られない状況であるが、6世紀後半から7世紀にかけて活性化し、大規模な溝が掘削され、微高地2にも竪穴住居が建てられる。古代の明確な遺構は、微高地2の溝1条のみであるが、律令的祭祀遺物が出土しており、⁽²⁾臨時の祓所が設けられた可能性が指摘されている。中世になると微高地1を中心に「原尾島中世村落」が成立し、⁽³⁾条里地割と一致する溝や屋敷地も確認されている。一方、微高地2以東は地割と一致する溝を除くと目立った遺構もなく、主に耕作地として利用されていたようである。このような河川敷内の検出状況や溝の流走方向、基盤の標高などから、本調査地は微高地2と同一の微高地上に立地すると考えられる。

本調査地で出土した最も古い土器は突帯文期の76～78である。微高地2では縄文時代晩期の土坑が散見されるが、本調査地では遺構は確認していない。76～78は弥生時代以降の溝から出土したが、いずれの溝も基盤Ⅲまで掘削が及ぶ深い溝であり、溝開削時に基盤Ⅲから混入した可能性が高い。雄町遺跡では微高地堆積の最終時期と考えられる堆積層から縄文晩期の土器が出土しており、⁽⁴⁾本調査地に

<弥生時代前期～中期>

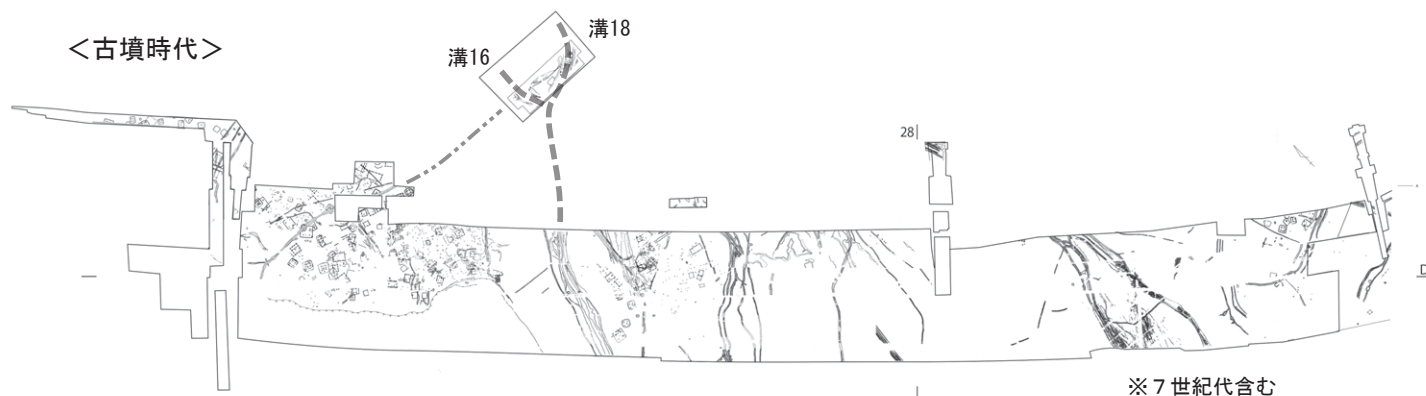


<弥生時代後期>



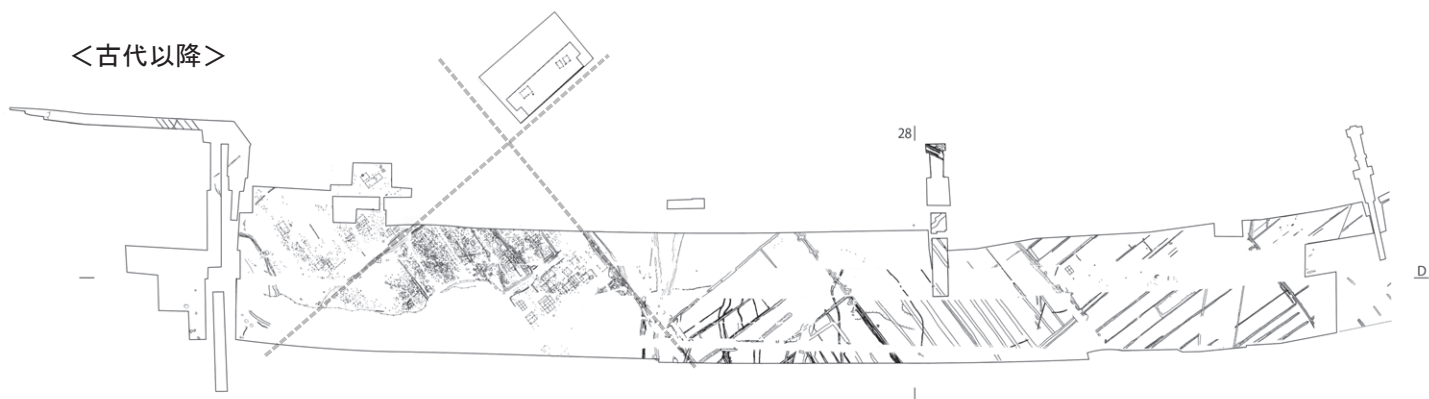
※アミ部分は後期末水田

<古墳時代>



※7世紀代含む

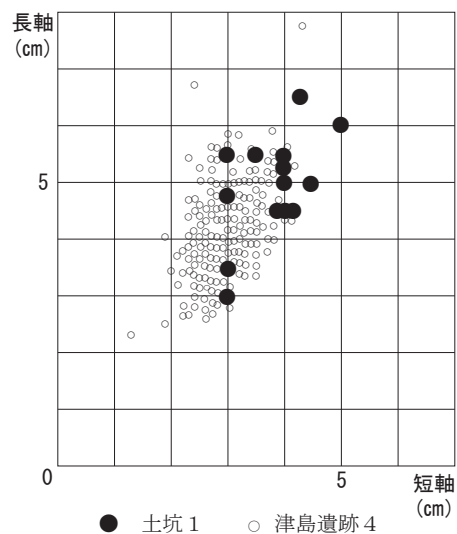
<古代以降>



第72図 百間川原尾島遺跡主要遺構配置図 (1/5,000)

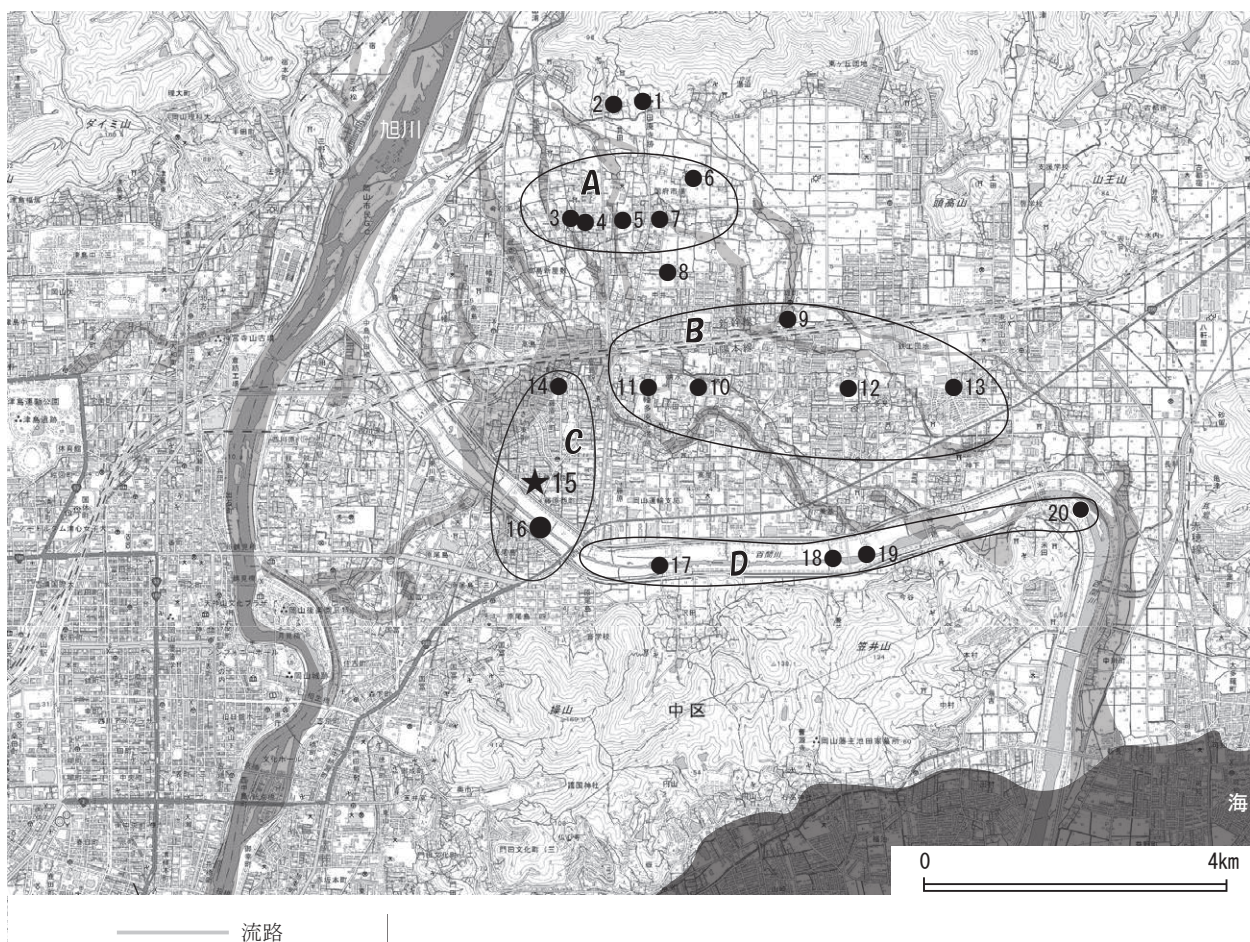
においても基盤Ⅲが同じ頃に形成された可能性を示唆している。

遺構では弥生時代中期前葉新段階（百・中・Ⅰ）の土坑3が最も古く位置づけられ、中期中葉（百・中・Ⅱ）の柱穴列1～3及び溝6が続く。いずれも基盤Ⅲ上面から掘り込まれた遺構である。溝は流走方向から微高地2西側縁を流れる百・中・Ⅰ～Ⅱの溝群のうちの一つと考えられる。微高地2では溝のほかに目立つ遺構はなく、集落の状況が判然としていなかったが、今回の調査で僅かではあるが居住の痕跡を見出すことができた。また、注目すべき遺物として土坑3内から出土した円礫があげられる。長径3～6.5cmの楕円を呈する自然礫で、このような円礫は百間川原尾島遺跡の他の調査地点や津島遺跡などでも出土しており、投弾として耕作物を荒らす鳥獣対策に使用されたと考えられている。⁽⁵⁾津島遺跡との大きさの比較を行ったところ（第73図）、領域はおおむね合致しており、時期差はあるものの、同様の性格を有していたと想定できる。今回の調査で水田は見つかっていないが、水田経営に携わる集団が居住していた可能性が考えられる。しかし、その後、後期前半（百・後・Ⅱ）の溝5まで遺構はなく、百・中・Ⅲ～百・後・Ⅰは空白期となる。河川敷内でも百・中・Ⅲの遺構はほとんどみられず、微高地1では皆無である。また、微高地2と微高地3の間の旧河道や溝も百・中・Ⅲには埋没し、水田上面で百・中・Ⅲの洪水堆積物が確認されたことから、水田経営も中断していた可能性が指摘されている。⁽⁶⁾ここで旭東平野内のほかの遺跡の動向に目を向けてみたい。第74図は旭東平野内で現地形に残された痕跡やこれまでの発掘調査成果から復元された旭川の旧流路と主な遺跡の位置である。旭東平野を形成した旧流路は、半田山と龍ノ口山の間から平野部に出た後、国府市場を通過して操山山塊の東へ抜ける南東方向の流路と、幡多廃寺北方から操山山塊の西へ抜ける南西方向の流路に分かれている。弥生時代から古墳時代の集落遺跡はこれら流路に沿って形成された自然堤防上に立地しており、流路との関係から、平野部への吐出口近くのA、南東流路沿いのB、南東流路と南西流路に挟まれたC、南東流路南の操山山裾に近いDの4つに分けることができ、百間川原尾島遺跡はCに含まれる。表10は主な遺構の検出数を基に作成した表で、調査規模の差によって遺構数は左右されるが、おおむね遺跡の消長を反映していると考えている。第74図と表10からこれら4地域の中期段階の動向をみると、A地域で遺構が認められるのは弥生時代後期以降である。天神河原遺跡の微高地基盤は砂礫層で、微高地斜面から中期末の土器が出土することから、少なくとも中期後半では土砂の流入が著しく、安定した微高地が形成されていなかったと考えられる。B地域では中期中葉に赤田東遺跡や乙多見遺跡、中期後葉に赤田西遺跡が出現し、前段階から出現していた雄町遺跡では中期後葉～後期前葉にかけて遺構数の増加が認められる。D地域でも中期中葉に百間川今谷遺跡が出現し、中期後葉には百間川兼基遺跡の集住度が高まっている。このようにC地域の百間川原尾島遺跡では中期後葉に集落の姿が消える一方、B・D地域では逆に活性化する状況が認められる。草原孝典氏は、集落の主体が一微高地群内で移動すると推測しているが、⁽⁷⁾百間川原尾島遺跡の場合、微高地を超えて集落が移動したと考えた方が良さそうである。旭川西岸平野の弥生時代前～中期集落を分析した野崎貴博氏は、洪水が頻発した弥生時代前～



第73図 土坑1出土円礫の大きさ

中期に集落の移動現象が認められることを指摘している⁽⁸⁾。本調査地でも中期前半の遺構面と後期後半以降の遺構面の間には厚く土砂が堆積し、低位部2の下部にある旧河道では前期堆積層の上部に中期土器を含む洪水砂が堆積して中期末に埋没していることから、中期後半段階に大規模な洪水が起きていたことは想像に難くない。近年の研究では中期後半に降水量が増大したことが明らかとなっており、⁽⁹⁾降水量の増大は河川の氾濫に繋がるが、複数の流路が入り乱れる旭東平野ではどの流路が氾濫するかによって影響を受ける場所や大きさに違いがあることは当然で、中期後葉は、本調査地周辺は土砂が急速に堆積する不安定な環境に陥っていたと思われる。時期は降るが7世紀代の溝18には旭川が決壊した際に堆積した堤防決壊堆積物が堆積しており、旭川本流からの土砂が流れ込みやすい地域であったとみられる。一方、B・D地域では流量が少なかった、あるいはそれまでに安定的な微高地が形成されて影響が少なかったと想定される。さて、溝の方向に注目すると、中期～後期前半以前の溝4～6と後期後半以降の溝1～3・7～12では流走方向が異なっている。微高地2では前者と同時期の溝は確認されていないが、後者は水田2と微高地2の間を流れる、水田経営に関わる水路とされる6―溝48～55に繋がると考えられる。百・後・Ⅱ段階には大規模な造田活動が行われるなど集落構造の大きな変化が認められており、溝の方向の変化もその一端と捉えられよう。また、溝3は洪水砂で上面が覆われているが、溝7や溝9～11は最下層に洪水砂が堆積しており、前者は洪水の前段階まで



※流路の復元は、治水地形分類図（出典：国土地理院ウェブサイト）を基に作成した

第74図 百間川原尾島遺跡周辺における主な遺跡（1/10,000）

に埋没し、後者は洪水後も機能し続けたと推察できるが、両者間にも流走方向や規模に違いが認められる。また、溝9～11は北西から南東に細長く延びる微高地に対して斜行しており、微高地2の北限を示す可能性もある。

古墳時代には広く平地化され、居住可能域が広がると想定されるが、前期では微高地東半で土坑2を検出し、西端で百・古・Ⅱに位置づけられる204を含む西への下がりを確認したにすぎない。明確な居住の痕跡が確認できるのは後期になってからで、6世紀中葉に竪穴住居1が営まれる。弥生時代に引き続き集落の中心となる微高地1において6世紀半ばに竪穴住居が減少するにもかかわらず、微高地2に布掘りで特殊な構造を有する5－建12・6－建4と軌をいつにして出現することは注視される。しかし6世紀後半以降の遺構は溝しかなく、居住域としては放棄されたように見受けられる。ここで注目されるのは溝16及び溝18である。両者ともに幅5m以上、深さ1m以上の比較的大規模な溝で、溝16からは斧柄などの木器や有孔円板、白玉など、遺物が比較的豊富に出土した。また、ダイコン属?の種子が出土したことも特筆される(第4章第1節)。ダイコンは地中海沿岸が原産地の渡来種で、文献では『古事記』に「淤富泥(オホネ)」と記されているのが初出であるが、考古資料から存在を裏付けることは難しく、このダイコン属?がダイコンと確定できたわけではないが、古墳時代に遡る貴重な事例となる⁽¹²⁾。

また両溝からは鉄滓や鉄鉱石などの製鉄関連遺物が出土しており、近くで製鉄や鍛冶が行われていたと推察できる。溝18では堰とみられる構造物も検出している。溝18と左岸(東)側に併走する溝19は溝21～23によって繋がっており、溝18を堰止めて水嵩を上下し、溝21～23をバイパスとして溝19と水量調節を図ったとみている。溝19・20は微高地2上を斜行する6－溝81～83に繋がると考えられ、微高地内部への給配水を担っていたと想定される。溝18と溝22の接続部分には完形の須恵器杯蓋145が置かれ、堰の前面(木a南側)ではウシの骨も出土している。何らかの祭祀がここで執り行われた

表10 旭川東岸地域における主な遺跡の動向

遺跡番号	遺跡名	弥生前期以前	弥生中期			弥生後期			古墳前期		古墳中期	古墳後期		特記事項
			前	中	後	前	中	後	前半	後半		前半	後半	
1	賞田廃寺													白鳳期創建
3	天神河原遺跡				×								●	国府関連か
4	南国長遺跡					?		●						国府推定地
5	南古市場遺跡								○					
6	北口遺跡	×			×				○		△		○	鉄鉱石出土、7C土師器窯
7	西口遺跡											△	△	古代末水田化
8	中井・南三反田遺跡				△	●					古墳群			平安水田
9	雄町遺跡	●	○	◎	◎	◎	○	○	◎	△				弥生中期前葉墓域
10	赤田東遺跡			○	○	◎					○		★	製鉄関連、馬
11	赤田西遺跡				◎		○	◎		○	○	○	△	幡多廃寺含む
12	乙多見遺跡			○			×							
13	東岡山遺跡	●							○	●	●	△	△	
14	原尾島遺跡	△						△	●		◎	○	○	
15	本調査地		●	●			△	△	●		×	○	△	
16	百間川原尾島遺跡	◎	●	○		★	★	★	★	◎	★	○	★	
17	百間川沢田遺跡	◎	●	●	●		△	●	★	○				弥生前期環濠集落
18	百間川兼基遺跡		○	◎	◎	●	◎	◎	○	●	★			5C代倉庫群か
19	百間川今谷遺跡			★	○		○	○	○	◎				弥生中期建物群
20	百間川米田遺跡	△		●	△		△	◎	○				○	

★住居・建物10以上 ◎住居・建物5～9 ○住居・建物1～4 ●井戸・土坑等 △溝・水田等 ×土器出土

と察せられる。

本調査地の溝と河川敷内の溝との関係を整理すると、東西方向の溝13・14は、微高地1を東西方向に貫流する2条の溝のうち、5世紀末～6世紀初頭の3－溝47・7－溝32と繋がる可能性が高い。溝13・14からは時期を示す土器が出土していないが、溝の切り合いから溝16より古く位置づけられ矛盾はない。南北方向の溝16・18と規模の見合う南北方向の溝は微高地2西縁辺を流走する2－溝73・5－溝29・6－溝80しかない。この溝の中心時期は6世紀前半であるが、百・古・Ⅱに開削され、流路を踏襲あるいは拡大しながら7世紀まで機能していたと考えられている。出土遺物には滑石製の玉類や農耕具や建築部材含む木製品、窯壁や鉄滓、羽口などの製鉄関連遺物、ウシ・ウマなどの動物遺体などがあり、内容も非常に似ている。溝16及び溝18の中心となる時期は、溝16は6世紀後半～7世紀前葉、溝18は7世紀前葉～中葉と差があり、この差を勘案すれば、2－溝73・5－溝29・6－溝80の古い流路が溝16に、最終段階の流路が溝18に相当している可能性が考えられる。ただし、溝18は本調査地内ではかなり東に振っており、微高地1を東西方向に貫流する6世紀末～7世紀初頭の3－溝35・38と接続する可能性も排除できない。また、2－溝73・5－溝29・6－溝80は本調査地の700m北に位置する原尾島遺跡の溝18に繋がると考えられているが、その間に位置する本調査地の溝と繋がるならば、時期的には溝16が原尾島遺跡－溝18に、溝18が原尾島遺跡－溝19に繋がることとなる。原尾島遺跡の白玉製作資料は溝18、製鉄関係遺物は主に溝19から出土しており、出土遺物の傾向からも首肯できる。しかし、倉敷市立自然史博物館の武智泰史氏から、原尾島遺跡の鉄鉱石はスカルン鉱石であるが本調査地の鉄鉱石は緻密な磁鉄鉱であり、両遺跡から出土した鉄鉱石の産地が異なるという教示を受けた。⁽¹⁴⁾もし溝18を介して鉄鉱石が原尾島遺跡から流入してきたとすれば、原尾島遺跡の一製鉄集団が複数種類の鉄鉱石を使用していたか、原尾島遺跡に別個の鉄鉱石を使用する複数の製鉄集団が存在していたことになる。あるいは本調査地近辺に別の製鉄集団が居住していた可能性も否定できない。

さて、本調査地で大規模な溝が利用されていた6世紀後半～7世紀前半は、百間川原尾島遺跡が再び活性化し、微高地1では竪穴住居が掘立柱建物へ変化する。同様の变化は赤田東遺跡でも起きているが、県下のみならず畿内各所で確認されており、⁽¹⁵⁾「推古朝の大開発」⁽¹⁶⁾とも称される中央政権が主導した耕地開発と深く関わっていると推察されている。⁽¹⁷⁾7世紀前半の旭東平野内部は滞水状態にあったと想定されており、⁽¹⁸⁾溝18がそれまでの流路を踏襲せず意図的に北東から南西へ開削されたならば、平野内部の排水を目的とした可能性があることを提起しておきたい。

河川敷内の古代の遺構は溝1条（5－溝35・6－溝130）のみで、溝18上部には付近で旭川が決壊したことを示す「堤防決壊堆積物」が堆積しており、その頃大規模な洪水に見舞われ、集落が放棄されたのかもしれない。その後も明確な遺構はなく、土層観察から、平安時代後半には全面が耕地化されていた可能性が高い。中世になると、河川敷内西半は屋敷地として、東半は耕作地として広く利用されている。11世紀後半に成立し、16世紀前半に廃絶したと考えられている「原尾島中世村落」は条里地割による規制を受け、東西方向の5－溝39と南北方向の5－溝45・6－溝128が条里地割の坪境とみられている。⁽¹⁹⁾この溝の延長線上は本調査地の西側と南側の現道路と一致し、本調査地とは坪が異なる。また、字も現道路を境に異なることから、原尾島村落が本調査地まで広がっていたとは考え難い。掘立柱建物1～3は主軸方向から同一時期の建物とみている。柱穴から中世の土器が出土したが、古代～中世の堆積層を切っており、土坑3同様に近世に降る可能性がある。いずれにせよ、本調査地

周辺は原尾島村落の外れとなる。

(渡邊)

註

- (1) 柳瀬昭彦 2004「第4章第4節 弥生～古墳時代の集落変遷」『百間川原尾島遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告179
高田恭一郎 2008「第5章 まとめ」『百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
團 奈歩・弘田和司・亀山行雄 2013「百間川原尾島遺跡・沢田遺跡の変遷」『百間川原尾島遺跡8 百間川沢田遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告239
上記のほか、本章に関わる旭川兩岸に所在する遺跡の報告書については章末に記した。
- (2) 高田恭一郎 1996「第4章第3節 古代の遺構・遺物」『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- (3) 岡本寛久 1996「第4章第4節 中世の村落」『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- (4) 岡山県教育委員会 1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1
- (5) 杉山一雄 2014「第3章第3節 遺物」『百間川原尾島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告241
金田善敬 2003「第4章第3節 弥生時代前期水田から出土した円礫」『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
- (6) 團 奈歩 2013「第6章第1節 調査の概要」『百間川原尾島遺跡8 百間川沢田遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 239
- (7) 草原孝典 2015「第IV章 結語」『幡多廃寺』岡山市教育委員会
- (8) 野崎貴博 2003「第5章第1節 岡山平野における弥生時代前期～中期の洪水と集落の動態」『津島岡大遺跡』12
- (9) 中塚 武 2015「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62
松木武彦・近藤康久 2020「岡山平野における居住高度の通時的推移と気候変動－弥生・古墳時代を対象に－」『先史・古代の気候と社会変化 気候変動から読みなおす日本史3』
- (10) 鈴木茂之氏に現地指導を仰ぎ、教示を受けた
- (11) 百・後・Ⅱ以前と百・後・Ⅲ以降で遺構面が異なる堆積状況は河川敷内でも確認されている。また、弥生時代後期末の洪水砂で埋没した水田下から後期中葉以前の建物や井戸が検出され、島状高まりからも百・後・Ⅱの土器が出土している。
正岡睦夫 1988「百間川遺跡群の水田」『考古学と関連科学 鎌木義昌先生古希記念論集』
- (12) ダイコンについて、種子同定を担当した松元美由紀氏から多大な教示をいただいた。記して深謝いたします。
- (13) 宇垣匡雅 1999「第4章 調査の成果」『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139
- (14) 鉄鉱石について武智泰史氏及び服部亮一氏から多大な教示をいただいた。記して深謝いたします。
- (15) 古代学研究会編 2021『古墳時代から飛鳥時代へ 集落遺跡の分析から見た社会変化』六一書房
- (16) 吉村武彦 2017「王権と交通」『日本古代の道路と景観－駅家・官衙・寺』鈴木靖民・荒木敏夫・川尻秋生編 八木書房
- (17) 森本 徹編 2013『考古学からみた推古朝』大阪府立近つ飛鳥博物館図録61
- (18) 高橋 護 1971「古地形からみた備前国府」『岡山県埋蔵文化財報告』
雄町遺跡では5世紀後半から7世紀前半の「厚い泥炭状の植物堆積」が確認されている
- (19) 前掲 (3)

第2節 古墳時代後期の手工業生産について

本調査では、古墳時代後期の遺構を中心に多種多様な遺物が比較的多く出土した。なかでも、溝16・18は規模が大きいこともあり、土師器、須恵器、土鍾、木製品、製鉄・鍛冶関連遺物、滑石製白玉、有孔円板、牛の骨、モモ・穀類・野菜の種子などの多種多様な遺物を包含していた。百間川原尾島遺跡周辺では、度重なる発掘調査により、製鉄・鍛冶関連遺物以外に、紡織、石製模造品、土師器などの生産に関わる遺物が少なからず見つかっている。そこで、本節では百間川原尾島遺跡周辺を対象に古墳時代後期の手工業生産関連遺物を整理することで、手工業生産の変遷や特徴についてまとめる。

旭川下流域左岸に広がる旭東平野の一角に位置する百間川原尾島遺跡、原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）、北口遺跡、赤田東遺跡、幡多廃寺では、古墳時代後期の手工業生産に関わる遺物（第75図）が確認されており、紡織、石製模造品の製作、製鉄、鍛冶、土器生産が行われたと考えられる。

紡織

紡錘に関わる遺物は原尾島遺跡、百間川原尾島遺跡、赤田東遺跡、幡多廃寺で認められる。原尾島遺跡では溝18から土製・滑石製の紡輪が各1点出土し、5世紀末葉～6世紀初頭に比定される。また、溝19では紡輪・紡茎ともに鉄製の紡錘1点が見つかり、7世紀前半に属する。

百間川原尾島遺跡では3-竪穴住居21から石製紡輪、溝37で石製紡輪の未成品、7-竪穴住居18で鋸歯文を施した滑石製紡輪、竪穴住居19で滑石製紡輪が1点ずつ見つかると、これらは5世紀末葉～6世紀初頭に位置づけられる。また、6世紀末から7世紀初頭の3-溝37で鋸歯文を施した滑石製紡輪1点、6世紀末の6-井戸15で紡輪・紡茎ともに鉄製で完形に近い紡錘1点が出土した。

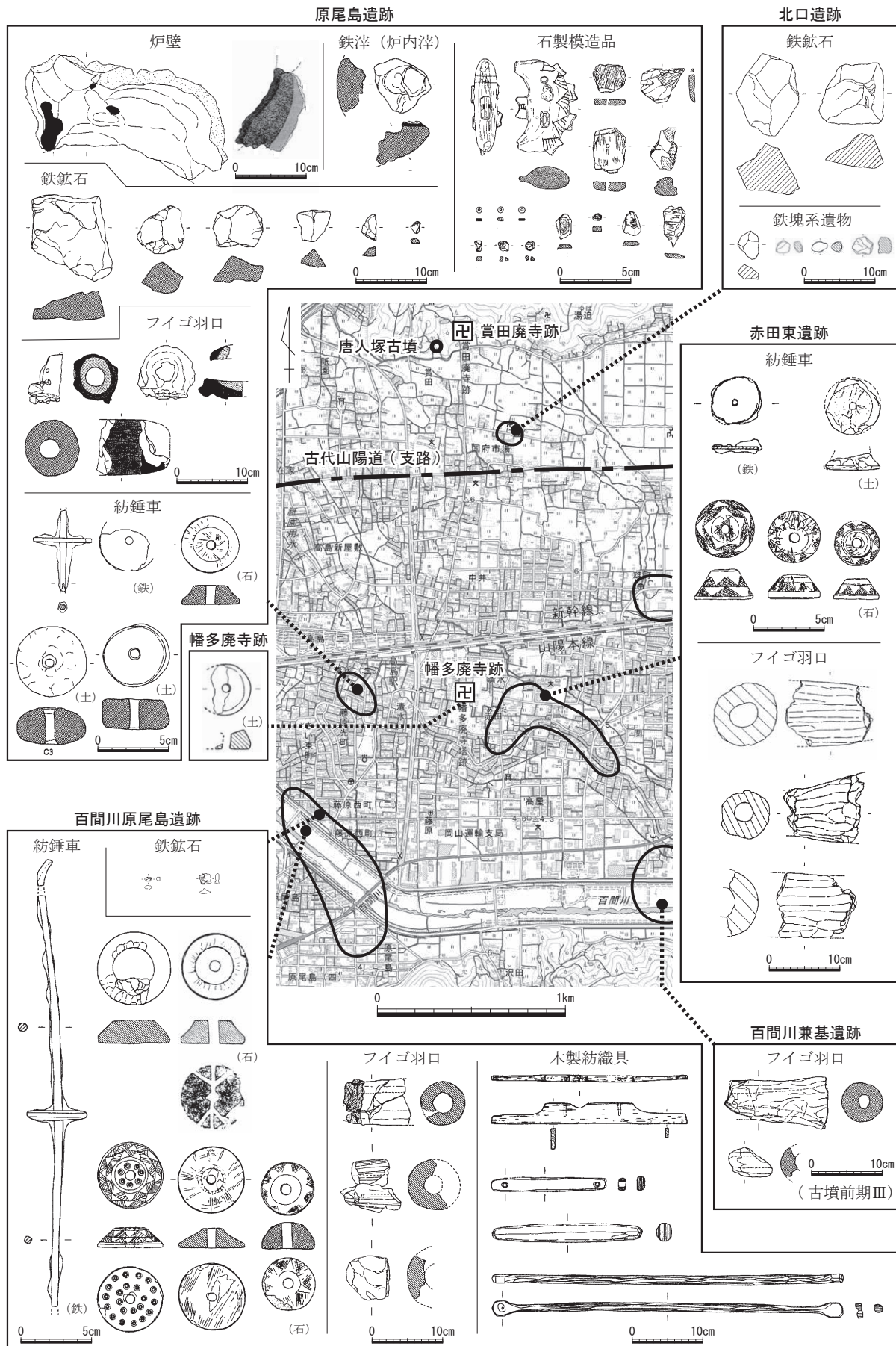
赤田東遺跡では包含層から鋸歯文を施した石製紡輪3点、破損が著しい紡輪1点、鉄製紡輪1点が出土し、大半が6世紀後半から7世紀にあたるものと捉えられている。また、幡多廃寺では、微高地の形状に沿った7世紀代の溝7から滑石製紡輪1点が出土した。

こうした紡輪の出土状況から、紡糸が行われた時期は5世紀末から6世紀初頭、6世紀末から7世紀前半の二時期に大きく分けられる。百間川原尾島遺跡と赤田東遺跡では紡輪の出土数が多く、紡糸が積極的に行われたと考えられるほか、鋸歯文が施された石製紡輪が百間川原尾島遺跡は2点、赤田東遺跡は3点と目立つ。また、紡輪、紡茎ともに鉄製の紡錘が6世紀後半から7世紀前半になって上記3遺跡から1点ずつ認められ、百間川原尾島遺跡では同時期に滑石製紡輪が併存している可能性⁽¹⁾がある。豊島雪絵氏によれば、県内では古墳時代の石製紡錘車が足守川下流域、旭川下流域、砂川流域の集落、津山盆地の古墳を中心に出土する傾向にあることが指摘されているが、なかでも旭川下流域では原尾島遺跡、百間川原尾島遺跡、赤田東遺跡でその出土が顕著である。

総かけに関わる遺物は、百間川原尾島遺跡2-溝73から中型の糸杵⁽²⁾（杵木）とみられる木製品が出土し、6世紀から7世紀初めに比定される。また、紡織に関わる遺物として、百間川原尾島遺跡では5世紀後半から6世紀前半の土器を多く伴う6-溝80下層から糸巻具か経巻具とみられる木製品のほか、長さ20cm前後の舟形や紡錘形で機織具の可能性が示唆される木製品が出土した。これらの糸杵や機織具は断片的な資料であるが、紡輪と合わせて一貫した織物生産が行われた可能性がある。

石製模造品製作

原尾島遺跡では竪穴住居8から滑石の素材剥片1点、土壇10から滑石製白玉3点と未成品5点、溝



第75図 百間川原尾島遺跡周辺における古墳時代後期の手工業生産関連遺物 (1/4・1/8)

18から多くの滑石製白玉と未成品、有孔板、剥片が出土した。製作時期は5世紀後半～末頃と捉えられている。滑石の原石や石核は認められないが、素材剥片から剥離、研磨、穿孔工程が行われ、白玉を主力製品とした一貫した製作が積極的に行われた。また、百間川原尾島遺跡の3-溝37から出土した滑石製紡輪の未成品は5世紀末ごろに製作された可能性を示す。

本調査では溝16から滑石製の有孔円板1点と白玉5点、溝18から白玉1点が出土した。百間川遺跡群周辺で出土した石製模造品は表11に示したとおりである。百間川沢田遺跡は古墳時代前期後半（百間川古墳時代Ⅱ）、百間川兼基遺跡は中期前半（百間川古墳時代Ⅲ）の出土例が多く、竪穴住居4軒や

表11 百間川遺跡群周辺における石製模造品一覧

遺跡名	出土遺構	時期	滑石製品							その他の玉類
			子持勾玉	勾玉	管玉	白玉	有孔円板	有孔板	紡輪	
百間川沢田遺跡	2-竪穴住居21	古墳時代前期Ⅱ				1				
百間川兼基遺跡	1-竪穴住居13	古墳時代Ⅲ					1			
	1-竪穴住居14	古墳時代Ⅲ		1						
	2-竪穴住居7	古墳時代Ⅲ				1				
	1-溝23	古墳時代Ⅲ				1				
	3-溝25	古墳時代Ⅲ					1			
	3-溝26	古墳時代Ⅲ				1				
原尾島遺跡	竪穴住居1	5世紀末～6世紀初頭				32				
	竪穴住居5	5世紀末～6世紀初頭				2				
	竪穴住居7	5世紀末～6世紀初頭				7		1		
	溝18	5世紀末～6世紀初頭							1	
	溝19	7世紀前葉	1							
	柱穴	古墳時代後期	1							
百間川原尾島遺跡	3-竪穴住居21	5世紀末				101		1	1	ガラス製小玉1
	2-竪穴住居24	5世紀末～6世紀初頭				7				
	2-竪穴住居26	5世紀末～6世紀初頭			1	1				碧玉製管玉1
	7-竪穴住居10	5世紀末～6世紀初頭			1	6				
	7-竪穴住居14	5世紀末～6世紀初頭				19				
	7-竪穴住居18	5世紀末～6世紀初頭					1		1	
	7-竪穴住居19	5世紀末～6世紀初頭				2			1	
	6-竪穴住居26	6世紀前半					1			
	2-竪穴住居43	6世紀中葉				1				
	6-竪穴住居21	6世紀後半					1			
	5-溝29	5世紀末～6世紀初頭	1			4				土製丸玉1
	2-溝72	6世紀				1				
	2-溝73	6世紀前半～7世紀初頭			8	5				瑪瑙製勾玉1 碧玉製管玉3 土製算盤玉2 土製丸玉3 材質不明丸玉2
	2-溝74	6世紀末			1	3	1			
	本調査-溝16古	6世紀後半				5	1			
	本調査-溝18	7世紀				1				
	3-溝35	古墳時代後期				1				
	3-溝38	6世紀末～7世紀初頭							1	
	7-溝34	6世紀末～7世紀初頭							2	
	4-落ち込み1	古墳時代後期				1				
	5-井戸10	古墳時代後期				2				
百間川今谷遺跡	4-溝32	古墳時代					2			
計			3	1	11	205	7	2	7	15

※上記のほか、百間川兼基遺跡1・3-包含層から勾玉2点、管玉1点、白玉4点、有孔円板1点、百間川原尾島遺跡2・4～6-包含層と土坑70から白玉20点、有孔円板2点、剣形品（有孔円板の転用）1点が出土。

溝3条から勾玉1点、白玉4点、有孔円板2点が出土した。このうち、百間川兼基遺跡2－竪穴住居7では白玉1点と未穿孔の白玉未成品1点が出土し、白玉が製作された可能性がある。

原尾島遺跡では竪穴住居3軒、溝2条、柱穴から子持勾玉2点、白玉41点、有孔板1点、紡輪1点が出土した。特に5世紀末～6世紀初頭（TK23・47型式併行期）の竪穴住居から白玉の出土が顕著である。また、百間川原尾島遺跡では竪穴住居10軒、溝7条、落ち込み、井戸から子持勾玉1点、管玉11点、白玉160点、有孔円板5点、有孔板1点、紡輪6点が見つかった。5世紀末～6世紀初頭の竪穴住居からの出土例が多いなか、一部は6世紀～7世紀前葉も認められる。

子持勾玉は原尾島遺跡の溝19と柱穴、百間川原尾島遺跡の5－溝29で計3点が見つかり、水辺で祭祀が執り行われたことが推測できる。時期は5世紀末から6世紀初頭、7世紀前葉である。中国地方では子持勾玉が各地域の拠点的な集落から出土し、1点のみ出土する事例が多いなか、計3点の子持勾玉が出土した原尾島遺跡と百間川原尾島遺跡は子持勾玉の保有率が高い集落群と言える⁽³⁾。

白玉は竪穴住居12軒と溝9条、落ち込み、井戸で確認された。原尾島遺跡の竪穴住居1では32点、百間川原尾島遺跡3－竪穴住居21では101点、同遺跡7－竪穴住居14では19点と多く、他の竪穴住居でも数点が認められることから、白玉は複数個を単位として主に竪穴住居で使用されたとみられる。白玉が出土した竪穴住居は5世紀前半、5世紀末から6世紀初頭にほぼ限定され、後者は原尾島遺跡で模造品が製作された時期と重なる。一方、百間川原尾島遺跡の2－溝73・74や本調査1－溝16・18のように、溝から白玉が出土した例は前時期や周辺からの流れ込みの可能性も否めないが、6世紀後半以降が多く、積極的に評価すれば水辺で白玉が使用されることが想定されよう。

有孔円板は竪穴住居や溝から1点出土する事例が多く、時期は5世紀前半と6世紀を主体とする。白玉とはほとんど共伴せず、単独で祭祀に使用されることが示唆される。

製鉄

本調査では総重量約7.27kgの製鉄・鍛冶関連遺物が出土した。このうち、製鉄関連遺物は鉄鉱石4.1g、炉壁2,216.5g、製錬滓4,718.6gの計6,939.2g、鍛冶関連遺物は椀形鍛冶滓266.4g、フイゴ羽口64.7gの計331.1gである（表12）。製鉄・鍛冶関連遺物は溝16・18でやや多く見つかり、弥生時代後期～終末期の溝5・10、古代～中世以降の溝24や下がり1・2は関連遺物が少量で混入と考えられる。本調査地では製鉄・鍛冶関連遺物の出土量が少なく、製鉄・鍛冶が行われたとは考えにくいだが、遺跡周辺で製鉄・鍛冶が行われた可能性があること、あるいは製鉄・鍛冶遺跡と多少なりとも関連があること、製鉄・鍛冶関連遺物が帰属した製鉄遺跡や鍛冶遺跡の付近までこれらの溝がつながることなどが推測される。

調査地周辺で製鉄・鍛冶関連遺物が出土した事例として、百間川原尾島遺跡（同遺跡2－溝73、6－溝78、7－溝34、本調査の溝16・18）、原尾島遺跡の溝18・19、北口遺跡のB地区溝1・2、赤田東遺跡があげられる。各遺跡における関連遺物の種別や出土量は表13に示したとおりである。具体的な出土量が報告されていない調査例があるが、関連遺物の出土量は原尾島遺跡が最も多く、次いで百間川原尾島遺跡、さらに北口遺跡、赤田東遺跡と続く。その出土量は製鉄遺跡との関係性や距離、鍛冶の規模と関連するものとする。調査面積及び出土遺構の規模、出土量や種類の比率は異なるものの、鉄鉱石、炉壁、製錬滓、椀形鍛冶滓、フイゴ羽口を伴う点は共通する。このうち、製鉄関連遺物は原尾島遺跡、百間川原尾島遺跡、北口遺跡、赤田東遺跡で確認されている。

百間川原尾島遺跡では2－溝73で11kgに及ぶ多量の炉壁や鉄滓が確認された。出土土器は6世紀前

半から7世紀初頭を主体とする。また、本調査の溝16・18から出土した製鉄関連遺物は少量で、周辺からの流れ込みと考えられるが、出土土器は溝16が6世紀後半、溝18が7世紀を主体とする。

原尾島遺跡では鉄鉱石、炉壁、製錬滓の製鉄関連遺物が総重量57kgに及び、周辺遺跡のなかで最も関連遺物の出土量が多い。特に鉄鉱石は計66点、総重量7.18kgと多く、最大で14.9cm、小さいものは約1.6cmと様々な大きさのものが認められる。地理的にみて、同遺跡に近いところでは岡山市北区御津石上の佐野鉱山が鉄鉱石の原産地として有力視されているほか、出土した炉壁が流紋岩、泥岩、頁岩を含むことから、岡山市東部から瀬戸町付近が粘土採取地の第一候補地と推定されている。こうした状況から、同遺跡では鉄鉱石の入手、選別、粉碎が主に行われた後、砂川流域の製鉄遺跡へ鉄鉱石が運ばれた可能性が想定されるだけでなく、旭川を利用すれば鉄鉱石の採取や旭川左岸平野の東端付近

表12 百間川原尾島遺跡 製鉄・鍛冶関連遺物集計表

(g)

遺構名等	時期	鉄鉱石	炉壁		鉄滓（製錬滓）		鉄滓 (埴形鍛冶滓)	フイゴ羽口
			—	ガラス質	(含鉄)	—		
竪穴住居1	古墳後期					34.7		
(溝5)	(弥生終末)			0.2				
(溝10)	(弥生終末)					140.1		
溝16	古墳後期		60.9	835.0	26.9	1,910.6	141.3	
溝17	古墳後期			27.7		54.1		
溝18	古墳後期	4.1	760.7	406.5	329.2	1,097.5	99.9	64.7
溝19	古墳後期			14.2		695.3		
(溝24)	古代～中世			3.6				
(下がり1)	(中世以降)			1.9	13.2			
(下がり2)	(中世以降)			18.5	5.9			
包含層ほか	—			87.3	228.1	183.0	25.2	
計		4.1	821.6	1,394.9	603.3	4,115.3	266.4	64.7
				2,216.5		4,718.6		

表13 百間川原尾島遺跡周辺の製鉄・鍛冶関連遺物の出土量

(kg)

遺跡名	出土遺構	時期	鉄鉱石	炉壁	ガラス 質滓	製錬滓	鍛冶滓	フイゴ 羽口	備考
百間川原尾島遺跡	本調査 一溝16・18	7世紀代	0.004	0.82	1.24	3.37	0.24	0.06	
	2一溝73	6世紀代		○		?	?	○	炉壁・鉄滓は約11kg
	6一溝78	6世紀後半				?	?	0.25	
	7一溝34	6世紀末～7世紀初頭		○	○	○	○	0.26	
原尾島遺跡	溝18・19	7世紀前半	7.18	10.51	2.98	27.84	3.79	4.77	
赤田東遺跡	竪穴住居1	6世紀中葉				○			
	建物9	6世紀末～7世紀初頭						○	
	P1209	6世紀後半～7世紀初頭						○	
	溝10	6世紀末～7世紀初頭		?		○		○	
北口遺跡	B区	7世紀前半	3.50	0.15	0.04	0.23		0.01	鉄塊系遺物0.096kg

※岡山県教育委員会1984・2004・2008、岡山市教育委員会2001・2005をもとに作成。

までの運搬が容易であることが示唆⁽⁴⁾されている。

赤田東遺跡では竪穴住居、掘立柱建物、ピット、溝から炉壁、鉄滓などが出土した。関連遺物の具体的な出土量は報告されていないが、製鉄関連遺物は6世紀中葉以降に比定されている。

また、北口遺跡では鉄鉱石、炉壁、ガラス質滓、鉄滓が出土しており、7世紀前半に位置づけられる。鉄鉱石は計26点、総重量3.503kgと原尾島遺跡に次ぐ出土量で、2.5～11.5cmの様々な大きさのものがある。そのうえ、鉄鉱石の外観的な特徴も原尾島遺跡と似るようである。それに対して、鉄鉱石以外の関連遺物は出土量がわずかで、原尾島遺跡とは種別の比率や出土量が大きく異なる。

鍛冶

鍛冶関連遺物は百間川兼基遺跡、百間川原尾島遺跡、原尾島遺跡、赤田東遺跡で確認されている。百間川兼基遺跡で古墳時代中期前半に比定される溝25からフィゴの羽口2点が出土し、鍛冶が行われた可能性がある。6世紀後葉から7世紀初頭にかけては百間川原尾島遺跡の6－溝78や百間川原尾島遺跡は7－溝34からフィゴの羽口や鉄滓が見つかったが、羽口は少量である。

6世紀後半～7世紀初頭に比定される鍛冶関連遺物は赤田東遺跡でも確認されており、古墳時代後期の建物9、溝10、土坑P1209からフィゴの羽口が1点ずつ見つかった。建物9は側柱建物で北東隅の柱穴から6世紀末から7世紀初頭の須恵器杯身とともにフィゴの羽口1点が出土した。また、P1209は長さ7.0m、幅3.0m、深さ12cmの不整形な土坑で、一体分のウマの骨が横倒しになった状態で見つかり、埋葬あるいは意識的に埋められた可能性が指摘されており、注目される。馬の骨に直接伴わないが、土坑の埋土から須恵器の高杯や甕、土師器の甕、フィゴの羽口が出土しており、6世紀後半から7世紀初頭に馬の存在や鍛冶が行われたことが明らかにされた。

7世紀前半は原尾島遺跡の溝19から出土した鍛冶滓3.79kg、フィゴ羽口4.77kgに加え、鉄槌や鉄鋌の可能性もある遺物もあり、鉄塊から鉄素材に加工する精錬鍛冶が行われた可能性がある。

北口遺跡のB地区ではフィゴの羽口の破片、砥石が各1点出土したに過ぎないが、鉄鏃、刀子、ヤリガンナ、斧などの鉄器がかなりの量出土しており、7世紀前半に遺跡内で鉄器生産、付近の丘陵部で製鉄が行われたことが示唆⁽⁵⁾されている。

土師器生産

北口遺跡では7世紀前半の土師器を焼成した窯が1基確認された。鉄器生産が行われた時期とも重なることから、土師器と鉄器が同時期に生産された可能性がある。

以上、古墳時代後期の百間川原尾島遺跡周辺において、紡織、石製模造品の製作、製鉄、鍛冶、土器生産に関わる遺物を検討したところ、5世紀末から7世紀前半にかけて遺跡や時期によって特定の業種、あるいは複合的に手工業生産を行っていたことが明らかとなった（表14）。

まず、5世紀末から6世紀初頭に百間川原尾島遺跡で紡錘と機織、原尾島遺跡で紡錘と石製模造品の製作が実施されるようになり、手工業生産が始まった画期として位置づけられる。続く6世紀前葉～中葉は手工業生産が低調であったが、6世紀後葉から7世紀初頭には赤田東遺跡で鍛冶と紡錘が行われただけでなく、6世紀後葉には馬の存在から秦氏との関わりも示唆⁽⁶⁾される。加えて、6世紀末～7世紀初頭には百間川原尾島遺跡でも紡錘が行われた。製鉄は直接的な操業を示す状況ではなく、百間川原尾島遺跡では6世紀から7世紀初頭の2－溝73、3－溝48から製鉄関連遺物が出土しているものの、その帰属が6世紀に遡るかどうかは判断が難しい。現状では7世紀前半ごろに原尾島遺跡や北口遺跡で鉄鉱石の入手、選別、粉碎を主に行い、原尾島遺跡を中心に製鉄に深く関わった可能性がある。

表14 百間川原尾島遺跡周辺における古墳時代後期の手工業生産の変遷

年代	古墳時代	須恵器 編年	百間川 兼基 遺跡		百間川 原尾島遺跡				原尾島遺跡			幡多 廃寺	赤田東 遺跡				北口遺跡		
			石製模 造品	鍛冶	紡錘	紡織	製鉄	鍛冶	紡錘	石製模 造品	製鉄	鍛冶	紡錘	紡錘	製鉄	鍛冶	製鉄	鍛冶	土師器
5世紀	前葉～中葉	TK73～208	○	●															
	後葉	TK23・47			●	○			●	●									
6世紀	前葉	MT15																	
	中葉	TK10																	
	後葉	TK43											●	○	●	●			
7世紀	初頭	TK209			●	○	○	○						⋮	⋮	⋮	⋮	○	
	前葉～中葉	TK217					○	○			●	●	○	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	●

また、7世紀前半には原尾島遺跡で精錬鍛冶や紡錘が行われたほか、北口遺跡では鋳をはじめとする鉄器や土師器が生産された。

このように、百間川原尾島遺跡周辺では、5世紀末から6世紀初頭は紡織と石製模造品製作、6世紀後葉から7世紀初頭は鍛冶と紡錘、7世紀前半は製鉄の初段階、鍛冶、紡錘、土師器生産が行われ、近接する遺跡群で複合的に手工業生産を行ったとみられる。

周辺地域では金蔵山古墳の築造以後、5世紀中葉から6世紀前半は首長墳が確認しづらい状況にあるなか、中井南・三反田遺跡のように平野部に小規模な古墳が群集するように築かれる。手工業生産が始まった5世紀後半から6世紀初頭は、百間川原尾島遺跡の微高地1-1に遺構が集中し、竪穴住居33軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑4基と遺構数が急に多くなる。また、この時期には百間川原尾島遺跡、原尾島遺跡、赤田東遺跡で造り付けのカマドを伴う竪穴住居が散見される。これらの遺跡では前段階の空白期において集落が再編され、新しい住居様式を有した人々とともに集住するようになるなかで、紡織や石製模造品の製作が行われたようである。

ところが、6世紀前葉から中葉になると、百間川原尾島遺跡では微高地1-1・2に遺構が散在し、竪穴住居2軒が認められるように集落規模が大幅に縮小した。こうした傾向は原尾島遺跡や北口遺跡でも同様であるとともに、周辺の古墳の築造も低調となる。それに対して、赤田東遺跡では6世紀前葉に集落の空半期をおくが、6世紀中葉から遺構数が増加しつつある。

6世紀後葉から7世紀前半にかけては、百間川原尾島遺跡や赤田東遺跡では遺構数が増加するとともに、遺構密度が高くなり、再び集落規模が大きくなる。この時期には紡織、製鉄、鍛冶、土師器生産などの手工業生産が複合的に行われ、特に製鉄は関連遺物の出土量が増えて活発になることが推測される。こうした集落や手工業生産の動向に対して、近隣では竜ノ口山丘陵に60基以上、操山丘陵に100基を超える横穴式石室をもつ古墳が群集して築かれるなか、6世紀後葉には操山の北尾根に大形の横穴式石室をもつ沢田大塚古墳や操山51号墳、7世紀初頭には竜ノ口山の南西麓に唐人塚古墳が築造された。このうち、唐人塚古墳は切石風の巨石による整った横穴式石室をもち、石室の積み方が奈良県岩屋山古墳と類似するほか、竜山石製の家形石棺が安置されたことから、畿内中枢の勢力との関

連が深いことが示唆されている⁽⁷⁾。さらに、唐人塚古墳に東隣する賞田廃寺は7世紀第2四半期に創建され、同古墳との深い関係性が指摘されるほか、上道氏一族の氏寺と評価されている⁽⁸⁾。この辺りは律令期に備前国上道郡上道郷に属し、吉備地域の有力な在地豪族である上道氏の本貫地に比定される。

6世紀後葉から7世紀前半にみられる集落の拡大や手工業生産の複合化と活発化は、旭川や内海を介した水運に適したという立地条件だけでなく、周辺の集落、古墳や寺院の動向と合わせて考えると、6世紀中葉から後葉に設置された屯倉、唐人塚古墳の被葬者、賞田廃寺の造営に関わったとされる上道氏、馬牛と関連が深い秦氏に関わる集団が少なからず関与したことも想像に難くない。さらに、赤田東遺跡の調査成果をもとに5世紀から7世紀にかけて吉備地域の集落変遷を丹念に検討した草原孝典氏⁽⁹⁾は、7世紀前葉に主体となる住居が竪穴住居から掘立柱建物へと変化し、集落内部の建物全体が整然と配置された状況について、課税を伴う集落が編成されたものと理解し、6世紀中葉から後葉に白猪屯倉が設置されたことが契機になったことを説いた。白猪屯倉は欽明16(555)年に吉備五郡に置かれ、応神紀の吉備五県(苑、川嶋、上道、三野、波区芸)にあたる説が支持されている⁽¹⁰⁾。屯倉の設置により集落の構造が変化したことに従えば、上道郡内に所在する百間川原尾島遺跡周辺では、集落内の手工業生産のあり方にも影響を及ぼした可能性があるだろう。

百間川原尾島遺跡が所在する旭川下流域左岸に広がる旭東平野には、賞田廃寺の創建後は7世紀第4四半期から8世紀にかけて幡多廃寺、古都廃寺、網ノ浜廃寺の古代寺院が上道郡内に集中して造営された。さらにそれだけでなく、岡山市中区国府市場周辺には備前国府推定地があり、その東西に古代山陽道支路が縦貫するなど、律令期には備前国の中枢となる。6世紀後葉から7世紀前半に拡大した集落群で行われた複合的な手工業生産は、律令期に備前国中枢となる経済的基盤の礎となったと考えられる。

本調査では古墳時代後期の製鉄・鍛冶関連遺物がわずかに出土したに過ぎないが、出土量の多少に関わらず、周辺遺跡とともに調査成果を蓄積することで、将来的に旭川下流域左岸における古墳時代後期の手工業生産の様相が具体的に明らかになることが期待される。(米田)

註

- (1) 豊島雪絵 2001「古墳時代における石製紡錘車の性格—中国・近畿地方出土例を中心に—」『古代吉備』第23集 古代吉備研究会
- (2) 東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- (3) 米田克彦 2020「中国地方における子持勾玉の基礎的研究」『玉文化研究』第4号 日本玉文化学会
- (4) 宇垣匡雅 1999「調査の成果」『原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)』岡山県教育委員会
- (5) 岡山市教育委員会 2001「北口遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999(平成11)年度』
- (6) 亀田修一 2006「幡多廃寺」『吉備の古代寺院』吉備考古ライブラリィ・13 吉備人出版
- (7) 間壁忠彦・間壁霞子 1974「石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第9号
- (8) 出宮徳尚 1987「古代寺院址」『岡山県の考古学』吉川弘文館
- (9) 草原孝典 2005「結語」『赤田東遺跡』岡山市教育委員会
- (10) 狩野 久 2005「白猪屯倉と蘇我氏」『古代を考える吉備』吉川弘文館

第3節 古墳時代後期の牛の遺存体について

本調査では古墳時代後期の溝18最下層で複数の木が組まれた状態を確認し、堰のような構造物であったことが推測された。その周辺では土師器、須恵器、滑石製白玉、モモ核、オニグルミ、スモモ核などの植物遺存体、牛の骨などの多様な遺物が出土した。なかでも、牛の骨は富岡直人氏により左右一対の寛骨と鑑定され、左右の寛骨の結合部が離れ、他の骨格が認められないことから、水刃を利用して牛を解体した後に廃棄した可能性があるとのこと教示をいただいた。そこで、本節では百間川原尾島遺跡周辺における古墳時代後期の牛の遺存体の出土例を馬とともに整理することで、牛馬の利用の始まりについてまとめる。

遺跡周辺では牛5例と馬8例が確認されており、百間川原尾島遺跡で牛5例と馬2例、百間川今谷遺跡、百間川沢田遺跡で馬各1例、赤田東遺跡で馬4例が報告されている（表15⁽¹⁾）。牛の確認例は百間川原尾島遺跡に限られる。出土遺構をみると、牛は溝3条、竪穴住居2軒、馬は溝6条、竪穴住居1軒、土坑1基で、牛馬ともに溝からの出土例が圧倒的に多い。このうち、赤田東遺跡の土坑P1209は馬1体が横倒しで埋葬された状態で見つかった事例として特に注目される。また、百間川今谷遺跡4－溝32出土の馬は、放射性炭素年代測定では5世紀中葉～6世紀前葉（校正年代）と推定されており、今のところ遺跡周辺では初現の事例に位置づけられる。日本列島における牛馬の普及は、遺存体や馬具、水田遺構での足跡、唐犁の出現から5世紀中頃と松井章氏⁽²⁾によって推定されている。百間川

表15 百間川遺跡群周辺における古墳時代の牛・馬の遺存体一覧

遺跡名	出土遺構	時期	大分類	小分類	部位	点数	備考
百間川原尾島遺跡	5－竪穴住居2	(弥生後期Ⅰ)	哺乳類	ウシ	臼歯	1	
	3－竪穴住居31	6世紀末～7世紀初頭	哺乳類	ウシ	歯	4	P4.fr.L
	6－溝80上層東肩	6世紀末～7世紀初頭	哺乳類	ウシ	臼歯	1	
	7－溝34	6世紀末～7世紀初頭	哺乳類	ウシ	上顎臼歯	1	
			哺乳類	ウシ	上顎M3	1	
	本調査－溝18	7世紀	哺乳類	ウシ	左右寛骨	1	
	6－溝80上層	6世紀末～7世紀初頭	哺乳類	ウマ	上顎臼歯	1	
	7－溝34	6世紀末～7世紀初頭	哺乳類	ウマ	上顎	4	成～老獣。 同一個体。
			哺乳類	ウマ	下顎	1	
			哺乳類	ウマ	上顎臼歯	1	
百間川沢田遺跡	2－溝113	古墳時代前期以降	哺乳類	ウマ	上下顎歯	1	中形。7才前後。
百間川今谷遺跡	4－溝32	古墳時代中期～後期	哺乳類	ウマ	左右上顎臼歯	1個体	同一個体か。 若齢以上。 放射性炭素年代は、 5世紀中葉～6世紀 前葉（校正年代）
			哺乳類	ウマ	右上腕骨	1	
			哺乳類	ウマ	右橈骨	1	
			哺乳類	ウマ	右中手骨	1	
			哺乳類	ウマ	右中足骨	1	
赤田東遺跡	竪穴住居9	6世紀中葉～後葉	哺乳類	ウマ	破片	2	
	溝3	6世紀中葉以降	哺乳類	ウマ	上下顎	1	
	土坑P1209	6世紀後半～7世紀初頭	哺乳類	ウマ	ほぼ全身	1体	
	溝13	6世紀末～7世紀初頭	哺乳類	ウマ	不明	不明	

原尾島遺跡周辺では、牛馬の遺存体の出土遺構は6世紀末から7世紀初頭が大半を占め、事例も増えることから、この頃に牛馬を利用し始めたと考えられる。牛馬の出土部位をみると、牛は頭蓋骨の一部、馬は頭蓋骨の一部、あるいは全身や複数の部位が出土する例が見受けられる。

牛馬の頭蓋骨の一部が出土する例は、遺跡周辺では牛5例、馬4例がある。團奈歩氏⁽³⁾によれば、県内における同様の出土例は古墳時代中～後期の岡山市津寺遺跡3－溝18や加茂間所遺跡の竪穴住居98、総社市神明遺跡の溝22でも認められ、日本古代における殺牛馬を伴う祭祀について丹念に検討した渡邊麻美子氏⁽⁴⁾の研究を援用しつつ、溝や竪穴住居からの牛馬の出土例は雨乞いや祈止雨に関わる祭祀の可能性あることを示した。さらに、門田誠一氏は、牛を殺して行う祭祀や明儀（殺牛祭祀）は殷代以降の中国に系譜があり、東アジアでは儀礼、奢侈品、贅物、病氣平癒、墳墓、謝礼、報奨、誓約、民間祭祀などの様々な目的があったとし、7世紀以降の日本では、牛を殺して天に誓うという三国時代の新羅の祭儀の要素を一部受け継ぎながら、祈雨を願う在来の信仰習俗として取り込まれたことを示唆した⁽⁵⁾。

百間川原尾島遺跡で古墳時代後期の溝や竪穴住居から牛の頭蓋骨が出土した事例は、牛を解体した後意図的に頭蓋骨を用いて主に水辺（溝）や竪穴住居で執り行われた祭祀の痕跡と考えられ、同遺跡では積極的に行われたようである。一方、馬は百間川原尾島遺跡やその周辺でも認められ、頭蓋骨等を伴う祭祀だけでなく、埋葬も行われた。こうした状況から、百間川原尾島遺跡周辺は備前地域のなかでも古墳時代後期に牛馬の利用や祭祀が積極的に行われた遺跡群であることが窺える。また、百間川原尾島遺跡の左岸用水3－H－1（竪穴住居）、3－竪穴住居25、5－竪穴住居16のように、百間川遺跡群では古墳時代後期になると各々の竪穴住居から少量の製塩土器が見つかる事例が多いことが大久保徹也氏⁽⁶⁾により指摘されている。このことは、集落の各竪穴住居に塩が偏りなく行き渡るほど、百間川原尾島遺跡周辺では塩を安定的に保有していたことが想定される。塩は食生活だけでなく、馬飼の諸条件の一つであることから、6世紀から7世紀初頭を中心に同遺跡周辺で一定数の製塩土器や複数頭の馬が認められることと無関係ではないだろう。『延喜式』卷二十八⁽⁷⁾によると、令制では兵部省被官の兵馬司の所管である馬牛牧が備前国長嶋にも置かれたことが記されており、馬牛の飼育が重要視された地域であることが窺える。百間川原尾島遺跡周辺では牛馬の遺存体の出土例が蓄積されつつあることから、備前地域では令制以前の6世紀から7世紀初頭から牛馬を積極的に利用した可能性が高く、牛馬は生業、交通、軍事に加えて、牛馬の祭祀や馬の埋葬などの精神文化に欠くことができないものでもあった。（米田）

註

- (1) 金子浩昌 1994「百間川原尾島遺跡出土獣骨の鑑定結果」『百間川原尾島遺跡3』岡山県教育委員会
富岡直人 2009「百間川今谷遺跡出土動物遺存体の分析」『百間川今谷遺跡4』岡山県教育委員会
- (2) 松井 章 1990「家畜と牧」『古墳時代の研究』4 生産と流通Ⅰ 雄山閣
- (3) 團 奈歩 2019「神明遺跡から出土した牛・馬の骨について」『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県教育委員会
- (4) 渡邊麻美子 2001「日本古代の殺牛馬を伴う祭祀」『駒澤考古』第27号 駒澤大学考古学研究室
- (5) 門田誠一 2011「東アジアにおける殺牛祭祀の系譜」『佛教大学歴史学部論集』創刊号
- (6) 大久保徹也 1994「岡山県」『日本土器製塩研究』青木書店
- (7) 虎尾俊哉編 2017『訳注日本史料 延喜式 下』集英社

第5章 文献（報告書）一覧

- 岡山県教育委員会 1972 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 1
- 岡山県教育委員会 1973 『岡山県埋蔵文化財報告』 3
- 岡山市教育委員会 1975 『幡多廃寺発掘調査報告』
- 岡山県教育委員会 1977 「沢田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 18
- 岡山県教育委員会 1980 「百間川原尾島遺跡 1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 39
- 岡山県教育委員会 1981 「百間川沢田遺跡 1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡 1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 46
- 岡山県教育委員会 1982 「百間川兼基遺跡 1 百間川今谷遺跡 1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 51
- 岡山県教育委員会 1982 「百間川当麻遺跡 2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 52
- 岡山県教育委員会 1984 「百間川原尾島遺跡 2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 56
- 岡山県教育委員会 1985 「百間川沢田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 59
- 岡山県教育委員会 1989 「百間川米田遺跡 3（旧当麻遺跡）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 74
- 岡山市教育委員会 1992 『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』
- 岡山県教育委員会 1993 「百間川沢田遺跡 3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 84
- 岡山県教育委員会 1994 「百間川原尾島遺跡 3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 88
- 岡山県教育委員会 1994 「中井・南三反田遺跡（備前国府推定地）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 92
- 岡山県教育委員会 1995 「百間川原尾島遺跡 4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 97
- 岡山県教育委員会 1995 「米田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 101
- 岡山県教育委員会 1996 「百間川原尾島遺跡 5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 106
- 岡山県教育委員会 1996 「百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 114
- 岡山県教育委員会 1997 「百間川兼基遺跡 3 百間川今谷遺跡 3 百間川沢田遺跡 4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 119
- 岡山市教育委員会 1998 「備前国府推定地（南国長）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996（平成8）年度』
- 岡山市教育委員会 1998 「乙多見遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要 1996（平成8）年度』
- 岡山県教育委員会 1999 「原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 139
- 岡山県教育委員会 2000 「原尾島遺跡 沢田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 153
- 岡山市教育委員会 2001 「北口遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999（平成11年度）』
- 岡山県教育委員会 2002 「百間川米田遺跡 4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 164
- 岡山県教育委員会 2004 「百間川原尾島遺跡 6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 179
- 岡山市教育委員会 2004 『ハガ遺跡』
- 岡山市教育委員会 2005 『史跡賞田廃寺』
- 岡山市教育委員会 2005 『赤田東遺跡』
- 岡山市教育委員会 2006 「赤田西遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報5 2004（平成16）年度』
- 岡山市教育委員会 2007 『東岡山遺跡』
- 岡山県教育委員会 2007 「百間川兼基遺跡 4 百間川沢田遺跡 5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 208
- 岡山県教育委員会 2008 「百間川原尾島遺跡 7 百間川二の荒手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 215
- 岡山県教育委員会 2009 「百間川今谷遺跡 4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 217
- 岡山県教育委員会 2009 「中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 221
- 岡山市教育委員会 2009 「北国長遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報8 2007（平成19）年度』
- 岡山市教育委員会 2011 「国長遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報10 2009（平成21）年度』
- 岡山市教育委員会 2012 『南古市場遺跡』
- 岡山県教育委員会 2013 「百間川原尾島遺跡 8 百間川沢田遺跡 6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 239
- 岡山県教育委員会 2014 「百間川原尾島遺跡 1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 24
- 岡山市教育委員会 2015 『幡多廃寺』
- 岡山市教育委員会 2017 『雄町遺跡』
- 岡山市教育委員会 2019 「西口（高島小）遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報18 2017（平成29）年度』

遺構一覧・遺物観察表凡例

1 遺構一覧表

- ・（数値）は残存最大値を示す。

竪穴住居

- ・床面積は平面したばで囲まれた面積を示した。

掘立柱建物

- ・桁行と梁行及び柱間距離は、柱穴間の直線距離を測り、その最小～最大値を示した。
- ・面積は建坪を示す。

土坑

- ・底面標高は、断面実測箇所の数値を示す。

溝

- ・深さ、底面標高は断面実測箇所の数値を示す。

2 遺物観察表

土器

- ・口径の（数値）は口縁部残存率が1／6以下、あるいは歪みのため、径が不確かであることを示す。
- ・器高の（数値）は残存値であることを示す。
- ・色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

金属器・土製品・石製品・木製品・玉類

- ・計測値の（数値）は残存値を示す。
- ・石製品及び玉類の材質は、岡山大学大学院鈴木茂之特命教授の同定による。
- ・木製品の樹種及び種子の種類は、パリノ・サーヴェイ株式会社の同定による。
- ・土製品及び玉類の色調は、土器の色調に準ずる。
- ・白玉の計測値は、平面における長径を最大長、短径を最大幅としている。

遺構一覽表

竪穴住居

掲載 番号	主軸 方向	残存 状況	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主柱 本数	床面積 (㎡)	床面標高 (m)	壁体溝	カマド	時期	特記事項
竪穴住居 1	東西	約1/2	方形	540	(352)	1 +	(15.7)	3.44	×	西辺	6世紀前半 (M T15)	

掘立柱建物

掲載 番号	規 模			柱 穴			面積 (㎡)	棟方向	主軸	時期	特記事項
	間数	桁行 (cm)	梁行 (cm)	形状	桁間 (cm)	梁間 (cm)					
掘立柱建物 1	3 × 1	681～688	463～477	円	182～315	463～477	32.2	東西	N-1° -E	中世以降	
掘立柱建物 2	2 × 1	335～466	298～310	円	133～333	293～310	13.7	南北	N-7° -W	中世以降	
掘立柱建物 3	2 × 1	422～456	355～360	円	192～230	355～360	15.7	南北	N-6.5° -W	中世以降	

土坑

掲載 番号	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (m)	時期	特記事項
			長軸	短軸	深さ			
土坑 1	楕円	逆台	170	115	48	2.75	百・中・Ⅰ新	
土坑 2	楕円	皿	(63)	69	20	3.30	百・古・Ⅲ	
土坑 3	隅丸方	箱	101	70	18	3.62	17世紀第2～4四半期	

溝

掲載 番号	流走 方向	規模 (cm)			断面形	底面標高 (m)		時期	特記事項
		上面幅	下面幅	深さ					
溝 1	南北	180～210	35～50	62	逆台	(北) 2.54	(南) 2.52	百・後・Ⅱ～Ⅲ	
溝 2	東西	155～220	26～50	67	逆台	2.58		百・後・Ⅱ～Ⅲ	
溝 3	南北	230～260	50～100	92	逆台	(北) 2.34	(南) 2.26	百・後・Ⅳ	
溝 4	南北	49	13	19	U	2.99		弥生時代後期前半以前	
溝 5	南北	290	30	80	逆台	(北) 2.48	(南) 2.48	百・後・Ⅱ	東側にテラス
溝 6	南北	160～200	30～40	92	逆台	(北) 2.34	(南) 2.26	百・中・Ⅱ	
溝 7	南北	160	30	50	U	(北) 2.60	(南) 2.66	百・後・Ⅳ ?	
溝 8	南北	64～92	20～40	25	U	(北) 2.26	(南) ー	百・後・Ⅳ	
溝 9	南北	90	30～70	62	U	(北) 2.68	(南) 2.72	百・後・Ⅳ	溝10と合流
溝10	南北	178	30～50	61	U	(北) 2.48	(南) 2.65	百・後・Ⅳ	溝9と合流
溝11	南北	100	40	88	U	(北) 2.30	(南) 2.58	百・後・Ⅳ ?	
溝12	南北	95	40	75	U	(北) 2.44	(南) 2.61	百・後・Ⅳ以前	
溝13	東西	210	176	16	皿	3.5		古墳時代	
溝14	東西	50～82	10～30	60	U	(西) 3.35	(東) 3.10	古墳時代	
溝15	東西	70～130	50～100	9	凸凹	3.36		古墳時代後期	
溝16	南北	820～1160	340	174	逆台	(北) 2.20	(南) 1.90	古墳時代後期	
溝17	南北	(400)	ー	76	皿	2.77		6 C後半～7 C初頭	
溝18	南北	530	350	95	逆台	(北) 2.50	(南) 2.90	～7 C	
溝19	南北	90～160	40	52	逆台	(北) 2.88	(南) 3.01	7 C前半	
溝20	南北	78	38	43	逆台	3.16		7 C前半	
溝21	南北	80	30	34	U	3.3		7 C中葉 ?	
溝22	南北	76	30	15	U	3.41		7 C中葉	
溝23	南北	70	47	25	U	3.38		7 C中葉	
溝24	東西	20～45	10	14	皿	(西) 3.44	(東) 3.46	12C	
溝25	東西	16～32	5	14	皿	(西) 3.58	(東) 3.61	12C	

遺物観察表

土器

掲載 番号	遺構・ 土層名	種別	器種	残存 状況	計測値 (cm)			色調			胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	断面			
1	土坑1	弥生土器	壺	欠	—	—	(22.8)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
2	土坑1	弥生土器	甕	欠	(28.4)	—	(26.3)	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙7.5YR8/4	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
3	柱穴列 1-P12	弥生土器	壺	欠	(17.2)	—	(3.55)	灰白2.5Y7/1	にぶい黄橙10YR7/3	黒N2/0	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
4	柱穴列 1-P7	弥生土器	壺	欠	(21.1)	—	(8.1)	黒褐10YR3/1	黒褐10YR3/1	黒褐10YR3/1	3mm以下の砂粒(多)	良好	
5	柱穴列 1-P14	弥生土器	甕	欠	—	—	(0.85)	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
6	柱穴列 1-P6	弥生土器	甕	欠	—	—	(4.4)	橙5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/3	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
7	柱穴列 1-P6	弥生土器	甕	欠	—	—	(2.1)	橙5YR6/6	明赤褐2.5YR5/6	灰白10YR8/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
8	柱穴列 1-P6	弥生土器	甕	欠	—	—	(1.1)	明赤褐5YR5/6	にぶい赤褐5YR5/4	明赤褐5YR5/6	1mm以下の砂粒(多)	良好	
9	柱穴列 1-P1	弥生土器	甕	欠	—	—	(3.5)	黒褐7.5YR3/1	灰褐7.5YR4/2	明褐灰7.5YR7/2	4mm以下礫(少)、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
10	柱穴列 1-P10	弥生土器	甕	欠	—	—	(1.2)	浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
11	柱穴列 1-P13	弥生土器	甕	欠	(34.0)	—	(4.7)	黒褐5YR3/1	黒褐7.5YR3/1	にぶい赤褐5YR4/3	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
12	柱穴列 1	弥生土器	甕	欠	—	(6.2)	(5.2)	にぶい黄橙10YR5/3	灰黄褐10YR5/2	にぶい黄橙10YR6/4	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
13	柱穴列 1-P3	弥生土器	甕	欠	—	(6.2)	(4.0)	灰黄褐10YR5/2	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄橙10YR6/3	3mm以下の砂粒(多)	良好	
14	柱穴列 1-P6	弥生土器	甕	欠	—	(6.1)	(2.3)	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
15	柱穴列 2-P5	弥生土器	甕	欠	(19.4)	—	(16.3)	にぶい黄橙10YR7/3	橙5YR6/6	褐灰10YR5/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
16	柱穴列 2-P1	弥生土器	甕	欠	—	—	(4.5)	にぶい黄褐10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	浅黄橙10YR8/3	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒(やや多)	良好	
17	柱穴列 2-P2	弥生土器	甕	欠	—	(6.4)	(3.1)	灰黄褐10YR6/2	にぶい赤褐5YR5/3	灰黄褐10YR6/2	2mm以下の砂粒(多)	良好	
18	柱穴列 3-P4	弥生土器	壺	欠	—	(12.4)	(4.4)	灰黄褐10YR5/2	橙5YR6/8	灰褐7.5YR4/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
19	柱穴列 3-P4	弥生土器	甕	欠	—	8.0	(5.2)	橙5YR6/8	にぶい褐7.5YR5/4	灰褐7.5YR5/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
20	柱穴列 3-P5	弥生土器	甕	欠	—	(5.5)	(4.5)	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
21	溝1	弥生土器	器台?	欠	(20.0)	—	(2.6)	にぶい橙5YR6/4	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR8/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
22	溝1	弥生土器	長頸壺	欠	(15.0)	—	(20.0)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3	黒褐10YR3/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒(やや多)	良好	
23	溝1	弥生土器	壺	欠	(13.3)	—	(9.4)	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	黒褐7.5YR3/1	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
24	溝1	弥生土器	壺	欠	10.6	—	(5.1)	灰黄褐10YR4/2	黒褐10YR3/2	にぶい赤褐5YR5/4	3mm以下の礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
25	溝1	弥生土器	甕	欠	(20.0)	—	(2.7)	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	褐灰10YR5/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
26	溝1	弥生土器	甕	欠	(20.8)	—	(4.3)	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR6/3	浅黄橙10YR8/3	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
27	溝1	弥生土器	甕	欠	(19.2)	6.9	33.6	灰黄褐10YR6/2	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR8/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
28	溝1	弥生土器	鉢?	欠	(17.3)	—	(11.1)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	褐灰10YR4/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
29	溝1	弥生土器	高杯	欠	(18.3)	—	(5.2)	橙5YR7/6	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の砂粒(多)(精良)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	良好	
30	溝1	弥生土器	甕	欠	—	(12.0)	(5.8)	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR4/2	明赤褐5YR5/6	3mm以下礫、2mm以下砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	良好	
31	溝2	弥生土器	壺	欠	—	—	(5.0)	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR6/2	黒褐10YR3/1	2mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母	良好	
32	溝3	弥生土器	壺	欠	—	—	(4.65)	灰黄褐10YR4/2	黒褐10YR3/2	灰褐5YR4/2	4mm以下礫、2mm以下砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
33	溝3	弥生土器	甕	欠	(16.0)	—	(3.3)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	褐灰10YR6/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
34	溝3	弥生土器	甕	欠	(11.0)	—	(3.8)	灰白10YR8/2	浅黄橙10YR8/3	灰白10YR8/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
35	溝3	弥生土器	甕	欠	—	—	(2.8)	灰白10YR8/2	黒N1.5/0	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
36	溝3	弥生土器	高杯	欠	—	—	(5.5)	橙5YR6/6	にぶい橙5YR7/4	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
37	溝3	弥生土器	甕	欠	—	5.0	(4.05)	灰5Y4/1	黒10Y2/1	灰5Y5/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
38	溝3	弥生土器	甕	欠	—	(5.4)	(3.8)	褐灰10YR4/1	黒10YR2/1	褐灰10YR4/1	2mm以下の砂粒(多)	良好	
39	溝3	弥生土器	甕	欠	—	(7.8)	(3.3)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい橙7.5YR7/4	褐灰10YR6/1	1mm以下の砂粒(多)	良好	
40	溝5	弥生土器	壺	欠	(17.4)	—	(1.3)	灰黄褐10YR5/2	にぶい黄橙10YR7/2	暗灰N3/0	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
41	溝5	弥生土器	壺	欠	(15.4)	—	(17.5)	橙5YR7/6	橙7.5YR7/6	褐灰10YR5/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
42	溝5	弥生土器	甕	欠	(21.4)	—	(4.7)	灰白10YR8/2	灰黄2.5Y7/2	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
43	溝5	弥生土器	甕	欠	17.0	—	(14.1)	灰黄褐10YR5/2	褐灰10YR4/1 (一部明赤褐2.5YR5/6)	灰黄褐10YR5/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
44	溝5	弥生土器	甕	欠	—	—	(1.3)	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1	灰5Y	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
45	溝5	弥生土器	甕	欠	—	—	(3.4)	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	灰白2.5Y7/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
46	溝5	弥生土器	甕	欠	—	—	(2.6)	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR4/2	褐灰10YR4/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
47	溝5	弥生土器	甕	欠	—	—	(3.2)	灰黄褐10YR4/2	褐灰10YR4/1	にぶい黄橙10YR6/3	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
48	溝5	弥生土器	甕	欠	—	—	(2.8)	灰白10YR8/1	灰白10YR8/2	褐灰10YR6/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
49	溝5	弥生土器	甕	欠	—	—	(3.2)	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	灰黄2.5Y7/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
50	溝5	弥生土器	瓶形	欠	—	(6.1)	(3.3)	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄褐10YR5/2	褐灰10YR5/1	2mm以下の砂粒(多)	良好	
51	溝5	弥生土器	瓶形	欠	—	(4.5)	(2.7)	浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	

掲載 番号	遺構・ 土層名	種別	器種	残存 状況	計測値(cm)			色調			胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	断面			
52	溝5	弥生土器	壺	欠	—	(11.0)	(7.7)	灰黄2.5Y7/2	にぶい黄橙10YR7/2	灰白2.5Y7/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
53	溝5	弥生土器	壺	欠	—	(10.0)	(5.5)	浅黄2.5Y7/3	橙5YR6/6	褐灰10YR5/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
54	溝5	弥生土器	壺	欠	—	(10.2)	(4.9)	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR8/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
55	溝5	弥生土器	甕	欠	—	6.0	(6.8)	灰黄2.5Y6/2	黒褐10YR3/2	灰5Y4/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
56	溝5	弥生土器	甕	欠	—	6.0	(3.0)	黄灰2.5Y4/1	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい赤褐5YR4/4	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
57	溝5	弥生土器	甕	欠	—	(6.1)	(4.0)	灰黄褐10YR6/2	にぶい橙7.5YR7/4	褐灰10YR6/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
58	溝5	弥生土器	甕	欠	—	4.8	(4.45)	黄灰2.5Y4/1	黒褐2.5Y3/1	灰黄褐10YR5/2	4mm以下礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
59	溝5	弥生土器	甕	欠	—	5.0	(3.4)	にぶい褐7.5YR6/3	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
60	溝5	弥生土器	壺	欠	—	(10.0)	(5.9)	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR5/2	褐灰10YR5/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
61	溝5	弥生土器	甕	欠	—	(6.6)	(15.5)	灰黄褐10YR6/2	にぶい黄橙10YR6/3	灰黄褐10YR6/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
62	溝5	弥生土器	甕	欠	—	4.0	(4.2)	灰黄褐10YR5/2	にぶい橙5YR6/4	褐灰10YR5/1	2mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
63	溝5	弥生土器	甕	欠	—	6.0	(1.4)	黄灰2.5Y5/1	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい褐7.5YR5/3	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
64	溝5	弥生土器	甕	欠	—	4.8	(3.0)	灰白10YR8/1	灰白10YR8/1	黒N2/0	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
65	溝5	弥生土器	高杯	欠	—	—	(4.9)	橙5YR6/6	橙2.5YR6/6	黒N1.5/0	1mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒、精良	良好	
66	溝6	弥生土器	壺	欠	(15.9)	—	(5.0)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
67	溝6	弥生土器	壺	欠	13.6	—	(5.0)	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	黄灰2.5Y4/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
68	溝6	弥生土器	甕	欠	—	—	(1.65)	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/1	黄灰2.5Y5/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
69	溝6	弥生土器	手捏ね土器	欠	(7.1)	—	(2.8)	にぶい褐7.5YR6/3	にぶい褐7.5YR6/3	灰褐7.5YR5/2	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
70	溝6	弥生土器	壺	欠	—	(8.6)	(2.7)	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/3	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
71	溝6	弥生土器	甕	欠	—	(5.3)	(3.9)	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄褐10YR5/2	にぶい黄橙10YR7/2	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
72	溝6	弥生土器	甕?	欠	—	7.0	(4.3)	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y6/2	黒褐2.5Y3/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
73	溝10	弥生土器	高杯	欠	—	—	(5.8)	灰白10YR8/2	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい黄橙10YR6/3	2mm以下の砂粒・赤色酸化(中)・雲母(中)・長石・石英(僅)	良好	
74	P 1	弥生土器	甕	欠	25.0	—	(8.9)	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	黄灰2.5Y4/1	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
75	P 2	弥生土器	甕	欠	—	—	(2.0)	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10YR8/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
76	その他	縄文土器	深鉢	欠	—	—	(2.5)	浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙10YR7/2	浅黄橙10YR8/3	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
77	その他	縄文土器	深鉢	欠	—	—	(2.1)	浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙10YR7/2	褐灰10YR6/1	2mm以下の砂粒(多)	良好	
78	その他	縄文土器	深鉢	欠	—	—	(3.0)	灰白2.5Y8/2	灰白2.5Y8/2	黒褐10YR3/1	2.5mm以下の砂粒・長石・石英(多)・雲母(少)	良好	
79	その他	弥生土器	壺	欠	(内)14.0	—	(6.0)	灰褐7.5YR6/2	灰褐7.5YR6/2	灰褐7.5YR6/2	2.5mm以下の砂粒・長石・石英(多)・雲母(中)	良好	
80	その他	弥生土器	甕	欠	—	—	(2.4)	橙5YR7/6	橙5YR6/6	にぶい橙5YR7/4	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
81	その他	弥生土器	甕	欠	(13.6)	—	(8.7)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	4mm礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
82	その他	弥生土器	白付鉢	欠	(10.4)	(4.6)	7.6	橙5YR7/6	浅黄橙10YR8/3	褐灰10YR6/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒、やや精良	良好	
83	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	欠	(12.4)	—	(3.3)	灰N6/0	灰N5/0	にぶい赤褐5YR5/3	2mm以下の砂粒(多)	良好	
84	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	欠	14.0	—	4.6	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
85	竪穴住居1	須恵器	杯蓋	欠	14.5	—	5.1	灰N6/0	灰N5/0	灰N6/0	4mm以下礫、2mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
86	竪穴住居1	須恵器	杯身	欠	(12.8)	—	(5.5)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	2mm以下の砂粒(多)(やや砂粒粗い)・長石・石英・雲母	良好	
87	竪穴住居1	須恵器	杯身	欠	—	—	(4.1)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	2mm以下の砂粒(中)	良好	
88	竪穴住居1	土師器	甕	欠	(18.7)	—	(3.6)	橙5YR6/6	橙5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の砂粒(中)・赤色酸化土粒、やや精良	良好	
89	竪穴住居1	土師器	甕	欠	(22.2)	—	(7.8)	橙5YR6/6	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒(やや多)	良好	
90	竪穴住居1	土師器	甕	欠	(17.2)	—	(6.5)	黄橙7.5YR7/8	黄橙7.5YR7/8	黄橙7.5YR7/8	2mm以下の砂粒(多)	良好	
91	竪穴住居1	製塩土器	製塩土器	欠	—	—	(2.9)	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	褐灰10YR4/1	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
92	土坑2	土師器	甕	欠	16.8	—	(4.1)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	6.5mm以下の赤色酸化土粒(中)・4mm以下の砂粒(中)・雲母(少)	良好	
93	溝15	須恵器	高杯	欠	—	(9.0)	(1.5)	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	1mm以下の砂粒(多)・長石・石英・雲母	やや軟	
94	溝16	須恵器	杯蓋	欠	(15.1)	—	(3.9)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	2mm以下の砂粒(中)	良好	
95	溝16	須恵器	杯蓋	欠	(10.0)	—	(2.1)	灰白N7/0	灰白2.5Y7/1	灰白N7/0	2mm以下の砂粒(多)	良好	
96	溝16	須恵器	杯蓋	欠	—	—	(2.1)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
97	溝16	須恵器	杯蓋	欠	—	—	(0.9)	灰白N7/0	灰白5Y7/1	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
98	溝16	須恵器	杯身	欠	—	—	(2.3)	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	1mm以下の砂粒(多)	良好	
99	溝16	須恵器	杯身	欠	—	(8.6)	(1.3)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
100	溝16	須恵器	甕	ほぼ完	19.0	—	28.2	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
101	溝16	土師器	甕	欠	—	—	(3.2)	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	暗灰N3/0	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒(やや多)	良好	
102	溝16	土師器	甕	欠	(18.9)	—	(5.5)	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	122と同一か
103	溝16	土師器	鉢	欠	—	—	(2.9)	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
104	溝16	須恵器	杯蓋	欠	(14.0)	—	(4.6)	灰N5/0	灰N5/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
105	溝16	須恵器	杯蓋	欠	(14.2)	—	(4.3)	灰白N8/0	灰白5Y7/1	灰白N8/0	4mm以下礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
106	溝16	須恵器	杯蓋	完	14.8	—	4.6	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄2.5Y7/2		2mm以下の砂粒(中)・赤色酸化土粒(多)	堅緻	土師質
107	溝16	須恵器	杯身	ほぼ完	10.5	—	5.3	灰N5/0	灰N5/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
108	溝16	須恵器	杯身	完	13.0	—	4.8	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2		3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
109	溝16	須恵器	杯身	欠	12.8	—	(2.9)	灰7.5Y6/1	灰N4/0	灰N4/0	3mm以下の砂粒(中)	良好	
110	溝16	須恵器	杯身	欠	(12.6)	—	(2.4)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
111	溝16	須恵器	高杯	欠	12.0	—	8.4	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	4mm以下礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	

掲載 番号	遺構・ 土層名	種別	器種	残存 状況	計測値(cm)			色調			胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	断面			
112	溝16	須恵器	高杯	欠	—	(9.4)	(4.6)	灰N5/0	灰N4/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(少)長石・石英	良好	
113	溝16	須恵器	高杯	欠	—	12.0	(10.1)	灰白N7/0	灰N5/0	灰白N7/0	4mm以下の砂粒(中)	良好	
114	溝16	須恵器	高杯	欠	—	(9.1)	(6.0)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	2mm以下の砂粒(中)	良好	
115	溝16	須恵器	ハク?	欠	—	—	(4.5)	灰N6/0	灰N5/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(少)	良好	
116	溝16	須恵器	壺?	欠	(7.6)	—	(5.4)	灰N6/0	灰白N7/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
117	溝16	須恵器	壺	欠	—	—	(13.8)	灰N6/0	灰白5Y7/1	灰N6/0・外側部に い橙5YR6/4(約2mm)	3～5mm礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
118	溝16	須恵器	壺	欠	—	—	(10.8)	灰白N7/0	灰N4/0	灰白N8/0	4mm以下礫(少)、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
119	溝16	須恵器	短頸壺	欠	(8.3)	—	(5.8)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	2mm以下の砂粒(中)	良好	
120	溝16	須恵器	甕	欠	23.0	—	(7.8)	暗灰N3/0、灰N6/0	暗灰N3/0	灰N6/0	3mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
121	溝16	土師器	甕	欠	(18.8)	—	30.4	い黄橙10YR7/2	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	4mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
122	溝16	土師器	甕	欠	(20.4)	—	(4.8)	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6	い黄橙7.5YR6/4	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	102と 同一か
123	溝16	土師器	甕	欠	(25.5)	—	(5.9)	い黄橙7.5YR7/4	灰黄橙10YR5/2	い黄橙7.5YR6/4	3mm以下の砂粒(多)長・赤色酸化土粒	良好	
124	溝16	土師器	甕	欠	(22.0)	—	(19.5)	灰黄2.5Y7/2	浅黄橙10YR8/3	褐灰10YR6/1	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
125	溝16	土師器	壺	欠	(11.0)	—	(5.8)	い黄橙7.5YR7/3	い黄橙7.5YR7/3	い黄橙7.5YR7/4	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
126	溝16	土師器	甕	欠	—	—	(5.35)	い黄橙10YR7/3	い黄橙10YR7/3	い黄橙10YR7/3	3mm以下礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
127	溝16	土師器	手捏ね 土器	欠	8.6	—	3.7	褐灰10YR4/1	灰黄褐10YR6/2	い黄橙10YR6/3	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
128	溝16	土師器	壺?	欠	—	—	(8.0)	い黄橙7.5YR7/4	橙5YR7/8	橙5YR7/8	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒、やや精良	良好	
129	溝16	土師器	高杯	欠	(19.5)	—	(6.1)	橙5YR7/6	い黄橙7.5YR7/4	橙5YR7/6	4mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒、やや精良	良好	
130	溝16	土師器	不明	欠	—	(5.4)	(6.4)	褐灰10YR6/1	黒褐7.5YR3/1	黒灰10YR6/1	4mm以下礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
131	溝16	土師器	甕	欠	(13.7)	—	(3.1)	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6	2mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒 (やや多)	良好	
132	溝16	土師器	甕	欠	(13.4)	—	(2.6)	い黄橙10YR6/4	い黄橙10YR6/4	い黄橙10YR6/4	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
133	溝16	土師器	甕	欠	(13.5)	—	(4.8)	橙5YR6/8	橙5YR6/8	橙5YR6/6	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
134	溝16	土師器	甕	欠	15.4	—	(20.0)	い黄橙10YR7/2	橙2.5YR6/6 黒 N1.5/0	橙2.5YR6/6	2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	煤
135	溝16	土師器	高杯	欠	(20.3)	—	(5.6)	橙7.5YR6/6	い黄橙7.5YR6/4	橙7.5YR6/6	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
136	溝16	土師器	高杯	欠	—	(10.5)	(2.1)	い黄橙7.5YR7/4	い黄橙7.5YR7/4	橙5YR6/6	3mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒(多)、やや精良	良好	
137	溝17	須恵器	杯蓋	欠	(13.8)	—	(2.9)	灰N5/0	灰N5/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
138	溝17	須恵器	杯蓋	欠	(12.6)	—	(4.7)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白5Y7/1	2.5mm以下の砂粒(少)	良好	
139	溝17	須恵器	杯身	欠	(12.3)	—	(2.0)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
140	溝17	須恵器	杯身	欠	11.9	—	3.9	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	3mm以下の砂粒(中)	良好	
141	溝17	須恵器	壺	欠	7.3	—	(7.3)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
142	溝17	土師器	不明	欠	径:13.2	厚:2.1	長:15.9	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	4mm以下の砂粒・長石・石英(多)5～7mm程礫6～7個 (数個)含む	良好	
143	溝18	須恵器	杯蓋	欠	(14.2)	—	(3.5)	灰N6/0	灰N6/0	い黄褐7.5YR5/3	1mm以下の砂粒(中)	良好	
144	溝18	須恵器	杯蓋	欠	(14.4)	—	(4.35)	灰N5/0	灰N5/0	灰褐7.5YR5/2	2mm以下の砂粒(少)	良好	
145	溝18	須恵器	杯蓋	ほぼ 完	12.5		4.2	灰白N8/0	灰白N7/0	灰白N8/0	2mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
146	溝18	須恵器	杯蓋	ほぼ 完	11.2	—	3.9	灰白7.5Y7/1	灰白7.5Y7/1		直径2mm以下の砂粒・赤色酸化土粒	やや 不良	
147	溝18	須恵器	杯蓋	欠	10.7	—	4.8	灰白N7/1	灰白N7/1	灰白N7/1	2mm以下の砂粒(中)	良好	
148	溝18	須恵器	杯蓋	欠	—	—	(1.7)	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	2mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
149	溝18	須恵器	杯蓋	欠	—	—	(2.2)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	2.5mm以下の砂粒(中)・雲母(少)	良好	
150	溝18	須恵器	杯蓋	欠	13.8	—	(1.3)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	2mm以下の砂粒(少)	良好	
151	溝18	須恵器	杯蓋	欠	(14.8)	—	(3.2)	灰白N7/0	灰N6/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
152	溝18	須恵器	杯身	欠	(10.4)	—	(5.7)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	3mm以下の砂粒(中)	良好	
153	溝18	須恵器	杯身	欠	(11.3)	—	(5.0)	灰N5/0	灰N5/0	灰N5/0	1mm以下の砂粒(中)	良好	
154	溝18	須恵器	杯身	欠	(11.0)	—	(3.7)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	3mm以下の砂粒(多)	良好	
155	溝18	須恵器	杯身	欠	(12.2)	—	4.8	灰白N8/0	灰白N8/0	灰白N8/0	2mm以下の砂粒(多)	良好	
156	溝18	須恵器	杯身	欠	(11.2)	(6.2)	3.4	灰N6/0	灰N6/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(多)	良好	
157	溝18	須恵器	杯身	欠	12.0	7.0	3.3	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y7/1	2mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
158	溝18	須恵器	杯身	ほぼ 完	11.6	—	3.5	灰N5/0	灰N5/0	灰N5/0	2mm以下の砂粒(多)	良好	
159	溝18	須恵器	高杯	欠	—	12.6	10.7	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	2mm以下の砂粒(少)・赤色酸化土粒	良好	
160	溝18	須恵器	高杯	欠	(12.6)	11.4	12.9	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	3.5mm以下の砂粒(中)	良好	歪みあり
161	溝18	須恵器	高杯	欠	10.6	7.6	8.2	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N8/0	2mm以下の砂粒(僅)・赤色酸化土粒、精良	良好	ひずみ 激しい
162	溝18	須恵器	高杯	欠	(13.5)	10.0	8.7	灰N5/0	灰N5/0	灰白5Y7/1	2.5mm以下の砂粒(少)・黒色砂粒(僅)	良好	
163	溝18	須恵器	高杯	欠	—	9.4	(1.4)	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	2mm以下の砂粒(少)	良好	
164	溝18	須恵器	高杯	欠	—	(9.2)	(5.4)	灰白N8/0	灰白N8/0	灰白N8/0	1mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	やや 不良	
165	溝18	須恵器	高杯	欠	—	8.8	(5.9)	灰N6/0	灰N5/0	灰白2.5Y8/1	1mm以下の砂粒(多)	良好 (やや瓦 質?)	
166	溝18	須恵器	壺	欠	(10.0)	—	(6.3)	黄灰2.5Y6/1	黄灰2.5Y6/1	灰白2.5Y7/1	1mm以下の砂粒(少)	良好	
167	溝18	須恵器	壺	欠	—	—	(8.7)	灰N4/0	灰N4/0	灰N4/0	4mm以下の砂粒(中)	良好	
168	溝18	須恵器	壺	完	8.2	2.8	10.3	灰N8/0	灰白N7/0	灰N8/0	5mm以下の礫2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	自然釉
169	溝18	須恵器	平瓶?	欠	6.8		(16.8)	灰白2.5Y8/1	灰白N7/0	灰白2.5Y8/1	2mm以下の砂粒・長石・石英(中)	良好	
170	溝18	須恵器	壺?	欠	—	10.0	(8.1)	灰白N7/0	灰白8/0	灰白8/0	5mm以下の礫、2mm以下の砂粒(多)・赤色酸化土粒	良好	
171	溝18	須恵器	甕	欠	(14.4)	—	(4.4)	灰N6/0	灰N6/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(中)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	良好	
172	溝18	須恵器	甕	欠	(22.6)	—	(7.6)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	2mm以下の砂粒(多)	良好	
173	溝18	須恵器	甕?	欠	—	—	(2.9)	灰N6/0	灰N6/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒(少)	良好	

掲載 番号	遺構・ 土層名	種別	器種	残存 状況	計測値 (cm)			色調			胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	内面	外面	断面			
174	溝18	須恵器	甕	欠	(24.0)	—	(24.5)	褐灰10YR6/1	褐灰10YR6/1	灰N5/0	4mm以下の砂粒 (中)	良好	
175	溝18	須恵器	甕	欠	—	—	(32.0)	灰10Y5/1	灰N5/0	灰N5/0	4mm以下の砂粒 (中)	良好	
176	溝18	土師器	甕	欠	—	—	(25.6)	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の砂粒 (少)・雲母 (中)・赤色酸化土粒 (少)	良好	
177	溝18	土師器	甕	欠	23.1	—	(23.6)	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の砂粒・長石・石英 (中)・雲母 (中)・赤色酸化土粒 (少)	良好	
178	溝18	土師器	甕	欠	13.7	—	(9.2)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
179	溝18	土師器	甕	欠	—	—	(7.6)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
180	溝18	土師器	甕	欠	16.3	—	(15.4)	灰黄褐10YR6/2	灰黄褐10YR6/2	黒褐10YR3/1	2.5mm以下の砂粒 (中)	良好	
181	溝18	土師器	甕	欠	(14.9)	—	(5.6)	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
182	溝18	土師器	甕	欠	11.9	—	(3.2)	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR5/2	2mm以下の砂粒 (中)・赤色酸化土粒 (少)	良好	
183	溝18	土師器	甕	欠	—	4.1	(6.8)	灰白2.5Y7/1	浅黄橙10YR8/3	黄灰2.5Y5/1	2mm以下の砂粒 (中)・雲母 (多)	良好	
184	溝18	土師器	甕	欠	(17.4)	—	(5.6)	橙7/5YR7/6	橙7/5YR7/6	橙5YR6/6	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒 (やや多)・やや精良	良好	
185	溝18	土師器	甕	欠	21.3	—	(10.7)	灰白2.5Y8/2	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3	2mm以下の砂粒 (中)・雲母 (少)	良好	
186	溝18	土師器	甕	欠	(23.0)	—	(8.3)	浅黄橙7.5YR8/4	にぶい橙7.5YR7/4	褐灰10YR5/1	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒 (多)	良好	
187	溝18	土師器	甕	欠	26.0	—	(7.6)	橙5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3	6.5mm以下の砂粒 (多)・雲母 (中)	良好	
188	溝18	土師器	甕	欠	(25.0)	—	29.1	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
189	溝18	土師器	甕	欠	32.8	—	(24.5)	浅黄橙10YR8/3	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	3mm以下の礫 (少)・2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
190	溝18	土師器	碗	欠	9.8	—	(3.8)	橙2/5YR6/8	橙2.5YR6/6	10YR8/2灰白	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
191	溝18	土師器	碗	欠	14.8	—	(5.0)	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒 (多)	良好	
192	溝18	土師器	皿	欠	(15.5)	—	(2.6)	橙5YR7/8	橙2.5YR6/8	橙5YR7/8	2mm以下の砂粒 (中)・赤色酸化土粒 (やや多)・やや精良	良好	
193	溝18	土師器	高杯	欠	—	10.4	(7.8)	橙5YR6/6	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR6/4	4mm以下の砂粒 (中)・赤色酸化土粒 (中)	良好	
194	溝19	須恵器	杯蓋	欠	—	—	(2.7)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒 (少)	良好	
195	溝19	土師器	甕	欠	—	—	(2.7)	にぶい褐7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR6/3	灰褐7.5YR5/2	4mm以下の砂粒 (多)・粗い・赤色酸化土粒	良好	
196	溝22	須恵器	杯蓋	欠	(11.0)	—	(2.3)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒 (少)・赤色酸化土粒	良好	
197	溝23	須恵器	杯蓋	欠	(11.8)	—	2.7	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	灰白5Y7/1	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
198	その他	須恵器	杯蓋	欠	(13.0)	—	(4.0)	褐灰7.5YR6/1	褐灰7.5YR6/1	にぶい褐7.5YR6/3	2mm以下の砂粒 (少)	良好	
199	その他	須恵器	杯蓋	欠	13.3	—	3.2	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	1mm以下の砂粒 (中)	良好	
200	その他	須恵器	杯蓋	欠	(12.6)	—	(4.5)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	2mm以下の砂粒 (少)	良好	
201	その他	須恵器	杯蓋	欠	(14.0)	—	(2.8)	灰白N7/0	灰白2.5Y7/1	灰白N7/0	2mm以下の砂粒 (中)・赤色酸化土粒	良好	
202	その他	須恵器	甕	欠	(21.9)	—	(5.7)	灰5Y5/1	灰5Y5/1	灰白N7/0	2mm以下の砂粒 (少)	良好	
203	その他	土師器	壺?	欠	14.0	—	(16.0)	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3	褐灰10YR6/1	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
204	その他	土師器	甕	欠	11.6	—	14.6	灰白10YR7/1	浅黄橙10YR8/3	灰白10YR8/1	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
205	その他	土師器	甕	欠	(16.0)	—	(7.7)	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄褐10YR6/2	にぶい黄橙10YR7/2	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
206	その他	土師器	高杯	欠	(18.0)	—	(3.9)	明赤褐2.5YR5/8	橙2.5YR6/8	明赤褐2.5YR5/8	1mm以下の砂粒 (少)・精良	良好	
207	その他	須恵器	棧橋	欠	(19.6)	—	(5.1)	灰白10YR7/1	灰白10YR7/1	灰白10YR7/1	1.5mm以下の砂粒 (僅)	良好	
208	その他	須恵器	杯身	欠	—	11.0	(2.0)	灰白2.5Y7/1	灰5Y6/1	灰白2.5Y7/1	2mm以下の砂粒 (多)	良好	
209	その他	須恵器	杯身	欠	—	(11.8)	(1.4)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒 (中)	良好	
210	その他	須恵器	杯身	欠	—	(7.4)	(2.1)	灰10Y6/1	灰10Y6/1	灰10Y6/1	2mm以下の砂粒 (多)	良好	
211	その他	須恵器	杯身	欠	—	(9.3)	(2.0)	灰N6/0	灰N6/0	灰N6/0	2mm以下の砂粒 (多)	良好	
212	その他	須恵器	杯身	欠	—	(10.6)	(1.5)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒 (中)	良好	
213	その他	須恵器	杯身	欠	—	(11.2)	(1.1)	灰白N7/0	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒 (中)	良好	
214	その他	須恵器	甕?	欠	15.6	—	(2.9)	灰N5/0	灰N5/0	灰赤10R5/2	4mm以下の砂粒・長石 (少)	良好	
215	その他	須恵器	壺?	欠	—	(12.0)	(3.0)	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y7/1	灰白2.5Y8/1	2mm以下の砂粒 (少)・赤色酸化土粒	良好	
216	その他	須恵器	円面硯	欠	—	—	—	灰N6/0	灰白N7/0	灰白2.5Y7/1	1mm以下の砂粒 (少)・赤色酸化土粒	良好	
217	掘立柱 建物1	瓦器	碗	欠	—	—	(1.4)	灰N5/0	灰N5/0	灰白2.5Y7/1	1mm以下の砂粒 (中)	良好	
218	土坑3	瓦	軒平瓦	欠	長： (7.4)	幅： 3.35	厚さ： 1.5	—	灰N4/0	灰黄2.5Y7/2	1mm以下の砂粒 (多)・雲母 (多)・赤色酸化土粒	良好	
219	土坑3	瓦	平瓦	欠	長： (10.05)	幅： (6.7)	最大 厚：2.1	—	灰白N7/0	灰白N7/0	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
220	土坑3	瓦	丸瓦	欠	長： (9.1)	幅： (7.3)	最大 厚：1.8	暗灰N3/0	灰N4/0	灰白N7/0	2mm以下の砂粒 (中)・赤色酸化土粒	良好	
221	溝24	須恵器	碗	—	—	6.0	(1.5)	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	1.5mm以下の砂粒 (少)	良好	糸切り
222	下がり1	土師器	碗	—	—	(6.7)	(1.7)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	灰白10YR7/1	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒 (やや多)	良好	
223	その他	瓦器	碗	—	—	(6.3)	(1.9)	暗灰N3/0	灰N5/0	灰白2.5Y8/2	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
224	その他	内面黒色 土器	碗	—	—	(6.4)	(1.6)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	黒N2/0	1mm以下の砂粒 (中)・赤色酸化土粒	良好	
225	その他	内面黒色 土器	碗	—	—	(6.0)	—	黒褐10YR3/1	浅黄橙7.5YR8/3	浅黄橙10YR8/3	2mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
226	その他	内面黒色 土器	碗	—	—	(8.4)	(2.3)	暗灰N3/0	橙5YR7/6	灰白10YR8/2	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒 (多)	良好	
227	その他	土師器	碗	—	(15.2)	—	(3.4)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	2mm以下の砂粒 (中)	良好	
228	その他	土師器	碗	—	—	6.4	(1.8)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	灰N4/0	3mm以下の砂粒 (多)・長・赤色酸化土粒	良好	
229	その他	土師器	碗	—	—	(5.6)	(1.8)	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	黒N2/0	1mm以下の砂粒 (多)・赤色酸化土粒	良好	
230	その他	土師器	碗	—	—	(4.2)	(0.9)	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1	1mm以下の砂粒 (多)	良好	
231	その他	土師器	杯	—	(14.0)	(7.2)	—	橙5YR6/8	橙5YR6/8	灰白10YR7/0	1mm以下の砂粒 (少)・赤色酸化土粒	良好	
232	その他	土師器	皿	—	—	10.0	(1.7)	橙7.5YR7/6	にぶい橙7.5YR7/4	橙7.5YR7/6	2mm以下の砂粒・赤色酸化土粒 (多)・雲母 (少)	良好	
233	その他	土師器	小皿	—	7.9	5.0	1.4	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4	1mm以下の砂粒 (少)	良好	
234	その他	瓦質土器	鉢	—	—	—	(3.7)	灰N6/0	灰N5/0	灰白2.5Y7/1	1mm以下の砂粒 (中)	良好	
235	その他	染付	皿	—	(12.2)	—	(2.6)	色調 素地胎土：2.5Y9.2/0.5 (胡粉) ホワイト 文様：2PB3/5 (藍色)	釉薬：5GY8.5/0.3 (オイスター ホワイト)	精良堅緻	良好		

石器・石製品

掲載 番号	掲載遺構名	器種	残存 状況	計測値(mm)			重量 (g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S1	柱穴列1	石斧	基部	(90.0)	(85.0)	(75.0)	724.44	安山岩(岩脈)	百・中・Ⅱ	未成品
S2	柱穴列1	敲石	完	107.0	58.0	42.0	384.43	流紋岩(白亜紀)	百・中・Ⅱ	
S3	柱穴列2	石鏃	完	28.6	16.6	3.5	1.70	サヌカイト	百・中・Ⅱ	
S4	溝2	楔形石器	完	50.0	58.0	20.0	74.50	サヌカイト	百・後・Ⅲ～Ⅳ	
S5	溝3	打製石包丁	欠	(41.0)	(45.3)	(6.4)	15.90	サヌカイト	百・後・Ⅲ～Ⅳ	
S6	溝5	敲石	基部	(118.1)	(54.5)	(40.0)	392.96	塩基性凝灰岩(古生代)	百・後・Ⅱ	磨製石斧転用
S7	溝5	敲石	完	91.1	59.0	22.6	176.37	花崗閃緑岩	百・後・Ⅱ	
S8	溝5	砥石?	欠	(122.0)	(105.5)	(42.7)	545.12	細粒花崗岩	百・後・Ⅱ	
S9	溝6	砥石?	欠	(101.3)	(87.0)	(39.0)	318.52	泥質砂岩(ホルンフェルス)	百・中・Ⅱ	
S10	弥生その他	石鏃	ほぼ完	29.2	22.0	3.2	1.78	サヌカイト		
S11	弥生その他	石鏃	欠	(16.1)	14.4	3.0	0.68	サヌカイト		
S12	弥生その他	打製石包丁	細片	(38.0)	(36.0)	(7.0)	7.76	サヌカイト		コーングロス
S13	竪穴住居1	台石	欠	(83.0)	(160.0)	(100.0)	551.47	デイサイト	6 C前半	
S14	溝16古	有孔円板	完	20.0	21.0	2.1	1.58	緑色片岩	古墳後期	
S15	溝18	鉄鉱石	—	6.0	9.6	5.2	0.48		古墳後期	白石分析
S16	溝18	鉄鉱石	—	14.0	16.4	7.6	1.89		古墳後期	白石分析

土製品

掲載 番号	掲載遺構名	器種	残存 状況	計測値(mm)				重量 (g)	色調	胎土	時期
				最大長	最大幅	最大厚	孔径				
C1	溝16	不明	完	43.1	44.5	16.9		33.01	にぶい橙7.5YR7/3	1.5mm以下の砂粒・長石・石英(中)・雲母(中)	古墳後期
C2	溝18	管状土鍾	完	51.1	9.2	9.6	2.9～3.5	5.01	灰黄褐10YR6/2	1mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	古墳後期
C3	溝19	管状土鍾	完	49.1	14.5	15.8	3.7～3.8	10.97	にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	古墳後期
C4	古墳その他	鞆羽口	欠	52.5	67.0	21.0			にぶい黄橙10YR7/3	5mm以下の礫・2mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	
C5	中世その他	管状土鍾	完	36.9	11.0	9.6	3.5～3.7	3.86	暗赤褐2.5YR5/6	2mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	
C6	中世その他	管状土鍾	完	40.0	11.0	10.0	3.6	4.05	灰白2.5Y7/1	2mm以下の砂粒(多)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	
C7	中世その他	管状土鍾	完	53.2	11.4	11.3	3.8	5.44	橙2.5YR6/6	2mm以下の砂粒(少)長石・石英・雲母・赤色酸化土粒	
C8	中世その他	管状土鍾	完	58.1	22.4	21.4	4.6～5.7	31.03	灰黄2.5Y6/2	2mm以下の砂粒・長石・石英(中)・雲母(少)	

金属器

掲載 番号	掲載遺構名	器種	残存 状況	計測値(mm)			重量(g)	材質	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
M 1	古墳その他	鉄鏃	欠	(28.1)・(45.5)	10.5	2.5	1.24・2.10	鉄	古墳後期	同一個体片か
M 2	中世その他	釘	欠	(68.2)	7.0	4.5	1219	鉄	中世以降	

木製品

掲載 番号	掲載遺構名	器種	残存状況	計測値 (cm)			材質	鑑定番号	備考
				最大長	最大幅 (径)	最大厚			
W 1	溝16	斧柄	ほぼ完	29.4	17.0		カヤ	7	
W 2	溝16	二又棒	欠	23.2	1.6	－	アワブキ属	5	加工痕有り
W 3	溝16	二又棒	欠	25.7	2.1	－			
W 4	溝16	砲弾形木製品	欠	20.3	9.8	7.9	アカガシ亜属	9	
W 5	溝16	砲弾形木製品	完	15.0	10.5	7.8	イスノキ	6	
W 6	溝16	加工棒	完	146.5	4.3	4.7	クスギ節	8	
W 7	溝16	杭	欠	(117.9)	5.4	5.6			
W 8	溝16	杭	欠	(26.05)	2.3	2.35			W 8 と同じ種類
W 9	溝16	杭	欠	27.6	4.0	3.9	クスギ節	10	
W10	溝16	角材	欠	27.0	6.9	－			被熱
W11	溝16	板材	欠	74.2	13.6	4.1	モミ属	4	
W12	溝18	板材	欠	(5.3)	(5.3)	0.5	広葉樹	1	
	溝18	杭	欠	34	4		クスギ節?	2	堰構造材か
	溝18	棒状	欠				クスギ節?	3	堰構造材か

玉製品

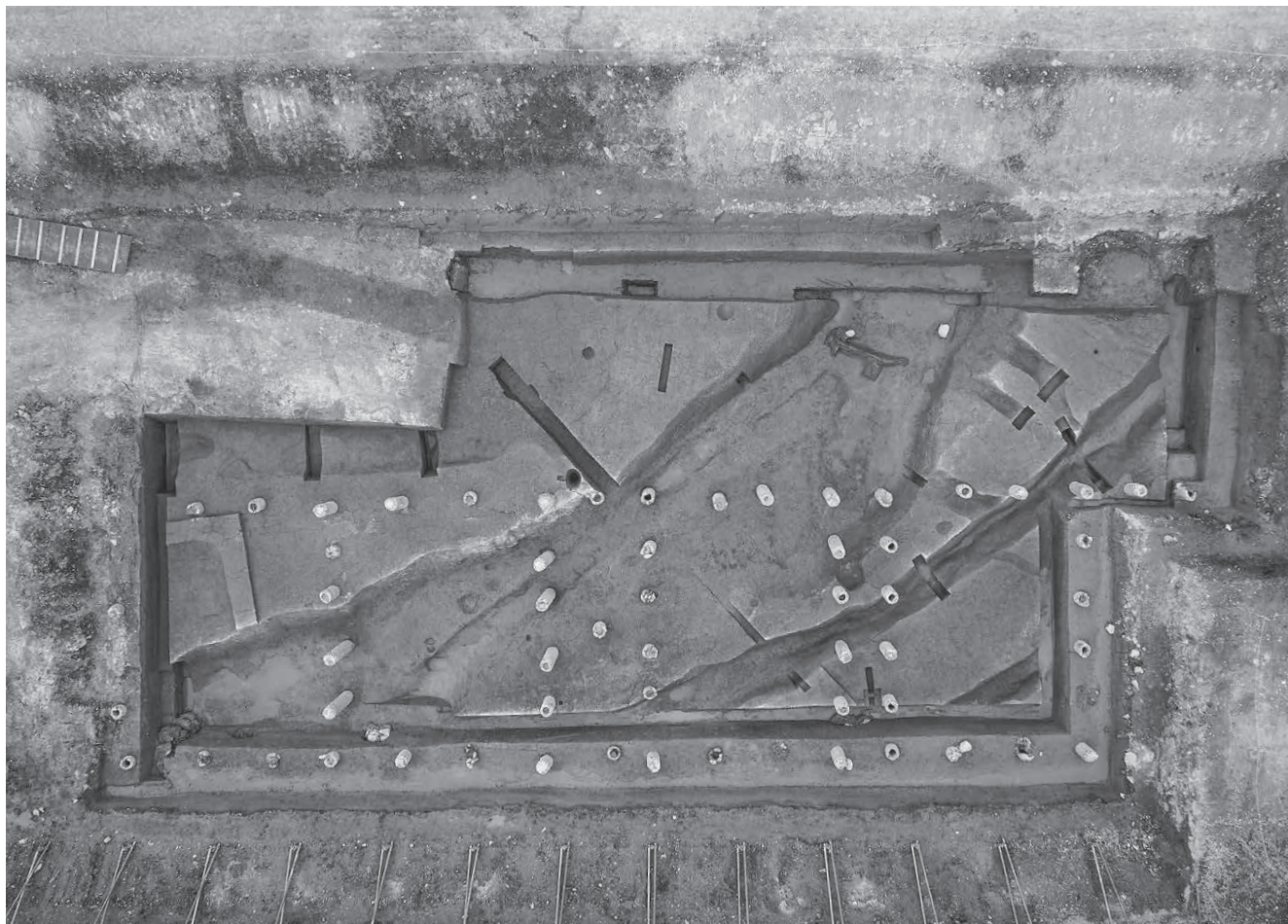
掲載 番号	掲載遺構名	器種	残存 状況	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	色調	時期
				最大長	最大幅	最大厚	孔径				
J1	溝16	白玉	完	4.9	4.7	3.6	2.6～2.5	0.09	蛇紋岩?	暗緑灰 (7.5GY3/1)	古墳後期
J2	溝16	白玉	完	4.3	4.3	2.4	1.9～1.3	0.07	滑石	暗緑灰 (5G4/1)	古墳後期
J3	溝16	白玉	完	3.6	3.6	1.9	1.5～1.3	0.04	滑石	暗オリーブ灰 (5GY4/1)	古墳後期
J4	溝16	白玉	完	3.2	3.2	2.3	1.5～1.4	0.04	滑石	暗緑灰 (7.5GY3/1)	古墳後期
J5	溝16	白玉	欠	3.6	2.7	1.5	－	0.02	滑石	緑灰 (7.5GY5/1)	古墳後期
J6	溝18	白玉	完	5.4	5.4	3.6	2.1～1.9	0.14	滑石	暗緑灰 (7.5GY4/1)	古墳後期

新旧遺構名称対照表

掲載遺構名	調査区	旧遺構名
竪穴住居 1	1	No.13
竪穴住居 1	2	No. 4
掘立柱建物 1	2	No. 5
掘立柱建物 2	1	No. 3
掘立柱建物 3	1	No. 2
柱穴列 1	2	No.22
柱穴列 2	2	No.20
柱穴列 3	2	No.21
土坑 1	2	No.15
土坑 2	1	No.14
土坑 3	2	No. 2
溝 1	2	No.14
溝 2	2	No.16
溝 3	2	No.17

掲載遺構名	調査区	旧遺構名
溝 4	2	No.13
溝 5	2	No.18
溝 6	2	No.19
溝 7	1	No.24
溝 8	1	No.23
溝 9	1	No.22
溝10	1	No.21
溝11	1	No.19
溝12	1	No.20
溝13	2	No. 8
溝14	1	No.17
溝14	2	No.11
溝15	2	No. 9
溝16	2	No. 3

掲載遺構名	調査区	旧遺構名
溝16	2	No.10
溝16	2	No.12
溝17	1	No. 8
溝18	1	No. 7
溝19	1	No. 9
溝20	1	No. 6
溝21	1	No.12
溝22	1	No.11
溝23	1	No.10
溝24	1	No. 5
溝25	1	No. 4
下がり 1	2	No. 6
下がり 2	1	No. 1



1 調査地西半（1区）全景（空撮：上が北）



2 調査地東半（2区）全景（空撮：上が北）



1 調査地西半（1区）全景（東から）



2 調査地西半（1区）北壁（南東から）



1 調査地東半（2区）全景（東から）



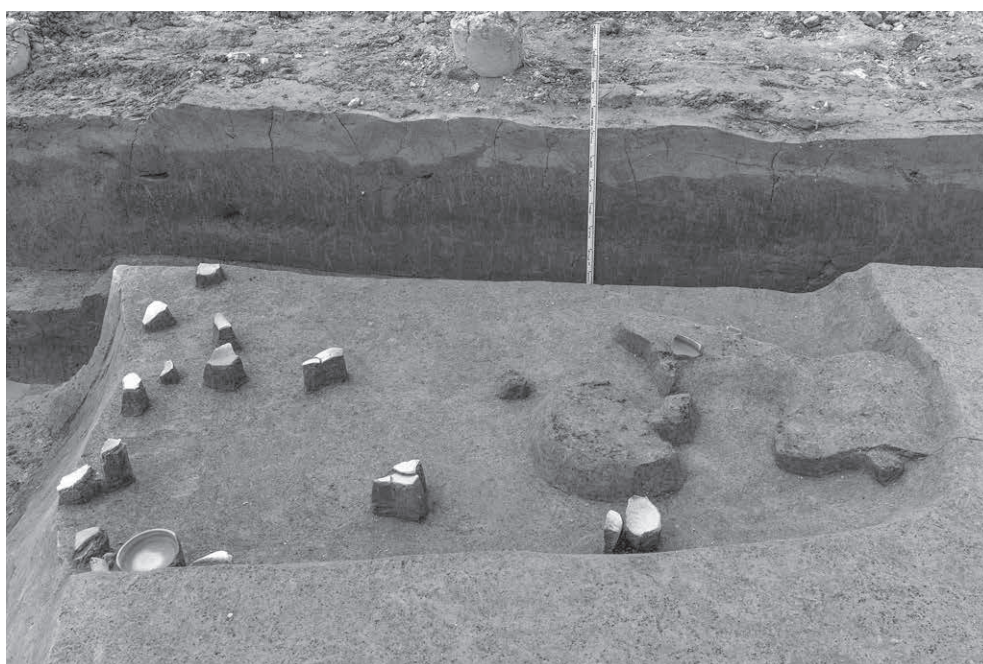
2 調査地東半（2区）作業風景（北西から）



1 竪穴住居 1
(東から)



2 竪穴住居 1
堆積状況
(北東から)



3 竪穴住居 1
北東部遺物出土状況
(東から)

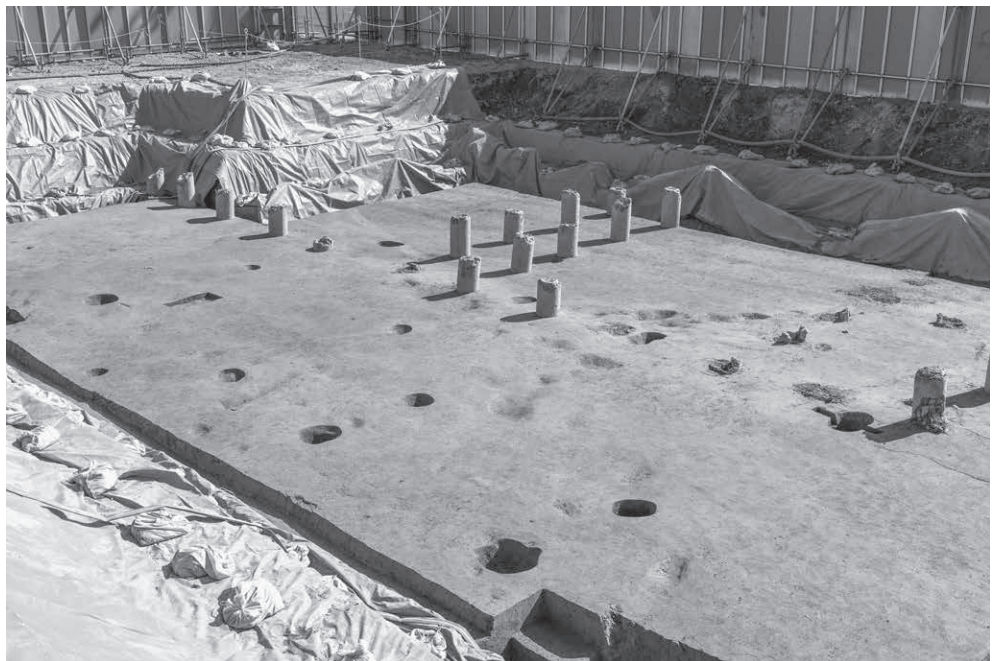
1 竪穴住居 1
カマド検出状況
(北東から)



2 掘立柱建物 1
(北から)



3 掘立柱建物 2・3
(北西から)

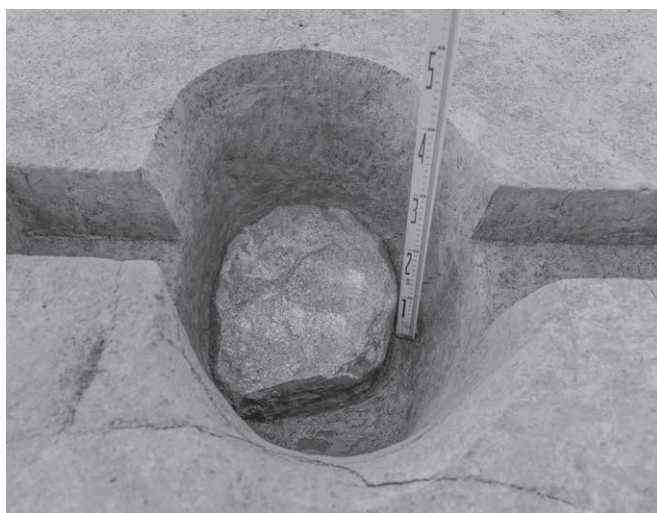




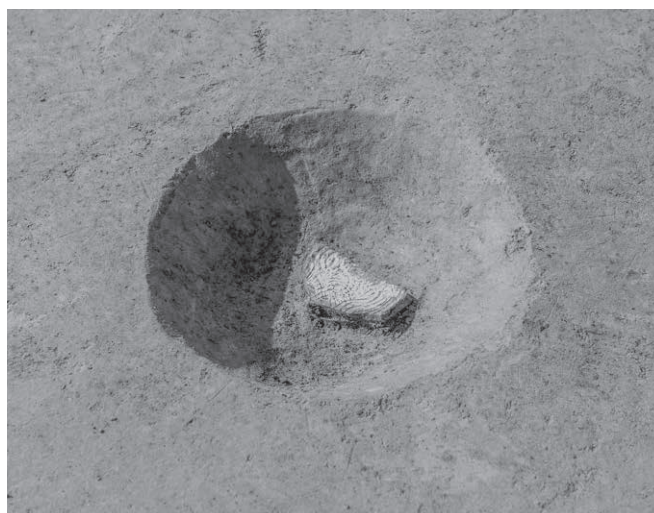
1 掘立柱建物 2 (北から)



2 掘立柱建物 3 (北から)



3 掘立柱建物 2 - P 4 (南から)



4 掘立柱建物 3 - P 2 (東から)

1 土坑 1 (南から)



2 土坑 2 (南東から)



3 土坑 3 (東から)





1 柱穴列 1 ～ 3
(北から)



2 柱穴列 1 ～ 3
(南から)



3 柱穴列 2 - P 2
遺物出土状況
(南から)



1 溝1～6（北東から）



2 溝1断面B（南から）



3 溝3断面D（南から）



1 溝4断面E
(北から)



2 溝5・6
(東から)



3 溝8~10
(南西から)

1 溝 8・10北半
(南東から)



2 溝 9・10南端
(北東から)



3 溝11・12北端断面
(北から)





1 溝13・14
(西から)



2 溝15
(南東から)



3 溝16
上層掘削後の状況
(北西から)



1 溝15・16（北東から）



2 溝16南端東肩口土器100出土状況（南から）



3 溝16南半土器出土状況（北東から）



4 溝16北端土器・木製品出土状況（南東から）



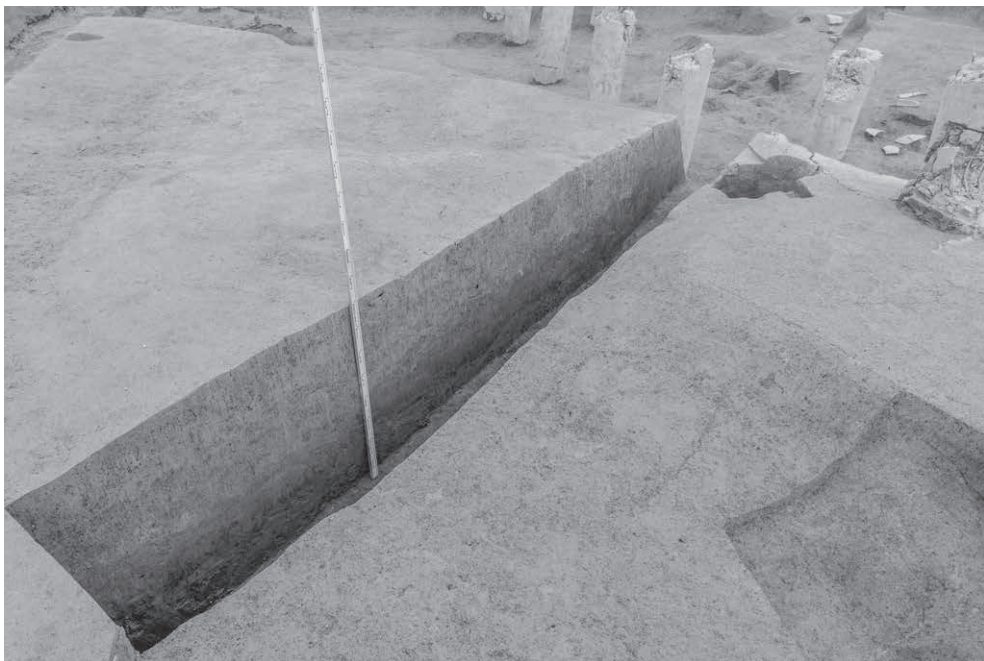
5 溝16北端土器・木製品出土状況（北東から）



1 溝17~20
(西から)



2 溝17~20
(北東から)



3 溝17断面
(断面F西半)
(北西から)

1 溝18
(北東から)



2 溝18北端
(南西から)



3 溝18・19中央断面
(断面F東半)
(南西から)





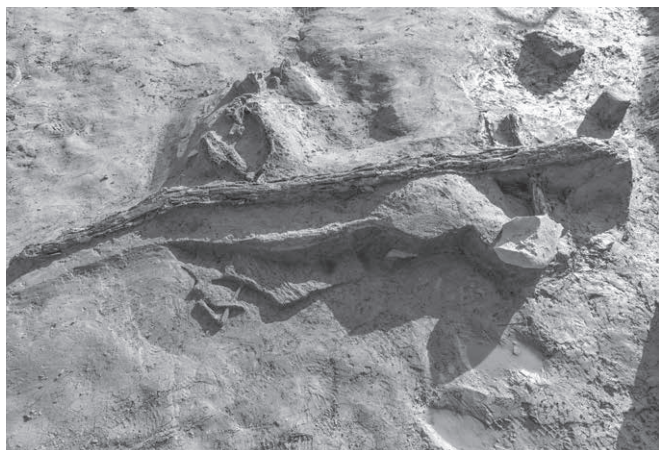
1 溝18（北東から）



2 溝18北半（南西から）



3 溝18内木・獣骨出土状況（南東から）



4 溝18内木・獣骨出土状況（北から）



5 溝18内獣骨出土状況（東から）

1 溝18南半
土器出土状況
(北東から)

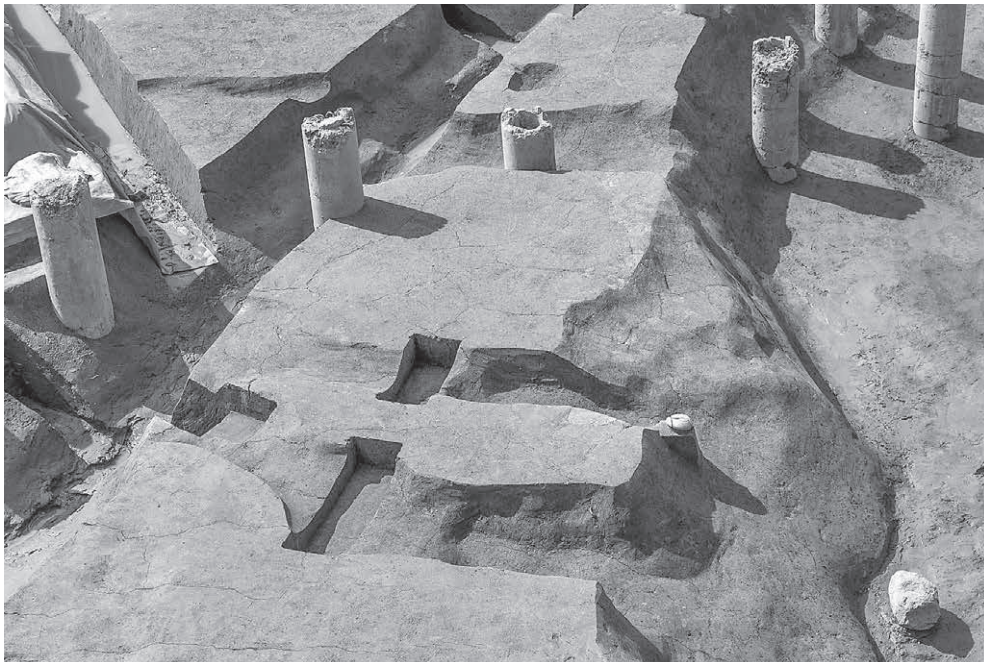


2 溝19
(北東から)

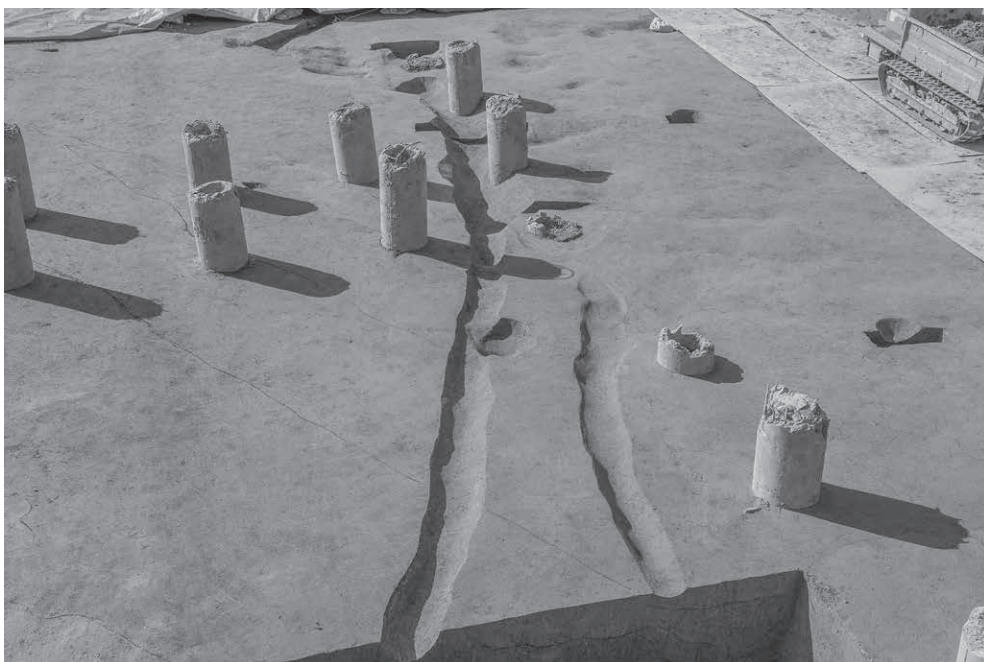


3 溝20
(北東から)





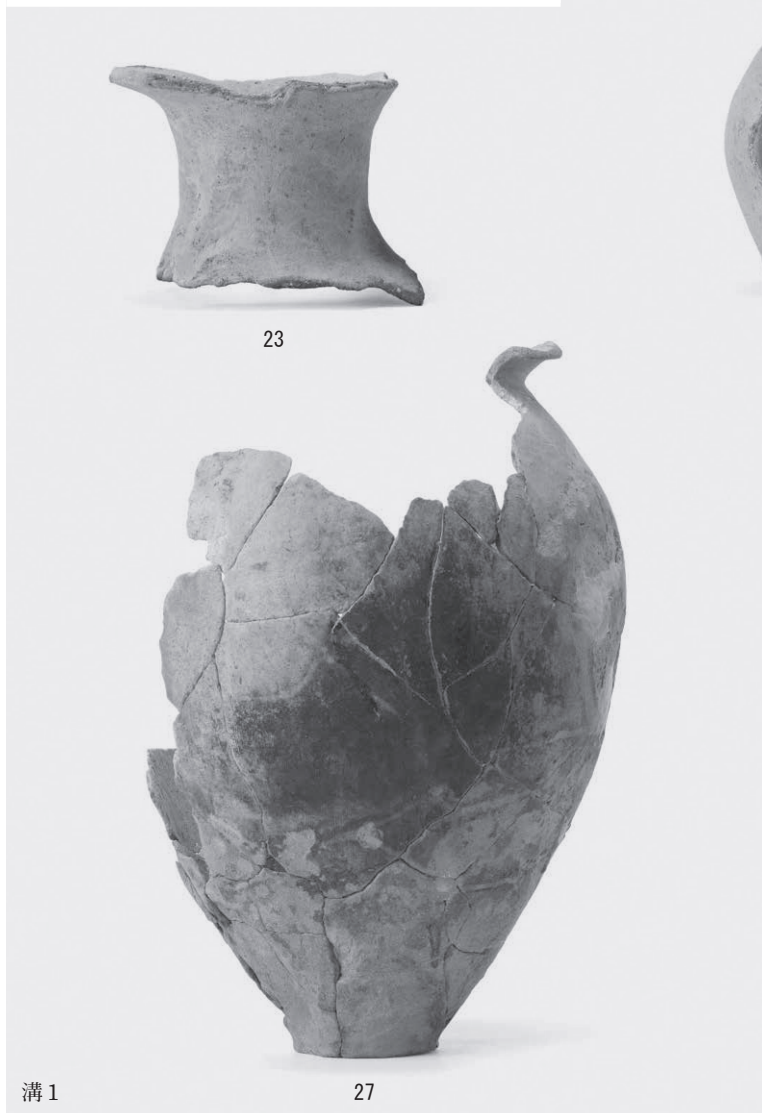
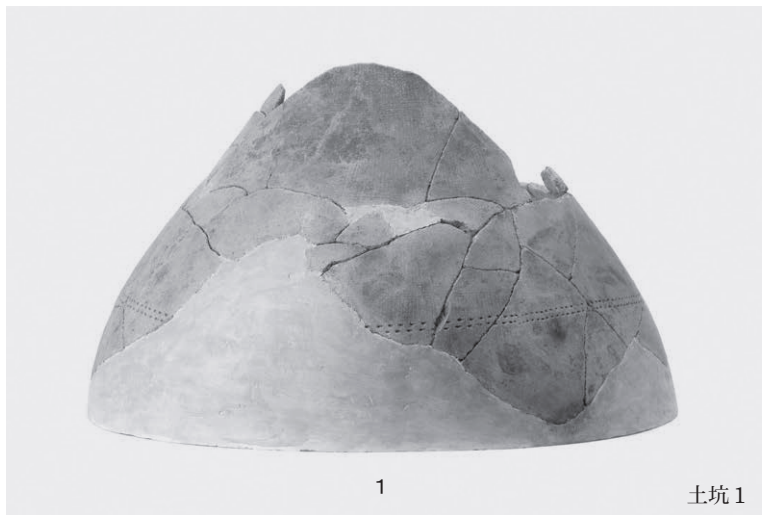
1 溝21～23
(北東から)



2 溝24・25
(東から)

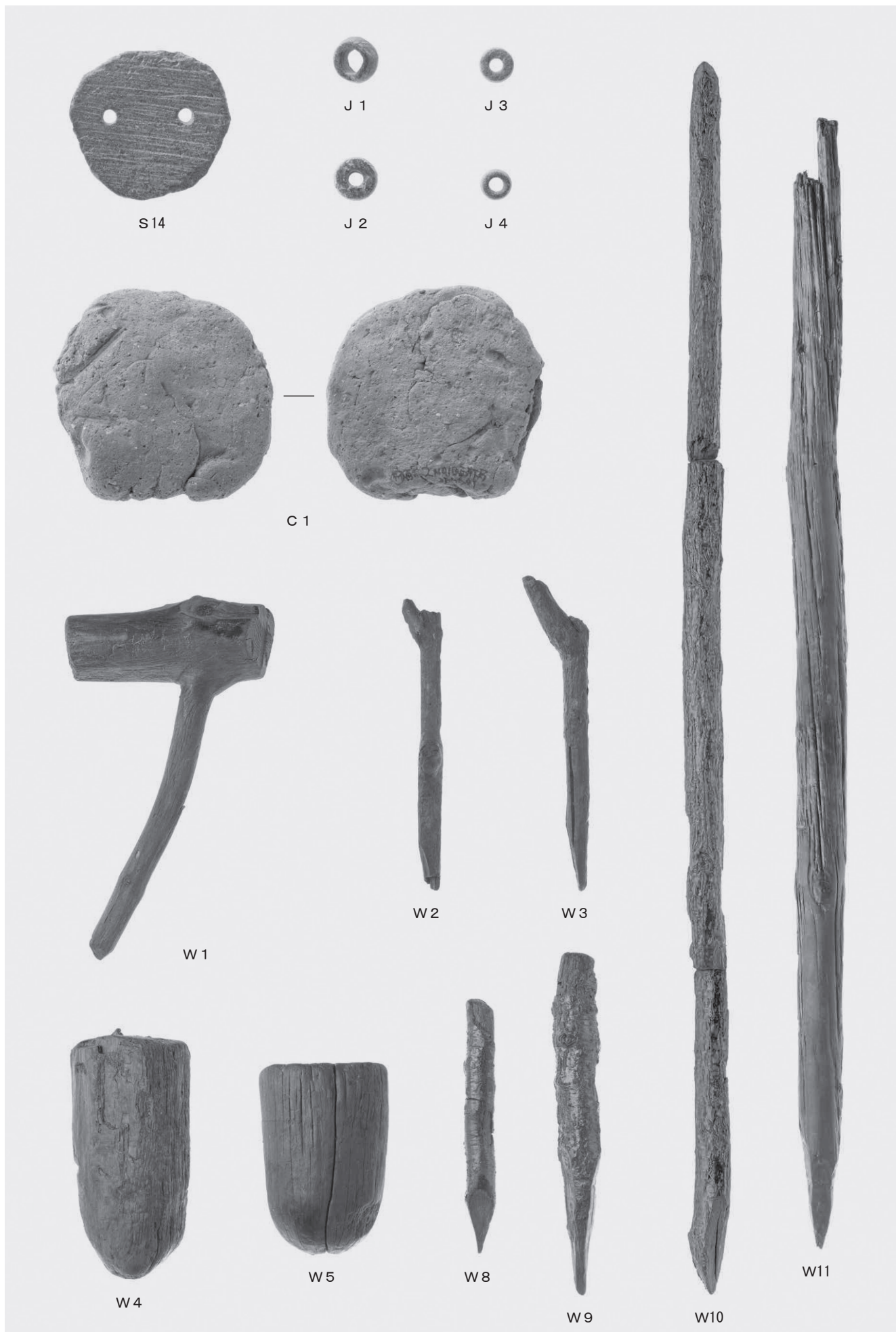


3 下がり2
(北西から)





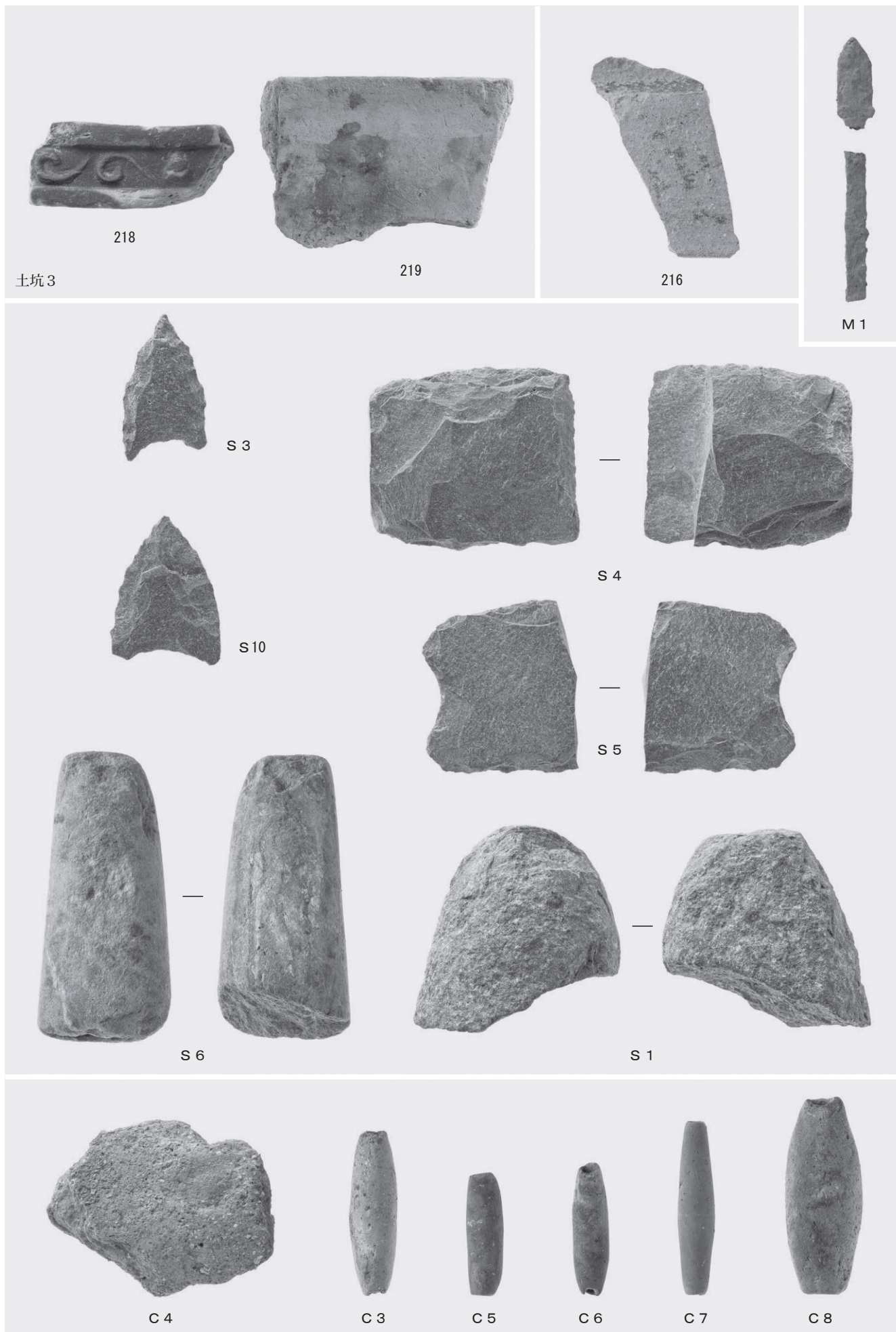
豎穴住居 1・溝16・溝17出土遺物



溝16出土遺物



溝18出土遺物



瓦・硯・鉄製品・石製品・土製品

報告書抄録

ふりがな	ひやっけんがわはらおじまいせき							
書名	百間川原尾島遺跡							
副書名	警察本部宿舍建替整備事業に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	261							
編著者名	渡邊恵里子・米田克彦・藤井翔平・藤井雅大・山口香織・柴田英樹・白石純・パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	2023年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
ひやっけんがわ 百間川 はらおじまいせき 原尾島遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 なかくふじわらひがしまち 中区藤原光町	33102	332011725	34° 40' 30"	133° 57' 12"	20210101～20210630	995	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
百間川 原尾島遺跡	集落	弥生時代以前		土坑1、柱穴列3、溝12		縄文土器、弥生土器、石鏃、打製石包丁、磨製石斧、敲石		
		古墳時代		竪穴住居1、土坑1、溝11		須恵器、土師器、土錘、羽口、有孔円板、滑石製白玉、木製品、鉄鉱石、炉壁、鉄滓		
		古代以降		掘立柱建物3、土坑1、溝2		須恵器、土師器		
要約	今回の調査地は百間川左岸堤防の北側で、これまで河川敷内で行われた調査地より離れているが、弥生時代中期の土坑や古墳時代後期の竪穴住居が見つかり、河川敷内で確認された微高地が本調査地点まで続くことが明らかとなった。古墳時代後期の溝16・18からは鉄鉱石や鉄滓などの製鉄関連遺物及び滑石製の玉類が出土し、百間川原尾島遺跡の特質の一端が窺える。また、溝16堆積土中からはダイコン属?の種子が検出された。古墳時代に遡る可能性のある、希少な出土例として注目される。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 261

百間川原尾島遺跡

警察本部宿舍建替整備事業に伴う発掘調査

令和5年3月17日 印刷

令和5年3月17日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南1-1-5